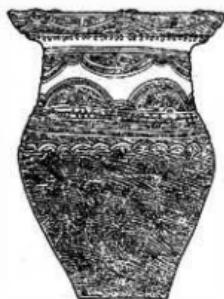


東北横断自動車道遺跡調査報告10

能登遺跡
南原B遺跡
村西遺跡
大村古墳群



1990年11月

福島県教育委員会
法人福島県文化センター
日本道路公団

東北横断自動車道遺跡調査報告10

能登遺跡
南原B遺跡
村西遺跡
大村古墳群

序 文

東北横断自動車道いわき～新潟線は、太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ、総延長210kmに及ぶもので、そのうち152kmは福島県の路線であります。

この道路は、いわき市西部に広がる台地・郡山盆地・猪苗代湖岸の丘陵地・会津盆地及びそれらの周辺地区をほぼ東西に横断する計画であり、その路線の中には多くの埋蔵文化財包含地が存在しております。そこで福島県教育委員会では昭和53年と昭和57年に、整備計画路線となった郡山～猪苗代間、猪苗代～会津坂下間につきまして路線予定地内の表面調査による遺跡分布調査を実施しました。その結果、両区間の横断自動車道路線内に20か所の遺跡を確認しております。

これらの遺跡のうち昭和63年度に着工されました猪苗代～会津坂下間の15遺跡につきましては発掘調査を行い記録保存することになり、平成元年度は調査2年次として12遺跡の発掘調査を、財団法人福島県文化センターに委託して実施しているところであります。

今回報告いたします会津坂下町能登遺跡ほか3遺跡は、縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の遺跡であります。能登遺跡からは、弥生時代の遺構としては遺物包含層のみしか検出できませんでしたが、数多く出土した弥生土器や石器の大部分は天王山式期のもので、まとまって出土したことで弥生土器の研究に大いに役立てる資料になるものと思われます。

これらの貴重な資料をまとめました本報告書が、広く県民の方々に文化財についての認識を深めていただくとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、この遺跡の調査から報告書の作成にあたり、ご協力いただいた関係機関・関係者各位に対し感謝の意を表すものであります。

平成2年11月

福島県教育委員会

教育長 大内忠昭

あ い さ つ

東北横断自動車道いわき～新潟線は、平成7年度の全線開通を目指して、建設工事が急ピッチで進められております。平成2年10月には郡山～磐梯熱海間が供用を開始し、本県の交通網は着々と整備されつつあります。しかし、開発にともなって先人の残した貴重な文化遺産が消滅することも否めません。

東北横断自動車道用地内には、数多くの遺跡が確認されており、用地内に所在する埋蔵文化財については、関係機関の協議に基づいて、当センターが記録保存のため発掘調査を進めているところであります。平成元年度は、工事の進行に相まって調査遺跡も増加し、郡山市から河沼郡会津坂下町間に所在する13遺跡の発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成元年度発掘いたしました会津坂下町にある能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群の計4遺跡の調査結果をまとめたものであります。とくに、能登遺跡からは弥生時代天王山式期の土器群が、東日本の該期の遺跡とは比較にならないほど多量に出土し、今後弥生時代後半の時期を考える上で貴重な資料を提示できたと考えております。本報告書が歴史を解明するための基礎資料として、また郷土を理解するための資料として、より広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に調査にあたり御協力をいただいた日本道路公团仙台建設局会津若松工事事務所・福島県関係各課・関係市町村及び教育委員会・工事関係者・地元の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成2年11月

財団法人 福島県文化センター

館長 佐藤昌志

例　　言

1. 本報告書は、東北横断自動車道いわき～新潟線のうち、猪苗代～会津坂下間（第9次区間）の建設にかかる遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書には、平成元年度猪苗代～会津坂下間で発掘調査を実施した12遺跡のうち、会津坂下町に所在する能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群の4遺跡の調査成果を収録した。
3. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託をうけて行ったものである。
4. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。
5. 財団法人福島県文化センターでは、事業第2部遺跡調査課の次の職員を配し調査に当たった。

文化財主査 大越道正	文化財主事 西山真理子
文化財主査 熊谷金一	
6. 本書は、担当調査員が分担執筆した。執筆者名は文末に示してある。
7. 能登遺跡出土土器の胎土分析は、奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼した。
8. 本書に使用した二万五千分の一の地形図は、建設省国土地理院長の承認を得て、複製使用したものである。（承認番号：平2東複、第99号）
9. 本報告書に収録した遺跡の発掘記録および出土品は、担当調査員と当課臨時職員が整理し、福島県文化センターにおいて保管の予定である。
10. 発掘調査及び報告書作成にあたり、次の方々と関係機関の助言・協力を得た。

石田明夫	伊東正義	猪股清徳	佐藤信行	酒井重洋
中村五郎	吉岡康暢			
会津坂下町教育委員会	新鶴村教育委員会	福島県立博物館		
弥生文化研究会				

凡 例

1. 本報告書内の造構図における用例は次の通りである。

- (1) 方 位 圖中の方位は磁北を示す。
- (2) 縮 尺 率 各造構の大きさに合わせて主に 1/30・1/60・1/80 の縮尺で採録した。
- (3) ケ バ 造構中の傾斜の表現には可、相対的に緩傾斜部には P のケバを使用した。
- (4) 焼 土 焼土の範囲は、アミ点で表示した。

2. 本報告書内の遺物図における用例は次の通りである。

- (1) 縮 尺 率 各遺物の大きさに合わせて主に 1/2・2/5・1/3・1/4 の縮尺で採録した。
- (2) 拓影図 土器片の拓影は、左側に外面を右側に内面を示した。
- (3) 断 面 貫土に纖維を含むものにはアミ点、須恵器・陶磁器は黒とした。

3. 本報告書内で使用した略号は次の通りである。

N T	能登遺跡	M H · B	南原B遺跡
M N	村西遺跡	O M	大村古墳群
T.....トレンチ	G.....グリッド	L.....造構外堆積土	
E.....造構内堆積土	S I豎穴住居跡	S K.....土坑	
P.....ピット	S G.....焼土造構	S H.....遺物包含層	

目 次

序 章	1
第 1 編 能登遺跡	7
第 1 章 調査経過	9
第 1 節 立地・地形 (9) 第 2 節 調査経過 (13)	
第 3 節 調査方法 (14)	
第 2 章 遺構と遺物	15
第 1 節 深穴住居跡 (15) 第 2 節 掘立柱建物跡 (27)	
第 3 節 土 坑 (31) 第 4 節 遺物包含層 (33)	
第 5 節 その他の遺構と遺物 (81)	
第 3 章 まとめ	93
第 1 節 弥生時代の遺物について (93) 第 2 節 奈良・平安時代について (99)	
付章 能登遺跡出土土器の螢光X線分析	107
第 2 編 南原B遺跡	109
第 1 章 調査経過	111
第 2 章 遺構と遺物	113
まとめ	114
第 3 編 村西遺跡	115
第 1 章 調査経過	117
第 2 章 遺構と遺物	119
まとめ	120
第 4 編 大村古墳群・大村遺跡	121
第 1 章 調査経過	123
第 1 節 立地・地形 (123) 第 2 節 調査経過 (123)	
第 3 節 調査方法 (124)	
第 2 章 遺構と遺物	125
第 1 節 大村 1 号墳 (125) 第 2 節 大村遺跡 (131)	
第 3 章 まとめ	137
第 1 節 大村 1 号墳について (137) 第 2 節 大村遺跡について (138)	

挿図・表目次

序 章

(挿図)

第1図 豊越道路線図	1	第2図 周辺遺跡分布図	4
(表)			
第1表 年代別発掘調査遺跡一覧	2	第2表 周辺遺跡一覧	5

第1編 能登遺跡

(挿図)

第1図 能登遺跡位置図	9	第19図 遺物包含層	34
第2図 遺跡周辺路線計画図	10	第20~46図 遺物包含層出土土器	42~68
第3図 能登遺跡全体図	11	第47~55図 遺物包含層出土石器	70~78
第4図 基本層序概念図	12	第56図 遺物包含層出土土製品	80
第5図 1号住居跡	16	第57図 墓土造構	81
第6図 カマド内遺物出土状況	17	第58図 1・2号溝跡	82
第7図 1号住居跡出土須恵器・土師器	18	第59図 1号溝跡出土土師器・須恵器・土師質土器	83
第8図 1号住居跡出土須恵器	19	第60図 ピット群	84
第9図 2号住居跡(1)	22	第61図 遺構外出土土器・土製品	85
第10図 2号住居跡(2)	23	第62~63図 遺構外出土石器	86~87
第11図 2号住居跡カマド	24	第64図 交互刺突文の展開と変様	95
第12図 2号住居跡出土須恵器・土師器	25	第65図 弧文の変化と展開	96
第13図 2号住居跡出土石器・縄文土器・土製品	26	第66図 開闢遺跡位置図	98
第14図 1号建物跡	28	第67図 会津盆地における奈良・平安時代の 須恵器変遷	100
第15図 2号建物跡(1)	29	第68図 会津盆地における奈良・平安時代の 土器変遷	102
第16図 2号建物跡(2)	30	第69図 能登遺跡1・2号住居跡 ・新潟県山三賀II遺跡出土土器変遷図	104
第17図 1・2号土坑	31		
第18図 土坑出土土器	32		

(表)

第1表 2号住居跡ピット計測表	21	第5表 能登遺跡出土石器一覧	90~91
第2表 1号建物跡柱穴計測表	27	第6表 能登遺跡出土土師器・土師質土器一覧	92
第3表 2号建物跡柱穴計測表	30	第7表 能登遺跡出土須恵器一覧	92
第4表 能登遺跡出土主要弥生土器一覧	88~89		

第2編 南原B遺跡

(挿図)

第1図 南原B遺跡位置図	111	第4図 1号溝跡断面図	114
第2図 南原B遺跡周辺路線計画図	112	第5図 遺構外出土土器	114
第3図 南原B遺跡全体図	113		

第3編 村西遺跡

(挿図)

第1図 村西遺跡位置図	117	第4図 1号土坑	120
第2図 村西遺跡周辺路線計画図	118	第5図 遺構外出土土器・石器	120
第3図 村西遺跡全体図	119		

第4編 大村古墳群・大村遺跡

(挿図)

第1図 大村古墳群位置図	123	第8図 大村1号墳出土繩文土器・弥生土器	130
第2図 大村古墳群周辺路線計画図	124	第9図 大村遺跡全体図	131
第3図 大村1号墳現況図	125	第10図 1~5号土坑	132
第4図 大村1号墳(1)	126	第11図 1・3号土坑出土石器・繩文土器	133
第5図 大村1号墳(2)	127	第12図 遺構外出土繩文土器	135
第6図 大村1号墳主体部	128	第13図 遺構外出土繩文土器・石器	136
第7図 大村1号墳出土土器	129		

序 章

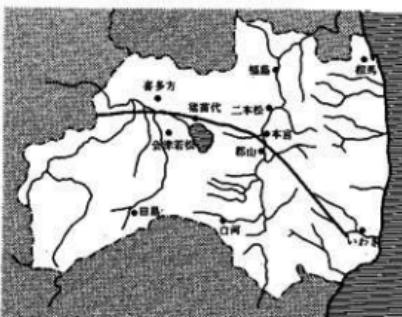
1 調査に至る経緯

東北横断自動車道いわき～新潟線は（以下磐越道という），福島県いわき市を起点とし新潟県新潟市を結ぶ総延長約212kmの高速自動車国道である。路線は、常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北自動車道と連結・交差、福島県会津地方・新潟県下越地方を通過し、北陸自動車道と連結する。磐越道の建設の推移は、昭和48年郡山～会津坂下間の基本計画が設定されたのを皮切りに、昭和53年いわき～郡山間・会津坂下～津川間に基本計画が策定され、同53年には郡山～猪苗代間の整備計画が、57年には実施計画が発表された。猪苗代～会津坂下間は、昭和59年に施工命令、翌60年に実施計画、ひきつづき昭和61年、いわき～郡山間・会津坂下～津川間に整備計画が発表されている。工事は、平成元年度現在郡山～会津坂下間に及び、このうち郡山～磐梯熱海間は平成2年10月に供用を開始した。

福島県教育委員会（以下県教育委員会という）では、路線内に所在する埋蔵文化財を確認するため、昭和56・57・62年に周辺部を含め表面調査を実施した。調査は、委託された福島県文化センターと関係市町村が行った。この結果を基に、昭和57年から日本道路公団仙台建設局と県教育委員会との間で路線内に所在する埋蔵文化財の保存協議が開始され、路線設定上保存困難な埋蔵文化財については記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、日本道路公団仙台建設局管轄工事事務所・福島県企画調整部総合交通課・県教育委員会が策定した調査計画に沿って、昭和60年から県教育委員会が福島県文化センターに委託して開始した。当初は郡山～猪苗代間に所在する遺跡を調査対象としたが、この区間の調査は平成元年度までにすべてを終了した。さらに昭和63年度からは、新たに猪苗代～会津坂下間に所在する遺跡の調査を開始した。初年度は、猪苗代・磐梯町・河東町の3町に所在する4遺跡18,080m²の調査を、平成元年度には猪苗代町・磐梯町・会津若松市・北会津村・会津坂下町の1市3町1村に所在する12遺跡62,000m²の調査を実施した。

日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所では、工事工程上発掘調査の終了時期を平



第1図 磐越道路線図

第1表 年次別発掘調査遺跡一覧

年次	遺跡名	所 在 地	査定面積	調査面積	報 告 書
1985	細草遺跡	郡山市熱海町大字上高玉字細草	4,900	4,900	東北横断自動車道遺跡調査報告1
1986	牧場山遺跡	郡山市熱海町大字玉川字牧場山	4,360	3,790	東北横断自動車道遺跡調査報告2
1986	葛籠山遺跡	郡山市熱海町大字玉川字葛籠	740	740	東北横断自動車道遺跡調査報告2
1986	小星遺跡	本宮町大字岩根本字小星	1,000	1,000	東北横断自動車道遺跡調査報告2
1986	登戸遺跡	猪苗代町大字開都字登戸	12,000	6,000	東北横断自動車道遺跡調査報告3
1987	登戸遺跡	猪苗代町大字開都字登戸	12,000	6,000	東北横断自動車道遺跡調査報告3
1987	中ノ沢A遺跡	郡山市熱海町大字中山字新田	10,700	5,500	東北横断自動車道遺跡調査報告4
1987	中ノ沢A遺跡	郡山市熱海町大字中山字新田	10,700	5,200	東北横断自動車道遺跡調査報告4
1988	北向遺跡	郡山市熱海町大字中山字北向	9,200	3,000	東北横断自動車道遺跡調査報告7
1988	法正遺跡	猪苗代町大字義島字達出	21,000	9,000	東北横断自動車道遺跡調査報告11
		磐梯町大字更科字達平			
1988	天光遺跡	磐梯町大字更科字天光	2,000	2,000	東北横断自動車道遺跡調査報告5
1988	大作原上遺跡	河東町大字金田字大作原上	1,780	1,780	東北横断自動車道遺跡調査報告6
1988	駒板新田模六群	河東町大字金田字大作原上	5,300	5,300	東北横断自動車道遺跡調査報告6
1989	牧場山遺跡	郡山市熱海町大字玉川字牧場山	4,360	600	東北横断自動車道遺跡調査報告7
1989	北向遺跡	郡山市熱海町大字中山字北向	9,200	6,200	東北横断自動車道遺跡調査報告7
1989	法正遺跡	磐梯町大字更科字達平	21,000	12,000	東北横断自動車道遺跡調査報告11
1989	高森平A遺跡	磐梯町大字更科字高森平	5,300	5,300	東北横断自動車道遺跡調査報告8
1989	角間遺跡	磐梯町大字更科字角間	6,100	6,100	東北横断自動車道遺跡調査報告8
1989	船ノ森西遺跡	会津若松市一箕町鶴賀字船ノ森西	8,750	8,750	東北横断自動車道遺跡調査報告9
1989	星敷遺跡	会津若松市町北町星敷	23,000	9,000	継続調査のため未刊行
1989	上吉田遺跡	会津若松市高野町柳川字吉田	6,100	6,100	東北横断自動車道遺跡調査報告9
1989	横沼西遺跡	会津若松市神指町北四合字横沼西	4,800	3,000	継続調査のため未刊行
1989	和泉遺跡	北会津町大字和泉字中分	11,150	5,000	継続調査のため未刊行
1989	能登遺跡	会津坂下町大字勝字大字能登	5,500	5,500	東北横断自動車道遺跡調査報告10
1989	南原B遺跡	会津坂下町大字牛川字南原	500	500	東北横断自動車道遺跡調査報告10
1989	村西遺跡	会津坂下町大字勝字大字村西	1,150	1,150	東北横断自動車道遺跡調査報告10
1989	大村古墳群	会津坂下町大字勝字大字大村	400	400	東北横断自動車道遺跡調査報告10

成元年としていたが、遺跡数や面積が多く年度内に調査終了することは不可能であった。一方、調査対象遺跡はいずれも未試掘で、遺構群の広がり、検出面の深さ、遺物の出土量等の予測ができるないまま調査に入らざるを得なかつたため、なかには調査中範囲が広がった遺跡や、遺構の密集度が高く遺物の出土量も予測をはるかに越える遺跡もあった。しかしながら総体的には遺構・遺物が少なく当初の見込みより多くの面積を消化でき、平成2年度に調査を残す遺跡の数は、会津若松市で2遺跡、北会津村で1遺跡、面積にして計21,950m²となった。

(大 越)

2 地理的環境

福島県は、県内のほぼ中央を南北に連なる奥羽山脈を境として、東側を太平洋側、西側を日本海側と大きく2つに分けられる。その奥羽山脈の西側は会津地方と呼ばれ、奥羽山脈と飯豊・越後山脈にはさまれた会津盆地や田島盆地が発達している。会津盆地は県内で最大の広さを持ち、

面積は約320km²を有する。盆地内では阿賀川（大川）が猪苗代湖より流出する日橋川や只見川と合流し、国内有数の大河となって日本海にそそいでいる。

会津坂下町は、会津盆地の西部に位置し、会津盆地平坦部を北流する阿賀川（大川）を境として、会津盆地の西縁山地を経て、只見川の段丘面からその西側の山地までを含んでおり、東は会津若松市・塩川町・湯川村、西は柳津町、南は北会津村・新鶴村、北は喜多方市・山都町・高郷村などの市町村と境界を接した面積およそ91.3km²、人口は約2万人を有する町である。町の中心には国道49号線と、JR只見線が通っている。

今回調査した遺跡付近の地形は、西に標高300m前後の会津盆地西縁山地が南北に連なり、町の東端を北流する阿賀川（大川）の支流である宮川（鶴沼川）や、田沢川などの中小河川が西縁山地より流出しており、河岸段丘や扇状地を形成している。

地質的にみれば、会津盆地の西縁山地は軽石質凝灰岩・礫岩などからなる七折坂層と砂岩・泥岩を主とする和泉層が発達している。その東側は山地より流出する河川がつくる扇状地の堆積物で覆われており、砂礫・砂・粘土の段丘層へと続いている。また、阿賀川（大川）に近づくにつれ盆地埋積堆積物の礫・砂・粘土砂・有機質土で厚く覆われている。

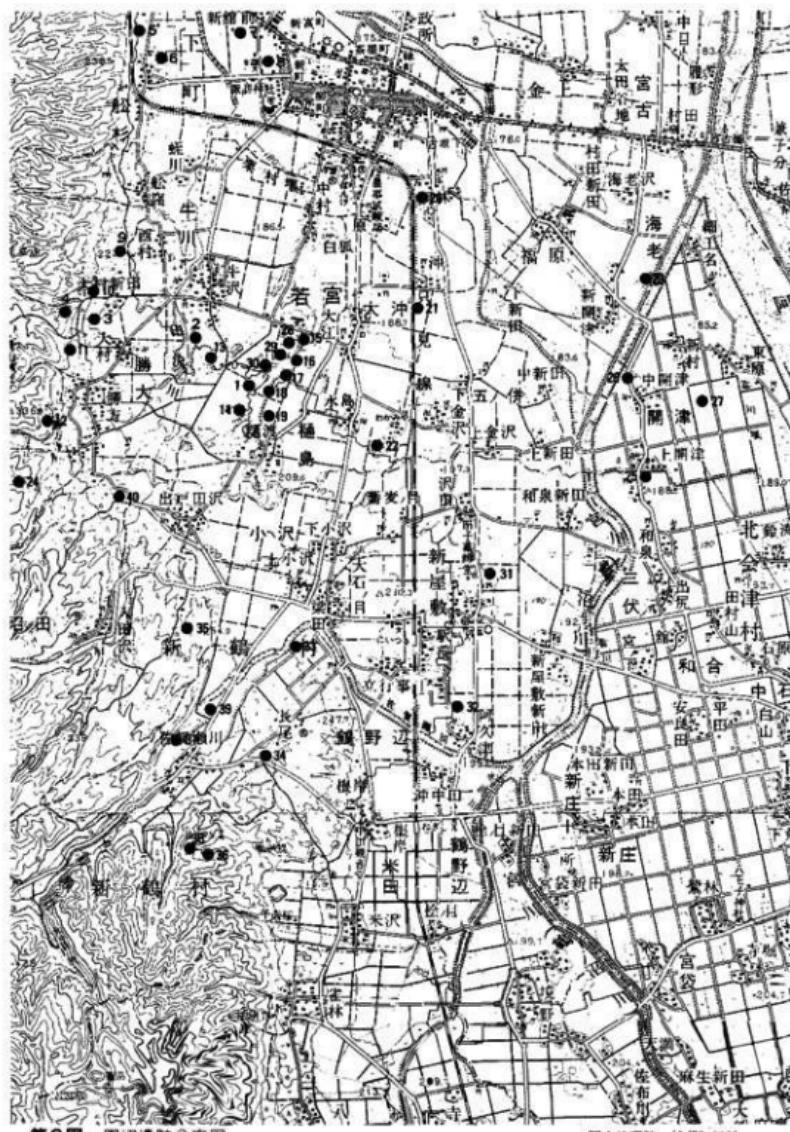
気候は内陸性気候で年間平均気温は11.3度、雪は12月から3月中旬にかけて降り、豪雪地帯である。土地はほとんどが水田として利用されているが、一部で蔬菜畑や果樹園などがみられる。また、盆地西縁山地の斜面においては薬用人参の栽培が行われているところもある。

3 歴史的環境

会津坂下町各地には、東北横断自動車道関連分布調査や国営会津農水事業関連発掘調査、会津坂下町教育委員会が実施している県営圃場整備事業予定地区内の遺跡分布調査および発掘調査などから、数多く遺跡が分布していることが明らかになってきている。また、会津坂下町周辺の各市町村にも多くの遺跡が分布している。

今回調査した能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群の各遺跡付近にも多くの遺跡が分布しており、発掘調査により各遺跡の全容が明らかになりつつある。これらの調査に基づいて歴史的環境を特に今回調査した各遺跡と関連がある弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代の遺跡を中心にして概観することにする。

本地域の旧石器時代の遺物は現在のところ確認されていない。縄文時代の草創期から前期の遺跡としては、1988年県文化センターが行った発掘調査で、地表約1.5mの礫層下から草創期の撲糸文系土器が出土した大村新田遺跡をはじめ、前期初頭の土器を出土している新鶴村の木留場遺跡や縄文時代前期から晩期の土器を出土している同じく新鶴村の京安林遺跡などがある。縄文時代中期から晩期の遺跡は、中期後半から後期前半の土器が出土している松原遺跡や、縄文時代晩期



第2図 周辺遺跡分布図

国土地理院 (1/50,000)

第2表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 物
1	能登道跡	会津坂下町大字藤大字能登	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
2	南原B道跡	会津坂下町大字牛川字南原	散布地	縄文・奈良・平安	縄文土器・土師器
3	村西道跡	会津坂下町大字藤大字村西	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
4	大村古墳群	会津坂下町大字藤大字草山・木林	古 墓	古墳	土師器
5	福荷森古墳	会津坂下町大字寺宇上野	古 墓	古墳	
6	北杉道跡	会津坂下町大字船杉寺北杉	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
7	井ノ森古墳	会津坂下町大字新館字井ノ森	古 墓	古墳	
8	磐六古墳	会津坂下町大字新館字磐六	古 墓	古墳	
9	前林道跡	会津坂下町大字牛川字前林	散布地	奈良・平安	土師器
10	大村新田道跡	会津坂下町大字山下	散布地	縄文	縄文土器・石座・石斧
11	水上道跡	会津坂下町大字藤大字水上・水村	散布地	平安	土師器
12	沢口道跡	会津坂下町大字藤大字沢口	散布地	奈良・平安	土師器(内馬)
13	南原A道跡	会津坂下町大字牛川字南原	散布地	古墳・奈良・平安	土師器
14	松無塚	会津坂下町大字藤大字松無	古 墓	弥生・古墳	弥生土器・土師器
15	大豆田D道跡	会津坂下町大字福島字大豆田	散布地	奈良・平安	土師器
16	大豆田C道跡	会津坂下町大字福島字大豆田	散布地	奈良・平安	土師器
17	大豆田B道跡	会津坂下町大字福島字大豆田	散布地	奈良・平安	土師器
18	大豆田A道跡	会津坂下町大字福島字大豆田	散布地	古墳・奈良・平安	土師器
19	山ノ神道跡	会津坂下町大字福島字山ノ神	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
20	館ノ内道跡	会津坂下町大字ノ内	集落跡	弥生	弥生土器
21	綿田道跡	会津坂下町大字大沖字綿田	散布地	弥生・古墳	弥生土器・土師器
22	境田戊道跡	会津坂下町大字五ノ堀併字境田戊	散布地	古墳・奈良・平安	土師器
23	金山日道跡	会津坂下町大字新聞津字金山	散布地	平安	土師器・須恵器・木製品
24	鬼越横穴墓群	会津坂下町大字藤大字鬼越	古 墓	古墳	直刀・切子玉・ガラス玉
25	和泉道跡	北会津村大字和泉中分	散布地	弥生・古墳	弥生土器・土師器
26	中間津三百石道跡	会津坂下町大字開津字三百石	散布地	弥生	弥生土器
27	中間津台場道跡	会津坂下町大字開津字台場	集落跡	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
28	範登A道跡	会津坂下町大字藤大字能登	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器・青磁
29	範登B道跡	会津坂下町大字藤大字能登	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
30	範登C道跡	会津坂下町大字藤大字能登	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
31	王山塚古墳	新鶴村大字新星敷字王山塚	古 墓	古墳	
32	阿久津椎現堂古墳	新鶴村大字鶴野邊字阿久津	古 墓	古墳	土師質円筒形土製品
33	長尾原古墳群	新鶴村大字立石田字堆甲	古 墓	古墳	石棺・頭骨・直刀・石枕
34	吹上古墳	新鶴村大字佐賀瀬川字疊平	古 墓	古墳	
35	大久保道跡	新鶴村大字田浦字大久保	散布地	縄文・平安	縄文土器・須恵器
36	京坂古墳	新鶴村大字米田字京坂	古 墓	古墳	
37	向山横穴墓群	新鶴村大字佐賀瀬川字向山	古 墓	古墳	直刀・人骨
38	五つ塚古墳	新鶴村大字米田字押	古 墓	古墳	
39	権現堂道跡	新鶴村大字佐賀瀬川字権現堂	散布地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器
40	木留場道跡	新鶴村大字沼田字木留場	散布地	縄文・奈良・平安	

序 章

大洞C₂式期の土器を中心として弥生時代前期・中期の土器も出土している鬼渡A遺跡などが上げられる。

弥生時代の遺跡としては、1987年に会津坂下町教育委員会で発掘調査を行った館ノ内遺跡、同じく細田遺跡がある。館ノ内遺跡は今回調査を行った能登遺跡と同様に天王山式期の弥生土器が出土している。また、同期と思われる住居跡も検出されている。細田遺跡も同じく天王山式期の弥生土器と、同期の住居跡が検出されている。宮川を挟んだ北会津村の和泉遺跡でも1989年の調査で同時期の遺物が出土している。新鶴村では権現堂遺跡で古式弥生土器の出土があり、再葬墓と考えられている。

会津坂下町の古墳は、亀ヶ森古墳や鎮守森古墳がある宇内青津古墳群が全国でも有名である。今回調査した遺跡周辺では、町の中心部より西側に分布している杵ガ森古墳・惣六古墳、直刀が出土している稻荷森古墳などが上げられる。また、新鶴村の境界付近には、昭和48年に発掘調査された鬼渡横穴墓群・山王塚古墳・長尾原古墳・阿久津権現堂古墳・吹上古墳・京塚古墳・五つ塚古墳などが分布している。古墳時代の遺跡としては、細田遺跡・境田戊遺跡・大豆田A遺跡などがあげられる。

奈良・平安時代の遺跡は他の時代の遺跡よりは比較的多い。盆地西縁山地沿いには、北から北杉遺跡・前林遺跡・水上遺跡・沢口遺跡などがある。南北に流れる出鶴沼川を挟んで西側に能登A・B・C遺跡があり、東側の段丘上には大豆田A・B・C・Dの各遺跡、山ノ神遺跡が川に沿ったかたちで点在している。町の南東側には、JR只見線を挟んで細田遺跡・境田戊遺跡・金山B遺跡が分布している。

中世の遺跡として知られる中丸遺跡では、発掘調査の結果から掘立柱の中世建物跡が検出されている。また、新鶴村の木留場遺跡でも中世掘立柱建物跡6棟が確認されている。城館跡としては館ノ内遺跡・牛沢館・栗村館跡などがあげられる。

以上のように、今回発掘調査対象になった4遺跡などを含めると会津坂下町やその周辺各市町村は、縄文から中世まで数多くの遺跡が分布している遺跡密集地帯となっている。 (熊谷)

第1編 のと能登遺跡

遺跡記号 AB-NT

所在地 会津坂下町大字勝大字能登

時代・種類 弥生時代-遺物包含層

奈良・平安時代-集落跡

調査期間 4月20日～9月29日

調査員 大越道正・熊谷金一

西山真理子

協力機関 会津坂下町教育委員会

目 次

第1章 調査経過	9
第1節 立地・地形	9
第2節 調査経過	13
第3節 調査方法	14
第2章 遺構と遺物	15
第1節 垂穴住居跡	15
1号住居跡 (15) 2号住居跡 (21)	
第2節 据立柱建物跡	27
1号建物跡 (27) 2号建物跡 (29)	
第3節 土坑	31
1号土坑 (31) 2号土坑 (32)	
第4節 遺物包含層	33
位置と層序 (33) 出土遺物 (35)	
第5節 その他の遺構と遺物	81
焼土遺構 (81) 清跡 (82)	
ピット群 (84) 遺構外出土遺物 (84)	
第3章 まとめ	93
第1節 弥生時代の遺物について	93
第2節 奈良・平安時代について	98

第1章 調査経過

第1節 立地・地形

位置と地形

能登遺跡は、福島県河沼郡会津坂下町大字勝大字能登地内に所在する。会津坂下町の南、JR会津坂下駅から約2kmほど離れた新鶴村との村境の近くにある。この地点は、会津盆地西縁山地の東側を南北に流れる田沼川と出鶴沼川に挟まれた平坦地の東側にある。本遺跡は、出鶴沼川がつくる河岸段丘および段丘崖上の平坦面にかけて川沿いに長く立地する。標高は、197m～200mである。現況は段丘および崖上付近は蔬菜畑、平坦面はほとんど水田になっている。

本遺跡の周辺には数多くの遺跡が分布している。出鶴沼川の対岸には本遺跡と向かい合うように奈良・平安時代の散布地である、大豆田A・B・C・D遺跡、山ノ神遺跡が点在している。調査区のすぐ南には松無塚がある。西には南原A・B遺跡、田沼川の対岸には村西遺跡・大村新田遺跡・大村古墳群・前林遺跡・水上遺跡・沢口遺跡などが分布している。また、宮川（鶴沼川）の対岸である北会津村の和泉遺跡では、今年度の調査で弥生土器が出土している。（熊谷）

基本層序

調査区は、段丘の緩斜面・段丘崖・段丘崖上の平坦面など各場所によって堆積土の層が異なった様相をみせているため、場所ごとに土層観察用ベルトを設定し土層断面図を作成した。土層はL I～L IXまでの8層に分けられたが各層の中でも3～6層に細分できるものもあった。L Iは表土・耕作土の層である。L IIは段丘崖上に存在していたであろう遺物包含層の再堆積層であると考えられる。L IIIは川の氾濫、洪水によって堆積した層であると思われる。L IVは弥生土器を多量に含む包含層である。L Vは主に粘土で構成されている層である。L VIは砂の層で基本層序概念図にはあらわされてこないが、



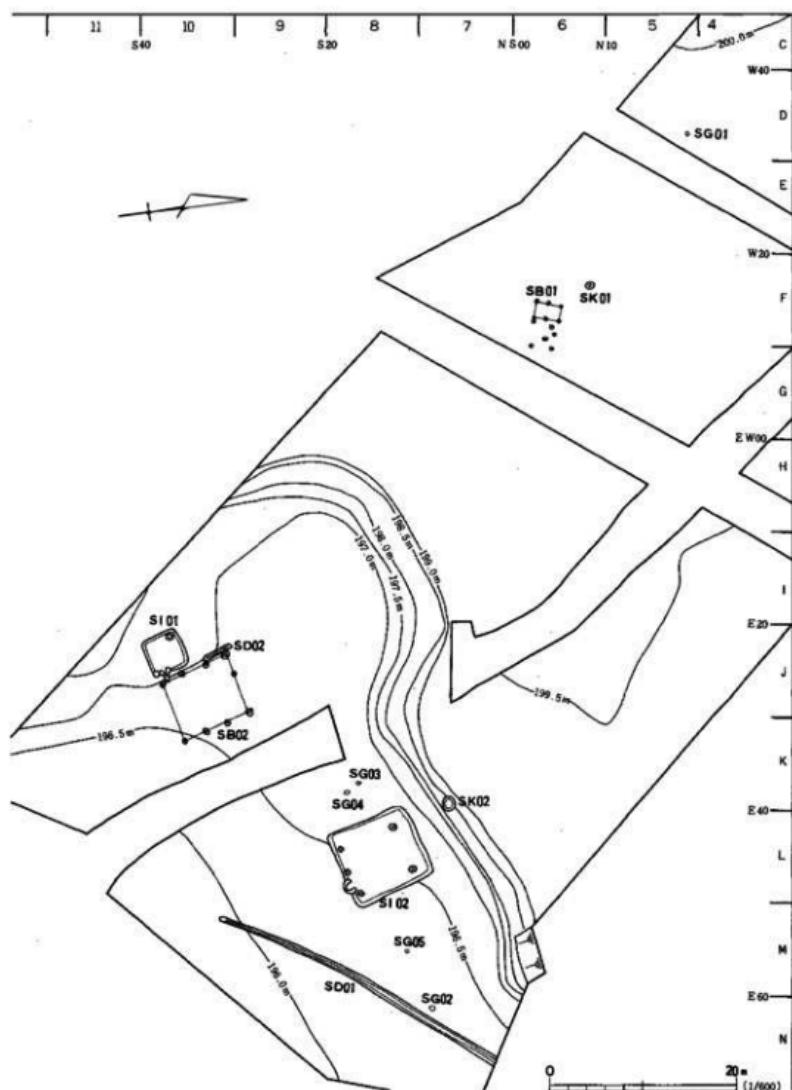
第1図 能登遺跡位置図

国土地理院(1/50,000)

第1編 能登遺跡



第2図 進跡周辺路線計画図



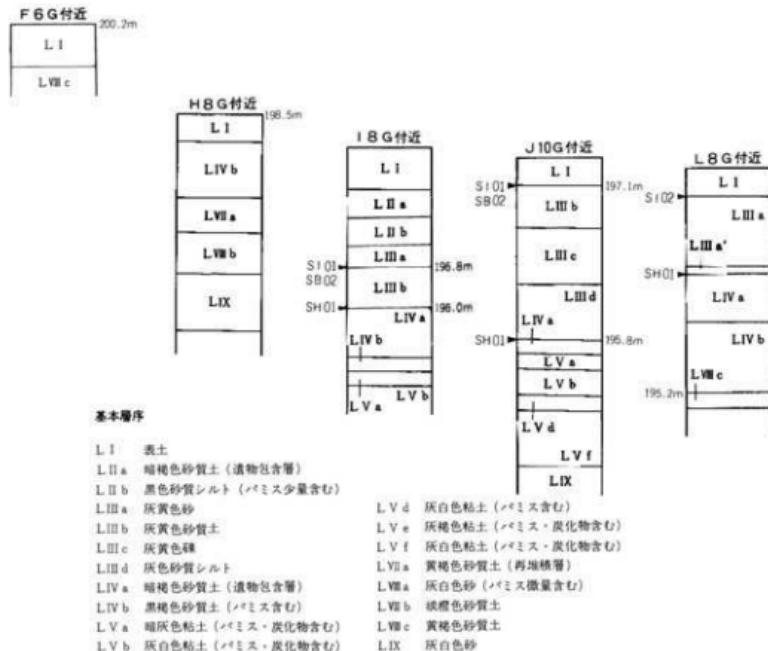
第3図 能登遺跡全体図

I 8・I 9・J 8 グリッド付近にみられた。L VII は再堆積層である。L VIII・L IX は地山層である。

F 6 グリッドの図は、1号掘立柱建物跡・1号土坑などが検出された場所で、近年は水田として利用されていたところである。土層は L I と L VII c の 2 層を確認、L VII c は暗灰色砂質土で、調査区の西側全体に広がっている。

H 8 グリッドの図は、段丘崖中腹で遺物包含層が検出された地点の土層であり、5 層に分層される。L I のすぐ下から L IV b の黒色砂質土があらわれる。その下層は L VII a の黄褐色砂質土、L VIII b の淡橙砂質土、L IX の暗灰色砂質土と続いている。

I 8 グリッドの図は、同じく遺物包含層が検出された段丘崖の下方部分の土層であり、5 層に分層できる。L II a は暗褐色砂質土、L II b は黒色砂質シルトである。この層には弥生土器が含まれており、前にも記述した通り、崖の上にあった弥生土器の遺物包含層が流れ込んで再堆積したものと思われる。また、この層には若干の土師器が含まれていた。L III a は灰黄色砂、L III b は灰黄色砂質土で、どちらも出鶴沼川の氾濫・洪水によって堆積した層と考えられる。L IV a は



第4図 基本層序概念図

暗褐色砂質土、LIV b は黒色砂質土の遺物包含層で多量の弥生土器が出土している。その下層に LV a の暗灰色粘土、LV b の灰白色粘土の粘土層が続いている。

J10グリッドの図は、1号住居跡・2号掘立柱建物跡などが検出されたところであり、5層に分層される。LIの次にLIII b がくる。この層の上面から竪穴住居跡や掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれている。続いてLIII c の灰黄色礫、LIII d の灰色砂質シルトとなっている。これらの層は平安時代以前に堆積した洪水層と考えられる。また、ここでは遺物包含層は検出されなかった。以下、LVa・LVb・LVd・LVf の4層に分層できる粘土層とLIV の地山層へと続く。

L8グリッドの図は、2号住居跡が検出されたところであり、4層に分層できた。ここもJ10グリッドと同じくLIII a の灰黄色砂層の上面から住居跡が掘り込まれている。その下層にはLVa とLIV b の遺物包含層が検出されたが、J10グリッド付近のようにLV の粘土層は認められず、LVII の地山層になる。

(西山)

第2節 調査経過

能登遺跡は、会津坂下町内で東北横断自動車道路線にかかる4遺跡の内の一一番東側に位置している遺跡である。調査は、高速道路の路線幅のみを対象として記録保存のため実施したものである。今回、調査したところは遺跡の南端部分で、調査面積は5,500m²である。当初、道路公団建設事務所から工事用道路を早急に建設したいので道路予定地を優先して調査してもらいたいとの要請があり、発掘調査は調査区の東西に走る農道を挟んだ南側を先行して行うようにした。また、遺物包含層を分断するかたちで通っている農道は農作業等で使用されているため、工事用道路の完成を待って最後に調査を行った。調査員は3名で、調査期間は途中の中止期間を入れて4月20日から開始し9月29日に終了した。

調査経過の概要は次の通りである。

4月20日、会津坂下町教育委員会など関係機関へのあいさつを終えたのち、調査区に入り、調査範囲の繩張りと表採を行う。4月21日、工事用道路を調査区の南側に建設する予定なので農道の南を優先して重機による表土剥ぎを開始する。4月26日、ブルドーザーによる排土の除去は、排土の捨て場が調査区の西方に限定されているため作業能率が上がらないので、ブルドーザーに変えて大型のキャリアダンプを導入する。4月28日、表土剥ぎが終了した段丘緩斜面より遺構検出作業を開始する。5月10日、調査区の北方にある標高197.40mの三角点よりベンチマークを移動する。5月11日、道路公団の路線中心杭を使って基準杭およびグリッド杭の設定を開始する。5月17日、1号掘立柱建物跡の精査を開始するが、南側の水田より調査区に水が侵入してきて遺構が水没し、排水に時間をとられてしまうことがたびたびあり調査は難航する。5月25日、段丘

崖下に遺物包含層が広がっていることが判明する。5月26日、2号掘立柱建物跡の精査を開始する。東側が削平されているため全容を明らかにすることはできなかった。5月29日、遺物包含層が住居跡の下まで伸びていることが判明したので、竪穴住居跡などの遺構を精査したのちに下層のLIII洪水層を重機によって排除することを決定する。6月5日、1号住居跡の精査を開始する。カマドをもった方形の住居跡で、出土遺物は土師器片、須恵器片で須恵器の割合が高かった。7月6日、西側の遺物包含層の全測図を作成し、調査区の東側に調査の主力を移す。7月13日、2号住居跡・溝跡・焼土遺構などの精査を開始する。7月25日、竪穴住居跡の下に堆積している洪水層を排除したのち遺物包含層の精査を開始するが南側よりも遺物の出土数は少なかった。8月11日、遺物包含層を横切る農道部分を残して全調査を終了する。9月29日、27日から農道部分の補足調査を行い、遺跡発掘調査の全日程を終了する。

(熊谷)

第3節 調査方法

今回の能登遺跡調査区の範囲は、東西に約95m、南北に約60mあまりで、調査面積は5,500m²である。

グリッド杭の設定にあたっては、国家座標を利用した。日本道路公団の設定した路線の中心杭S T A560+40とS T A560+67の座標値から国家座標X+170250.00, Y-1590.00の位置に基準杭を設定した。ここから、東西、南北に10m四方のグリッドを張り巡らした。グリッド杭の命名にあたっては、基準杭をNS00・EW00として、真東にE10・E20……、真西にW10・W20……、真南にS10・S20……、真北にN10・N20……としてこれを組み合わせて表記することにした。グリッドの名称は、西から東へはアルファベットでA・B・C……N、北から南へは数字で1・2・3……11として、それらを組み合わせてA1・H8・J10グリッドなどと呼称することにした。ベンチマーク(BM)は調査区の北方にある標高197.40mの三角点から移動して、調査区に3か所設定した。BM1はG5グリッド付近で200.00m、BM2はH9グリッド付近で197.50m、BM3はK9グリッド付近で197.50mで、これらをレベル原点とした。

調査区のLIの表土・耕作土剥ぎは、時間の関係で重機を使用して行った。また、遺物包含層は竪穴住居跡などの遺構が検出されたLIII層の下層に伸びていることが判明したので、LIIIの洪水層も重機を使って除去した。

遺構の記録にあたっては、遺構は1/10ないし1/20の縮尺で図化した。調査区の全体図は1/200の縮尺として測量を行った。写真是35mmモノクロームおよびカラーリバーサルフィルムを使用して、両者同アングル、同コマ数で撮影を行った。また、特に必要と認められた場合は6×4.5判のカメラを使用した。

(熊谷)

第2章 遺構と遺物

遺構は、調査区の中でも河川に近い東半部に大部分検出されている。竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡2棟・土坑3基・遺物包含層1箇所・焼土遺構3箇所・溝跡2本・柱穴6個が検出されているが、確実に時期比定できるものは弥生時代後半の遺物包含層と、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、平安時代後期の土坑1基である。遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器などがあり、平箱にして約90箱出土した。このうち9割前後を占めるのは天王山式期に属する弥生土器である。

(大越)

第1節 竪穴住居跡

1号住居跡 SI01

遺構 (第5・6図 図版3~6)

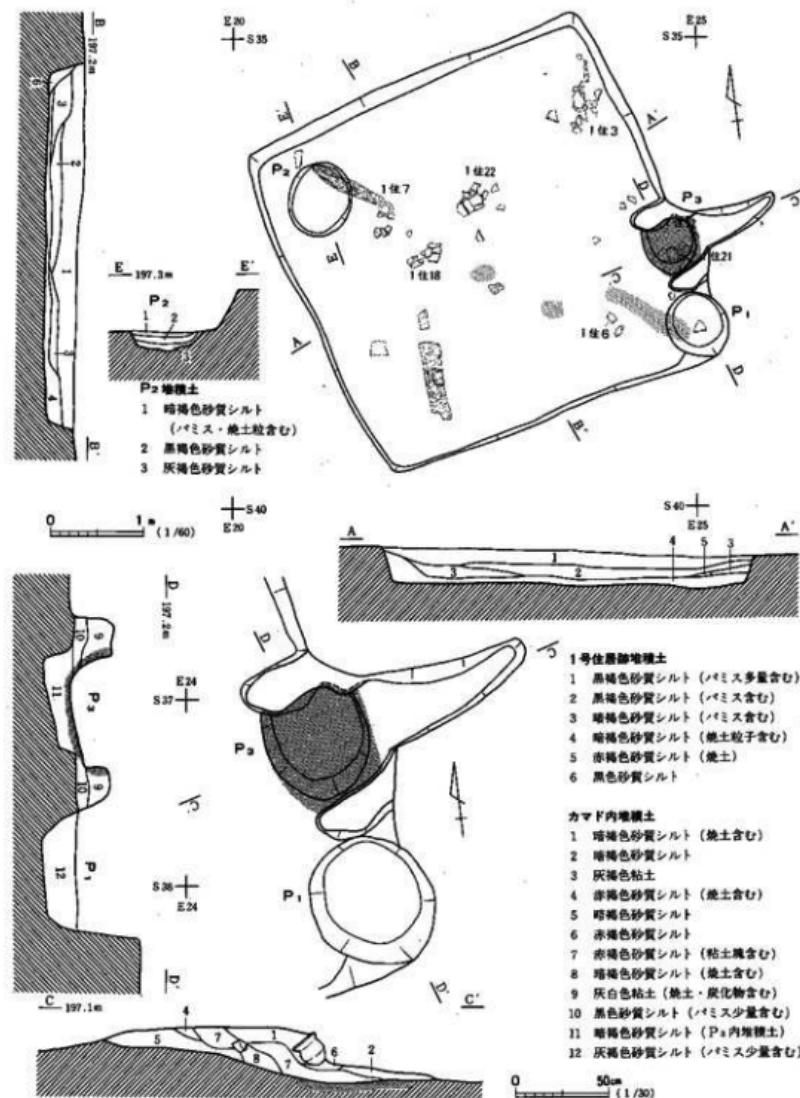
本住居跡は、調査区南東側、J10グリッドに位置する。検出面はLIII b上面である。規模は南北約3.93m、東西約3.92mであり、ほぼ方形である。主軸方向は、N26°Wであり、東壁南寄りにカマドを有している。住店内堆積土は、焼土・炭化物を含むか否かにより大きく2層に分かれ、 ℓ 1~ ℓ 3までがLII a・b・cに対応し、 ℓ 4は堆積状況等より本住居跡南側を南から北へ流れる出鶴沼川による堆積と考えられる。

床面上では、焼土・炭化物が放射状に検出され、柱材ではないかと考えられる。また、床面上の遺物の殆どが2次的に火を受けていることから、住居が埋まる前に火災にあったものと考えられ住居使用時もしくは廃棄直後における火災であろう。床面はLIII bであり、水割けの良い砂質の土であり、貼床などの施設は見られなかった。

壁の残存状況は良好であり、東壁が32.5cm、西壁が37cm~44cm、南壁が27cm~42cm、北壁が30cmである。各壁の傾斜は、ほぼ垂直であるが、緩いところでは約60°となる。また壁面での、その他の施設は見られなかった。

東壁南寄りに位置するカマドは、残存状態が良く、右袖から左袖までの幅約100cm、焚口から煙道までの長さ約150cmを測り、右袖幅22cm・長さ48cm、左袖幅28cm・長さ48cm、燃焼部幅52cm・長さ34cm、煙道幅34cm・長さ94cmである。カマド内堆積土からみると、 ℓ 3・ ℓ 9が粘土層であり ℓ 3は天井部崩落土と考えられる。 ℓ 6・ ℓ 7はカマドに伴う焼土であり、 ℓ 4は火災時の焼土であろう。燃焼部床面はあまり焼け締まっておらず、また炭層が見られないことからカマド内

第1図 能登遺跡



第5図 1号住居跡

の挿き出し後に廃棄されたものであろう。

また、燃焼部の床下に深さ約13cm、長径約74cm、短径約55cmの楕円形を呈する浅い掘り込みがみられた。カマドの構築に拘る構造であろうか。また燃焼部内には、土師器の甕が残されており検出面にススの付着が見られることから、火災時の状況のままと思われる。この甕の奥に須恵器杯や土師器甕、須恵器鉢等が重なって出土している。特に焼けているようない点は観察できず、カマドの支脚というよりは、廃棄時の何らかの行為に伴うものと考えられる。カマド袖は、左右ともに高さ27cmであり、黒色砂質シリトを敷いた後に灰白色粘土を積みあげて作られている。粘土には焼土粒や炭化物、土器片が含まれている。煙道は緩やかな登り勾配を呈していたが、余り明確な構造は描むことができなかった。

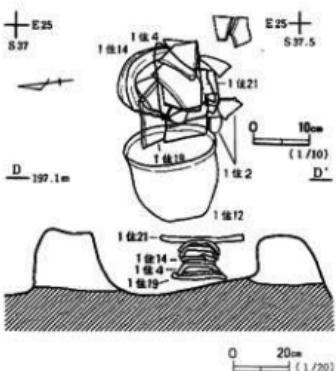
その他住居内施設としては、ピットが2個みられる。南東隅にP₁、対角の北西隅にP₂が位置する。P₁は長径74cm、短径64cmの楕円形であり、深さは19cm、堆積土は1層である。P₂は長径76cm、短径72cmのはば正円であり、深さ20cm、堆積土は3層に分かれ、③から⑩までは、双耳椀（1住12）が出土している。

遺 物（第7・8図 図版28・29）

本住居跡出土遺物は、土師器（甕）、須恵器（杯・蓋・甕・瓶類・鉢）である。土師器杯は見られなかった。遺物の出土状況はカマド内と、床直上が主体である。出土状況からみると、非常に一括性の高い資料であり、当時の生活用具のセット関係をよく現していると思われる。

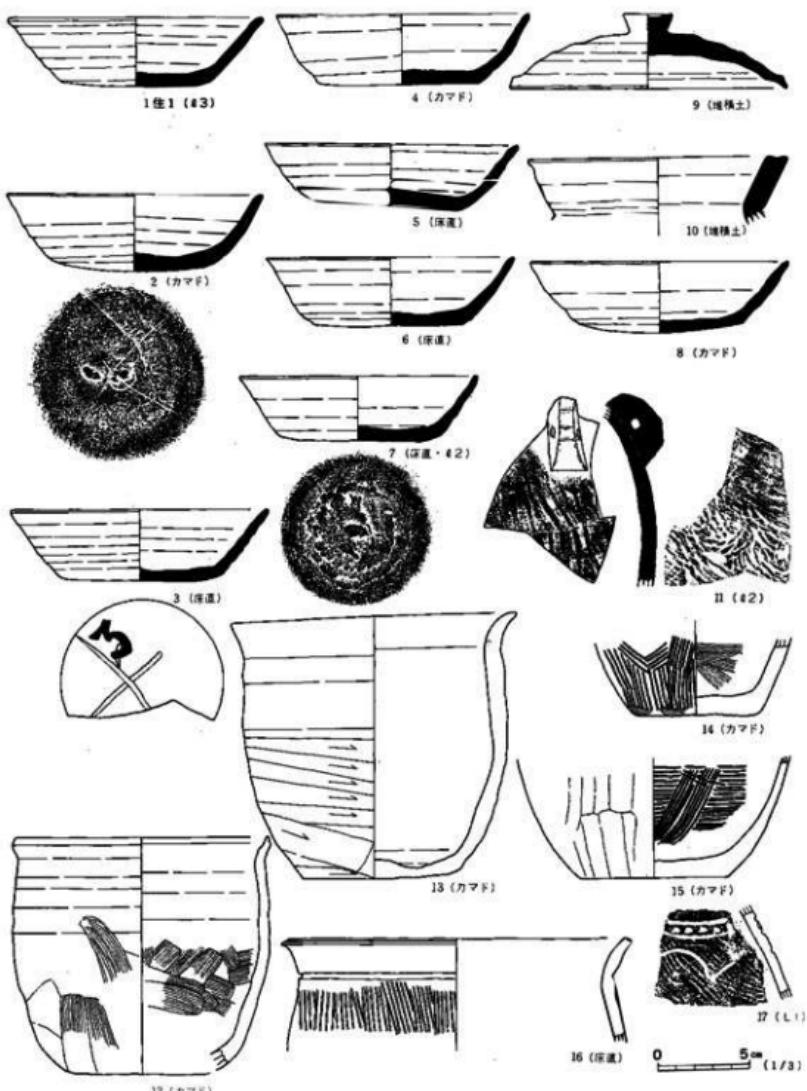
〔土師器〕

甕 1住12・13は小甕であり、ともにカマド内からの出土である。12は焼き歪みがみられ、外側ともに口縁から胴部半ばまではロクロナデ、胴部下半はナデ調整を施している。13は内面と外面口縁部から胴部半ばまでがロクロナデ、底部裏面から胴部下半まで回転ヘラケズリである。12の口唇部がやや受口状に立ち上がるのに比べ、13の口唇部は舌状ぎみに軽く引き出されている。14・15・16は、長胴甕である。14・15はカマド内から重なるようにして出土したものであり、16は床直上からの出土であるが、胎土を観察すると14・16は同一個体の可能性がある。14の底部裏面から胴部にかけてはハケメ調整である。16の口唇部は、端部を軽くつまみ出した形態であり、そのため口唇部に溝状に巡る筋がついている。また頸部にめぐる沈線は深く、はっきりと施されている。各個体の胎土の差異は、肉眼観察では認められなかった。

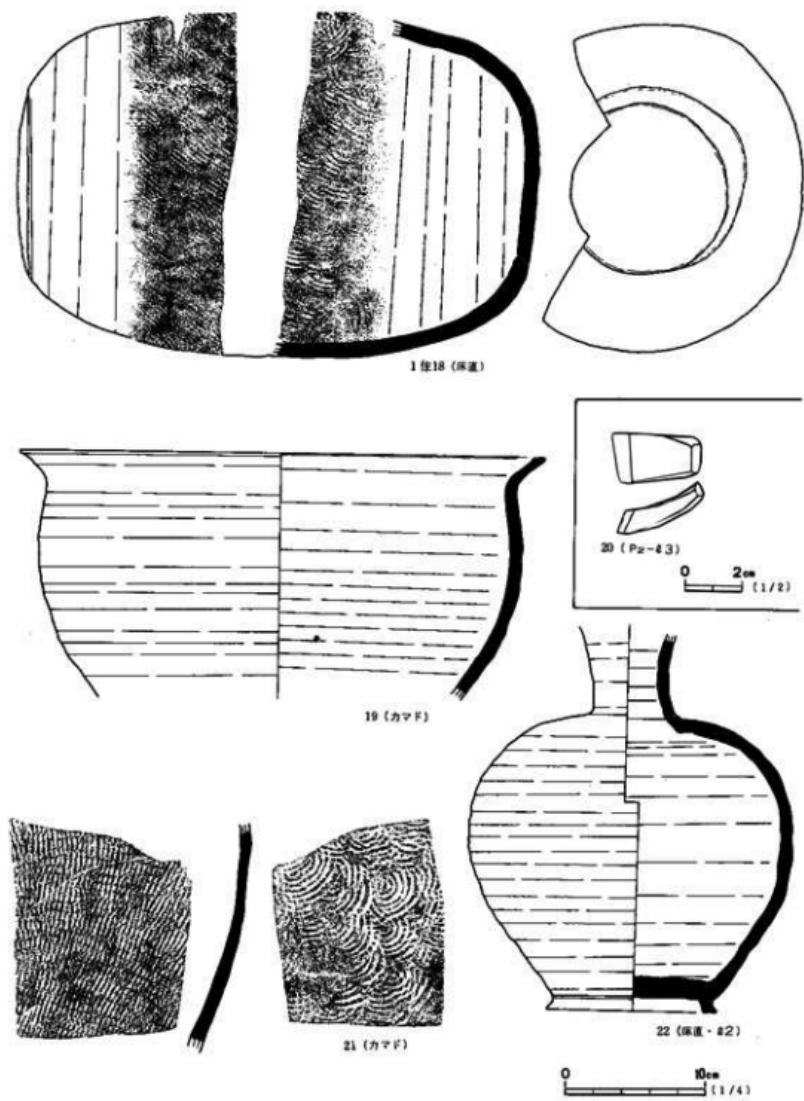


第6図 カマド内遺物出土状況

第1編 能登遺跡



第7図 1号住居跡出土須恵器・土師器



第8図 1号住居跡出土須恵器

〔須恵器〕

杯 1住1は ℓ 3, 2・4・8はカマド内、3・5~7は床直上からの出土である。底部の切り離し技法はすべて回転ヘラ切りであり、4を除きすべてナデによる調整を行っている。また、2・3にはヘラ記号がみられ、ともに「+」であり、3には墨書きがみられ「寺」と考えられる。

蓋 1住9は堆積土からの出土である。天井部には、回転ヘラケズリ再調整が行われており、つまみ部は宝珠形の中央部がやや浅く窪んだボタン状の形をとる。

甕 1住21は大甕の胴部破片である。出土位置はカマド内上部であり、口縁部資料は見当たらず、カマド内から重なって出土した土器群の最上部に内面を上にした状態で検出された。

瓶類 1住11は双耳瓶、18は横瓶、22は長頸瓶であり、出土位置は、11が ℓ 2, 18が床直上、22が住居跡中心付近の床直上である。11は耳部周囲に自然釉の痕跡がみられ、これは2次的な火熱のために自然釉のほとんどがとんでもしまったものと思われる。また耳部片側にタール状の付着物がみられる。18は全体の約4分の1ほどの残存であり、口縁部資料に欠ける。内外面ともタタキ痕を片側半分ほどナデ消しておらず、外面には灰灰による自然釉がみられる。22はほぼ完形のものであるが、口縁部は意図的に削り取られたのか、全く見つからなかった。頸部は3段構成であり、頸部から肩部にかけて張り出す形態である。全面に薄く自然釉が掛かっていたものと思われるが、2次的な火熱のために脚と肩の一部を除き釉が剥離している。また脚部下には焼台の破片が付着しているが、これにより、焼台の上に載せるようにして焼成されたことが窺える。

鉢 1住19は口径37.4cm、灰褐色を呈し内外面ともにロクロナデされており、胴部は球胴に近い。口縁部はやや外反している。

双耳椀 1住20はP₂- ℓ 3から出土したものである。双耳椀の耳部である。

弥生土器 1住17はL1からの出土であり、天王山式土器の壺の肩部である。

不明 1住10は器種不明である。色調・胎土の観察からすると11の双耳瓶と非常に似通っており、また黒ずんだ釉の発色なども似ている。

須恵器の胎土についての肉眼観察からは10・11とその他の2グループに分けることができた。

まとめ

本住居跡は、廃棄の直後または廃棄時に火災にあったものと思われ、その資料の一括性は非常に高いものであり、出土遺物は住居跡に伴う生活用具であったと思われる。遺物の内訳は、食器・貯蔵・調理具が須恵器、煮炊具が土師器というように用途による使い分けが明確に現れており、土師器は一点も見られなかった。このような須恵器を食器の中心とする在り方は、会津地方の地域性とも言え、北陸方面からの影響が考えられる。

出土遺物群は須恵器を基準とする8世紀中葉頃と考えられ、よって本住居跡もそれに近い時期のものであろう。

(西山)

2号住居跡 S I 02

遺構 (第9・10図 図版7~10)

本跡は調査区の北東端K・L~7・8グリッドに位置し、南西側に検出された1号住居跡との距離は約30mである。検出面は1号住居跡同様低位段丘面に堆積した砂礫層(LIII)上面である。この付近は後世の耕作がLIIIに及び、住居跡も上部からの歯状の掘り込みによって部分的に搅乱を受けている。特に住居跡南東区では搅乱が床面にまで達している。プランは、東西8.2m、南北9.1mで若干南北が長いもののほぼ方形を呈しており、北壁と南壁の中央を結ぶ直線の真北からの偏度はN21°Wである。住居跡内埋土は、4層に大別される黒褐色ないし褐色砂質シルトを主体とした自然堆積層であるが、住居跡中央部の床面は最上層に堆積するL1に覆われている。

床面は、大部分地山LIIIを直接利用しているが、北壁とカマド周辺を除く壁沿いには、幅60cm~100cm、深さ20cmで、灰褐色砂質シルトを投入整地し貼床としている。全般に平坦ではあるものの、住居跡北半から東側にかけては幾分低くなっている。カマド付近や住居跡中央部の床面は、よく踏み締められたと思われる表層が硬化しているが、縁辺部ではしだいに軟かくなる傾向を示し、特に北壁付近での踏み締まりは住居跡内で最も弱い。

壁溝は、北壁の東半から東南壁、それに西壁の南端部にかけ掘り込まれている。幅24cm~32cm、床面からの深さ7cm~16cmで南壁の西半部分が最も深い。壁は、南西隅で最大残存高53cmを測る。壁面は、北壁を除く他の3壁は約80°前後で立ち上がるが、北壁は崩れが大きいせいか約60°強の勾配しか示していない。

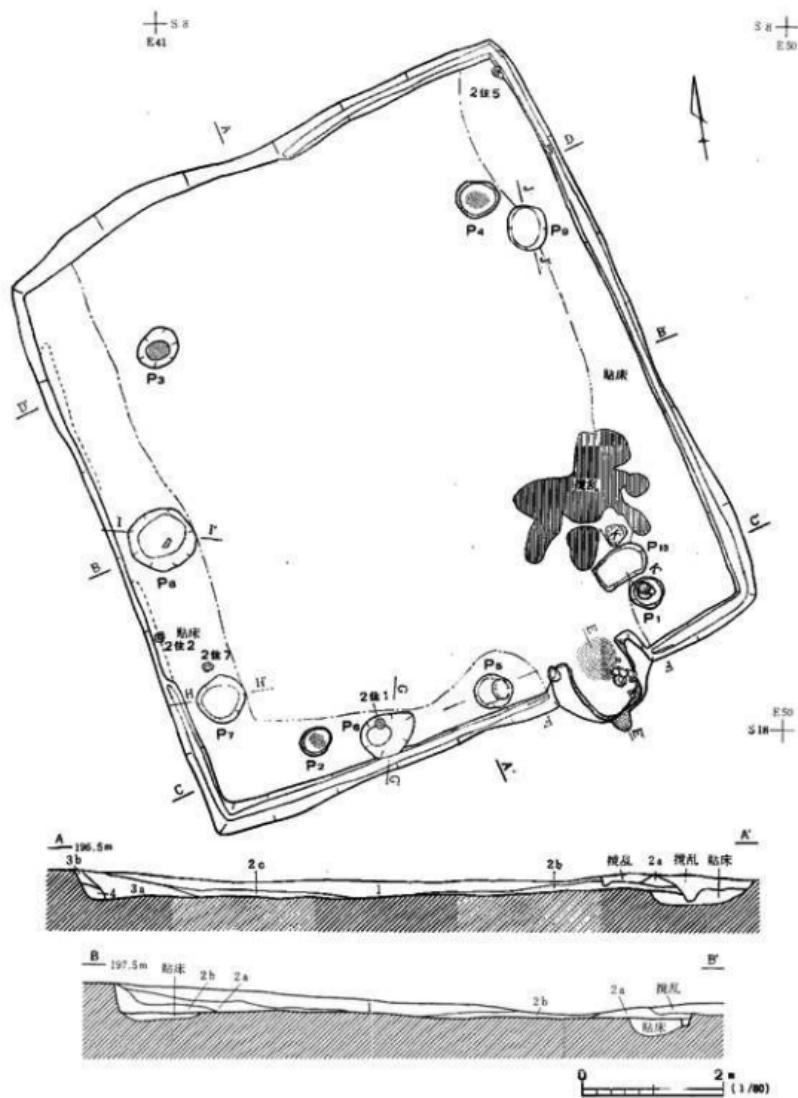
カマドは、南壁東寄りに位置している。焚口幅84cm、燃焼部奥行104cmで、燃焼部の半分強は住居跡プランより外部に張り出している。袖部は灰褐色ないし黒褐色の粘土や砂質シルトによって構築されている。右袖幅約34cm、左袖幅約30cmで、壁面から住居跡内に約54cmの長さで張り出している。火床面からの最大残存高は30cmである。火床面は現状では、焚口から奥壁に向って僅かに登っている程度であるが、焼土面が流れたためか袖周壁部分が燃焼部奥半に観察されなかつたことから、本来この部分での傾斜は現在よりもあったと思われる。燃焼部と袖の下部には、壁溝が連続して掘り込まれていることが確認され、壁溝掘り込み後にカマドの位置を選定、一部壁溝を埋め戻してカマドを構築したことがわかる。奥壁は、70°弱の勾配で立ち上がっている。奥壁上端ではさらに25cm程度焼土粒を混入した暗褐色土の広がりが外方向に向って確認されていることから、種道が付設されていた可能性が高いと考えられる。

ピットは、総数10個検出された。主柱穴はP₁~P₄で、ほぼ住居跡プランの対角線上付近に位置し

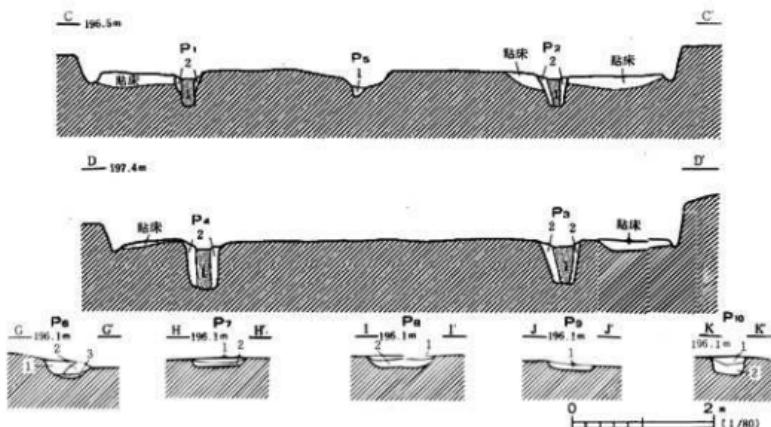
第1表 2号住居跡ピット計測表 (cm)

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
長 横	48	45	62	57	55	81	67	92	64	76
短 横	45	37	49	54	48	59	64	85	54	47
深 さ	48	45	61	68	15	25	6	8	10	28

第1図 能登道路



第9図 2号住居跡 (1)



2号住居跡地盤土

A-A'・B-B'

- 1 黒褐色シルト(バニス多量含む)
- 2 a 單褐色砂質シルト(バニス・焼土若干含む)
- 2 b 單褐色砂質シルト(バニス若干含む)
- 2 c 單褐色砂質シルト(バニス若干含む)
- 3 a 黒褐色シルト(バニス多量含む・堅緻)
- 3 b 黒褐色シルト(バニス少量含む)
- 4 明褐色砂質シルト
- 粘床 灰褐色砂質シルト

C-C'・D-D'

- 1 單褐色砂質シルト
- 2 灰褐色砂質シルト

P₆堆積土

- 1 單褐色シルト(炭化物・焼土・バニス含む)
- 2 單褐色シルト(焼土微量含む)
- 3 底褐色砂質シルト

P₇堆積土

- 1 單褐色シルト(バニス若干含む・堅緻)
- 2 底褐色砂質シルト

P₈堆積土

- 1 底褐色砂質シルト(バニス含む)
- 2 單褐色砂質シルト(バニス若干含む)

P₉堆積土

- 1 底褐色砂質シルト

P₁₀堆積土

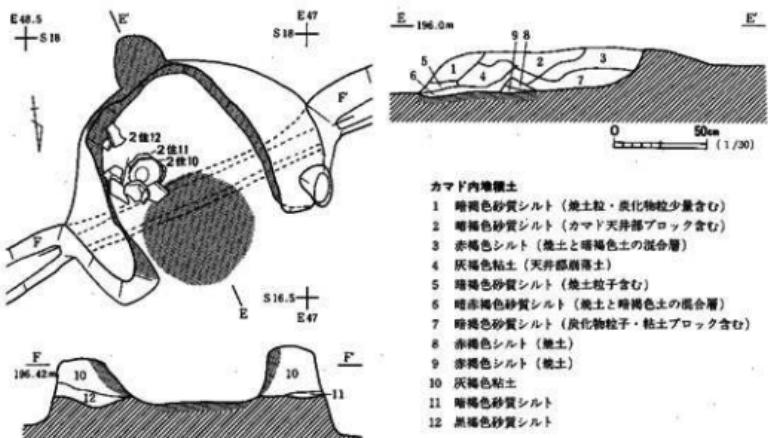
- 1 底褐色砂質シルト(白色粘土ブロック含む)
- 2 底褐色砂質シルト

第10図 2号住居跡 (2)

ている。主柱穴の平面形は、径37cm～62cmの橿円形もしくは円形を呈す。深さは42cm～65cmである。いずれも径18cm～26cmの柱痕が確認されている。掘形内埋土は灰褐色砂質シルトを投入し、たたき締めている。

この他柱痕を有するビットが1個(P₅)ある。これはP₁とP₂のほぼ中間に位置することから支柱の一種と考えられるが、必ずしも柱痕は細くではなく主柱穴と同規格の柱痕が検出されている。

P₆～P₁₀は、貯蔵穴状のビットである。平面形はP₆～P₉が略橿円形、P₁₀は略長方形を呈している。P₁₀を除く他の4個のビットは住居跡の周壁沿いに位置している。深さはP₆・P₉が24cm～26cmと深くP₆は鍋底状に、P₁₀は箱形に窪む。他の3個のビットは8cm～15cmと浅く、皿状に窪



第111図 2号住居跡カマド

んでいる。埴土は、P₆・P₇が人為堆積、P₈～P₁₀が自然堆積土であった。

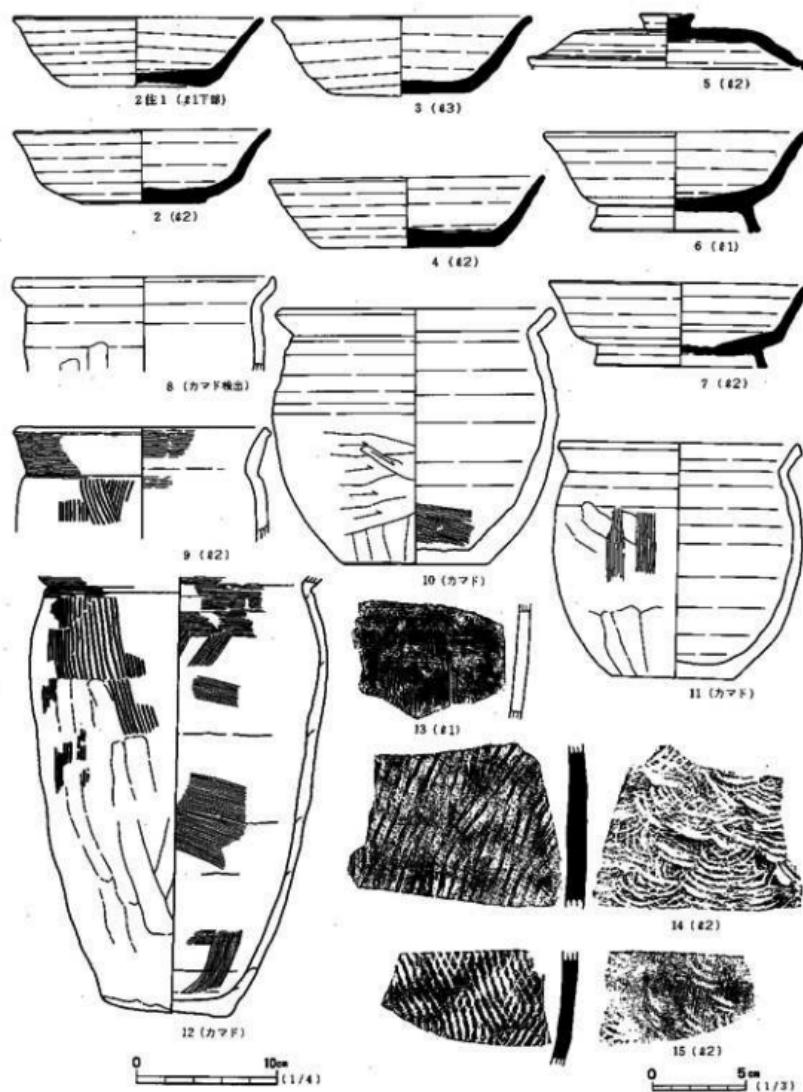
遺 物 (第12・13図 図版29・30)

本跡の出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕、砥石、土錘、繩文土器、弥生土器がある。遺物の多くは堆積土中に小破片状態で混入していたが、カマドの内部や貯蔵穴状ピット、床面付近から出土した土師器甕や須恵器杯・蓋は、不完全ながらも形状をとどめているものが多い。

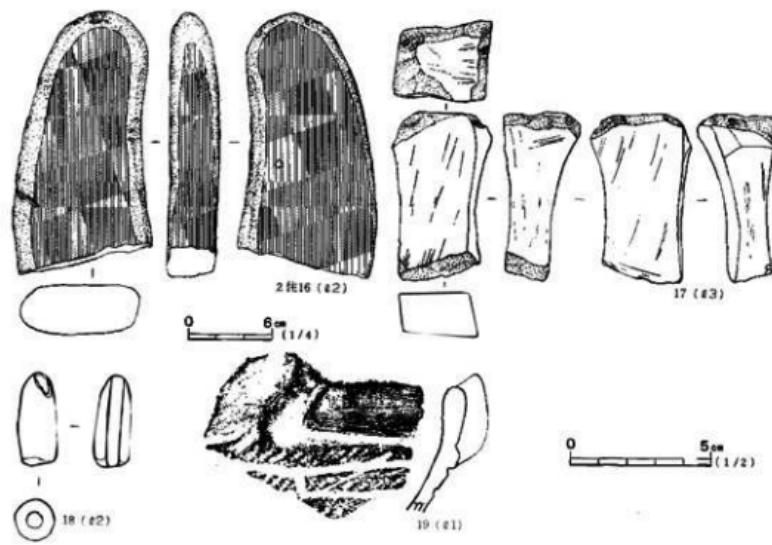
〔土師器〕

杯 堆積土中から小破片13点が出土した。すべてロクロ成形である。外面の調整痕が観察できる破片が3点あるが、うち2点は回転ヘラケズリ、残りの1点は回転ヘラミガキが施されている。内面は、ヘラミガキ・黒色処理される破片が9点、すでに黒色処理が消失しているもの3点である。この他ナデ調整のみで黒色処理されない破片が1点あるが、これは他の破片に較べ、小振りで粗雑な造りになるものと考えられる。

甕 図示した甕は6点である。これらの甕は大きさの点で、高さ30cmを超える長胴の甕（2住12）と、12cm～13cmの小型の甕（2住10・11）に2分される。2住12は、粘土紐の積み上げによる成形で、外面の調整は縦位のハケメを主体とし、胴半ばから下半にかけ軽いケズリの入る部分がある。2住8・10・11は、ロクロ成形で外面に縦もししくは斜方向にケズリが入る。2住9では、外面にハケメが入るが、特に口唇部はロクロ成形甕の端部のそれと同様面取り風に稜をもっている。2住13は、ロクロ成形の長胴甕と思われる胴部下半の破片で、外面にハケメが施されている。



第12図 2号住居跡出土須恵器・土師器



第13図 2号住居跡出土石器・縄文土器・土製品

〔須恵器〕

杯 2住1～4の4点である。2住2は高台付杯の杯部と形態上同じで、他の3点とは区別される。底部切り離し技法は4点とも回転ヘラ切りで、切り離し後は底部外面がナデ調整されるのみである。2住2を除く3点中最も底径が小さいのは2住1である。体部から口縁部の立ち上がりは直線的であるが、2住3の口縁部では僅かに外反気味となる。色調は、2住1～3が青灰色、2住4が白色系である。

高台付杯 2住6・7の2点の図示である。いずれも杯部は体部下端で屈曲点を持ち、口縁部は僅かに外反気味に立ち上がる。杯部の底部切り離しは回転ヘラ切りであるが、2住7では底部を部分的に、2住6では体部下端から底部にかけ高台貼付の前段に■転ヘラケズリを施している。

壺 2住5のみ図示した。他に小破片が3片ある。2住5の天井部は直線的に造り、中央部がやや深んだツマミを、軽い回転ヘラケズリ調整のち付けている。縁端部の造りは鈍い。

甕 2住14・15の2点を図示した。2点とも胴部の小破片で、外面は平行タタキメである。内面は、同心円状のアテ具痕であるが、2住15ではさらにナデ調整されている。

〔石製品〕

砥石 2住16・17の2点である。2住16は火山灰質砂岩製で偏平な2面を主に使用面としている。

る。2住17は凝灰岩製で小口面の縁辺を除き使用面としている。

〔土製品〕

2住18とした土鍤が1点、堆積土中から出土しているのみである。残存長3.2cm、径1.2cm、孔径0.4cmで端部を折損している。

〔繩文土器〕

堆積土中から1点(2住19)出土した。加曾利B₁式期の鉢形土器の口縁部破片である。無文の口縁部を斜方向の隆帯で区切り、以下地文に繩文が施される部分に沈線を2条以上横走させ、さらにその沈線を縱位の短沈線で繋いでいる。

まとめ

本住居跡は、床面積が約70m²を数え、住居跡としては大型の部類に属す。4本柱を主柱としているが、カマドが付設される南壁沿いの中央付近には、支柱穴と考えられるピットが検出されており、カマド上部の天井高を高くとっていた可能性が考えられる。出土した土器群の組成中、土師器杯・須恵器甌は小破片が少量混入したのみで、遺存状態だけからいえば生活時の器種構成を反映しているとはいいがたい。当住居跡の時期は、出土遺物中に底径の広い須恵器杯やハケメ調整される土師器甌とともに、やや底径の小さい2住9のような杯も混在することから、1号住居跡よりは時期的に下降する平安時代初頭頃としておきたい。

(大 越)

第2節 挖立柱建物跡

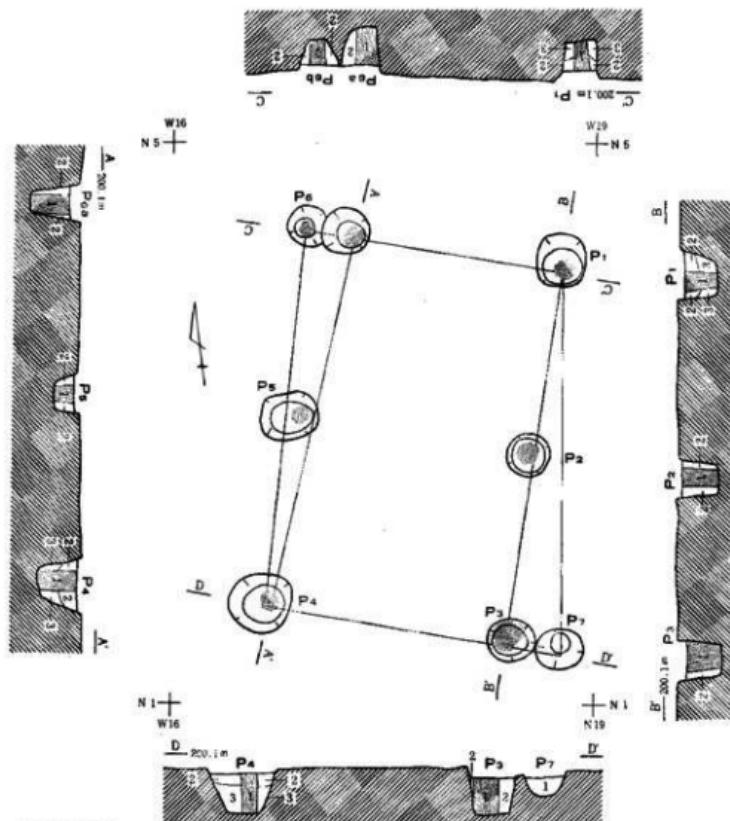
1号建物跡 SB 01 (第14図 図版11・12)

調査区中央部南側段丘上平坦面のF6グリッドにおいて検出された掘立柱建物跡である。本遺構の北側約3mのところに1号土坑があり、南東方向へおよそ20m行くと段丘斜面になっている。検出面はL型の地山層である。当初、F6グリッドには本遺構に関係する7個の柱穴を含めると14個のピットが検出されたが、柱痕が明確に分かれるP₁～P₆が建物跡を構成していることが判明した。

規模は東西に1間、南北に2間の長方形を呈しており、南北柱列の中点を結ぶ軸線は真北から18度東に傾いている。東側柱列と西側柱列はどちらも約2.60m(1.30m+1.30m)を測り、南側柱列は1.70m、北側柱列は1.50mある。このことから規模としてはあまり大きな建物ではなかったと思われる。掘形はすべて円形プランで、柱痕も直径15cm前後のものが確認され、形状から丸柱を使用していたと考えられる。P₆は据え替えた可能性があり、先後関係はP_{6a}→P_{6b}となる。

第2表 1号建物跡柱穴計測表

P No	1	2	3	4	5	6a	6b
長径	38	30	34	44	40	32	28
短径	36	30	30	40	30	32	26
深さ	28	30	32	32	18	34	22



1号建物跡地土

P1	P3	P5
1 黒褐色シルト	1 黒褐色シルト	1 黒褐色シルト
2 灰褐色シルト	2 灰褐色シルト (地山ブロック含む)	2 灰褐色シルト (地山ブロック含む)
3 棕褐色シルト (地山ブロック含む)		
P2	P4	P6
1 灰褐色シルト	1 黑褐色シルト	1 黑褐色シルト
2 棕褐色シルト (地山ブロック含む)	2 灰褐色シルト (地山ブロック含む)	2 灰褐色シルト (地山ブロック含む)
	3 棕褐色シルト (地山ブロック含む)	

第14図 1号建物跡

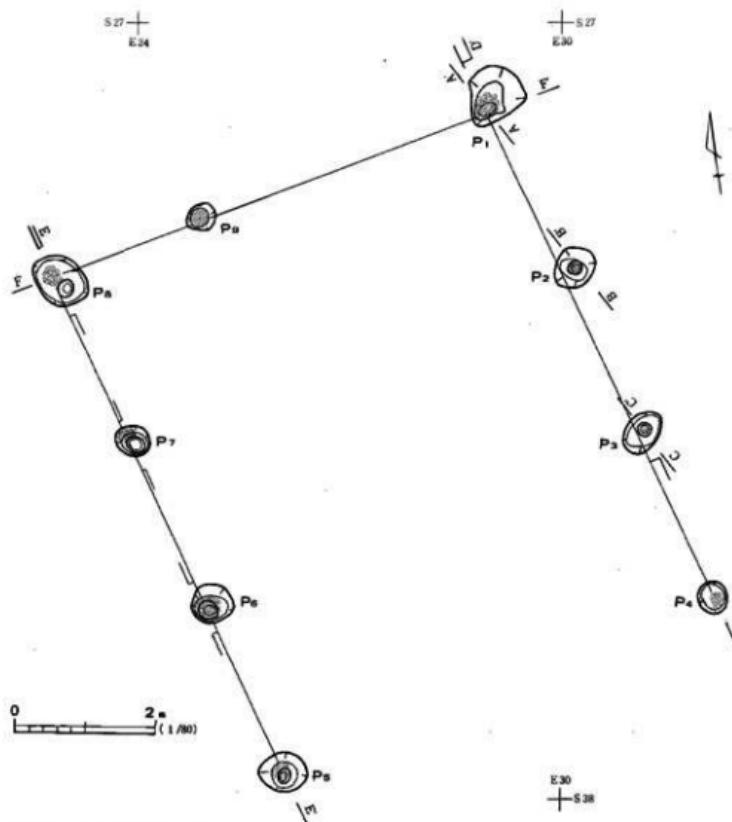
0 1m (1/40)

各ピットから建物跡に共伴する遺物の出土がなかったので、本遺構が建物として機能していた時期は不明である。
(西山)

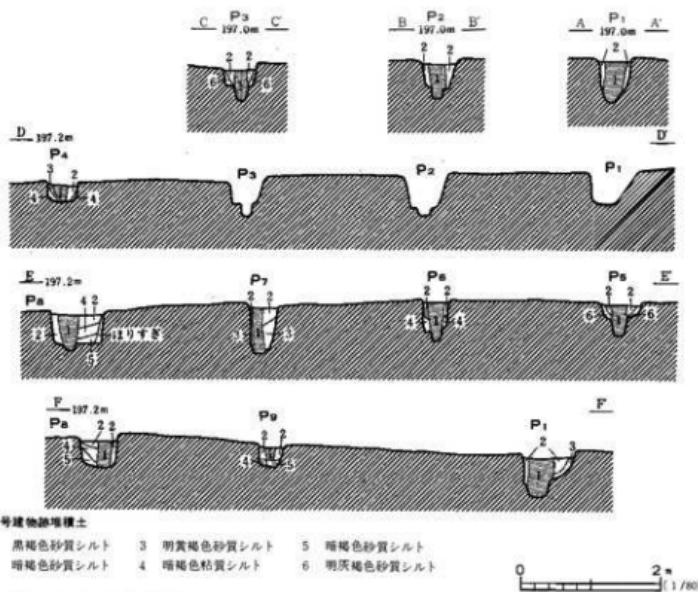
2号建物跡 SB02 (第15・16図 図版13・14)

調査区の東部南側、段丘崖下緩斜面平坦部のJ 9・10、K10グリッドにおいて検出された掘立柱建物跡である。本遺構のすぐ南西側には1号住居跡があり、北西側には1号溝跡が検出された。また、農道を挟んで約20m北側には2号住居跡がある。検出面はLIII aである。

規模は不明な点が多いが東西に2間、南北に3間の長方形を呈しており、南北柱列の中点を結



第15図 2号建物跡 (1)



第16図 2号建物跡(2)

ぶ軸線は真北から12°西に傾いている。東側柱列間は、約7.60m (2.50m + 2.50m + 2.60m) を測り、西側柱列間は約7.80m (2.60m + 2.80m + 2.40m) を測り、北側柱列間は約6.60m、南側柱列間は6.50mを測る。東西の柱列が3間以上続くことからかなり大きな規模の建物ではなかったかと推測される。掘形はP₁がやや形くずれしているものの、その他はすべて円形プランで、柱痕も直径20cm前後のものが確認され、柱痕の形状から丸柱を使用していたと思われる。

遺物は、P₄内から土器部の口縁部破片が一点出土したが小破片のため図示していない。ロクロ成形であり、口唇部を面取りふうに仕上げている。口縁部の長さは短めであり、1.5cm程度で頸部につながると思われる。

本構造の西側柱列は、1号住居跡のカマドの煙道部と一部重なっているが切り合がみられない

いたため新旧関係は分からぬ。また、2号住居跡とは主軸方向、規模がほぼ同じであり、両者の間には何らかの関係があった可能性もあると思われる。時期については不明である。
(鶴谷)

第3表 2号建物跡柱穴計測表

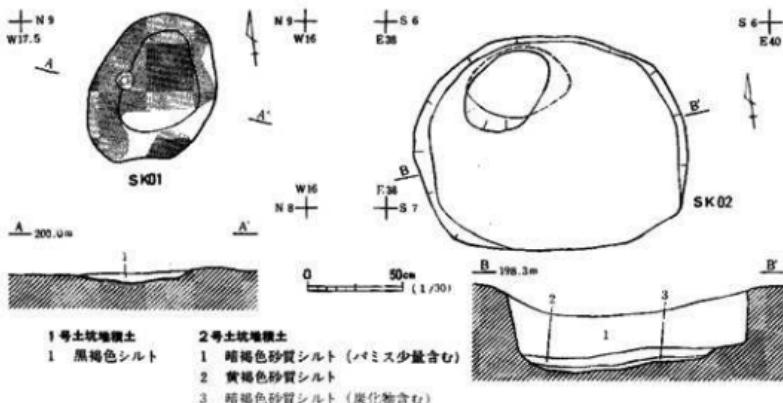
P No	(cm)								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
長径	84	64	68	48	68	60	48	88	44
短径	68	52	48	48	60	58	44	60	40
深さ	64	56	56	28	48	80	72	48	32

第3節 土 坑

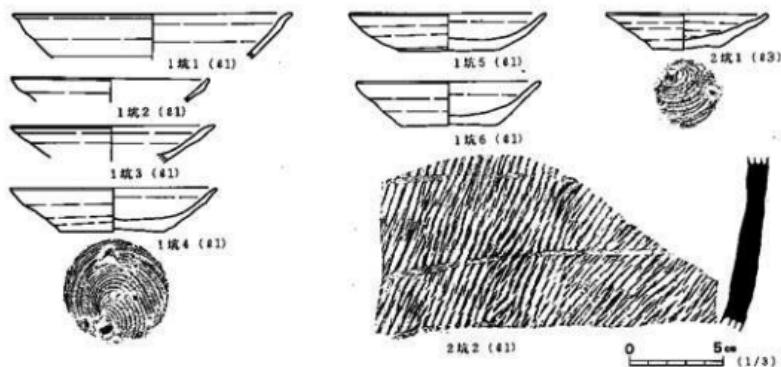
1号土坑 SK01 (第17図 図版30)

調査区中央南側段丘上平坦面のF 6 グリッドにおいて検出された土坑である。本遺構が検出されたF 4 グリッド付近は、耕作土を剥いだ時点で調査区外の水田底面より低くなつたため、大量の水が浸入し、遺構が水没することがあり作業は困難を極めた。平面プランは長径86cm、短径63cmの橿円形を呈する。深さは検出面より5cmと平面プランから考えると大変浅くなつておる、断面形はレンズ状に近い形をしている。堆積土は暗褐色シルトの1層のみで、底面一帯は厚さ2cm程度の焼土に覆われていた。

出土した遺物は土師質土器かほとんどである。1坑1は①から出土した壺である。体部は直線的に開き、口縁部を軽くつまみ出す形である。内外面ともロクロナデである。1坑2～6はすべて①から出土した皿である。2は口縁部の破片であり、内外面ともにロクロナデである。口縁部と体部の境に緩い段を有しており、これは3・4に共通する形態である。3も内外面ともにロクロナデを行っており、2と比べて口唇部を軽くつまみ出している。4も内外面ともにロクロナデであるが、見込み中央部のみ未調整である。底部は回転糸切り・未調整であり、体部は直線的に開き、口縁部との境に緩い段をもち、口唇部を軽くつまみ出している。5はやや内弯ぎみに立ち上がる形態であり、他と比べて丸みのある形態である。内外面ともにロクロナデ、見込み中



第17図 1・2号土坑



第18図 土坑出土土器

尖部は未調整である。底部は回転糸切り・未調整である。6は直線的に開き、口縁部付近でやや内弯する。内外面ともにロクロナデ、底部は回転糸切り・未調整である。

本遺構は、底面が焼土で覆われていたが、性格は不明である。底面付近から11世紀頃に比定される土師質土器が出土していることから、本土坑の時期もそれに近いものと思われる。(西山)

2号土坑 SK 02 (第17図 図版30)

本遺構は調査区北東部段丘崖の斜面中腹のK 7グリッドで検出された土坑である。南西側のすぐ下には2号住居跡が検出されている。検出面が斜面であったうえに南半分は削られており、上端のラインと下端のラインが同一になってしまっている。平面プランは長径約140cm、短径約120cmのはば円形と推定される。深さは北側で約55cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層になっている。 $\varnothing 1$ は暗褐色砂質シルト、 $\varnothing 2$ は黄褐色砂質シルト、 $\varnothing 3$ は暗褐色砂質シルトで炭化物を含むが特に中央付近に集中している。底面の北側には直径約40cm、深さ25cmのピットが検出された。

遺物は若干ではあるが出土している。2坑2は $\varnothing 1$ から出土した須恵器模の胴部破片である。外面はタタキ後、沈線を一条施しており、内面はヘラナデ再調整を行っている。胎土は緻密であり、焼成も良好である。2坑1は $\varnothing 3$ から出土した土師質土器の皿である。体部から口縁部にかけて直線的に開き、内外面ともにロクロナデである。見込み部分もナデ調整されている。底部は回転糸切り・未調整である。

本土坑の性格については不明であるが、下層より12世紀初頭に比定される土師質土器が出土していることから、本土坑の時期もそれに近いものと思われる。(西山)

第4節 遺物包含層

位置と層序

天王山式期の土器を多量に出土した遺物包含層は、調査区東側の南東向き斜面一標高196.5m～199mに形成されていた。比高差約1.5m、厚さ10cm～30cm、量の多少はあるが斜面のほぼ全域に遺物の出土がみられた。特に遺物の出土が多かった地点は、斜面西寄りであり、グリッドで示すとI 8・I 9グリッドにあたる。出土する地点は、斜面上よりも裾部が主であり、上から流れ落ちてきた遺物が、裾部で溜まったかのようであった。遺物包含層を振り込んでいく中で、斜面上では遺構が確認されなかったことや、先のように斜面裾からの出土が主であったことから、本遺物包含層を形成した遺跡は斜面上段に形成されていたものと思われる。

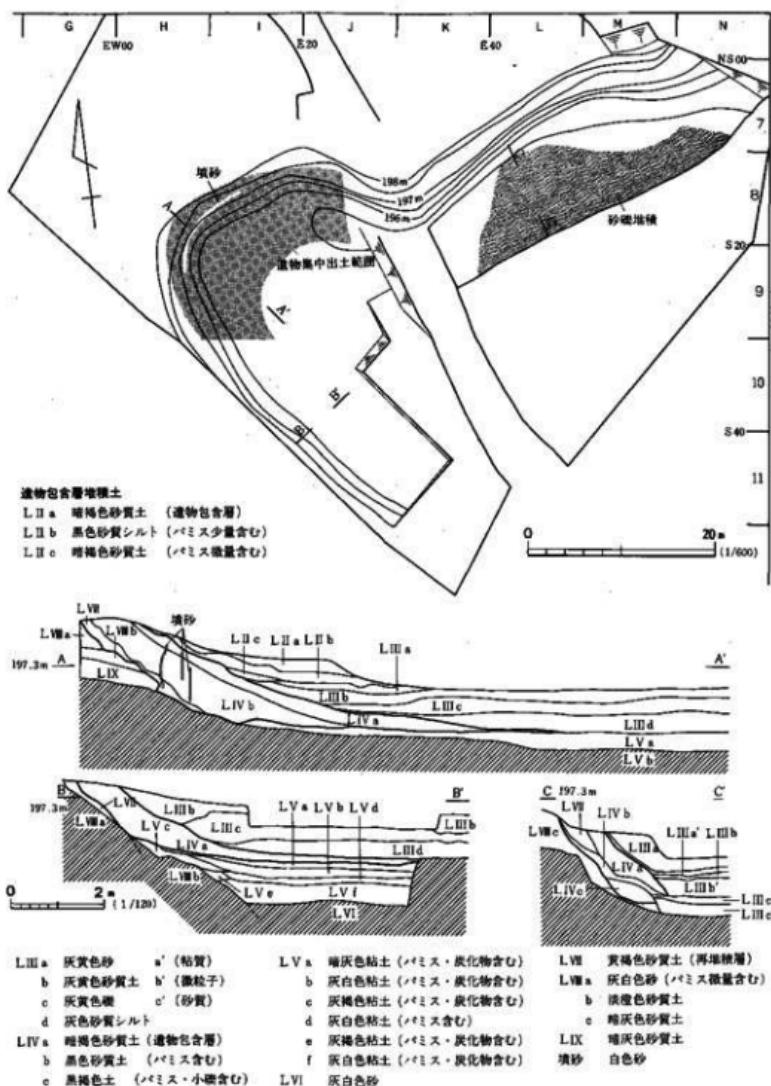
遺物包含層を含む上下の層位について簡単に説明すると、再堆積層をL II、河川による堆積層（洪水層）をL III、遺物包含層をL IV、粘土層をL Vと大きく分けて考えた。そして、土質・混入物などの違いによりa・b・cと細分した。遺物包含層は奈良・平安時代の遺構が形成されていたL III下に入り込んでおり、L IIIは約1mの厚さをもって堆積していた。L IIIには遺物を全く含まず、遺構が形成されなかったと思われることから、L IIIは比較的短期間に堆積した層ではないかと考えられる。遺物包含層はL IV a・L IV b・L IV cに細分された。遺物が出土したのは、L IV aのみであるが、L IIIとL Vの間にある有機物を含む堆積層と考え、遺物包含層の範疇に含めた。またL IV aの堆積状況であるが、斜面裾部が最も厚く、平坦面になると非常に薄くなっている。このような状況からしても、斜面上段からの流れ込みによる堆積であることが伺える。また、L IIについてであるが、土師器破片とともに天王山式土器も出土しており、L IV a出土の土器と同様のものであり、斜面上段に残ったL IV a層の再堆積層であろう。この再堆積層は1号住居跡内の堆積土にも見られることから、1号住居跡廃絶以後に堆積したものと考えられる。

調査区東寄りの斜面下の平坦面では、砂礫の堆積が確認された。河川の自然流跡と思われる。おそらく、遺跡東南側を流れる出鶴沼川の流跡であろう。

また今回の調査では、遺物包含層検出の際に地震による噴砂が確認されている。遺物の出土が多い西寄りの斜面中腹一標高約197mに、約10mの範囲、幅2cm～3cmで見られた。噴砂は白くきめ細かい砂で、L VII b・L IV b・L IV aを突き抜けるように上がっている。また、これはL III b面（1号住居跡、2号掘立柱建物跡検出面）でも確認され、さらにL IIへも細く貫入していることから、L II堆積以後～L I堆積以前の地震によるものと思われる。しかし残念なことに、今回の調査では地震による被害やその年代などを掘むことが出来ず、奈良時代末以降に本地域で地震が起きたという事実の確認にのみ留まってしまった。

(西山)

第1図 能登遺跡



第19図 遺物包含層

出土遺物について

本跡から出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土製品・石器であるが、その大半は天王山式期に属す弥生土器によって占められる。遺物包含層中最も集中して遺物が検出されたのは、I 8・9、J 8グリッドにおいてである。以下、出土遺物を種別ごとに報告する。

縄文土器（第20図 図版38）

包1~8・10~14である。包1は、渦状の隆帯と短沈線の連続施文によって文様が構成される。包7は、堀ノ内1式期の土器で、口縁部には縦の沈線で結ばれる盲孔が上下に2点みられる。包2は、加曾利B式期前半期の土器で、口縁直下の幅の狭い無文帶以下は沈線で地文の縄文を横長に交互に区画している。包5・6も、口縁直下に幅の狭い無文帶があり、堀ノ内式期から加曾利B式期の間でたらえられる。包3・4は、大洞C₂式期の浅鉢で工字文風の文様を表出している。包10~14は、大洞C₂式期の新段階から弥生時代初期まで存続する条線文系の土器で、口縁部は折り返し口縁風に肥厚している。

弥生土器（第20~46図 図版31~48）

天王山式期に属す土器が大半を占めるが、これ以前の土器も少量混在しているため、天王山式期以前の土器と天王山式期の土器に2分して記述する。

〔天王山式期以前の土器〕

包9・15~36である。包9は、研磨した器面にやや太めの沈線を横位に引き文様を表出しているが、斜めに入る沈線や沈線間にばらつきがある。恐らく今和泉式期頃の段階までには入る土器と思われる。包15・16は、南御山II式期の壺の肩~胴部破片である。やや細目の沈線で渦文を表出し、沈線間に偽似縄文がみられる。包17~19も同時期と思われる土器であり、包17・18では同じく沈線間に偽似縄文がみられる。ただ包15・16に較べ、沈線の入りが鋭い。包19は蓋の破片で、縁部に沈線一条を巡らせ、体部に2本の平行沈線で山形文ないし重三角文を配している。包20~36までは細い平行沈線で文様を表出する土器で、ニッケ式期のものと思われる。包20では口唇部に刻みを、包27・29では縄文を施文している。包34とした蓋の天井部には布痕が残る。包36は高杯の脚と考えられるが、内面に漆様の付着物がある。包31・32は今和泉式期~川原町口式期に伴う腰形の土器で、頸部の綾络文以下は地文の縄文となる。

〔天王山式期の土器〕

包37~410の計374点を図示した。この中には小破片で器種の認定が困難なものも拓影図として含まれているが、おおよそ大別して壺・甕・注口・蓋・浅鉢の5種を確認した。ただ、壺と甕の器種区別は2者の中間的様相をとるものが多く2種だけの名称では不充分なので、広口壺という名称も併用した。従って、原則として胴部に膨らみをもち頸部に閉塞性のあるものを壺、胴部に

膨らみをもたせ頭部を意識して造り出しているが閉塞性があまりみられないものを広口壺、胸部から頭・口縁部が開放的に開くものを甕と呼称した。以下器種ごとに確實に器種認定できるものを中心としてまとめておく。

壺 包38~41・57・59・62・79・80・83・106~117・127~131・133の28点である。口縁部から底部まで連続して接合している個体がなく、器高や最大径を計測できるものに恵まれないが、法量的には包38~41・106・107・110のように胴径20cm、推定器高30cmを超えるものと、これらよりは小さくなるが胴径10cm弱、推定器高約15cmを下回らないもの（包79・80・83）、包127~131・133のように極端に小振りとなるものとに分けられる。口縁部の形状は、平縁のもの（包54・84・106・107・109・115・117）、山形の突起がつくものの（包38・62・111・113）がみられる。包38では2個1対の山形突起が4単位造られていたと思われる。包62では突起の頂部に竹管の刺突が、包113ではスリット風に竹管側面の押圧が入る。小型土器と包111を除き、すべて複合口縁状になる。立ち上がりは短く「く」の字に開いているものが多いがなかには若干受口状になるもの（包38・107・115）がある。口唇端部はほとんど面取り風に削がれている。頭部は、口縁部と胸部から明瞭に区別するもの（包38・39・57・59・62・106・108）と、頭部と胸部の境界が不明瞭でなだらかに胸部に移行する形態のもの（包40・41・79・83・107・113・129・133）がある。後者では必然的に肩部が撫肩になる。胸部では、中央の張りの強いもの（包38）、やや下膨れになると思われるもの（包40・79）、倒卵形を呈するもの（包41・110）、胸部半ばが「く」の字形に張り出す算盤玉状を呈するもの（包83）がみられる。底部まで接合するものはわずか3点（包41・83・127）しかない。包41は底部周縁が張り出す平底であるが、中央部に向って若干迫り上っている。包83は縁辺が高台風になった上げ底である。包127は平底で縁辺が幾分張り出している。

施文される文様は、竹管による沈線や刺突を主とした文様と地文とである。竹管による文様は、口縁部から胸部の上端まで施文されるのが多いが、まれに胸部半ばまで及ぶもの（包38・79）がある。口縁部文様は、沈線と刺突の組み合わせによって表出することが多く、特に口縁部のなかでも肥厚した口縁の下端に顎著にみられる。包38・106・107は、肥厚した口縁下間に2条の沈線を巡らし、下端にできた隆起風の部分の下方より竹管の端部から側面を使用し粘土を押し上げて区切った間に原則として2個1組の刺突を配している。これは若干斜め上方から施文されているようであるが、包106では3個入る場合もあり、包107では1個しかみられない部分もある。包54・115では沈線を3条巡らせ、刺突を2段施文している。包115は2段とも上下1個ずつ入るいわゆる交互刺突になっているが、包54では全体的に竹管の入りが浅く、からうじて上段が交互刺突になっているだけで、下段は単なる横1列の刺突列となっている。包79の口縁下端の刺突文も、包57下段の施文法と類似している。包113は、これとは逆に口縁下端を下方から、竹管を押し上げ

るようにして施文し、隆帯に凹凸を持たせている。包113では、沈線を引かず交互刺突を施文している。

口唇部は、面取り風に削ぎ落した後地文と同じ原体を回転させ施文するもの（包59・79・83・109・112・113・115・117）と竹管で施文するもの（包62）がある。ただ包117では施文したあと磨消され、部分的にしかみえない。包62は突起間を鱗ぐように沈線を引き、口唇下端を竹管側面で押出し刻目を入れている。

頸部文様は、口縁部と胸部の境界に沈線を巡らし、その間に場合によっては磨消し手法を取りながら円弧文、曲線文を描くもの（包54・79・111・113）と、地文のみの施文で終るもの（包39・40・108・109・112・114）、無文帶とするもの（包38・57・59・62・106・115・116）がある。包83・107は器形的制約からか上記のいずれにもあてはまらず、特に包83では地文のみの施文で終っている。ただ包107は狭いながらも無文帶を意識しているようである。境界に引かれる沈線は特に手を加えないものが例であるが包54では、上下とも交互刺突を伴なっている。

胸部文様は、上端に下向きの連弧文を描くもの（包40・41・80・106）と、副部上半に渦状の文様を展開するもの（包38・79）がある。後者に入る包79では、沈線間に磨消し手法が加わる。包108の文様構成は不明であるが、恐らく連弧文の組み合わせによる文様が胴上半に展開されていると思われる。この個体は胴上端に磨消し手法を加え、下向きの長い連弧の連結点の上位に沈線による円文を描いている。

地文には、縄文を地文とするものが多いが、包41は單節縄文、他は附加状や直前段多条の縄を使用する例が多い。胸部では文様帶を有さないかぎり全面に施文されるが、口縁部・頸部では磨消されることが多い。器内面の調整は、ナデを最終調整としているが、なかにケズリのまま終っているもの（包57・62・109・115・116・117）がある。

広口壺 包42~48・51~55・58・60・61・63~66・69・70・71・73・132の25点とした。法量的には、壺のようなばらつきはなく、大半は器高20cm弱~30cm弱の間で納まるようであるが、なかには包132のように小型土器中に広口壺の形態を示すものが若干含まれている。器形上特徴的なのは、頸部の立ち上がりであるが、これには直立するものとやや内傾気味に立ち上がるものとがみられる。内傾するものは胸部との境界がやや不明瞭になるが、外面に引かれる沈線とそれに呼称する内面の棱によって頸部が意識されている。胸部は最大径を上半に有するものが多いが、極端に膨らむものはない。底部が観察できる資料は3点（包42・44・61）あるが、基本的には平底であるものの包46・61では、中央部に向ってほんの僅か迫り上がっている。包42には根の圧痕が残っている。口縁部は、受口状を示すものが5点（包42・43・46・64・65）ある。口唇部はすべて複合口縁で端部は面取り風に削られている。

口縁部文様には、弧文・沈線文・刺突文がある。なかでも刺突文は口縁部半ばから下端にかけ、

多用され20点中16点まで施文される。これらの刺突文は、竹管の端部から側面を使用し口縁端部に下方から刻目を入れ、刻目間に1個ずつ刺突を加えるもの（包43・46・47・65・70・71・73）、刻目間に2個刺突が入るもの（包45・52・64・69）、下方からの刻目で上の沈線を区切るもの（包50・66）、下方の刺突列のみで沈線を区切るに至らないもの（包44）の4種に分けられる。包43・70では上方の刺突が形骸化し軽くしか入っていない。

これら4種のうち下方に入る施文手法の大半は竹管の端部から側面を使用し刻目とするものであるが、包44・70のみは、いわゆる刺突に近い。2個1組で区切りが入る包52では、上2個の刺突の中間に軽く下方からオサエが入る。包64では口唇部に1個おきに区切られる刺突文を施文している。また、包70の上半には竹管による刺突列が3段施文されている。上段は竹管端部を斜め上方から刺突し楔形とし、下2段は端部を正面から突き刺し円形の刺突文としている。包58は、複合口縁の肥厚した部分に指頭状の軽いオサエが入る。

頭部文様には、頭部を口縁部と胴部から区画し、中に沈線による弧文や曲線文を施文するもの（包42・43・44・45・47・52・53・69・70・71）、区画しただけで文様を描かず地文のみを全面に残すもの（包50?・64?・66）、がある。この他、無文帶となるもの（包61）、口縁部と胴部を沈線で区画し無文帶とするもの（包46・58・60）もみられる。区画する沈線は包42・43・69・73のように刺突を伴うものがある。この場合の刺突法はいわゆる交互刺突になるものが多いが、包43の■縁部との境界に引かれた2本の沈線間の隆帯風の部分を斜めに刺突している。

胸部の文様は、文様帶として半ばから下半にまで及ぶものは少なく包69・73の2点のみである。他は上端に連弧文あるいは山形の波状文が施文されるもの（包44・46・47・50・60・64・66・71）か、地文しか施されないもの（包42・43・58・61）である。

地文には、附加状縄文や直前段多条の縄を使用するものが多い。器内面の調整でケズリの痕跡を残すものは、包49・52・53・58・64・69・132の7点である。

甕 本来的な甕の他に頭部の開きが大きく広口壺には含まれないものをも本類とした。包37・56・72・74・75・77・81・82・85・90~94・97・101・118~126の25点がある。法量的には、器高25cm前後（包55・56?・74・94・121）と、これより小型で器高15cm強以下（包37・81・82・122・123）に集中する傾向がある。この他不確実ながらも甕と推定される包84・97・105は前者の法量を上■るものである。

口縁部の形態で、受口状を呈するものは包86のみで、他は直線的に外方に開くか、内窓気味に開いて立ち上がるかのいずれかで、單口縁のもの（包37・77・81・91・93・101・121~123）が多くなる。頭部以下の形態では、胴部の最大径を上半にとるもの（包37・101・120・121）と、半ばから下半にとるもの（包48・55・56・63・75・85?）とがある。後者は広口壺の流れを汲むものであろう。底部まで接合した資料は11点みられるが、上げ底の包94と剥離して形状が不明な包82を

除き、他は平底である。包105では木葉痕を有し底部周縁が外方に張り出している。包82は焼成後の底部穿孔である。

文様は、広口壺の器形の流れを汲むものに多く描かれる傾向にある。これらは口縁部も複合口縁となり、口縁の下端に刺突を主とした文様を施している。包55では、だれた向きの異なる弧文を2段に描き口縁下端の沈線下に交互刺突を施している。包72・75・94では、下端部を縱長の刻目間に原則として1個ずつ刺突していく方法をとる。ただ包95では2個刺突される部分が1箇所みられ、包94では刺突されない部分も多々ある。包56・74は、下方からの区切りのなかに2個刺突が入るものであるが、包54の下方からの区切りは幅が広く入りも浅い。包90・92は、口縁下端から沈線部にかけ、刻目で沈線を含めて区切る。包118では、沈線を引かずに複合部の下端に斜め上方から刺突を列点風に施している。包86では、これが刻目に近い形状をとる。口唇部の装飾には、地文と同じ原体を回転して施文するもの（包56・72・77・90・91・93・101・121・122）と、沈線を描き端部に刻目を施すもの（包86・94）がある。包92では口縁部半ばに弧文が短く崩れた波状沈線が引かれている。

彫形のなかでも頸部がやや長目になる包92では、前述の波状沈線と2本の平行沈線を描いている。包90は無文の頸部下に同様の波状沈線が施文されている。包37では、頸部を中心に口縁下半から胴部上半まで、平行沈線と連弧文とを組み合わせている。胴部上半から半ばにかけ文様の描かれるものは9点（包35・48・51・56・72・74・75・85・94）あるが、これも器形が広口壺の流れを汲むものに多く、頸部から一定幅で胴上半を沈線によって区画し文様帯を表出している。文様の多くは平行沈線や単沈線による弧文を主としている。地文が施文される資料中縁文を施文する包84を除き他は附加状や直前段多条の縄の使用が多い。また、地文を施文せず、わずかに口縁部に刺突文を施すだけで他は無文となるもの（包118・119・125・126）や、胴部上端に軽い刺突を列点風に施すのみでほとんど地文のみの土器（包120）も混在する。

注口 包103・104の2点である。包103は、口縁部と注口部先端を欠損している。胴径9cmの小振りのもので、注口部は胴上半から斜上方に3cm弱延びている。文様は、胴上半を横位の単沈線で区画し、その間に頸部に引かれた沈線から鉤手状の文様を2本1組みの沈線で描いており、地文は底部にまで及んでいる。包104は、注口部から胴部にかかる破片で胴部の上位に横位の沈線が一条引かれている。

高杯 包102の1点を確認したのみである。脚部の破片で、脚最大径6cm、高さ3.1cmを測る。器内面に文様はなく、内面の調整はケズリである。

浅鉢 包99・100の2点である。いずれも角皿形に近い。包99は、器高2.7cm、推定口径10cm程度と思われる。器面に文様は施文されず、底部は上げ底である。包100は、体部から口縁部を欠損している。残存高1.6cm、底径11.5cmである。体部下端には2条の沈線が引かれ、底部の四隅は低

く盛り上がり脚となっている。

畫 包236~250・398~408の26点である。このうち天井部から縁部まで形状が窺い知れるのは、包236・238・242・245・246・250の6点と数少ない。天井部形態には、小さく絞り込まれて滴み風になるもの(包241・250)、天井部がほぼ平坦で台形状を呈するもの(包239・243~247・406・407・408)、天井が縁部に向って直線的に「ハ」の字に開くもの(包236・237・238・249)がある。天井端部が短く立ち上がり、中央部が垂むもの(包237・238・241・242・249・250)もみうけられる。ただこれとは異なり、指頭による押圧が連続的に加えられたために、端部が突出した例(包249・406・408)もある。包238の天井端部は、短い波状を呈している。包245・246では天井部外面に低い突起が、包245で4個、包246で8個付けられ、突起の下を細孔が包245で2孔、包246で4孔(2孔1組)対峙して穿たれている。この他細孔を有す蓋が2点(包237・240)あるが、包240は壺もしくは甕類の底部再利用品で、孔も焼成後にあけられたものである。包408では、端部に刻目が2箇所対峙して付けられている。縁部の形態的特徴には、平縁のもの(包236・242・245・246・250・398・399・400・403・405)、場合によっては波頂部に突起を有す大きく緩やかな波状を呈するもの(包402・403)、小波状を呈するもの(包238)がある。包245・246は、複合縁部となっている。

文様には、地文の施文のみで終わるもの(包238・242・249?・250・398?・399?・405?)、地文上に竹管による沈線や刺突・押圧によって文様を描くもの(包245・246・400~403)、無文のもの(包236)に大別されるが、天井部に指頭の押圧によって造り出した凹凸を文様として意識しているもの(包249・406・408)もある。包406では、天井部にまで地文が施されている。包244では、不明瞭ではあるが布目痕様の文様が残っている。指頭による凹凸を造り出すものには、天井縁部が波状になる傾向がある。

器種不明 これまで器種ごとに分類可能な資料について触れてきたが、ここでは器種を特定
破片資料 できない破片資料について紹介する。

口縁部資料は、包86~89・251~351・353・354、頸部から胴部資料は、包355~397、胴部から底部資料は、包134~234、脚部資料は、包98・235である。胴部から底部資料のなかで包171・173~233は、取り分け底部に残る痕跡を提示したものである。

口縁部資料中、包87・251~266・270~288・290・292・295・296は、竹管による刺突や刻目風な押圧により、文互刺突状の文様を表出するものである。このうち語義本来の文互刺突として認められるのは、包251・256・257・258・262・263・266で、包256・262では上半に連弧文、口唇部に竹管端部の突き刺しが入り内面口唇下端に沈線が廻る。包252~254・260・270~272では、下位の刺突列が竹管端部から側面を含めて使用するようになり、施文方向は斜方向からの施文となる。いずれも口唇下に崩れた弧文を描いている。包255・259・261・284・286~288・295は、

下位列の施文法が竹管端部から側面を使った縦長の刻目になるものである。包276・277・280・282・284・286・287は、口縁半ばに横位の沈線が巡り、包259・275・277・284は口唇外面に刻目が入る。包261では上位にもう1段交互刺突状の文様が施される。包288は、頸部の2本の沈線間に小さな円形刺突を列点状に施している。

包297～310・312・313・318は、口縁の複合部下端に沈線を巡らすことによってできた隆帯状の部分を、竹管の端部から側面を使って刻目を入れ。この範囲のなかに沈線部から隆帯にかかるよう2個の刺突を施すもので、包303ではこの文様が2段に構成されている。この文様の上には、横位の沈線を1条ないし2条巡らす場合が多い。

包289～291・293・294・296・314・316は、刺突が刻目の間に不規則に入ってくるものである。包289～291は原則的に刺突は1個であるが、全く刺突を加えない部分もある。包88・293～295・314は、刻目間に刺突が1個～3個の間で付けられる。包88の区切りは指頭のオサエでできた痕跡のように幅広い。

包315・319～333・336・337・340・343は、口縁の複合部下端に引いた沈線によって得られた隆帯状の部分に刺突や押圧を加え沈線を区切っていくものである。これも竹管端部を使って刺突するもの（包320・321・323・324・330・340）と、主に側面で押圧し刻目とするもの（包322・327・329・331・332・333）とがある。包315は、やや幅の広い刻目間の隆帯の中央を下方からわずかに押上げている。

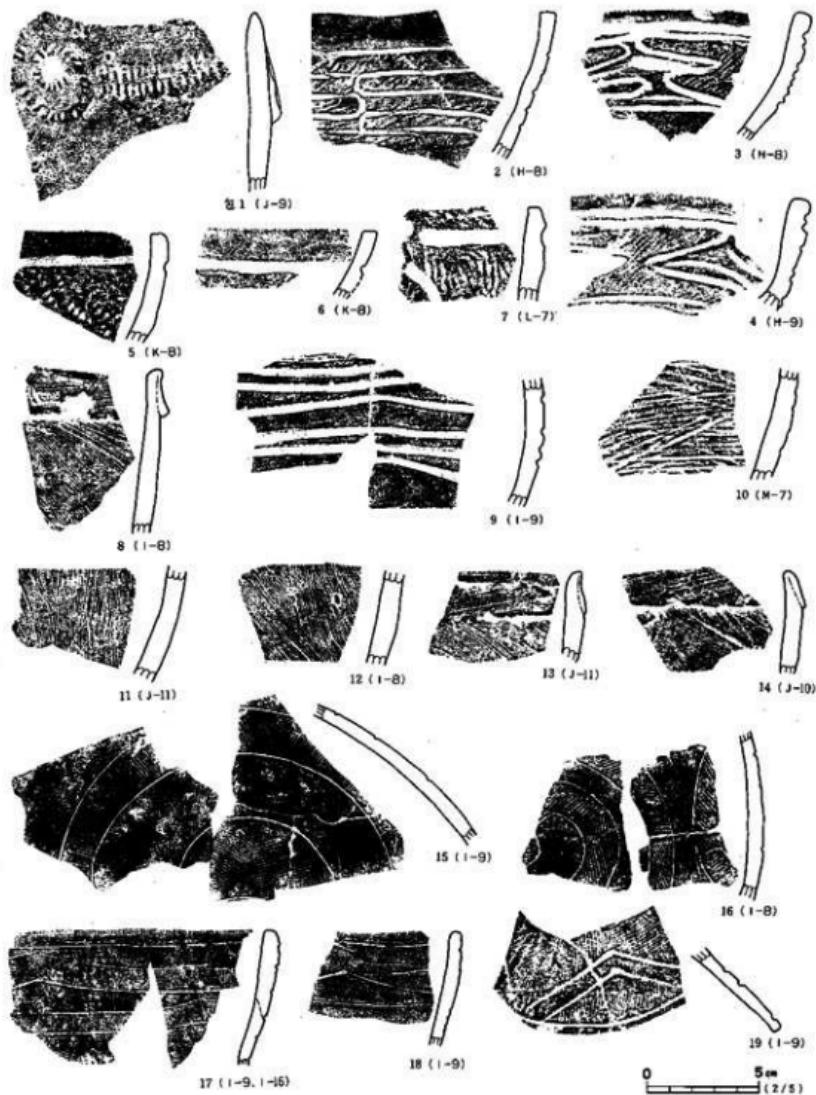
包339・344は、口縁複合部に沈線を引かずに刺突を施すものである。包344は、複合部の下半にやや下方から竹管の端部を突き刺し、2列の刺突文を施文している。包339は、上位列に竹管端部を使った円形刺突を施し、複合部下端にあたる下位列には、竹管端部から側面を使用して刻目を、上位円形刺突文の中間に位置するように若干斜め方向から施文している。

包259・265・342・347・349・350では、口唇部を削ぎ取って平らな面を作った後、刻目や刺突を加えている。包347・350は、口唇端部に沈線を引いたあと端部側面に刻目を入れ、沈線間に竹管端部による刺突を1個ずつ施している。包259・265は、沈線を引いたあと口唇端部に刻目だけを施して沈線を区切るものである。包265に比べ包259の刻目間のはうが長い。包262・342は端部に沈線を引かずに刺突文だけを施し、包349は端部側面に刻目だけを加えるものである。包342では口唇下にやや横長の瘤状の突起がある。

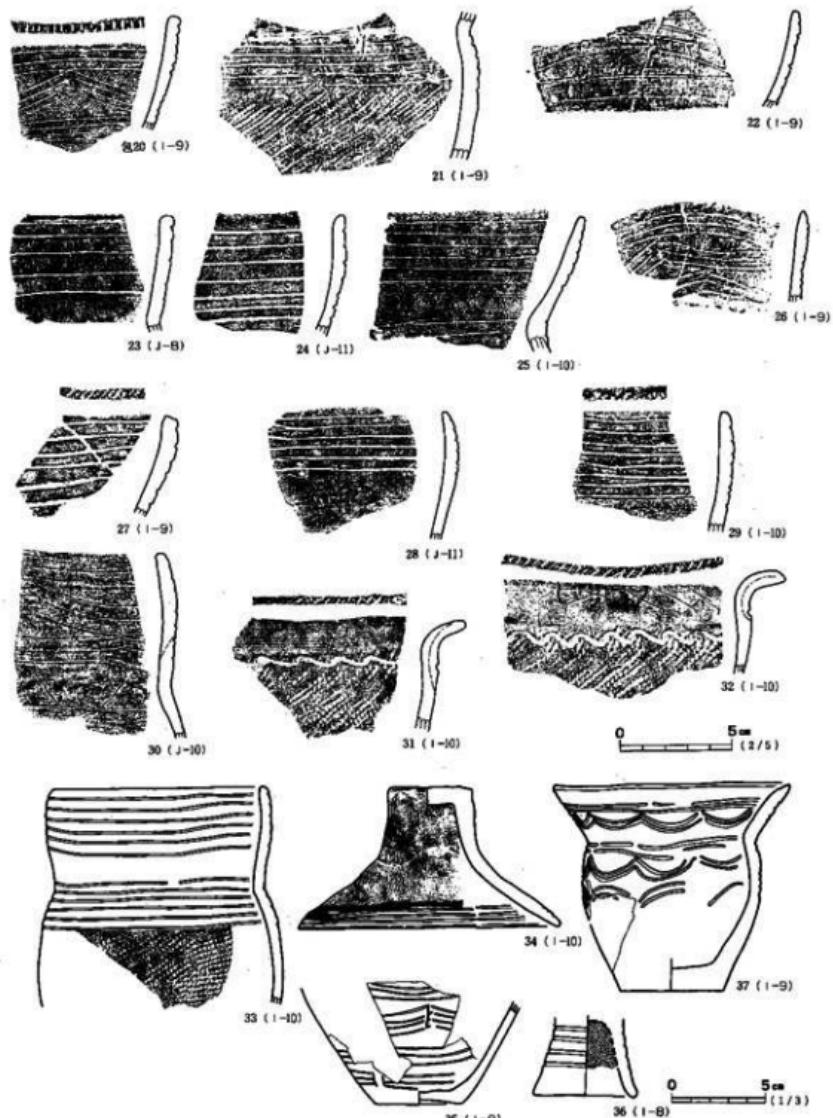
この他刺突文を有さない資料も含まれている。包267～269・341・345・346・348・351・353・354がこれにあたり、包341・348・351・353・354では、口唇端部に地文が施文されるのみで口縁部外面は無文となる。包346は、平行沈線・連弧文が施文されている。包267～269は、地文のみの施文となる。

これらの口縁部資料中、受口状口縁を呈すものは8点（包261・274・277・278・284・287・297・

第1編 能登遺跡

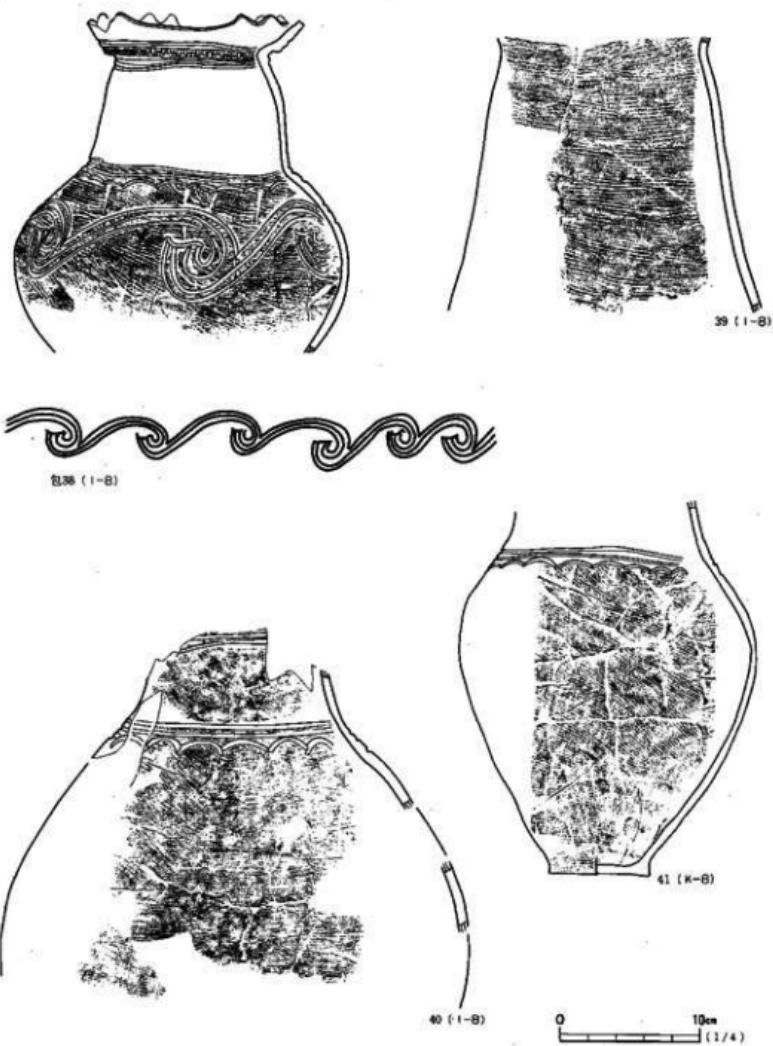


第20図 遺物包含層出土土器

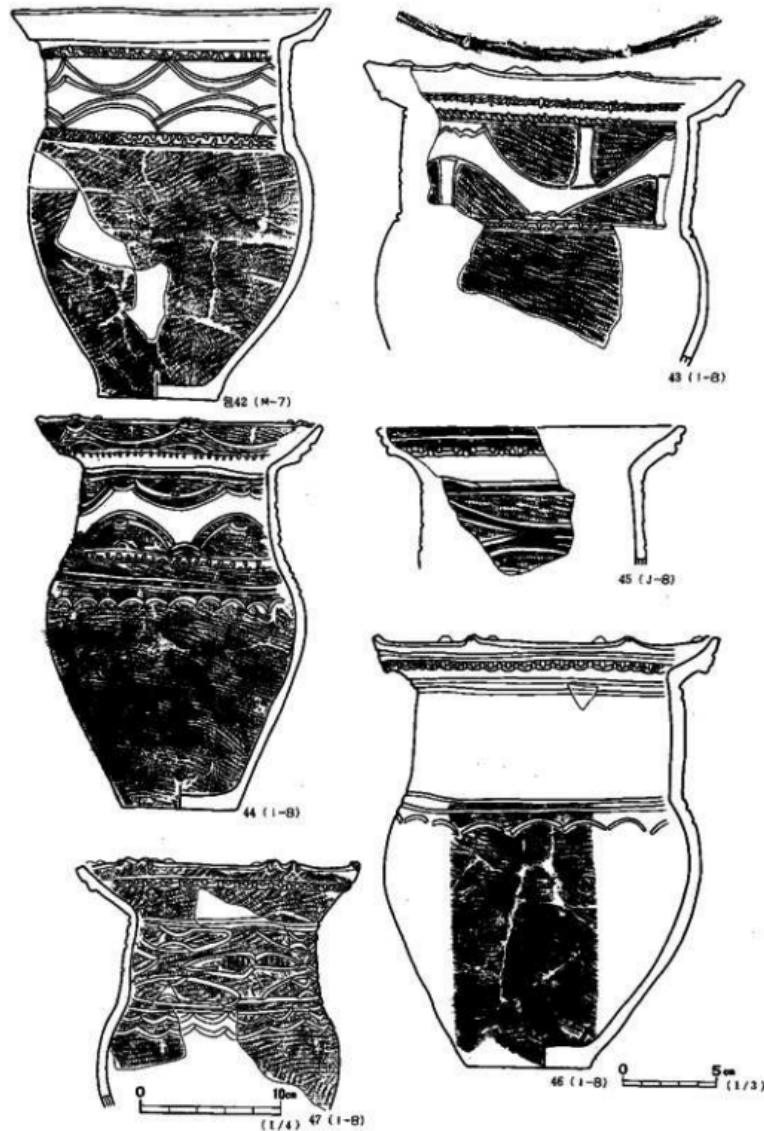


第21図 遺物包含層出土土器

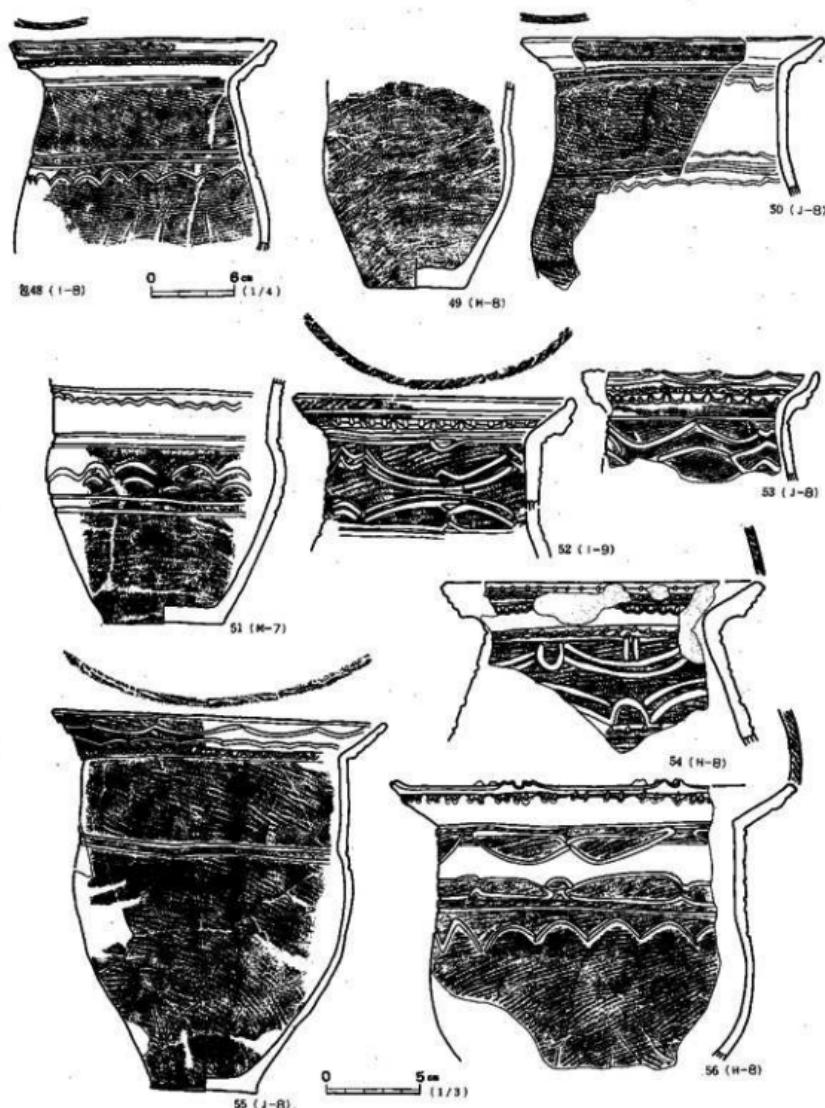
第1編 能登遺跡



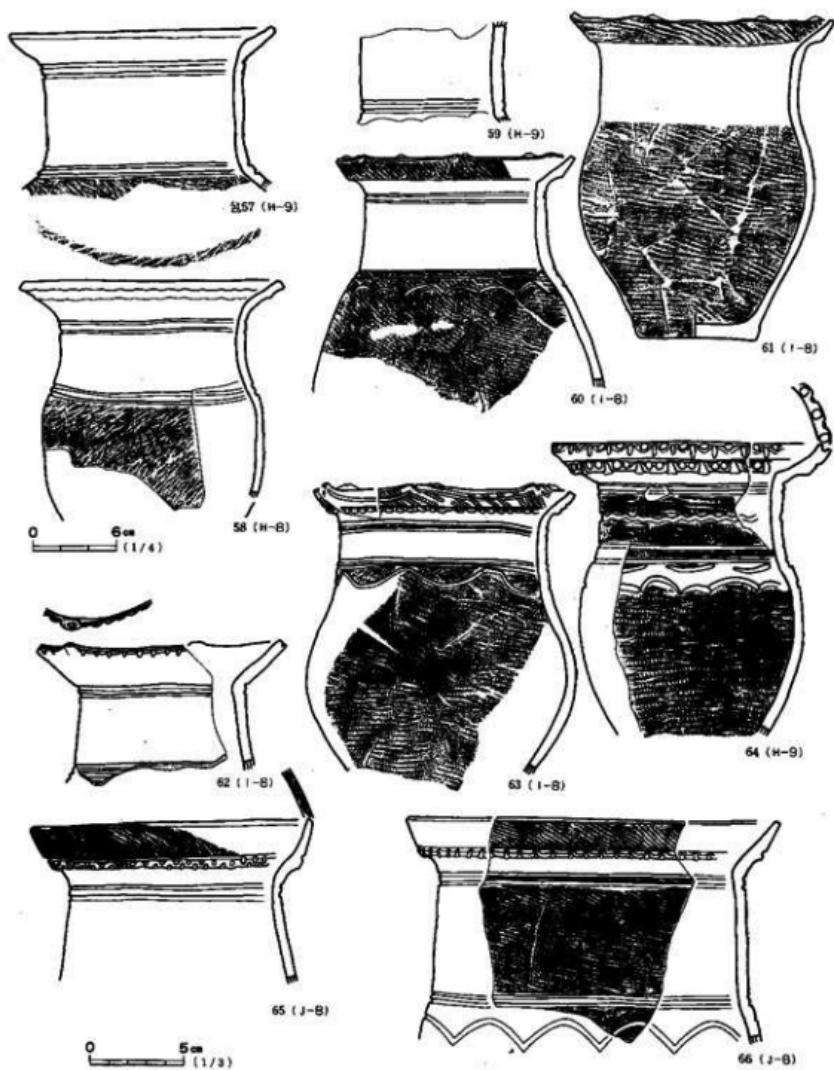
第22図 遺物包含層出土土器



第23図 遺物包含層出土土器



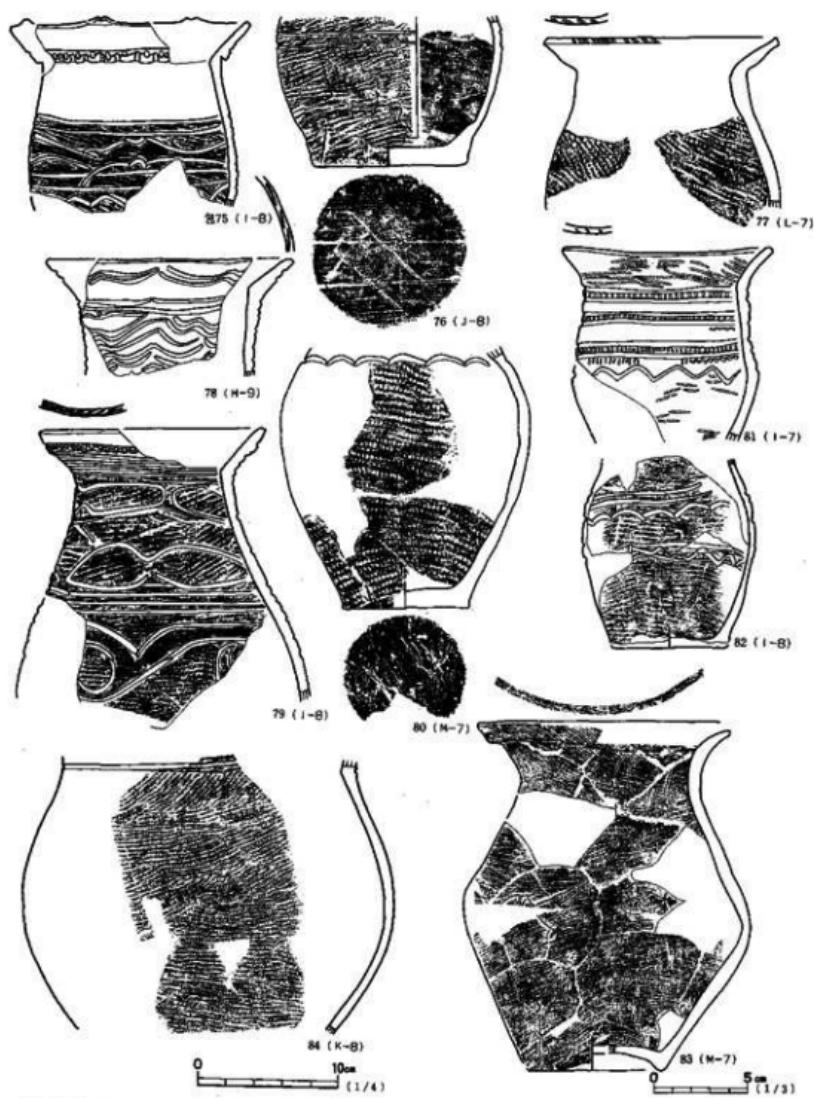
第24圖 遺物包含層出土土器



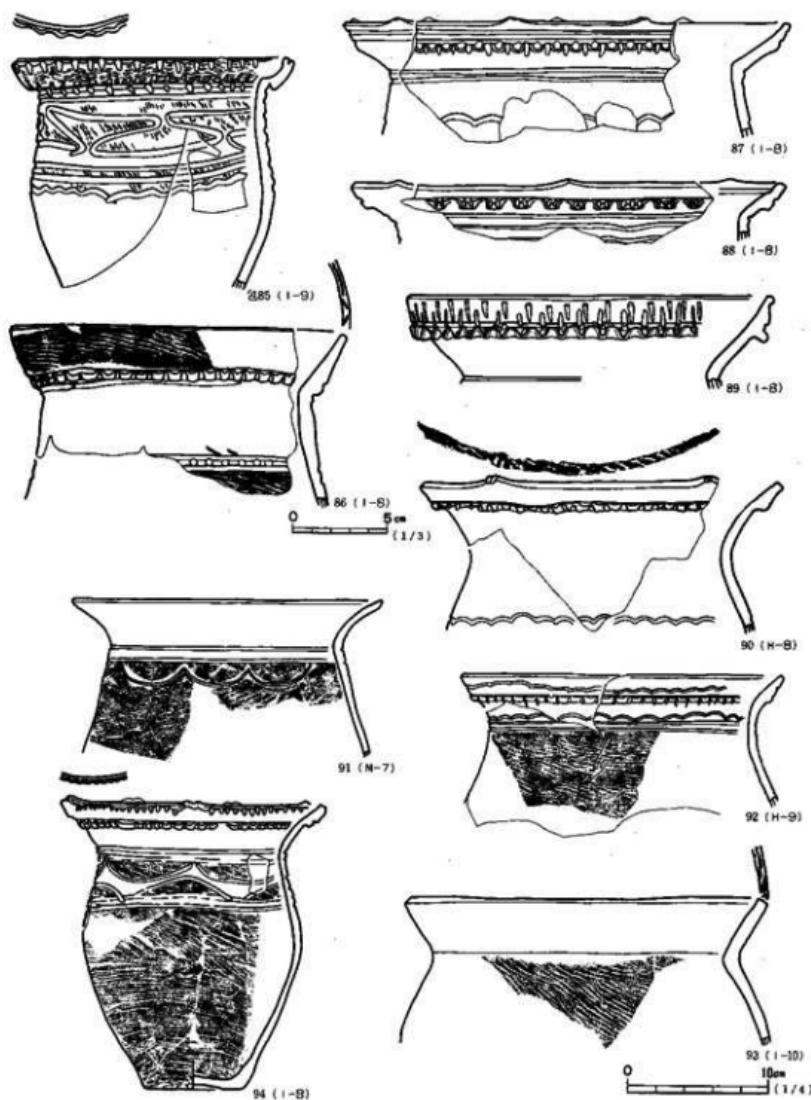
第25図 遺物包含層出土土器



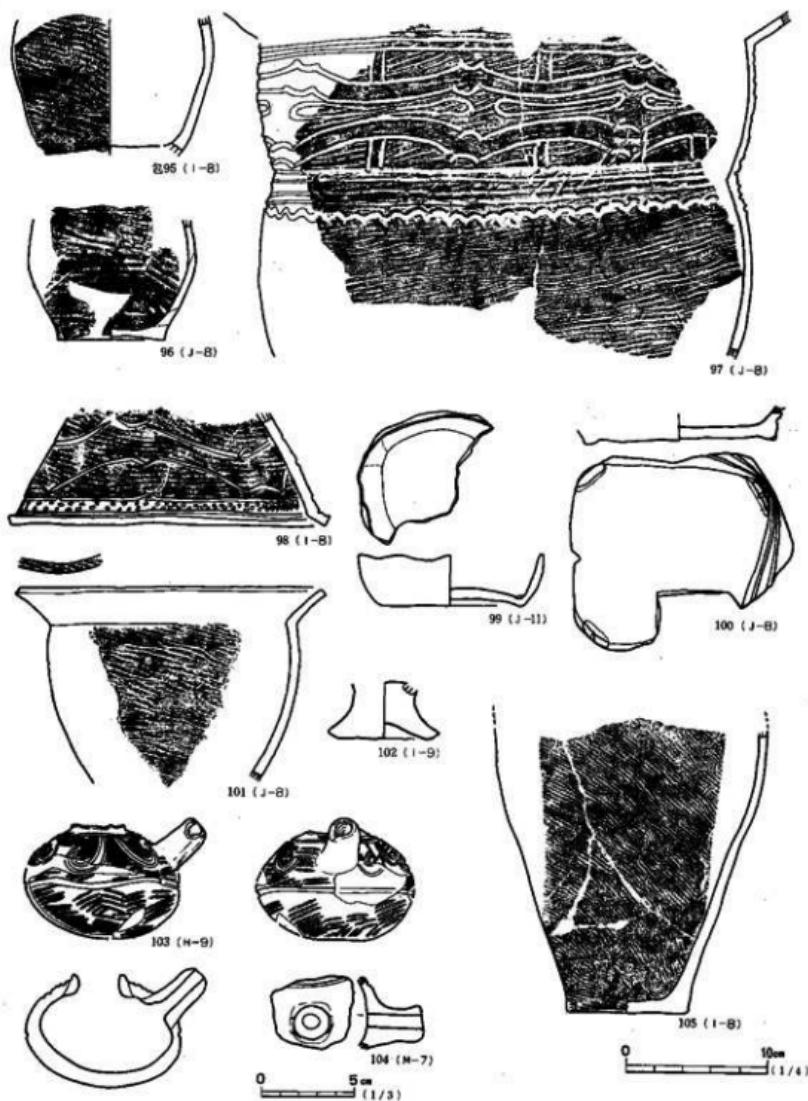
第26図 遺物包含層出土土器



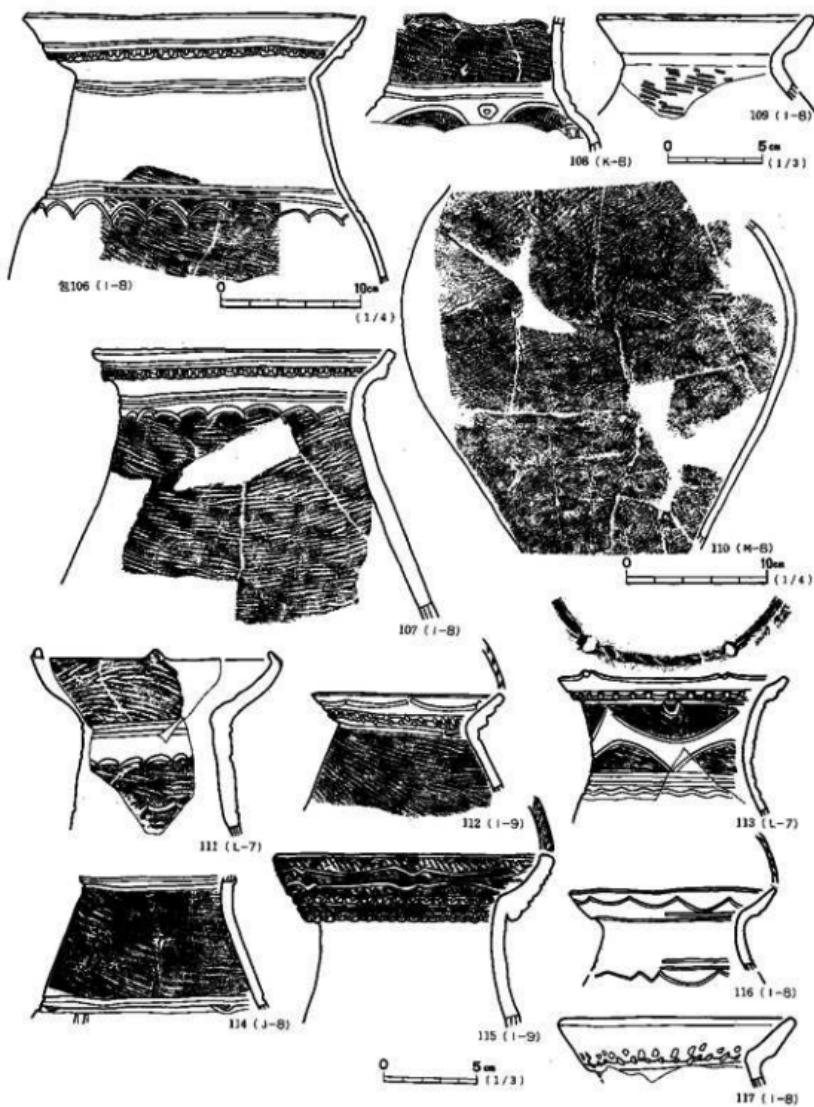
第27図 遺物包含層出土土器



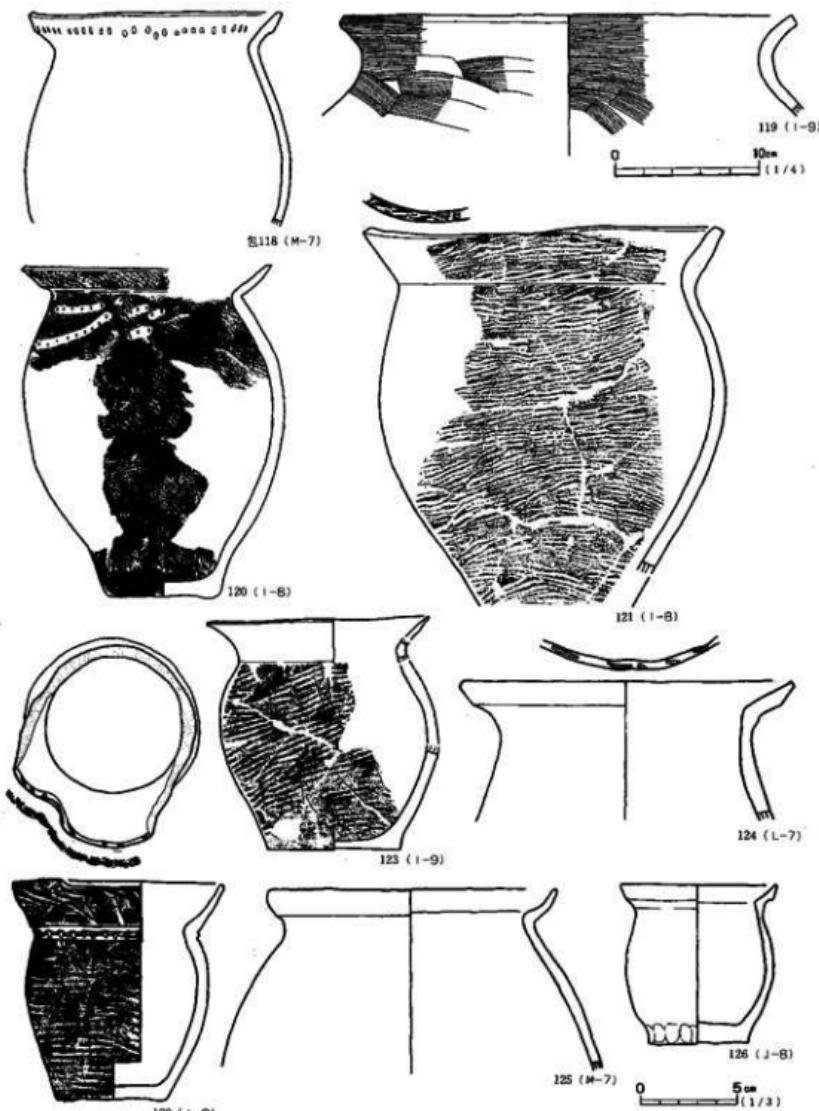
第28図 遺物包含層出土土器



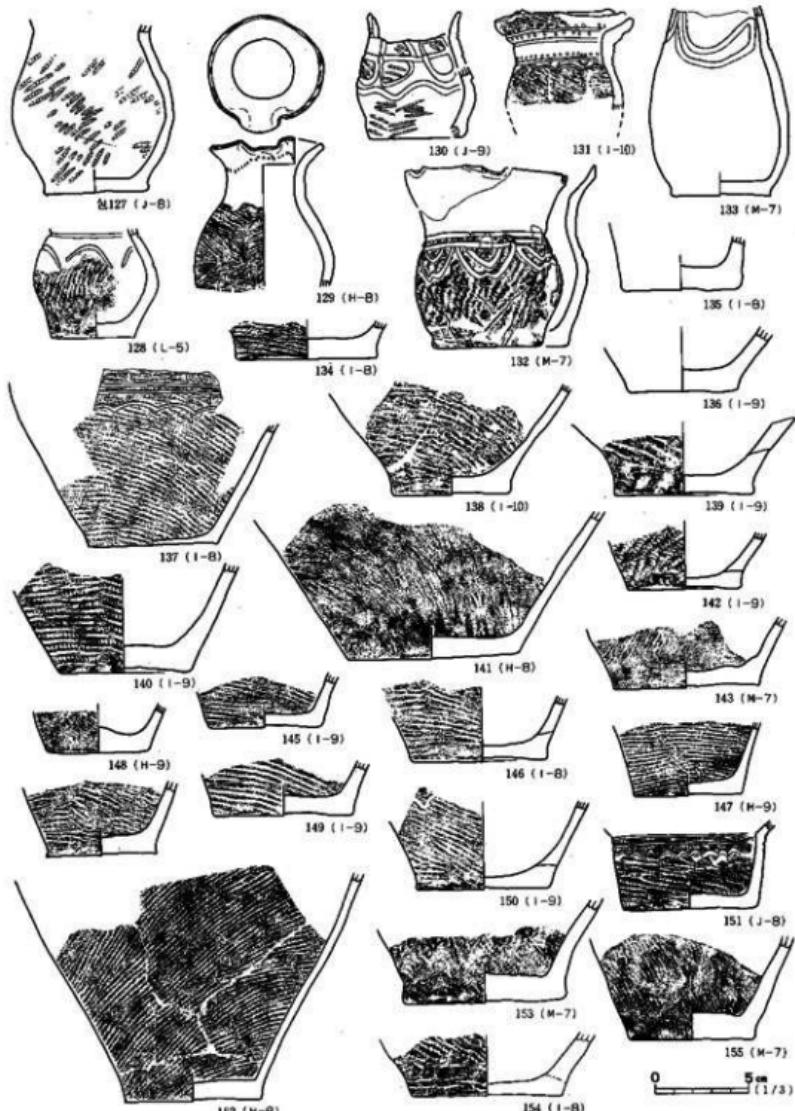
第29図 遺物包含層出土土器



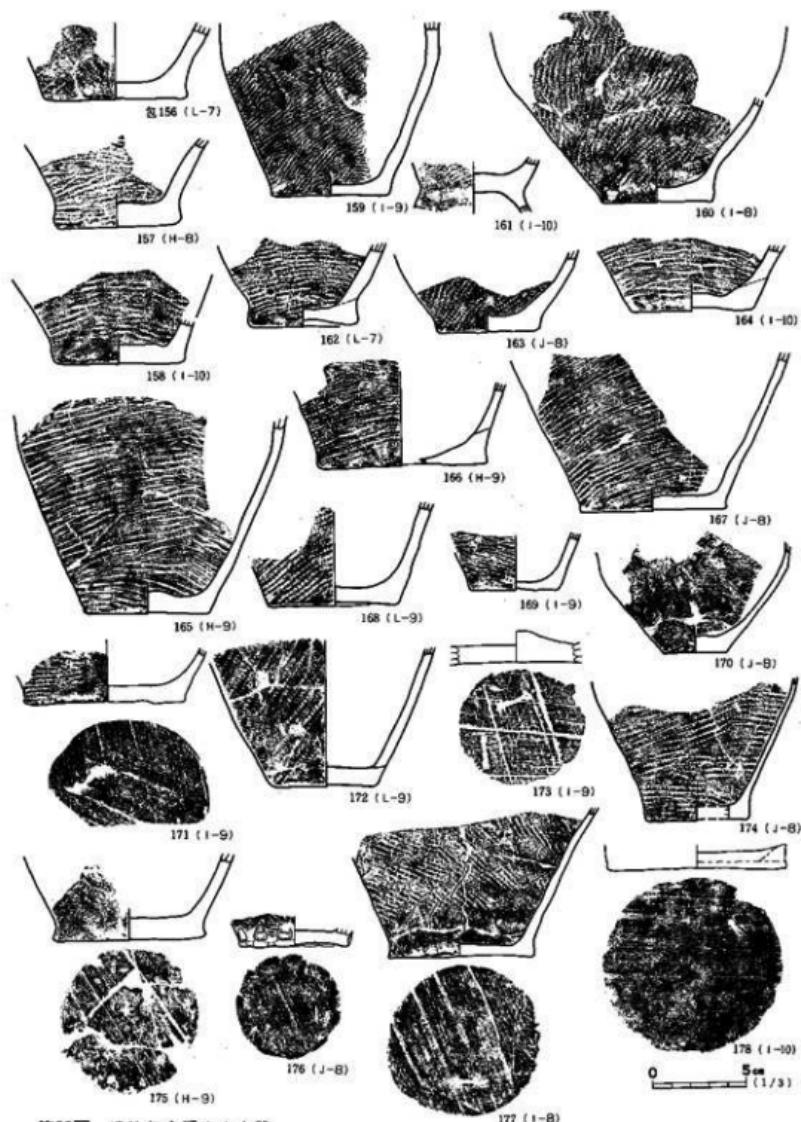
第30図 遺物包含層出土土器



第31図 遺物包含層出土土器

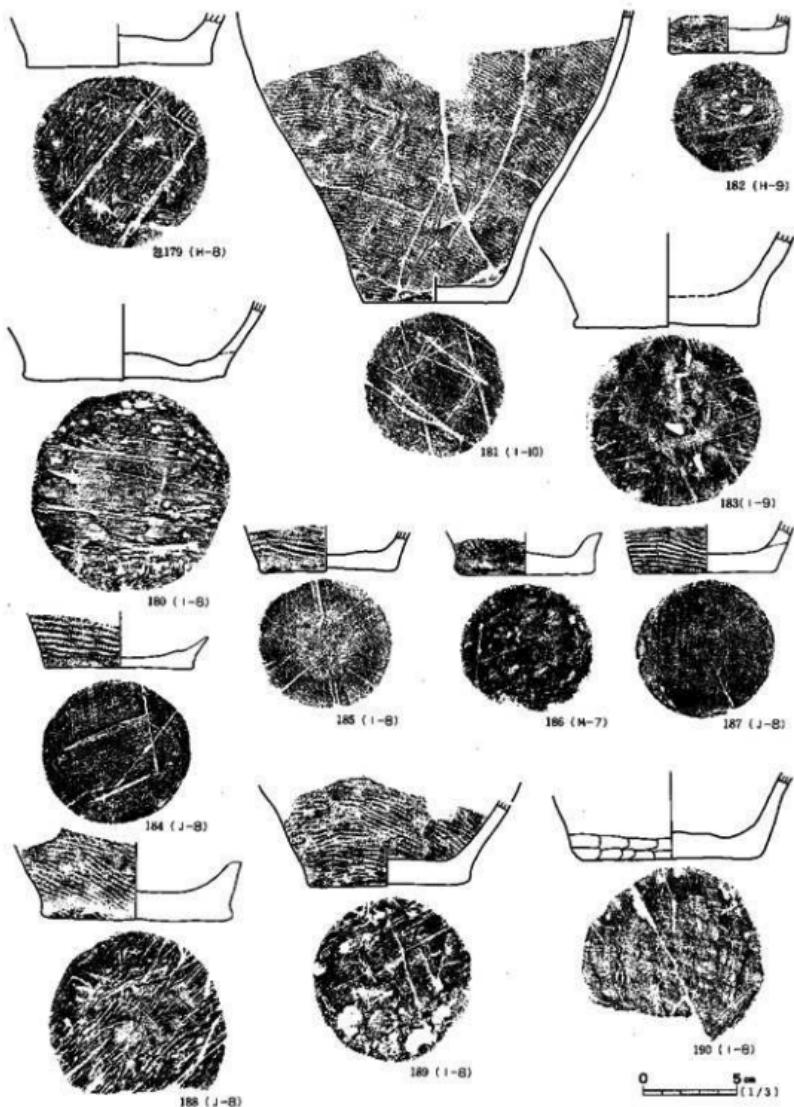


第32図 遺物包含層出土土器

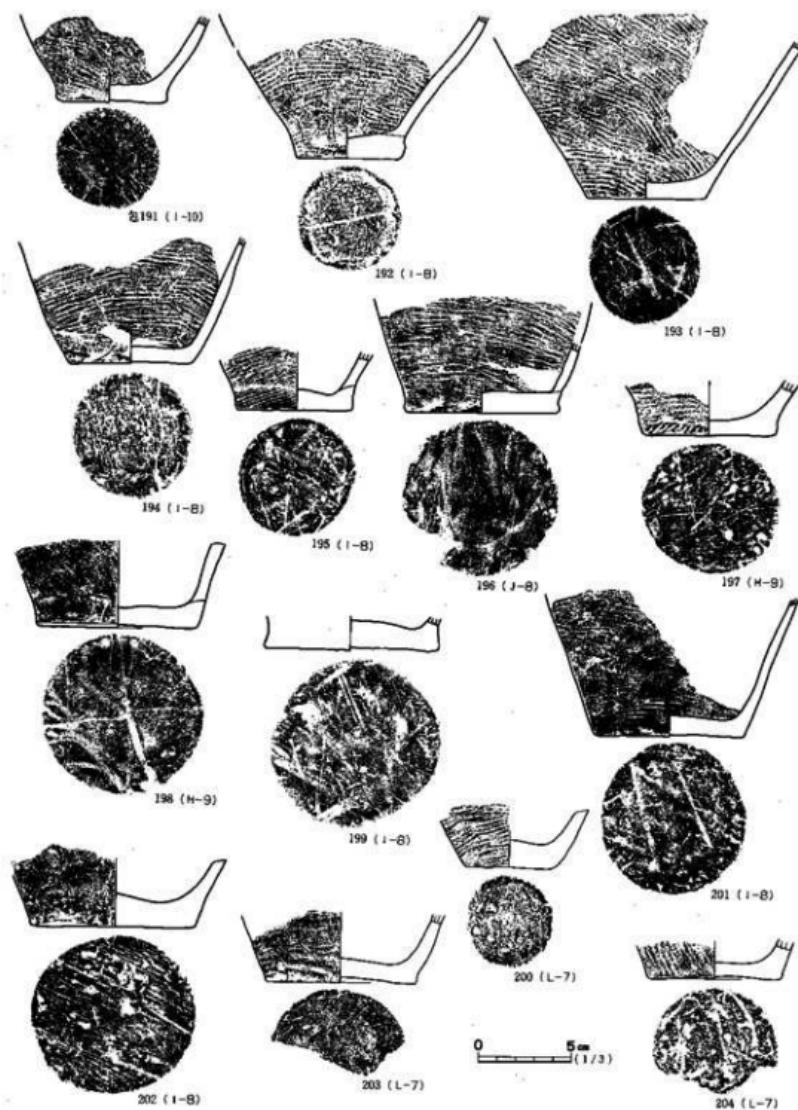


第33図 遺物包含層出土土器

第1編 能登遺跡

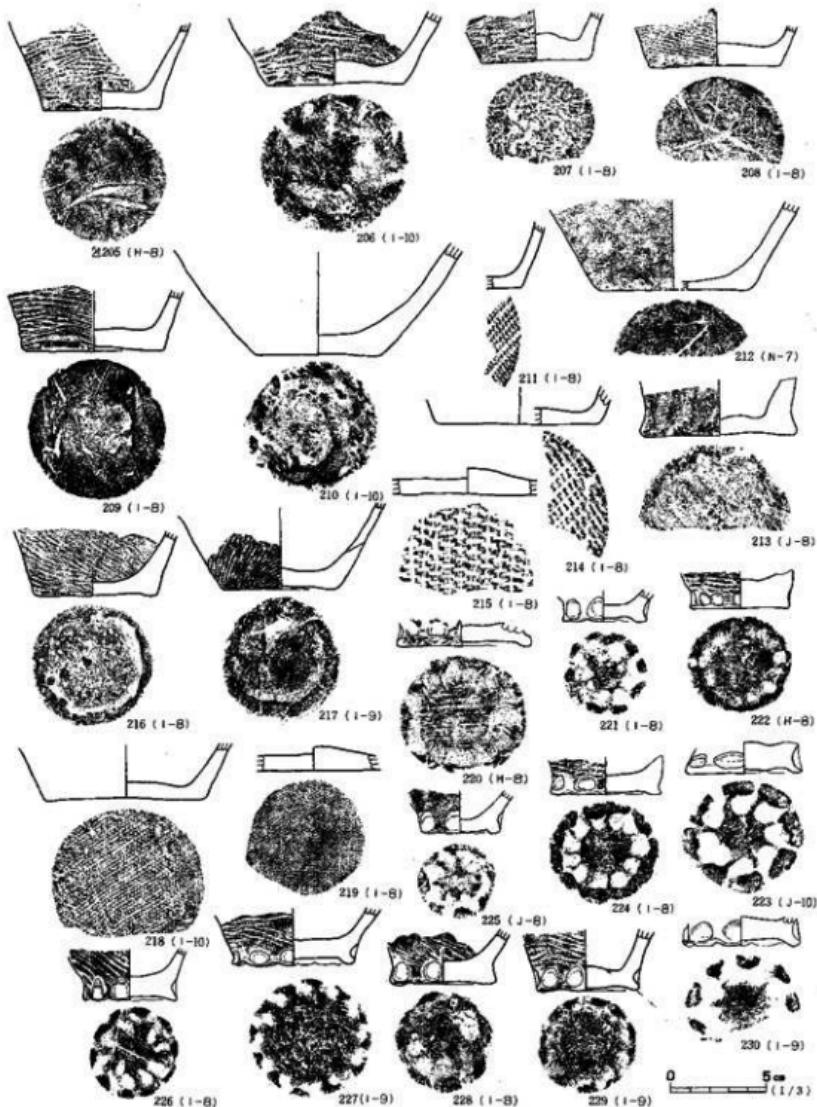


第34図 遺物包含層出土土器

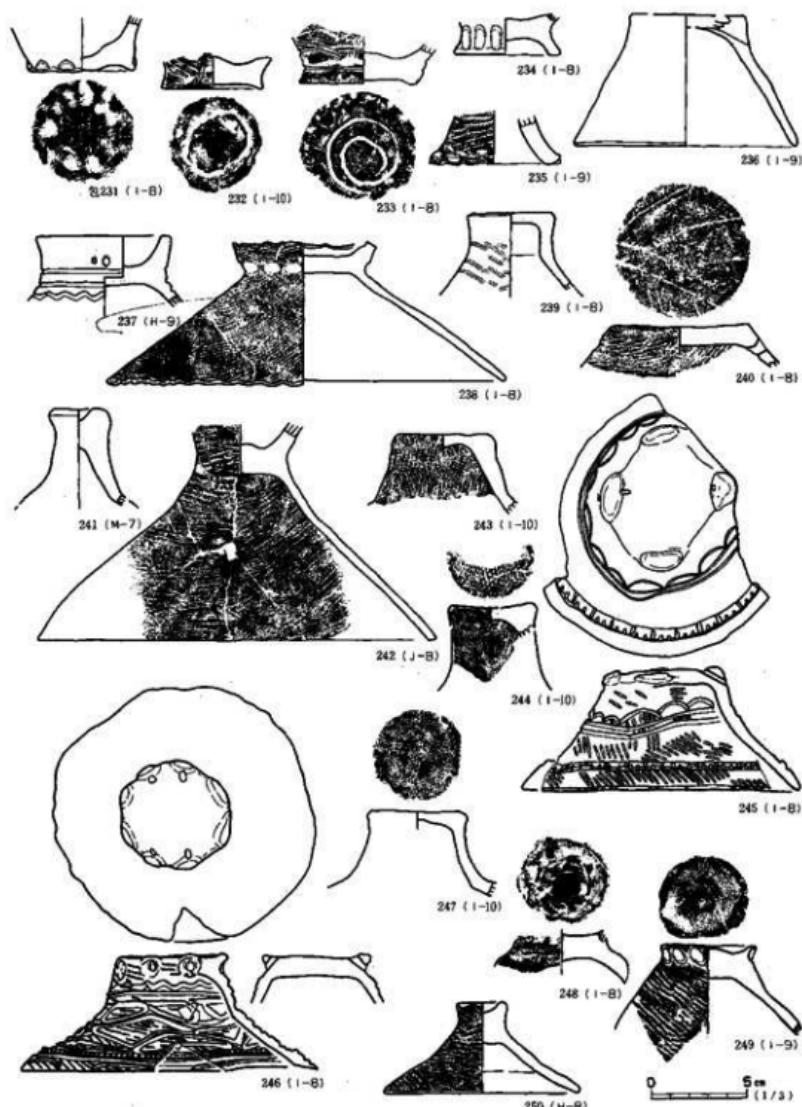


第35図 遺物包含層出土土器

第1圖 鮑亞遺跡

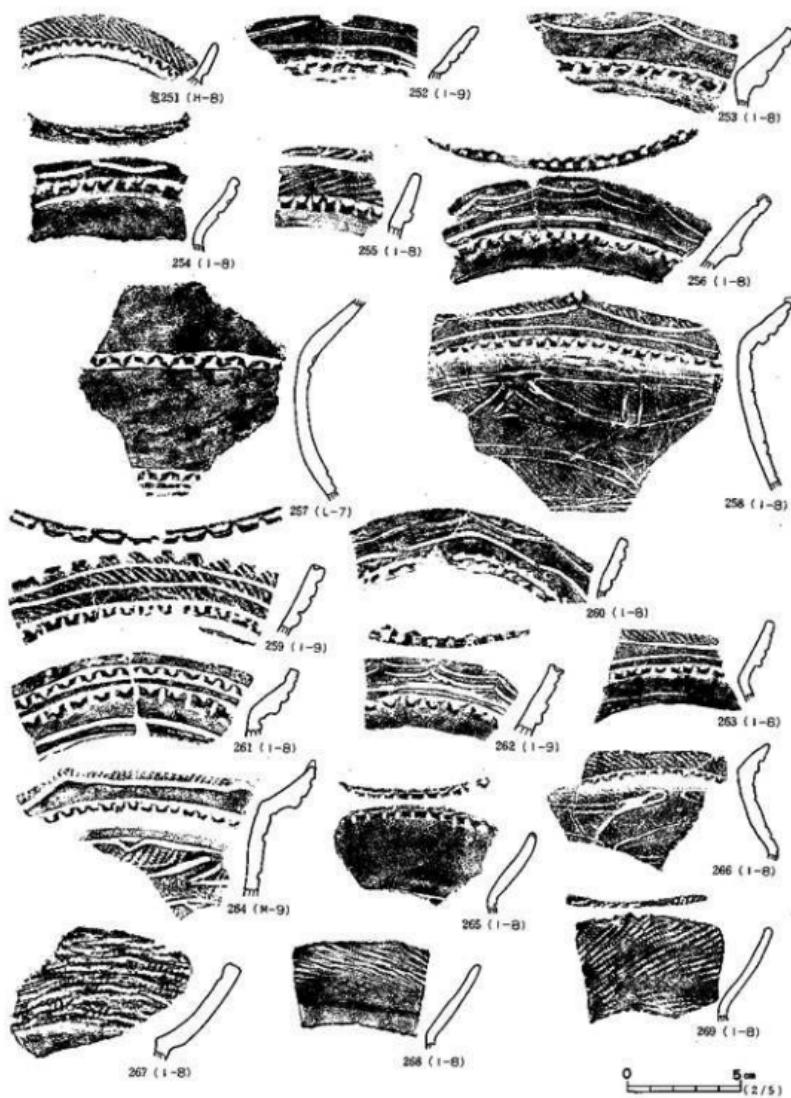


第36圖 遺物包含層出土土器

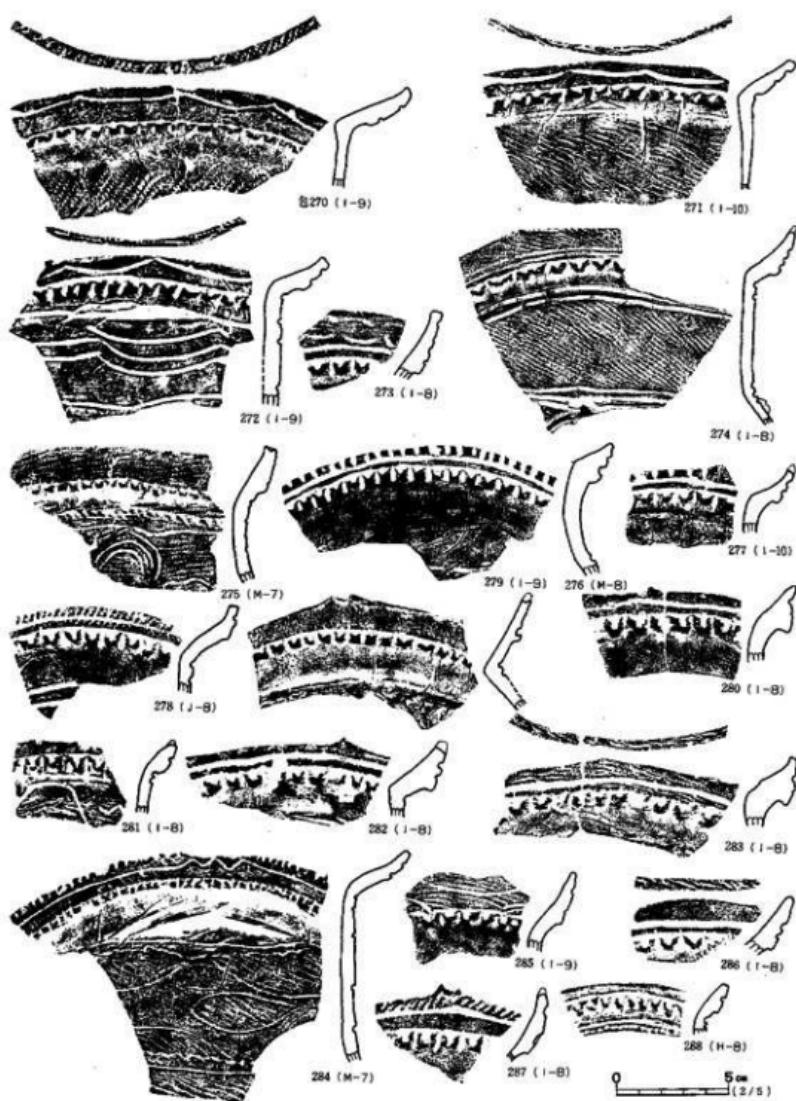


第37図 遺物包含層出土土器

第1幅 能登遺跡

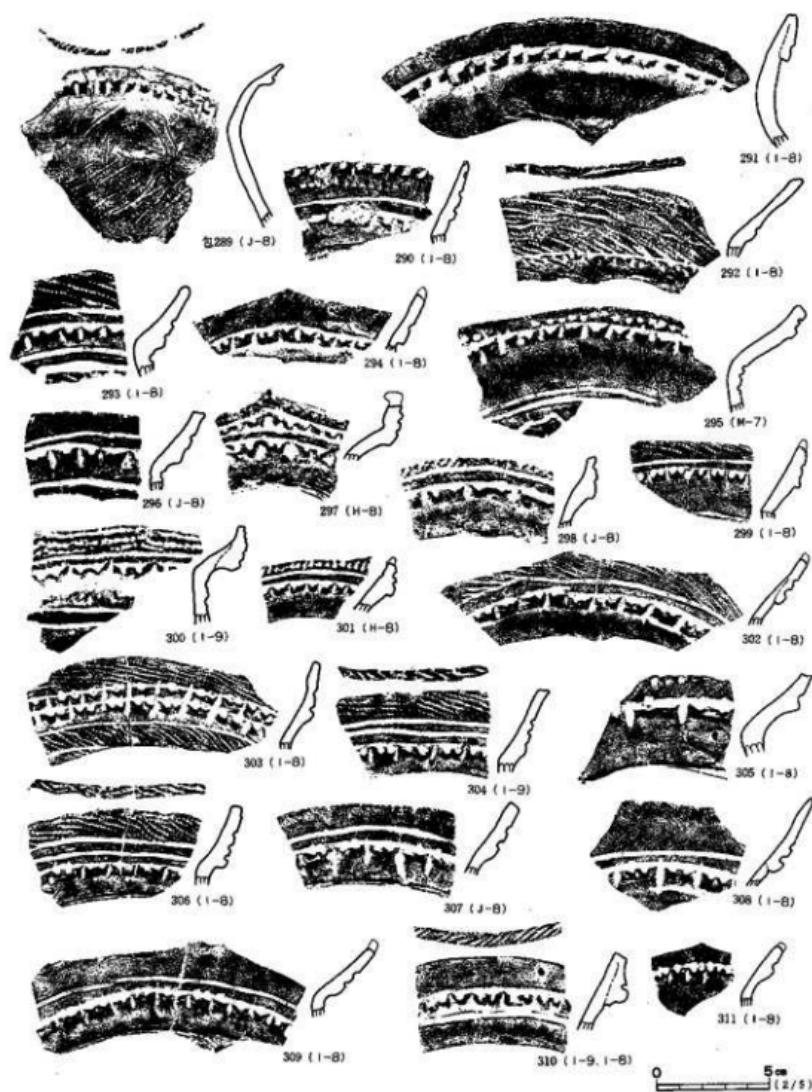


第38図 遺物包含層出土土器

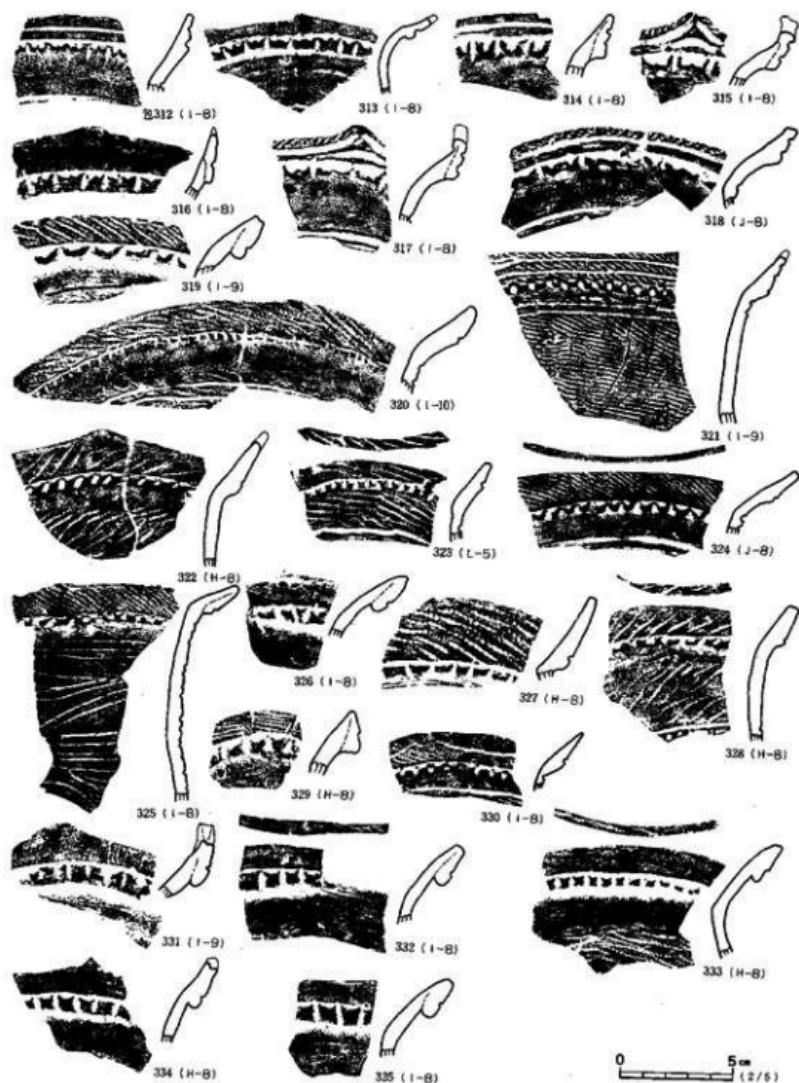


第39図 遺物包含層出土土器

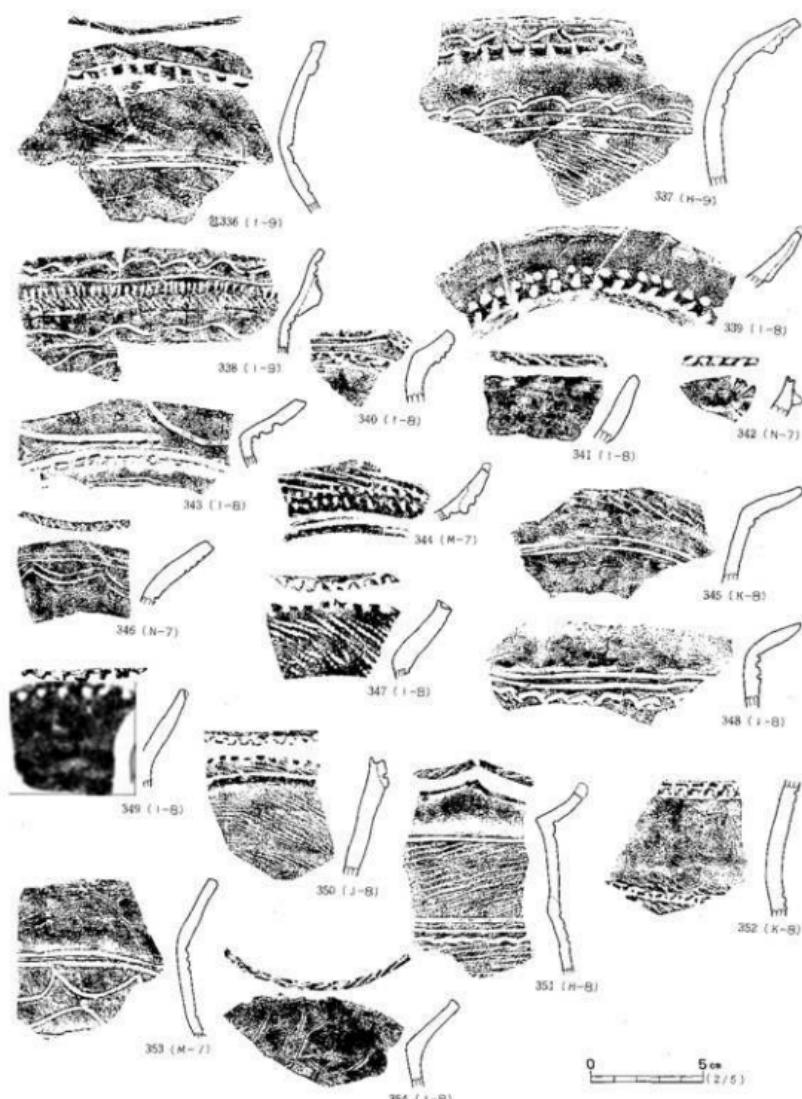
第1編 能登遺跡



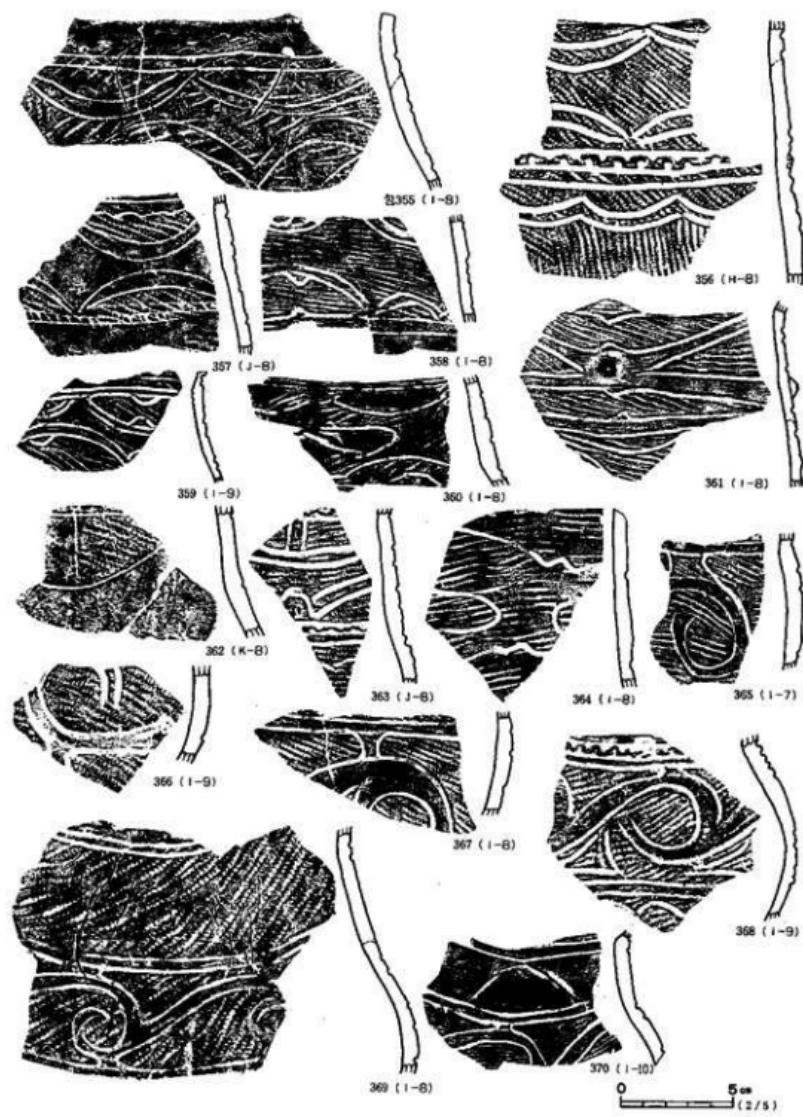
第40図 遺物包含層出土土器



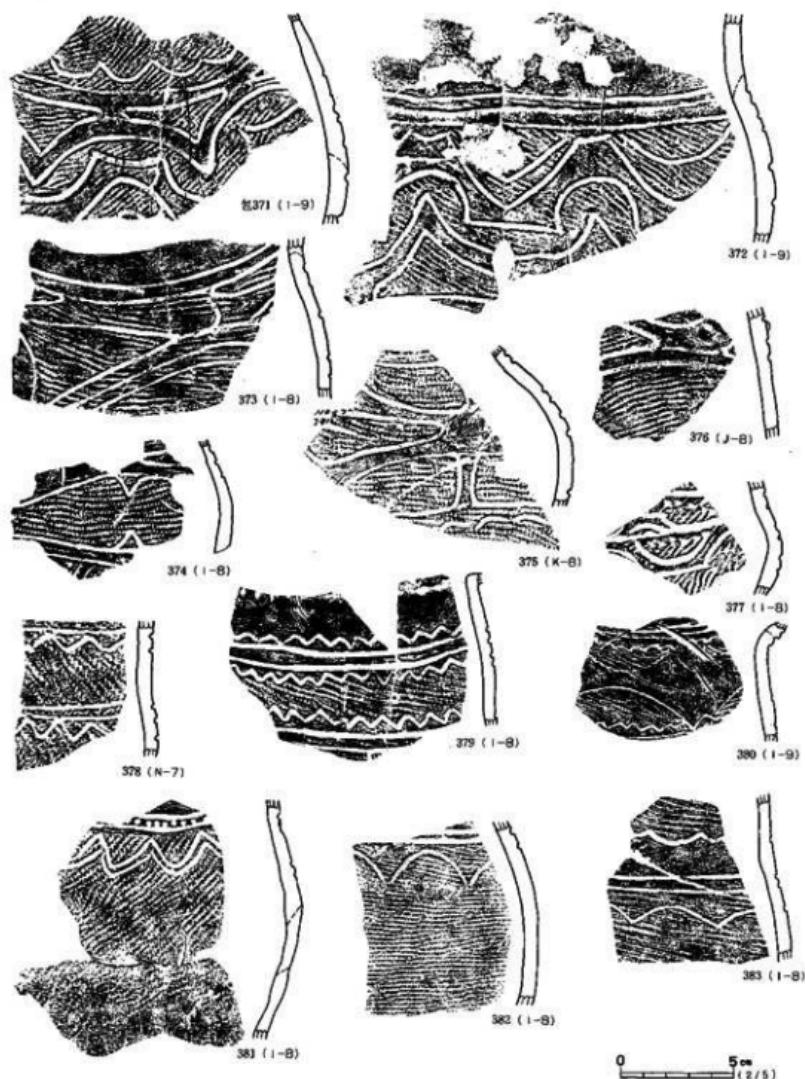
第41図 遺物包含層出土土器



第42図 遺物包含層出土土器

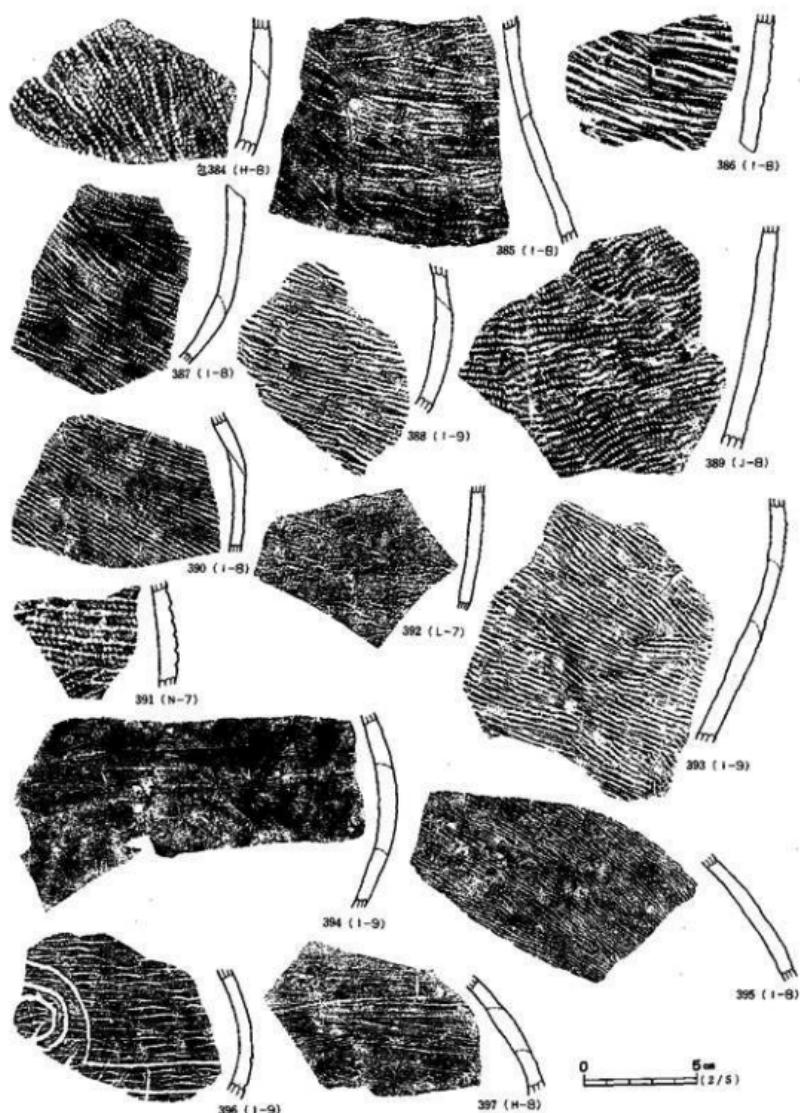


第43図 遺物包含層出土土器

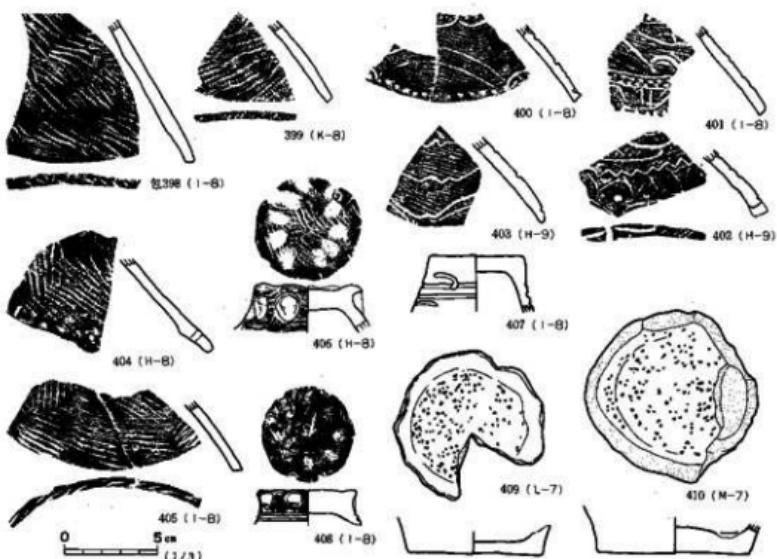


0 5cm
(2/5)

第44図 遺物包含層出土土器



第45図 遺物包含層出土土器



第46図 遺物包含層出土土器

315), 波状口縁のもの10点(包258・279・297・302・309・311・313・318・331・351), 山形突起のつくもの7点(包258・264・274・309・339・344・351), 口唇部に地文を施すもの34点(包254・255・269~272・279・283・286・288・289・291~293・295・297・304・306・310・312・320・322~324・326~329・331~333・336・341・345・346・351・353・354)である。また、包256・261・262・265では、内面の口唇直下に横位の沈線を1条巡らせている。

地文には附加状や直前段多条の縦を使用する例が多いが、なかに単節縄文のもの(包258・259・263・266・274・278)も含まれる。包261・274・277・278・284・287・297・315は、内面の調整痕としてケズリの痕跡を残している。

頸部から胴部までの破片で包352~383・396は、地文上に沈線や刺突による文様が描かれるものである。包384~393・395は地文のみが施文されるもの、包394・397は無文のものである。包355~357は、頸部に連弧文が描かれている。連弧文は、上下2列逆向きに施文されるが、包355では下位列の反復幅が上位列に較べて短い。包352・356・368は、交互刺突文が施文されているものである。包352の交互刺突文は、刺突の位置が乱れ隆帯がとぎれとぎれで蛇行していない。包358~364・371~377・380は、弧文から変化した文様が描かれるものである。包358・359・374は、文様の縁

取りの沈線が文様半ばで屈曲する。包362・363は、弧文と直線で囲まれる文様の半ばを縦の沈線によって区切っている。包375では、この文様が左右に分裂している。包358・360・363・371・372・380では、弧文と弧文とを結ぶ短いブリッジが入る。包378・380は波状文ないし山形文が施文されている。包381～383は、胴部上半に弧文が描かれるもので、包381では上向きの連弧、包382・383は下向きの弧文となっている。包377の刺突文は、竹管の背により押し引き風に施文されている。包361・376では、文様の中点に瘤状の突起が貼り付けられているが、包361の突起の頂点は、盲孔が1個開けられている。

施文される地文のなかには、単節繩文のもの（包356・367・371・374・377・381・389）や附加状繩文のもの（包369・391）が含まれる。包356では胴部の条が縦走している。器面調整で内面にケズリ痕を残すものは包357・360・371・374である。

包134～234は胴部から底部の破片である。この中で単節繩文を地文とするものは5点（包155・168・172・181・217）、附加状繩文のもの1点（包140）がある。器面調整中ケズリは、胴半ばより上位の外面では大変稀であったが、胴部から底部では、特に胴部下端と底部に散見する（包154・155・170・190・194・202・213）。また内面に残るもの（包137・140・146）がある。

底部形態では、平底の他に上げ底となるもの（包140・146・176・201・203・209・213・217・220～227・229・230）、僅かではあるが凹底となるもの（包135・153・162・185）がある。上げ底になる包220～227・229・230は、胴部下端と底部周縁に指頭による押圧を加え一種の文様としているが、その結果底部周縁が引き出され上げ底となるものである。

底部の外面に痕跡として残るものには、木葉痕（包198・207・208・212）、網代痕（包211・214・215）、板目様痕（包142・153・171・173・175～181・183～185・188・191～193・196・197・199）がある。板目様痕はその痕跡から草類の葉の圧痕かと思われる。これ以外に、包232では台状に延びた底部周縁の末端に、竹管端部による刺突と底部に沈線による渦文を施している。包409・410には、内面に穀粒の炭化物痕かと思われる黒点が点々と見られる。

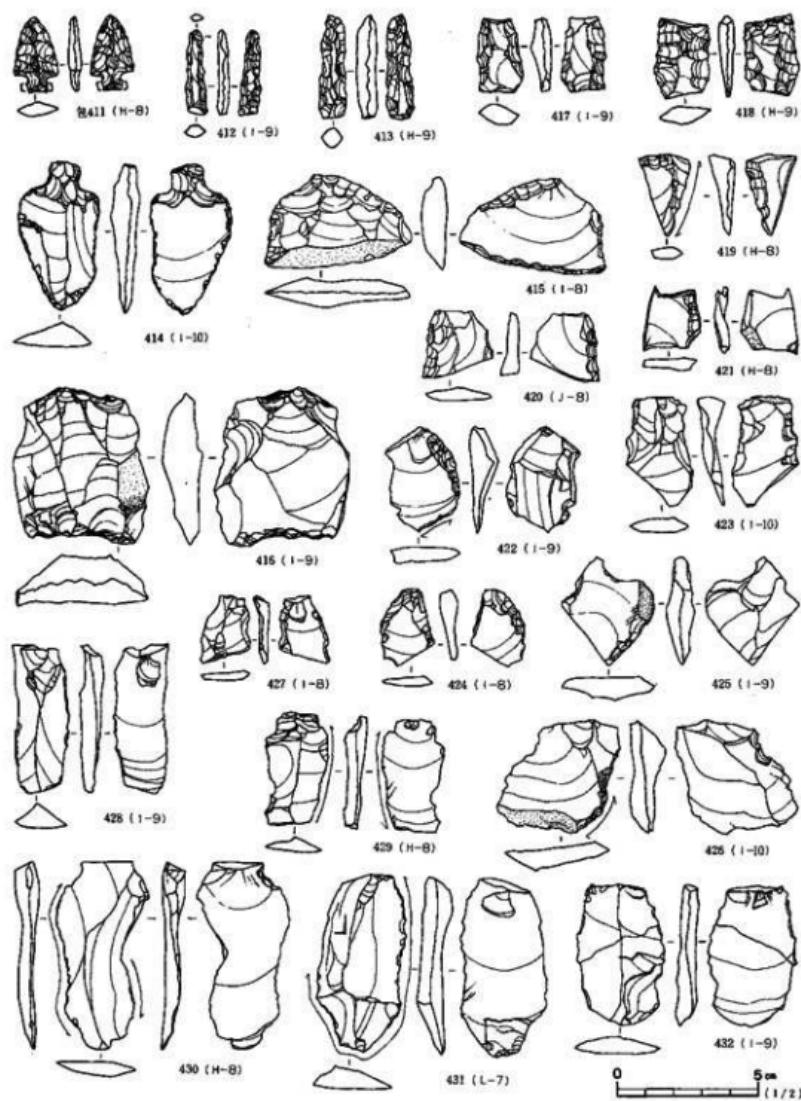
脚部資料2点のうち、包98は推定脚径17.4cmと大振りの脚で外面下端の沈線間の帯状の部分に交叉互刺突を施し、上位には頂点が屈曲する弧文を描いている。地文には直前段多条の繩を使用し、内面にはケズリ痕が残る。包235は推定脚径7.2cmと小さなもので、端部に刻目を施している。附加状繩文を地文とし、内面はナデの調整が施される。

(大越)

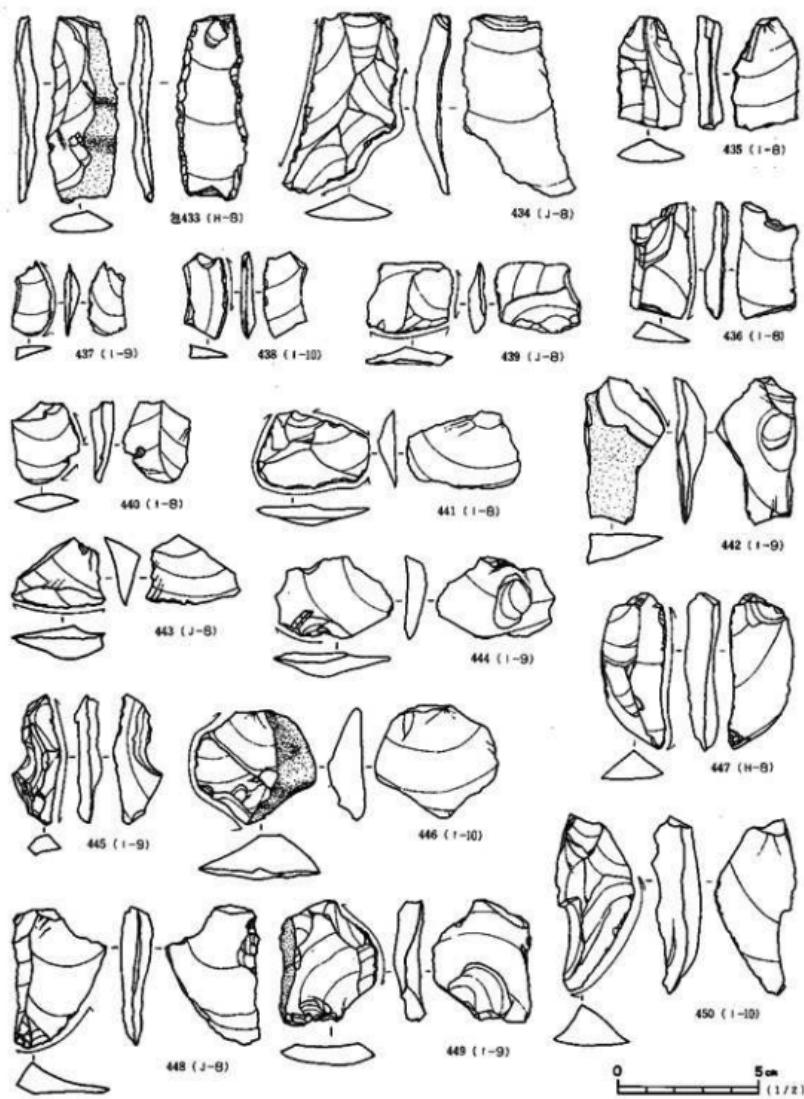
石器 (第47～55図 図版50～53)

器種は、石錐・石錐・石匙・石斧・敲石・磨石・凹石・礫器・石核・剝片が確認されているが、定型石器の数量は少ない。剝片中には微細な剝離痕を縁辺に残すものが多く極力図化に努めた。石質には、頁岩・凝灰岩・流紋岩・安山岩・砂岩・玉髓の類が見られるが、多用されるのは硬質頁岩・珪質細粒凝灰岩である。以下、上記石器を各器種ごとに記す。

第1編 能登遺跡

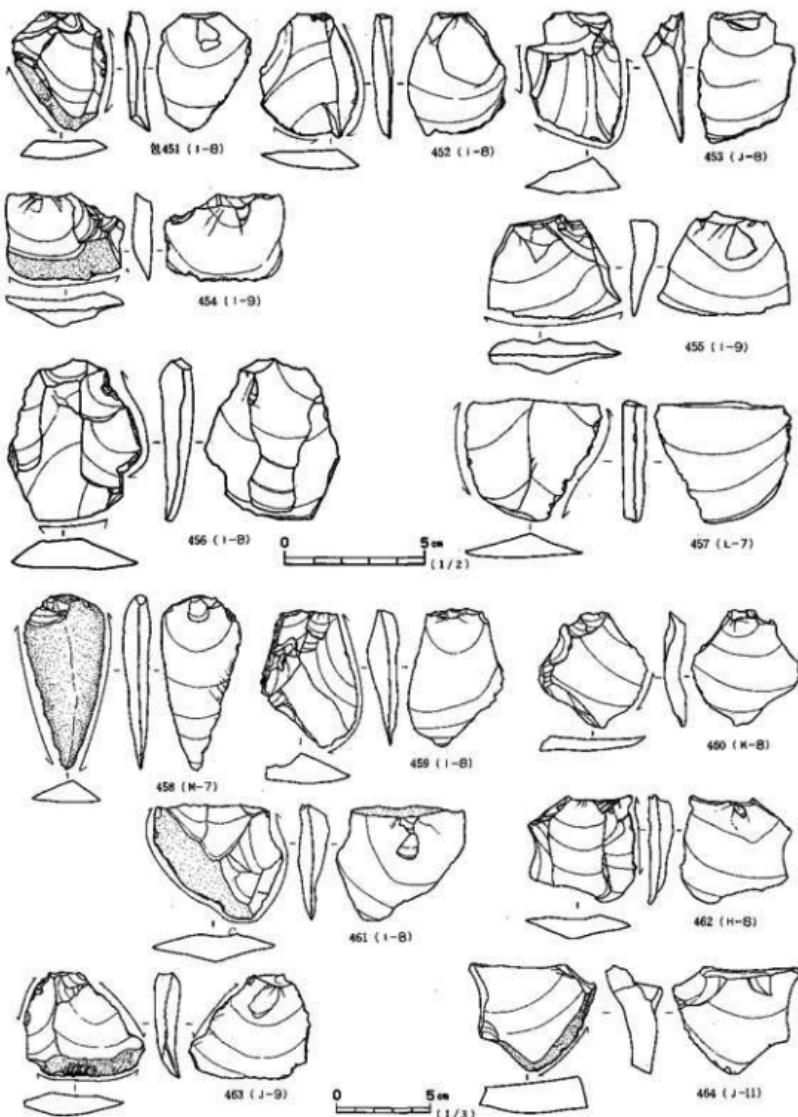


第47圖 遺物包含層出土石器

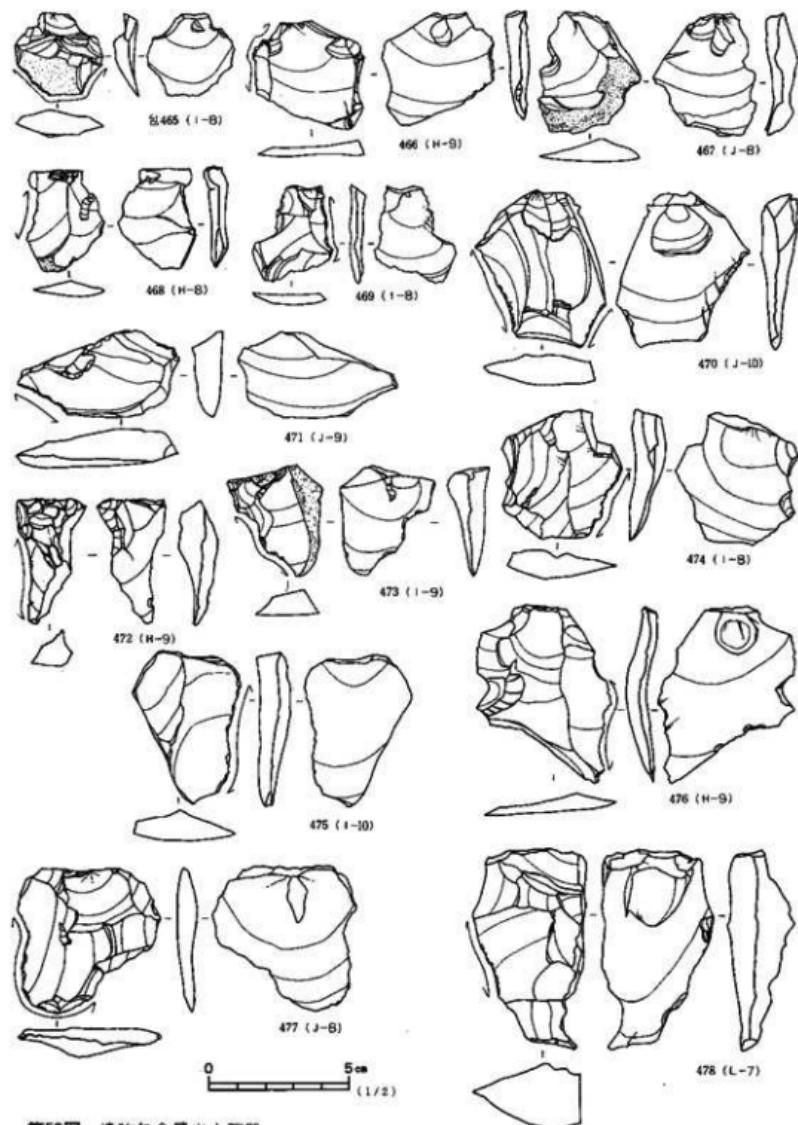


第48図 遺物包含層出土石器

第1編 能登遺跡

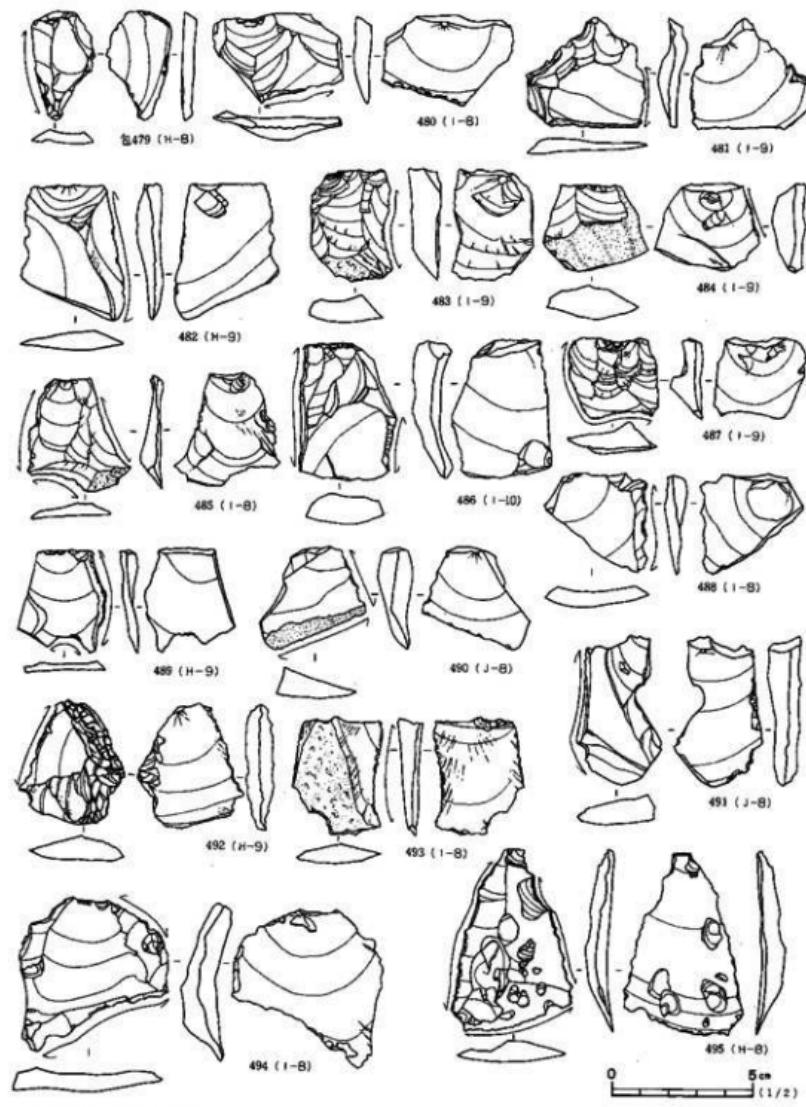


第49図 遺物包含層出土石器

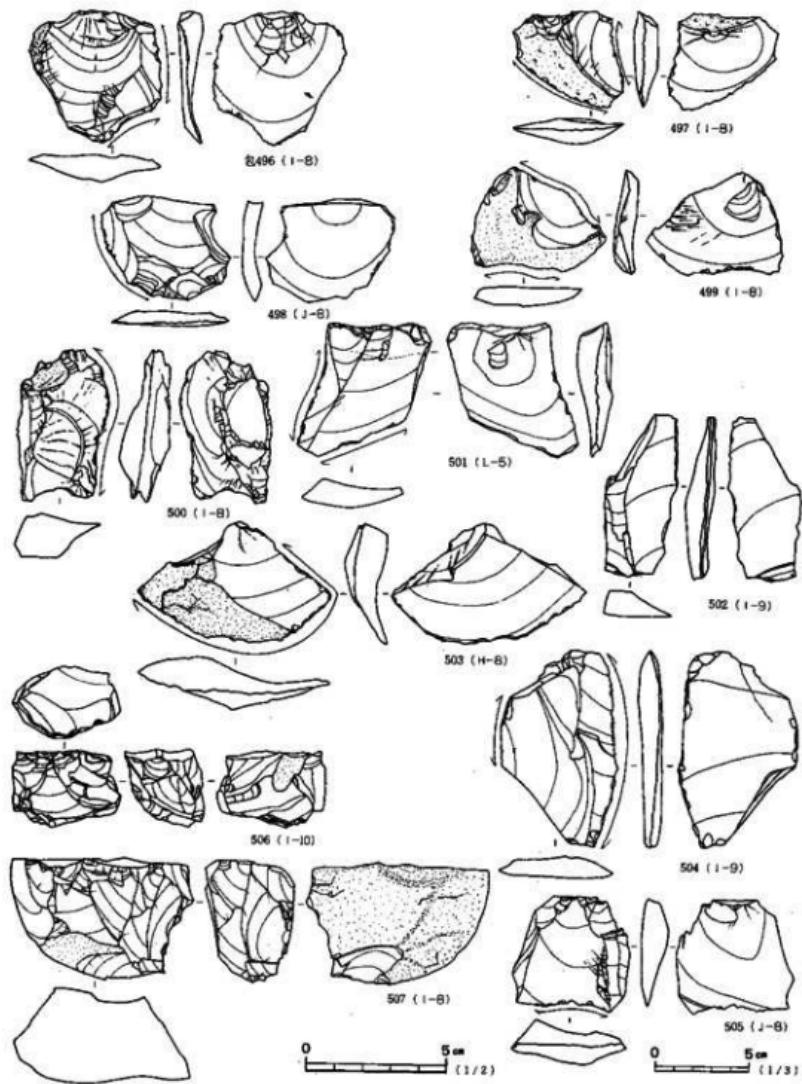


第50図 遺物包含層出土石器

第1編 能登遺跡

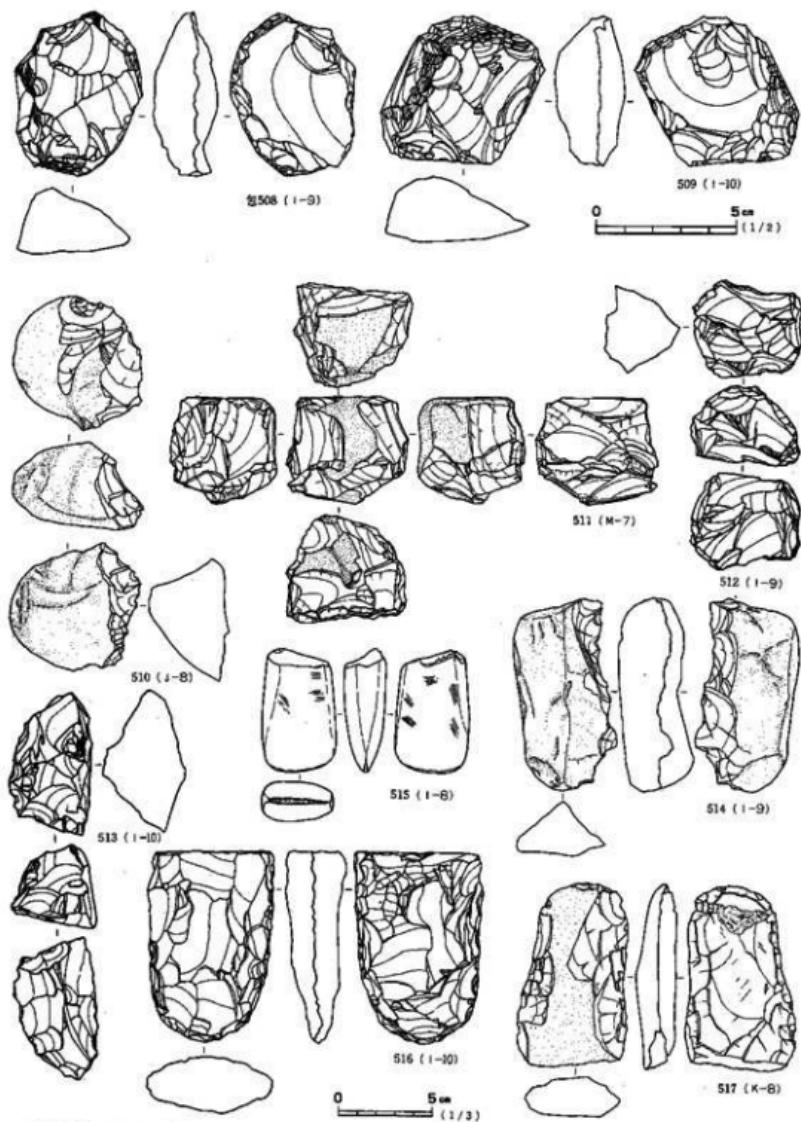


第51図 遺物包含層出土石器

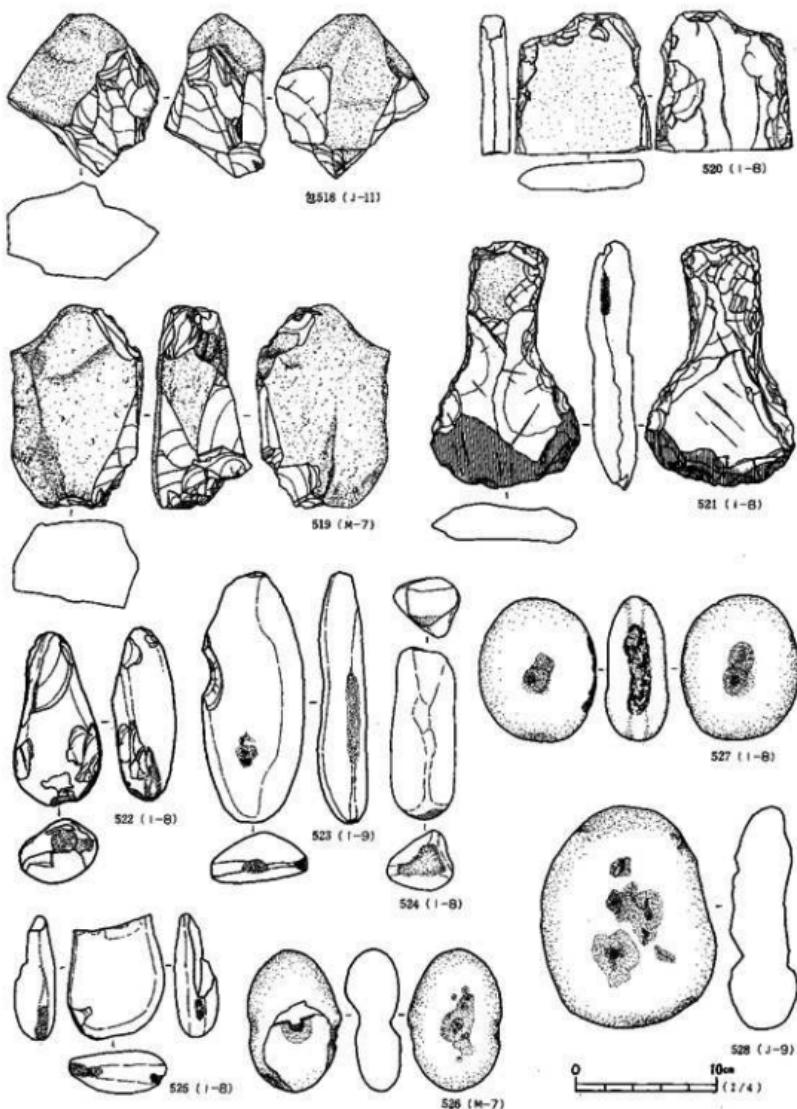


第52図 遺物包含層出土石器

第1編 能登遺跡

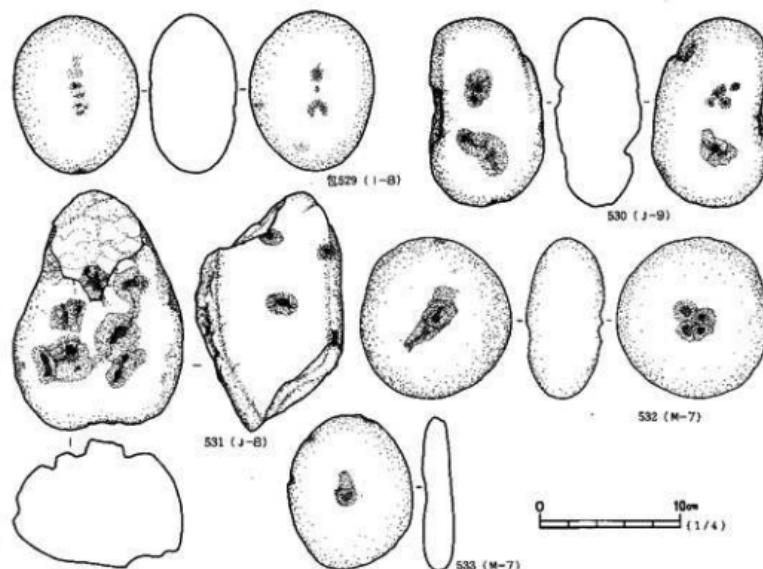


第53図 遺物包含層出土石器



第54図 遺物包含層出土石器

第1編 能登遺跡



第55図 遺物包含層出土石器

石 鐵 包411だけの出土である。包417は、先端部が折損しているため断定はできないが、上半の両側縁が弯曲し始めていることや、厚味もあることから石鐵の未製品の可能性が考えられる。包411は、茎の基部に抉りのみを入れ先端を左右に張り出させるアメリカ式石鐵で、基部の両端を折損している。

石 錐 包412・413の2点である。いずれも基部が折損しているため、抜みの存否については不明である。細い縦長の剥片の両側縁を剝離調整して錐としたものと思われ、身部に若干の反りがみられる。

石 匙 包414の1点である。鍔型の石匙で、抜み部以下の縁辺の両面に浅い調整剝離が連続的に施されている。腹面左縁から一部棱を残す剝離調整がみられる。抜み部の抉りは極めて浅く、抜み部両端の張り出しがほとんど見られない。

ピエス・エスキュー 包416の1点である。長さ5cmを超える大型のもので、片縁の一部に自然面を残す。上下両端の形状は、各々凸縁と凹縁になっており、両端とも縁部に潰れが見られるが、凹縁の潰れのはうが顕著である。

スクレイパー 包415・418~428・432・433・508・509の16点である。包415は横型の石匙に板

めて形状が似ているが、摘み部を造る意図が認められることから本類に含めた。素材の剥片剥離の際失敗した可能性もある。下端には自然面を残し縁部の剥離調整は片面からの浅い剥離が入るのみである。両側縁に調整が入る包418・420・432以外は、主に片縁の細部調整で終わっている。包418の調整は深く片面の端部の一方に潰れがある。包432は、極めて浅い調整が両方向から交互に加えられている。包508・509は、縁辺の大部分に潰れがみられ他のスクレイパーからは区別される。

石斧 包515～517・521の4点である。このうち磨製石斧は包515だけで、他は打製石斧である。包521は弥生時代の石器で、刃部から下端の両面にかけ磨耗が著しい。包517も包521同様、石器になるものと思われる。身・刃部を欠損するもので、上半の両側縁に若干の潰れが見られる。磨製石斧包515は基部を欠損している。刃部の潰れが著しい。

敲石 包522～525の4点である。いずれも縦長の不定形の塊の塊部や側縁に敲打痕がみられる。包523は抉り込みが1箇所みられるが、側縁の敲打痕が途切れていることから本来の形態を示すものではない。

磨石・凹石 包526～533の8点である。磨石として使用されているのは包527・529の2点で、他は凹部がみられるものである。凹部は、包528・533では片面のみ、包530・531では、両面と側面にみられる。磨石は包527の両側縁には敲打痕が残っている。

石核 包506・507・510～514・518・519の9点である。包510・514・518・519は、自然面を多分に残しているものである。包506・512・513は自然面を残さず全面から剥片剥離を行っている。特に打面の設定はしていないようである。包511も一部自然面を残しこれらに近い。

剥片 包428～431・434～505の75点を図示した。これらの剥片は縁辺に微細な剥離痕や滑らかな部分を伴うものを主とする。これらは、図中において各剥片の片面の縁辺に副縁を描いて表した。剥片の形態は様々で統一性がない。微細な剥離や滑らかな部分は、剥片剥離の際の打点部の残る縁辺には見られない。痕跡の残る縁部の形態は凸縁・凹縁・平縁の3種に類別されるが、これは剥片を使用した目的によって部位に相違があったものと思われる。

(大越)

土製品 (第56図 図版49)

包534は径3.2cm、厚さ約1cmの円盤状土製品である。中央付近に小枝か竹管による圧痕がみられ、その脇には櫛のような形の圧痕がある。砂を含んだ胎土であり、天王山式土器の胎土よりやや粗いが似通っている。

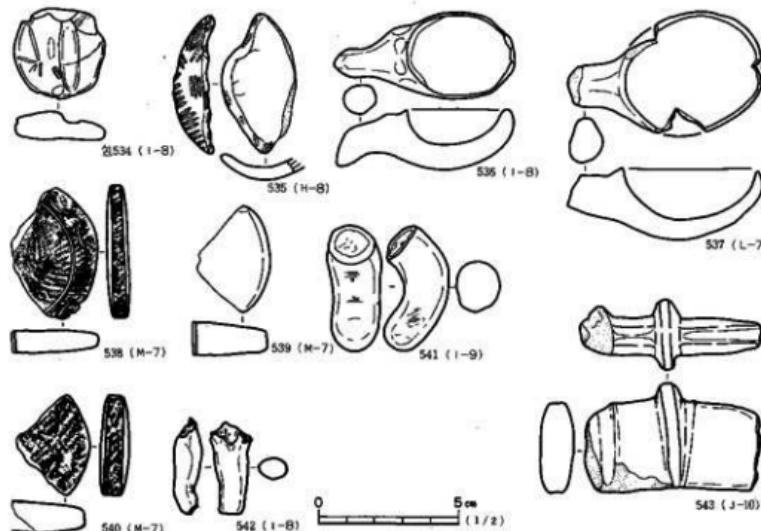
包535は器種不明である。匙の一部とも考えられるが、左右の開きが大きいため、不明とした。包536・537は匙である。包536は体長6.4cm、幅3.1cm、深さ2.3cm、柄の部分は1.2×1cmの楕円形、身の厚さは約1cmであり、ほぼ完形である。包537は残存長6.9cm、幅4.3cm、深さ2.7cmである。柄の部分は1.1×1.6cmの偏平形、身の厚さは約0.7cmである。両者とも胎土は緻密、焼成はや

や軟質である。

包538・539・540は杓垂車である。包538は径3cm、厚さ0.8cm。包539は径2.6cm、厚さ1.1cm。包540は径は分からないが、厚さは0.7cmである。包538は地文の上に円形の区画線をつけ、その周囲に連弧文の文様を施している。地文は片側と側面のみに施されており、単節縄文である。包539は無文である。包540は前面に単節縄文を施しているが、沈線による文様等は見られない。胎土は緻密であり、天王山式土器と似ている。

包541・542は器種不明であるが、土偶の手や何かの把手になる可能性がある。

包543は独鉛石型土製品である。独鉛石の中央部付近にあたる破片である。残存長6.2cm、幅3.8cm、厚さ1.3cm～2.5cmである。砂を多く含んだ胎土であり、焼成は良である。能登遺跡では、遺構外から独鉛石が出土しているが、それよりは小型のものと思われる。 (西山)



第56図 遺物包含層出土土製品

第5節 その他の遺構と遺物

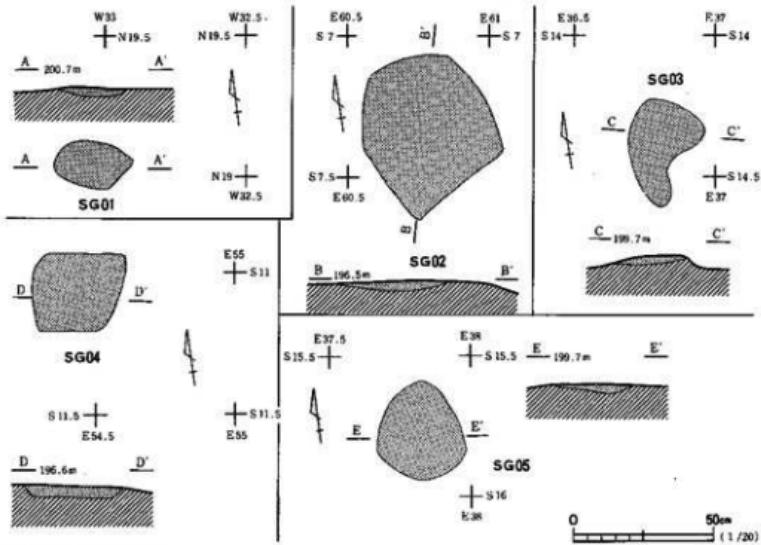
焼土遺構 SG01~05 (第57図)

今回の調査では全部で5か所の焼土遺構が検出された。遺構の分布状況をみると、1号焼土遺構が調査区西側の段丘上平坦面のD5グリッドで検出された他は、すべて2号住居跡が検出された調査区南東側の段丘面で、3・4号焼土遺構は住居跡の西側のK8グリッドで、2・5号焼土遺構は住居跡の東側のM7・N7グリッドで検出されている。遺構の検出された面と調査区内の基本土層との関連をみると、1号焼土遺構はLⅢの地山層上面で検出されているが、他のすべては2号住居跡と同じLⅢbの洪水層上面から検出されている。

平面形は不整形を呈するものがほとんどで、大きさもまちまちである。最も大きいものは2号焼土遺構で長軸120cm、短軸90cmである。最も小さいのは1号焼土遺構で長軸50cm、短軸30cmである。平均すると60cm~70cm程度のものが多い。いずれの遺構の焼土もボソボソした感じで、検出面から6cm~8cmの深さに達しており、底面が堅く焼けているものは見当たらなかった。

遺物は2・4号焼土遺構から少量ではあるが出土している。いずれも検出面からの出土で、土師器の甕や杯の小破片であるが、共伴関係は明確には分らない。

(熊谷)



第57図 焼土遺構図

溝 跡

1号溝跡 SD01 (第3・58図 図版26・30)

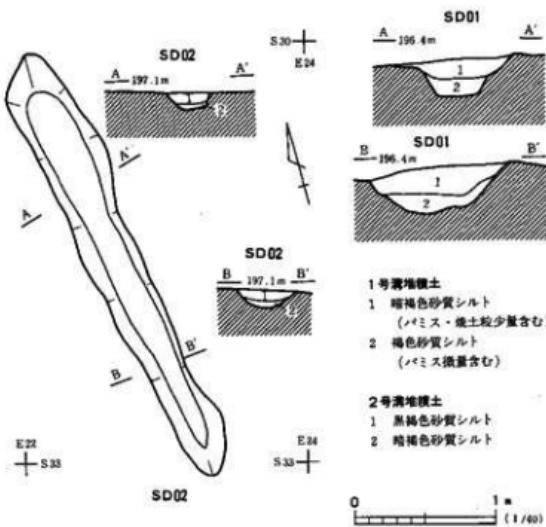
調査区東側、2号住居跡の東手を南北に横切る溝である。全体の様子はつかめないが、長さ約33.5m、幅約60cm~90cmが確認されている。深さは約27cm~30cmで、2号住居跡と同じくLIII bを検出面とする。堆積土は2層確認され、l 1には焼土粒が混ざっていた。溝底の傾斜であるが、ほぼ水平であり水が流れるほどの傾斜角度を呈してはいない。

遺物は、土師器(高台付杯・甕)、須恵器(甕・長頸瓶)、土師質土器である。小破片のため図示できなかった破片資料として土師器420片、須恵器50片があり、土師器の量が圧倒的に多い。

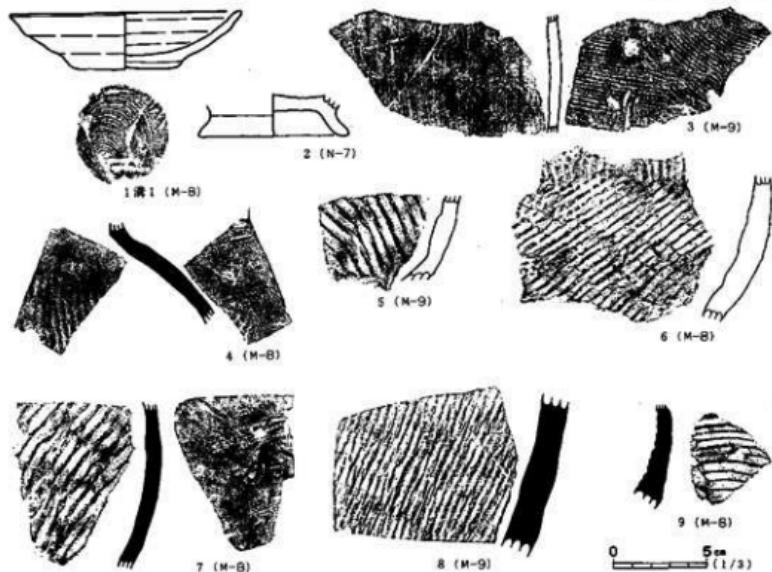
1溝2は土師器・高台付椀の脚部であり、N 7グリッドーl 1の出土である。脚部の内外面とも丁寧なロクロナデがされており、見込みはヘラミガキの後黒色処理がおこなわれている。ミガキは、横一方向である。

1溝3・5・6は土師器甕である。1溝3・5はM 9グリッドー堆積土、1溝6はM 8グリッドー堆積土の出土である。1溝3は長頸甕の胴部破片であり、内面はハケメ、外面はケズリ調整を行っている。1溝5は外面にタタキ痕を残す胴部下半の破片であり、内面はナデ調整されている。1溝6も外面にタタキ痕を残す胴部破片であり、内面はヘラナデされている。

1溝4・7・8は須恵器甕である。4・7はM 8グリッドー堆積土、8はM 9グリッドー堆積土の出土である。4は肩部の破片であり、外面にタタキ痕を残し、自然釉がかかっている。内面は縦方向のヘラナデ後頸部付近をカキメ調整している。7は胴部の破片である。外面にタタキ痕を残し、内面はヘラナデによりアテ具痕を消している。非常に堅密な焼成であり、胎土も緻密である。8も



第58図 1・2号溝跡



第59図 1号溝跡出土土師器・須恵器・土師質土器

胴部の破片である。外面にタタキ痕を残す。4・7と比べ褐色味を帯びている。1溝9はM8グリッドー堆積土内出土であり、長頸瓶の底部付近の破片である。1溝1はM8グリッドー堆積土出土の土師質土器皿である。器形は体部から口唇部にかけ直線的に開き、口縁部付近でやや内弯ぎみになる。調整は内外面ともにロクロナデであるが、見込み中央部付近には見られない。底部は糸切り・未調整であり、胎土は緻密、焼成は軟質である。

本溝は、調査区東側を南北に横切るものである。底面での傾斜がほとんど見られることや、調査区の途中で切れていることから、水路の可能性は低いと思われる。また出土遺物は、ほとんどが破片であり、その時期は高台付杯や土師質土器から11世紀代と思われる。

2号溝跡 SD02 (第58図)

本溝跡は、2号建物跡西隣に位置し、全長約3.2m、幅約35cm~45cm、深さ約15cmである。2号建物跡P₇~P₈の西側に平行している。底面の傾斜はほとんどなく平坦である。遺物は全く確認されなかった。

2号建物跡に平行していることから、それにともなう溝の可能性も残されている。しかし、明確な決め手に欠けるため、ここではその可能性があることのみ示しておく。また本遺構の時期、性格については不明である。

ピット群 (第60図 図版12)

本ピット群は1号建物跡の南側に位置している。P₁は長径が40cm、短径が31cm、深さが28cmである。

P₂は長径が43cm、短径が34cm、深さが31cmであり、柱穴である。P₃は短径が32cmであり、P₂に切られているため長径は分らない。深さは12cmである。P₄は径が19cmの円形であり、深さは10cmである。P₅は長径28cm、短径23cm、深さ34cmであり、柱穴になる可能性がある。P₆は長径44cm、短径33cm、深さ15cmである。いずれも1号建物跡と同じL層b層を検出面としている。

遺物の出土は見られなかった。

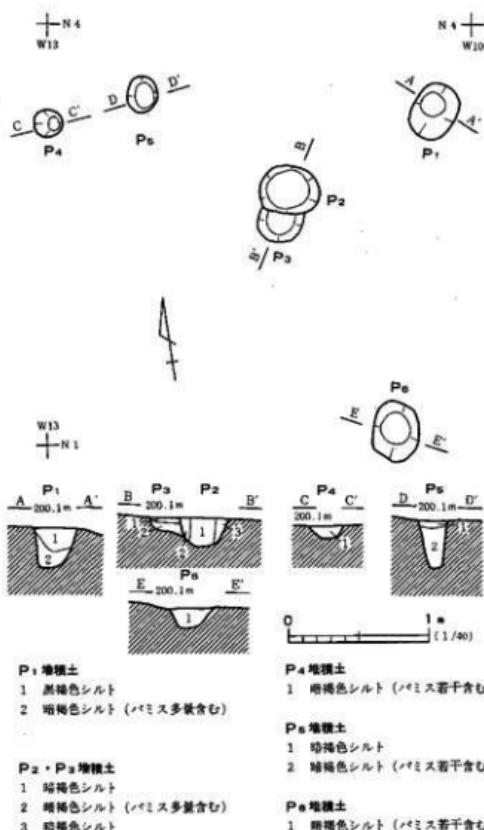
本ピット群は、1号建物跡と近接しているためその新旧関係や性格が問題であるが、切り合い関係などがつかめなかつたために新旧関係についてはわからない。またひとつの遺構を構成するピット群とみるのは到底不可能である。

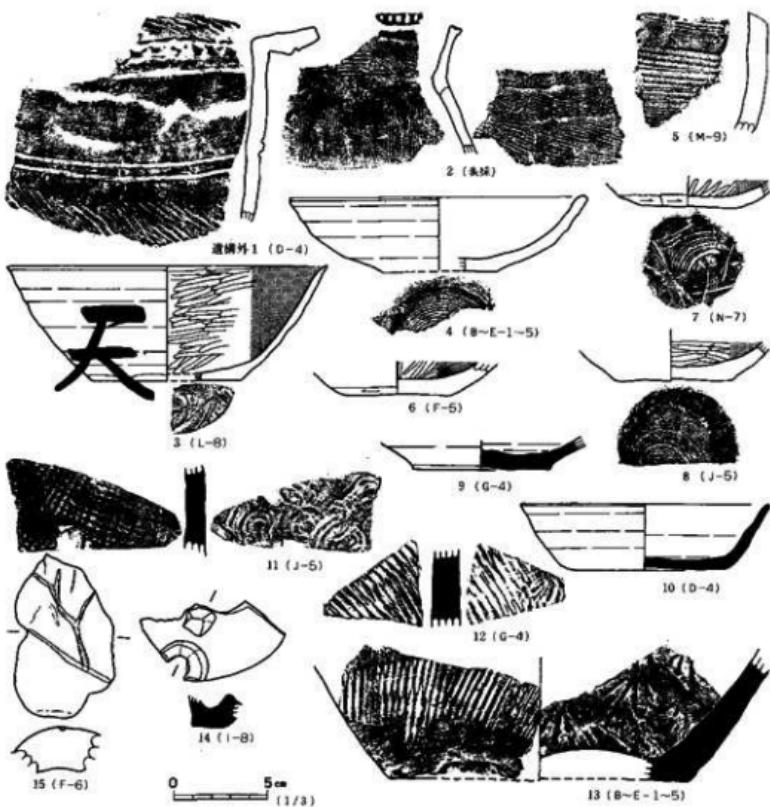
(西山) 第60図 ピット群

遺構外出土遺物 (第61~63図 図版54・55)

弥生土器

遺構外1・2の2点である。双方とも圓形土器の破片である。遺構外1は、口縁の把厚部下端に交差刺突文を有している。口唇部は面取り風に仕上げられ、口縁形状は緩い波状になるようである。胴部上端には無文帯があり、無文帯以下は平行沈線を境に撚糸文の地文のみとなる。内面には胴部外面の2本の沈線に呼応して軽い棱が観察される。調整はナデである。遺構外2の口唇





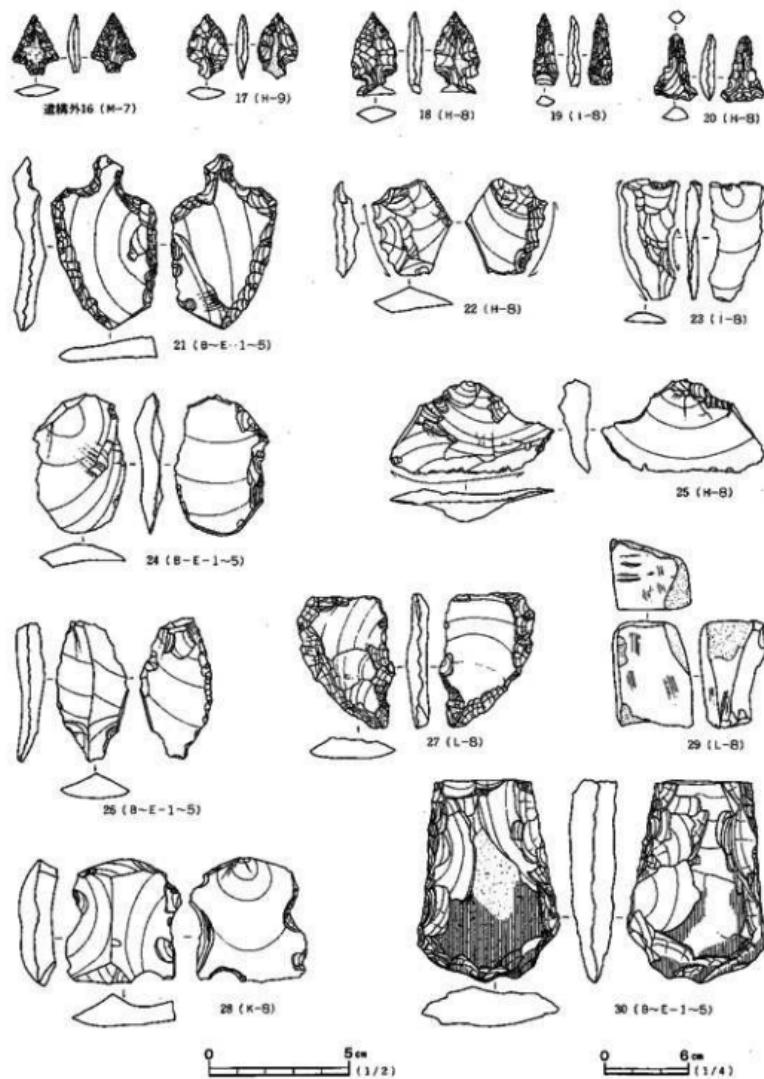
第61図 遺構外出土土器・土製品

端部には、刻目が施されている。外面の調整は、頸部に若干ナデが入るもののはハケメ、内面は口縁部でナデ・胴部はハケメである。

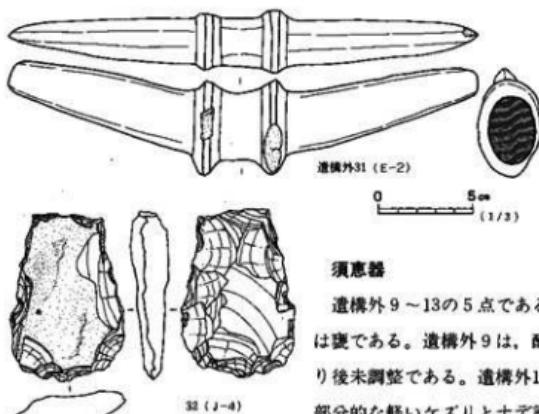
土師器

遺構外3・5～8の5点である。遺構外3・6～8は杯、遺構外5は器種不明である。杯は、すべてロクロ成形で、内面ヘラミガキ・黒色処理されている。底部切り離し技法は、底部から体部下端にかけ全面へラケズリされる遺構外6以外は回転糸切りである。遺構外7・8の外面調整は、底部周縁と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。遺構外3の体部外面には伸びやかな書体で「天」と墨書きされている。

第1編 能登遺跡



第62図 遺構外出土石器



第63図 遺構外出土石器

須恵器

遺構外9～13の5点である。遺構外9・10は杯、11～13は甕である。遺構外9は、酸化焰焼成で底部は回転ヘラ切り後未調整である。遺構外10は、回転ヘラ切り後、底面に部分的な軽いケズリとナデ調整を加えている。遺構外12は、両面ともタタキメ、遺構外11は、外面格子目状タタキメ、内面には同心円状のアテ具痕が残る。さらに両面とも部分的にナデが加えられる。遺構外13は、外面平行タタキメ、内面八手状のアテ具痕上に両面とも一部ナデが入る。

施釉陶器

遺構外14の1点のみである。小破片で器種の認定には不安が残るが、一応鳥形瓶類と考えたい。表面に灰釉が施されているが、一部内面にも孔を伝って釉の垂れがみられる。

土製品

遺構外15とした羽口1点である。推定径7cm～8cm、残存長8.5cm、厚さ約2cmで、胎土中に砂の混入が目立つ。

石器

遺構外16～28・30・32の15点を掲載した。器種には、石鎌・石錐・石匙・石斧がある。この他主に使用痕あるいは2次的な細い剝離痕を有する剥片を図示した。

遺構外17・18とした石鎌2点は、アメリカ式石鎌で、遺構外17は基部調整に失敗している。遺構外19・20は石錐である。石斧2点中遺構外30は、弥生時代の石斧で刃部先端から側縁の下端にかけ磨減している。剥片中には、スクレイバー風に縁辺を剝離したもの（遺構外22・26・27）、縁辺に細い剝離痕を有するもの（遺構外23～25）、抉入部がみられるもの（遺構外28）がある。

石製品

遺構外29とした砥石と、遺構外31の独鉛石がある。砥石は凝灰岩製で、表・裏・側面の4面を主な使用面としている。独鉛石は、ブーメラン形に開き、基部には2条の高まりが節状にみられる。先端は小型磨製石斧の刃部のように造り出されている。

(大越)

土師質土器

遺構外4の1点である。ロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。やや大振りの杯で、体部の立ち上がりは内弯気味に大きく開いている。

第4表 能登遺跡出土主要弥生土器一覧

(単位: cm)

遺物名	器種	地点	標印No	口径	底径	器高	最大幅	外 面 の 特 徴	内面の調整
包37	甕	I 8	第21図	5.6		4.2		口-腹上文様有 地文無 口唇丸	ナデ
包38	甕	I 8	第22図	15.4		23.8	23.8	頸部無文帯 腹上半文様有 文刺 a 口唇角 口縁突起	ナデ
包40	甕	I 8	第22図	13.0		18.4	33.5	頸部文様地文	ナデ
包41	甕	K 8	第22図			7.2	27.6	21.1 頸部無文帯	ナデ
包42	広口甕	M 7	第23図	16.9	6.4	21.1		口縁無文 腹部文様有 文刺 a 口唇角 植痕	ナデ
包43	広口甕	J 8	第23図	26.0			15.5	口-腹上文様有 文刺 a 口唇角 口縁突起	ナデ
包44	広口甕	I 8	第23図	15.3	6.0	20.7		口-腹上文様有 文刺 a 口唇角 口縁突起	ナデ
包45	広口甕	J 8	第23図	16.0			7.5	口-腹上文様有 文刺 b 口唇角	ナデ
包46	広口甕	I 8	第23図	18.4			22.8	口-腹上文様有 頸部無文帯 口唇角 口縁突起	ナデ
包47	広口甕	I 8	第23図	20.1			17.3	口-腹上文様有 文刺 a 口唇角 口縁突起	ナデ・ケズリ
包48	広口甕	I 8	第24図	18.9			16.0	口-腹上文様有 文刺 b 口唇角	ナデ
包49	広口甕	J 8	第24図	16.2			8.3	口-腹上文様有 文刺 a 口唇角	ナデ
包50	広口甕	M 7	第24図					頸-腹上文様有 頸部無文帯	ナデ
包52	広口甕	I 9	第24図	14.6		8.0		口-腹上文様有 文刺 b 口唇角	ナデ・ケズリ
包53	広口甕	J 8	第24図	12.5			5.6	12.6 口-腹上文様有 文刺 a 口唇角 口縁突起	ナデ・ケズリ
包54	広口甕	H 8	第24図	16.6			9.1	口-腹上文様有 文刺 a 口唇角	ナデ
包55	広口甕	J 8	第24図	18.0	5.7	20.0		口-腹上文様有 文刺 a 口唇角	ナデ
包56	甕	H 8	第24図	22.0		15.1		口-腹上文様有 文刺 c 口唇角 口縁突起	ナデ
包57	甕	H 9	第25図	17.0			11.4	頸部無文帯 口唇丸	ナデ・ケズリ
包58	広口甕	H 8	第25図	18.4			15.3	頸部無文帯 口唇角	ナデ・ケズリ
包60	広口甕	I 8	第25図	12.5		12.6	15.4	頸部無文帯 口唇角 口縁突起	ナデ
包61	広口甕	I 8	第25図	14.0	6.2	17.3		頸部無文帯 口唇角 口縁突起	ナデ
包62	甕	I 8	第25図	12.4			7.6	頸部無文帯 口唇角 沈線 斜目 口縁突起	ナデ・ケズリ
包63	広口甕	I 8	第25図	13.8			15.2	14.2 口-頸部文様有 頸部無文帯 文刺 d 口唇角 口縁突起	ナデ
包64	広口甕	H 9	第25図	15.0			15.4	口-腹上文様有 文刺 a b 口唇角 角突	ナデ・ケズリ
包65	広口甕	J 8	第25図	14.8			8.6	頸部無文帯 文刺 a 口唇角	ナデ
包66	広口甕	J 8	第25図	20.0			11.8	口-腹上文様有 文刺 d 口唇角	ナデ
包67	甕	H 9	第26図	15.9		6.8		頸部文様有 口唇角	ナデ
包68	-	I 9	第26図	12.2			5.5	口-頸部文様有 文刺 a 口唇丸 斜目	ナデ
包69	広口甕	J 8	第26図	13.8			13.5	14.1 口-腹半文様有 文刺 a b 口唇角 痕状貼付	ナデ・ケズリ
包70	広口甕	J 8	第26図	16.4			7.0	口-腹部文様有 文刺 a 口唇角	ナデ
包71	広口甕	I 8	第26図	16.6			15.2	口-腹上文様有 文刺 a 口唇角 口縁突起	ナデ
包72	甕	I 9	第26図	17.2			13.7	口-腹半文様有 文刺 a b	ナデ
包73	広口甕	M 7	第26図	14.8			11.5	16.0 口-腹半文様有 頸部無文帯 文刺 a	ナデ
包74	甕	I 8	第26図	18.6			20.7	口-腹上文様有 文刺 b 口唇角 口縁突起	ナデ・ケズリ
包75	甕	I 8	第27図	13.0			10.0	口-腹半文様有 頸部無文帯 文刺 a b 口唇角	ナデ
包77	甕	L 7	第27図	12.2			9.8	口-腹上文様有 口唇角	ナデ
包78	-	H 9	第27図	13.0			6.3	口-頸部文様有 口唇角	ナデ・ケズリ
包79	甕	I 8	第27図	12.1			16.0	15.6 口-腹半文様有	ナデ
包80	甕	M 7	第27図			6.7	13.9	13.3 頸上文様有	ナデ
包81	甕	I 9	第27図	10.8			10.6	頸上文様有 口唇丸	ナデ

(単位: 10cm)

包82	裏	I 8	第27回		9.7	7.1	網半文様有		ナデ
包83	蓋	M 7	第27回	13.5	7.1	18.5	15.3	頭部無文帯 口唇角 上底	ナデ
包85	裏	I 9	第28回	15.0		12.2		口・網半文様有 口唇沈線 刻目	ナデ
包87	裏	I 8	第28回	24.3		6.3		口・網上文様有 网上無文帯 口唇角 口縫突起	ナデ
包88	-	I 8	第28回	22.8		3.5		口・網文様有 文刺 c 口唇角 口縫突起	ナデ
包89	-	I 8	第28回	19.4		4.9		口縫無文 布文刺 d 口唇角 口唇丸	ナデ
包90	裏	H 8	第28回	18.7		8.4	19.2	頭部無文帯 文刺 d 口唇角 口縫突起	ナデ
包91	裏	M 7	第28回	22.0		11.0		頭部下文様有 口縫無文 口唇丸	ナデ
包92	裏	H 9	第28回	21.0		9.5		口・頭部文様有 文刺 d 口唇角	ナデ
包93	裏	I 10	第28回	14.6		10.3		口縫無文 口唇角	ナデ
包94	裏	I 8	第28回	19.2	6.7	20.8		口・網上文様有 网上無文帯 文刺 a-d 口唇沈刺 上底	ナデ
包97	裏	J 8	第29回			15.6	26.6	網上半文様有	ナデ
包101	裏	J 8	第29回	16.4		10.3		口縫無文 口唇角	ナデ
包103	注 口	H 9	第29回	2.3		5.6	8.3	網上半文様有	ナデ
包105	裏	I 8	第29回		8.2	20.0	19.1	底部周縫強出 底部木彌板	ナデ・ケズリ
包106	蓋	I 8	第30回	24.3		16.7	25.7	口・頭部文様有 頭部無文帯 文刺 b 口唇角	ナデ
包107	蓋	I 8	第30回	16.0		12.4		口・頭部文様有 文刺 b 口唇角	ナデ
包111	蓋	L 7	第30回	13.2		9.8		頭部文様有 口唇角 口縫突起	ナデ
包112	蓋	I 9	第30回	10.2		6.3		口縫文様有 文刺 a-b 口唇丸	ナデ
包113	蓋	L 7	第30回	12.3		7.7		口・頭部文様有 文刺 c 口唇角 口縫突起	ナデ
包118	裏	M 7	第31回	19.0		14.9		口縫の刺突を除けば無文 口唇丸	ナデ
包120	裏	I 8	第31回	13.1	5.6	17.1	13.7	網上部に刺突があるがほとんど地文のみ 口唇角	ナデ
包121	裏	I 8	第31回	18.0		21.1		口・網地文のみ 口唇角	ナデ
包122	裏	I 8	第31回	10.2	5.7	11.6		頭部文様有 文刺 d 口唇丸 片口	ナデ
包123	裏	I 9	第31回	11.4	7.0	12.4		口縫無文 口唇角	ナデ
包124	裏	L 7	第31回	17.0		7.3		口唇に地文有 口縫・頭部無文 口唇角	ナデ
包125	裏	M 7	第31回	15.0		9.5	19.6	無文 口唇丸	ナデ・ケズリ
包126	裏	J 8	第31回	8.1	5.2	8.4		無文 口唇丸	ナデ
包127	裏	J 8	第32回		5.1	9.0	8.2	頭部無文	ナデ
包128	蓋	L 5	第32回			5.8	6.5		ナデ
包129	蓋	H 8	第32回	5.1		7.8	7.2	頭部無文 口縫下刺突列 片口 口唇丸	ナデ
包130	裏	J 9	第32回		5.0	6.7	6.1	網上半文様有	ナデ
包131	蓋	I 10	第32回	7.4		5.4		網上半文様有	ナデ
包132	広口蓋	M 7	第32回	9.6	5.7	9.4		口縫無文 網上半文様有 片口状 口唇丸	ナデ・ケズリ
包133	裏	M 7	第32回		5.4	10.0	7.4	網上半文様有	ナデ
包136	蓋	I 9	第37回					無文 緋端丸	ナデ
包238	蓋	I 8	第37回					天井端・緋端波状 緋端角 地文のみ	ナデ
包242	蓋	J 8	第37回					緋端角 地文のみ	ナデ
包245	裏	I 8	第37回					文様有 天井尖突有 天井孔2 文刺 b 緋端角	ナデ
包246	裏	I 8	第37回					文様有 天井指撫突刺 天井孔4 文刺 d 緋端丸	ナデ
包250	蓋	I 9	第37回					地文のみ 緋端部角	ナデ

文刺：交互刺突の略、文刺 a：上下の刺突が1：1、文刺 b：下の刺突間に上の刺突が1-3入るもの、文刺 c：bの刺突が指振の再圧に変わるもの、文刺 d：下の刺突のみのもの。

第5表 遺物包含層出土石器一覽

番号	持國	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石質	番号	持國	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石質
包411	47	石錐	2.6	1.5	0.5	1.6	硬質鐵灰岩	包453	49	剝片	4.7	3.2	1.3	14.3	硬質頁岩
包412	47	石錐	3.0	0.7	0.4	0.8	流紋岩	包454	49	剝片	3.1	4.3	0.7	9.0	硬質鐵灰岩
包413	47	石錐	3.7	0.9	0.7	2.6	流紋岩	包455	49	剝片	3.7	4.6	1.2	13.4	硬質頁岩
包414	47	石錐	5.2	2.8	1.0	11.4	硬質頁岩	包456	49	剝片	5.7	4.7	1.1	27.3	硬質頁岩
包415	47	石錐	5.3	3.2	0.9	15.6	硬質頁岩	包457	49	剝片	4.7	4.2	0.8	16.2	流紋岩
包416	47	楔形石器	5.9	4.7	1.7	52.8	硬質頁岩	包458	49	剝片	9.2	4.3	1.5	39.3	硬質頁岩
包417	47	剝片	2.6	1.6	0.7	3.2	硬質鐵灰岩	包459	49	剝片	7.5	4.9	1.7	47.6	硬質頁岩
包418	47	剝片	2.6	1.8	0.6	3.2	硬質鐵灰岩	包460	49	剝片	6.2	5.7	0.9	27.4	硬質頁岩
包419	47	剝片	2.6	1.6	0.5	2.2	硬質鐵灰岩	包461	49	剝片	6.2	6.1	1.4	47.7	珪質岩
包420	47	剝片	2.4	2.6	0.6	3.3	硬質頁岩	包462	49	剝片	5.9	5.7	1.0	35.3	硬質頁岩
包421	47	剝片	2.4	2.0	0.4	2.1	硬質頁岩	包463	49	剝片	5.6	6.2	1.3	37.3	流紋岩
包422	47	剝片	3.7	2.5	0.8	6.3	珪質岩	包464	49	剝片	5.3	6.5	2.1	71.0	硬質頁岩
包423	47	剝片	4.0	2.2	0.7	5.1	硬質鐵灰岩	包465	50	剝片	2.9	3.1	0.7	4.5	硬質頁岩
包424	47	剝片	2.7	2.0	0.6	2.3	硬質頁岩	包466	50	剝片	3.3	4.0	0.6	7.8	硬質頁岩
包425	47	剝片	3.6	3.3	0.9	7.9	硬質頁岩	包467	50	剝片	4.3	3.5	0.9	12.3	硬質頁岩
包426	47	剝片	4.3	3.7	1.2	15.4	流紋岩	包468	50	剝片	3.6	2.5	0.6	4.9	硬質頁岩
包427	47	剝片	2.3	1.9	0.4	1.8	硬質頁岩	包469	50	剝片	2.8	2.7	0.5	3.4	硬質頁岩
包428	47	剝片	5.1	1.9	0.7	8.0	硬質頁岩	包470	50	剝片	5.8	4.0	1.0	24.3	硬質頁岩
包429	47	剝片	4.0	2.2	0.7	4.7	硬質頁岩	包471	50	剝片	3.0	5.8	1.2	16.9	硬質頁岩
包430	47	剝片	6.7	3.1	0.7	11.0	硬質頁岩	包472	50	剝片	4.5	2.4	1.4	6.9	珪質鐵灰岩
包431	47	剝片	6.2	3.0	0.9	17.6	珪質鐵灰岩	包473	50	剝片	3.8	3.3	1.6	9.8	硬質頁岩
包432	47	剝片	4.9	3.2	0.6	11.5	硬質頁岩	包474	50	剝片	4.5	4.4	1.1	16.0	珪質鐵灰岩
包433	48	剝片	6.6	2.4	0.7	11.4	硬質頁岩	包475	50	剝片	5.4	3.7	1.0	18.0	流紋岩
包434	48	剝片	6.5	3.2	0.8	15.9	流紋岩	包476	50	剝片	6.4	4.6	0.7	14.2	硬質頁岩
包435	48	剝片	3.9	2.3	0.7	6.9	矽質頁岩	包477	50	剝片	5.1	5.1	0.8	18.7	流紋岩
包436	48	剝片	4.1	2.1	0.6	4.5	珪質鐵灰岩	包478	50	剝片	7.1	4.2	2.2	48.9	珪質鐵灰岩
包437	48	剝片	2.6	1.3	0.5	1.2	矽質頁岩	包479	51	剝片	3.8	2.0	0.4	3.7	硬質頁岩
包438	48	剝片	2.9	1.5	0.5	2.1	珪質鐵灰岩	包480	51	剝片	3.1	4.4	0.8	8.7	珪質鐵灰岩
包439	48	剝片	2.5	2.9	0.5	3.4	硬質頁岩	包481	51	剝片	3.9	4.2	0.6	8.2	硬質頁岩
包440	48	剝片	2.8	2.3	0.7	3.2	珪質鐵灰岩	包482	51	剝片	4.8	3.7	0.8	13.3	硬質頁岩
包441	48	剝片	3.7	2.7	0.6	5.1	珪質鐵灰岩	包483	51	剝片	4.0	2.7	0.9	12.2	硬質頁岩
包442	48	剝片	5.1	2.9	1.0	9.5	流紋岩	包484	51	剝片	3.2	3.5	1.2	13.7	硬質頁岩
包443	48	剝片	2.5	3.3	1.1	4.7	珪質鐵灰岩	包485	51	剝片	4.0	3.7	0.7	6.5	硬質頁岩
包444	48	剝片	2.6	4.0	0.7	6.6	硬質頁岩	包486	51	剝片	4.9	3.4	1.3	20.7	矽質頁岩
包445	48	剝片	5.1	1.6	0.7	4.0	硬質頁岩	包487	51	剝片	2.9	3.2	1.0	6.9	珪質鐵灰岩
包446	48	剝片	4.1	4.3	1.5	19.6	珪質鐵灰岩	包488	51	剝片	3.6	3.4	0.6	8.0	珪質鐵灰岩
包447	48	剝片	5.5	2.2	1.0	12.5	硬質頁岩	包489	51	剝片	3.6	2.8	0.4	3.6	硬質頁岩
包448	48	剝片	4.9	3.2	1.0	11.4	硬質頁岩	包490	51	剝片	3.1	3.8	1.1	10.4	珪質鐵灰岩
包449	48	剝片	4.3	3.3	0.7	11.8	硬質頁岩	包491	51	剝片	4.9	3.0	1.1	15.0	硬質頁岩
包450	48	剝片	6.2	2.7	106	16.5	珪質鐵灰岩	包492	51	剝片	4.4	3.4	0.9	11.9	硬質頁岩
包451	49	剝片	4.4	3.2	0.8	9.7	硬質頁岩	包493	51	剝片	4.2	2.9	0.7	8.4	矽質頁岩
包452	49	剝片	4.5	3.4	0.6	9.0	矽質頁岩	包494	51	剝片	5.0	5.4	1.2	20.5	硬質頁岩

番号	鉢底	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石質	番号	鉢底	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石質
包495	51	刮片	6.3	4.0	0.7	13.2	珪質岩	包523	54	敲石	17.7	7.2	3.5	570.0	硬質頁岩
包496	52	刮片	4.7	4.5	0.6	12.0	硬質頁岩	包524	54	敲石	12.1	4.7	4.2	350.0	砂岩
包497	52	刮片	3.2	3.8	0.9	9.3	珪質頁岩	包525	54	敲石	7.7	7.0	3.2	240.0	安山岩
包498	52	刮片	3.5	4.0	0.7	11.4	流紋岩	包526	54	凹石	9.9	6.5	3.9	188.4	細粒凝灰岩
包499	52	刮片	3.4	4.8	0.7	12.5	珪質頁岩	包527	54	凹石	10.2	8.1	4.3	500.0	安山岩
包500	52	刮片	5.3	3.1	1.7	22.1	硬質頁岩	包528	54	凹石	15.8	12.3	5.0	700.0	細粒凝灰岩
包501	52	刮片	4.8	3.7	1.0	16.8	珪質凝灰岩	包529	55	凹石	11.2	8.6	6.1	850.0	安山岩
包502	52	刮片	5.9	2.4	0.8	11.0	流紋岩	包530	55	凹石	13.4	7.9	6.0	840.0	石英安山岩
包503	52	刮片	4.2	6.8	1.3	21.6	珪質凝灰岩	包531	55	凹石	16.7	12.0	10.5	1,550	細粒凝灰岩
包504	52	刮片	7.0	4.1	0.7	23.6	硬質頁岩	包532	55	凹石	11.4	10.6	5.3	830.0	石英安山岩
包505	52	刮片	5.8	6.1	1.6	57.6	珪質凝灰岩	包533	55	凹石	11.0	8.8	2.1	250.0	石英安山岩
包506	52	石核	3.2	3.9	2.3	30.7	珪質頁岩	外16	62	石錐	2.1	1.6	0.4	1.0	玉髓
包507	52	石核	4.3	6.6	3.3	108.8	珪質凝灰岩	外17	62	石錐	2.3	1.4	0.4	0.9	硬質頁岩
包508	53	搔器	5.8	4.4	2.1	56.8	流紋岩	外18	62	石頭	2.8	1.5	0.5	1.8	硬質頁岩
包509	53	搔器	5.4	4.7	2.5	68.3	珪質凝灰岩	外19	62	石錐	2.5	0.9	0.5	0.7	珪質凝灰岩
包510	53	礪器	6.8	7.1	4.3	178.6	珪質頁岩	外20	62	石錐	2.2	1.5	0.4	0.9	珪質凝灰岩
包511	53	石核	5.7	6.4	5.2	270.0	珪質岩	外21	62	石錐	6.1	3.7	0.7	16.4	珪質凝灰岩
包512	53	石核	5.9	5.1	4.2	129.0	珪質頁岩	外22	62	刮片	3.4	2.6	0.8	6.8	硬質頁岩
包513	53	石核	4.5	7.7	4.6	113.6	珪質凝灰岩	外23	62	刮片	4.2	2.1	0.3	2.6	珪質凝灰岩
包514	53	石核	10.2	4.8	3.7	199.5	珪質頁岩	外24	62	刮片	4.8	3.2	0.7	12.2	硬質頁岩
包515	53	石斧	6.5	3.6	2.3	93.4	珪質岩	外25	62	刮片	3.3	5.9	0.8	9.6	硬質頁岩
包516	53	石斧	10.3	5.7	2.8	250.0	珪質凝灰岩	外26	62	搔器	4.9	2.5	1.0	9.3	硬質頁岩
包517	53	石斧	9.6	5.8	2.1	171.1	珪質凝灰岩	外27	62	搔器	4.8	3.1	0.7	11.5	珪質凝灰岩
包518	54	石核	11.4	10.7	7.2	730.0	珪質凝灰岩	外28	62	块状石器	4.3	3.9	1.1	21.6	珪質凝灰岩
包519	54	石核	14.3	19.2	7.0	1,060	珪質凝灰岩	外29	62	砾石	3.7	3.4	3.3	23.8	細粒凝灰岩
包520	54	石斧	9.7	10.1	2.1	350.0	珪質岩	外30	62	石斧	14.3	9.8	3.2	530.0	珪質凝灰岩
包521	54	石斧	17.6	10.5	3.1	540.0	珪質凝灰岩	外31	63	敲打石	25.1	5.0	3.3	370.0	砂質凝灰岩
包522	54	敲石	12.3	6.2	4.9	430.0	頁岩	外32	63	石斧	8.9	6.0	2.1	106.0	珪質凝灰岩

第6表 能登遺跡出土土師器・土師質土器一覧

(単位:cm)

遺物No.	器種	出土層位	持因No.	口径	底径	器高	遺物No.	器種	出土地点	持因No.	口径	底径	器高	
1住12	甕	第7回	15.4	8.4	14.2	1坑3	甕	L 1	第18回	11.0				
1住13	甕	第7回	16.0		12.6	1坑4	甕		第18回	11.0	5.6	2.3		
1住14	長颈甕	第7回		6.8	4.0	1坑5	甕	L 1	第18回	10.6	4.8	2.0		
1住15	甕	第7回		8.0	6.5	1坑6	甕	L 1	第18回	10.0		2.0		
1住16	甕	第7回	18.8		5.6	2坑1	甕		第18回	8.6	3.6	1.9		
2住8	甕	第12回	14.0		5.0	1坑1			第59回	12.4	5.8	3.0		
2住9	甕	L 2	第12回	13.6		6.0	1坑2		第59回		8.0	2.1		
2住10	甕		第12回	15.0		13.7	遺構外3	杯	L 8, L 1	第61回	17.0		6.1	
2住11	甕		第12回	12.8	6.5	12.6	遺構外4	杯	L 1	第61回	15.6	6.0	4.0	
2住12	甕		第12回		8.8	31.3	遺構外6	杯	L 1	第61回		5.0	1.7	
1坑1	皿	L 1	第18回	15.0			遺構外7	杯	L 1	第61回		5.0		
1坑2	皿	L 1	第18回	10.6			遺構外8	杯		第61回			6.0	

第7表 能登遺跡出土須恵品一覧

(単位:cm)

遺物No.	器種	出土層位	持因No.	口径	底径	器高	遺物No.	器種	出土地点	持因No.	口径	底径	器高
1住1	杯	L 3	第7回	13.9	7.8	3.6	1住20	瓦耳杯	L 3	第8回			
1住2	杯		第7回	14.1	8.6	4.1	1住22	長颈瓶	L 2	第8回		11.2	27.0
1住3	杯		第7回	14.0	8.8	3.9	2住1	杯	L 1	第12回	13.5	7.4	3.9
1住4	杯		第7回	13.6	8.5	3.7	2住2	杯	L 2	第12回	13.6	6.8	3.9
1住5	杯	床痕	第7回	13.6	7.9	3.5	2住3	杯	L 3	第12回	14.0	7.6	4.3
1住6	杯		第7回	13.4	8.1	3.7	2住4	杯	L 2	第12回	14.6	9.4	3.7
1住7	杯		第7回	12.8	8.7	3.5	2住5	盞	L 2	第12回			2.9
1住8	杯		第7回	14.0	8.9	3.7	2住6	杯	L 1, L 2	第12回	14.1	9.0	5.4
1住9	盞		第7回	15.2		4.0	2住7	高台杯	L 2	第12回	13.9	9.2	4.5
1住10	甕		第7回	14.0			遺構外9		L 1	第61回		7.2	1.8
1住11	多耳瓶	L 2	第7回			9.3	遺構外10	杯	L 1	第61回	13.2	8.1	3.6
1住18	橫瓶		第8回		13.5	24.1	遺構外13	甕		第61回			
1住19	鉢		第8回	37.4		18.0	遺構外14			第61回			

第3章 まとめ

第1節 弥生時代の遺物について

本期に属する遺物には、弥生土器・石器・土製品がある。これらは、主に調査区中央東よりに位置する遺物包含層より出土している。遺物包含層には、縄文土器や本期に先行する弥生土器が僅かに散見するが、この天王山式期の土器群が最も新しい時期の遺物である。遺物包含層は、黒色シルトを主体とする單一層で、限定された時間帯の中で遺物が包含された可能性が高いと考えられる。また、これらの土器は崖面上方から流れ込んでおり、上位の平坦地に遺構群が存在したと推定されるが、すでに削平され該期の確実な遺構群は検出されなかった。ただ、1号掘立柱建物跡とした遺構は、2号掘立柱建物跡よりも掘形の規模が小さく、間尺も短いことから、該期の住居跡を構成する柱穴群の可能性を残していると考えられる。

さて、すでに遺物の出土状況やその特徴については、第2章第4節において種類や器種ごとに述べてきたところである。従って、ここでは紙数の制限もあり今回の調査で最も多量に出土した天王山式期土器の特徴のいくつかについて触れるのみとする。

土器組成について

天王山式期の土器群を構成する器種には、壺・広口壺・甕・蓋・注口・浅鉢の6種が確認されたが、これに蓋を除く他の5種の中から器高10cm前後に満たない小型の土器を独立させ、新たに器種構成の中に加えるとすれば7種になる。また包97とした土器のように、一応變形としたが普遍的な變形とは異なり、瓢形の胴部を極端にだぶつかせた形態をとるものもある。さらに小型土器もしくは法量的に小型土器に近いものの中には、器種如何に問わらず片口の形態をとるものがある。上記の器種中、量的に最も多数を占めるものは広口壺である。広口壺は、頸部の開閉度によって、壺形に近いものから變形に近いものまで種々様々である。恐らく變形に近い形態をとるものの中には、變形同様煮炊器として使用されたものも含まれると思われる。

文様について

本土器群に施文される文様は、地文（単節縄文・撚糸・附加状・直前段多条）と、主に竹管を施文具として刺突や沈線を多用し交互刺突文や弧文・曲線文・波状文・山形文などを描き、さらに場合によっては磨消文や瘤状の貼付け文を組み合わせて構成している。

地文は各器種とも大半の土器に施されるが、甕や蓋の一部に無文の土器も混在する。また地文

が施されるものうち単節縄文を地文とするものは少ない。該期の地文の特徴としてあげられる縦走縄文が施文される資料は微々たるもので、僅か包356に見られるのみである。施文される範囲は、口縁部から胴・体部下端までを対象とするが、意図的に壺や広口壺の頸部を施文せず無文帯とする場合もある。まれに口縁内面に地文を施すものもある。これは図示できなかった破片資料であるが、施文後ナデによって多くの部分を磨消している。

文様帯の多くは、壺・広口壺・甌の口縁部から胴部上半にかけて展開する。壺・広口壺では、口縁部・頸部・胴上半部の3部分に分けてみることが可能である。甌は頸部として長めの領域がないため、壺・広口壺でいう頸部文様帯は、胴上半にまで及ぶことになる。ただ文様帯が顯著に描かれる器種はといえば、相対的に見て広口壺とした一群である。しばらく広口壺の文様構成を中心に見てみる。

口縁部文様帯は、横走する沈線や弧文、主として複合部下端に施される交互刺突文及びそれに類するもので構成されるが、まれに複合部下端に指頭による押圧を加えるものもある。

頸部文様帯は、上下を横走する沈線で区画し、内部に弧線や不整三角形・眼鏡状の枠取りをした文様を描き、場合によっては磨消文を援用しながら全体の図案を表出している。むろん区画した内部を無文とするものや、地文のみの施文で終わっているものもある。また中央に振幅の緩い一条の波状沈線（包64）や、刺突による列点文を加えた2本の並行沈線文を巡らしただけ（包81）の簡素なものもある。上下の区画に用いられる沈線には、単沈線と並行沈線との2種があるが、後者の場合には交互刺突文を伴う場合が多い。

胴部上半の文様は、頸部文様帯の下端に沿って施される例が多い。下向きの連弧文が主に用いられるが、他に上向きの連弧文（包47・63）も用いられることがある。

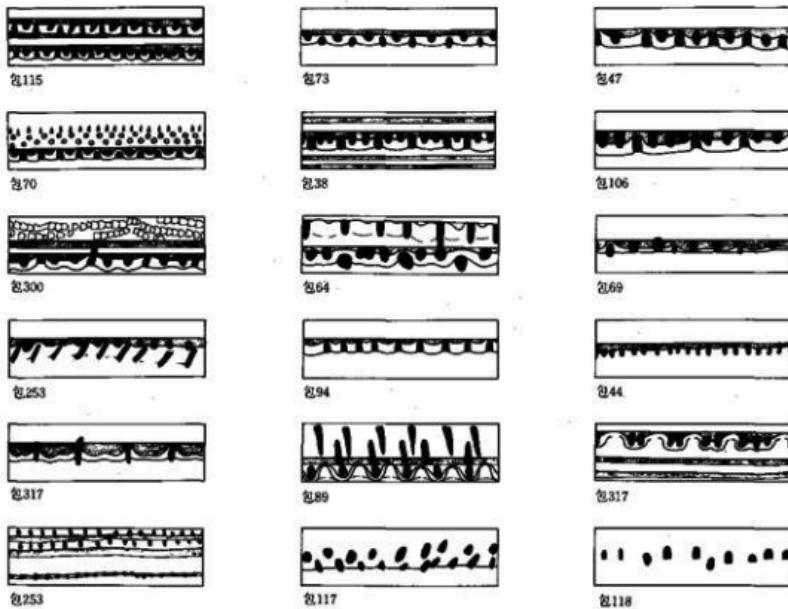
壺とした包38は、胴部上半に文様帯が認められる例である。頸部を区画する沈線に沿う下向きの連弧文の下に藏手状渦状文を横展開させている。包369・370も壺形になると思われる。包38同様藏手状渦状文を展開させているが、包369では渦状文下部に文様帯の区画として並行沈線を巡らしているようである。この3点の頸部は、包38・370が無文、包369では地文のみの施文で、特に沈線や刺突による文様は描かれない。

甌の胴部文様帯は、1段のみで終わる場合と2段に及ぶ場合（包71・75）とがある。包75の文様帯は1段しか描かれないと、上位に無文帯がありこれを含めて2段とした。いずれも原則として上下を沈線で区画しているようである。そして、下段の沈線下には下向きの連弧文や連弧文崩れの波状文が描かれるものが多い。文様は、広口壺の頸部文様帯に描かれる文様とほぼ類似するものが多いが、2段構成をとる包72の下段の文様は下向き弧文を基本としながらも弧文の両端を内側に巻き込んだ図柄が施文されている。また包81は、刺突による列点文を伴う並行沈線文が間隔をもって横位3段に施文され一つの文様帯を構成している。

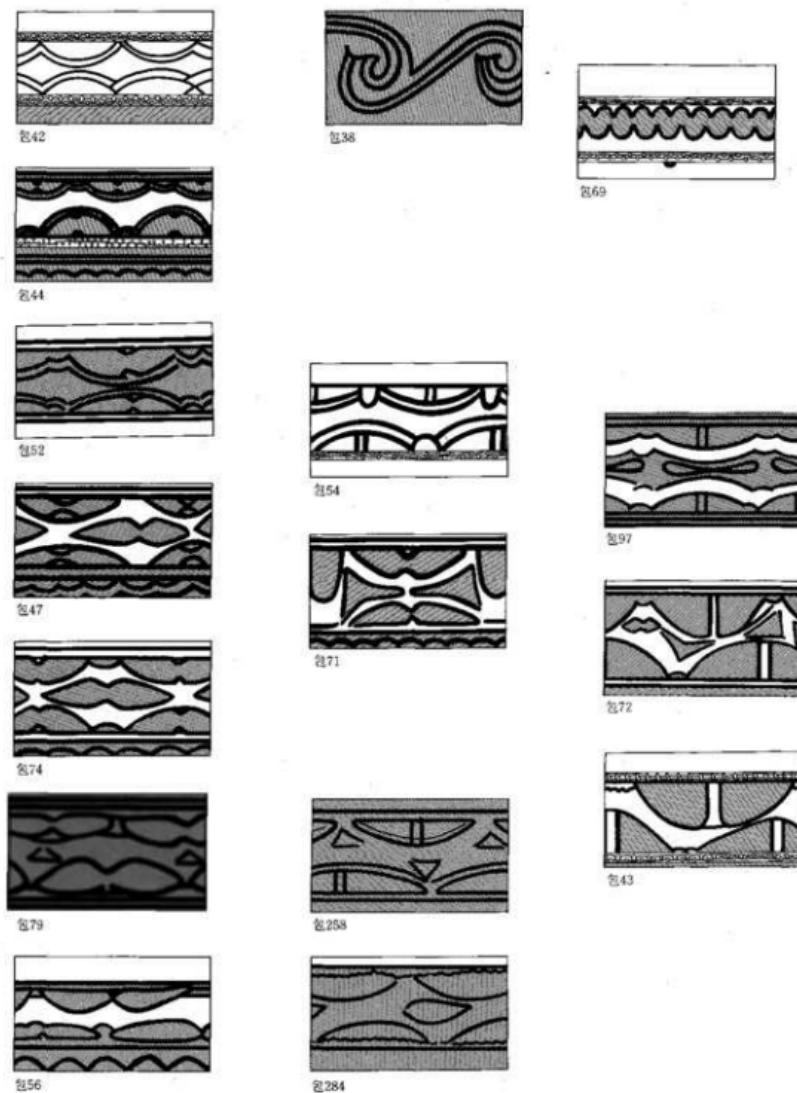
これまで口縁部から胴部上半にかけ施文される文様を、各器種や部位ごとに概観したが、これ以外に装飾的効果を持つ文様要素として、主に壺・甌類になるとと思われる胴部下端に指頭の先端で突き刺し、文様とするもの（包220～230）がある。これには、指頭を突き刺した際僅みに爪形を残す場合がある。また、この手法を行うことによって底部の周辺を若干外方に引き出す効果も持っており、その結果端部は波状を呈すことが多い。

さて、文様要素の中で交差刺突文や沈線によって描かれる図柄などは、該期の時期判定の基準としては欠かすことのできないものである。しかしながら当遺跡の土器群の文様の表出は一様ではなく幾つかの種類が見られることから、その代表的な資料の文様を部分的に抜粋して見た（第64・65図）。第64図では口縁の複合部下端の交差刺突文を、第65図は主に頸部や胴部上半に描かれる文様帶について各々まとめてみた。

まず始めに第64図に模式化した交差刺突文である。これは頸部あるいは胴部上半の文様帶を画す並行沈線間や口縁複合部下端に多用される文様である。頸部から胴上半への施文法は、比較的平坦な面に2条の並行する沈線を横走させ、その間の隆起状になった部分の上下を刺突し直線的な隆起状の部分を細かな波状とするものである。これに比べて口縁部では、複合部下端に横走す



第64図 交差刺突文の展開と変様



第65図 弧文の変化と展開

る1条の沈線を巡らし、端部の隆帯風になった部分の上下に刺突を加えていくが、この場合上位の刺突に比べ下位の刺突は、施文工具の側面の使用幅が長いため、つまり端部で突き刺し側面で押上げ気味に押圧し縦長の窪みを作るために隆帯状の部分を細かく区切ることになり、隆帯状の部分の端面が連続した波状を描かないことになる（包47・70・115）。これには突き刺すよりも側面で押圧する動作を主として、隆帯状の部分を区切る場合も含まれる（包43・94）。ただし側面の作用が短く終れば隆帯状の部分の端面は連続し波状を描くことになり、前者により近い施文手法となるが、例は（包65）少なくどちらかといえば隆帯状の部分を波状にすることよりも交互に刺突することに主眼がおかれていているといつてよい。

また、口縁複合部下端に上下をずらし1個ずつ交互に刺突するものほかに、交互刺突を基調としながらも幾つかの変化形がある。それは下位列の刺突の間に上位列の刺突を2～3個複数施したもの（包38・64・69・106・300）や、上位列に刺突が加わらず下位列の刺突のみで終わるもの（包44・94・317）、沈線を引かず交互刺突文を施文するもの（包117）、沈線を引かず下位列の刺突のみで終わるもの（包118）、隆帯状の部分に列点文しか施さないもの（包131）、下位列が刺突に変わり指頭の押圧になりその間の上位列に刺突を施すもの（包88・89）がある。下位列の刺突のみで終わる包317は、やや長い刺突間の隆帯状の部分の下位中央を僅かに押上げることによってあたかも上位列に2個の刺突があるように見せかけている。

次に頸部ないし胴上半部に施文される文様帶であるが、第65図に図示した文様中包38・69をとりあえず除き他の文様、とりわけ上下の境界内に描かれる文様は、すべて2重連弧文の系統で理解されると考えられる。包42は、単純な2重連弧文で円弧を上下に対峙させるものであるが、包44・52・54・97では、2重連弧文の形を残しながらも連弧を結ぶ短いブリッジ状の弧線や、連弧文の内線の中央と対峙する境界線側を小さく張り出させるラインや、そこを結んでしまう縦の2重沈線が加えられる。包71では、連弧の内線が眼鏡状の枠取りを呈し、上下の外線が連結して不整の三角形の枠取りとなり、先にブリッジ状に現れた弧線が伸びてやや大きくなっている。包47・74では、連弧の外線が連結独立し眼鏡状の枠取りとなる。包79・258は、内部の三角文が小さく退化している。包72・284もこのあしらいに近い。包56では、連弧の外線に当たる部分で構成される文様が喪失し、磨消部で占められ、眼鏡状の枠取りも左右に別れかかっている。包284文様帶の境界線の内線は不規則で小さく短い振幅を描いているが、これは包43からの流れで追えそうである。

以上、交互刺突文と連弧文の種類や変化について述べてきた。現在のところ双方の文様における種類や変化の様相を、文様の展開と変遷といった変遷過程としてとらえたい。しかしながら、一個体の土器に同時に施文される2種の文様要素の組み合わせは、必ずしも直線的な変遷過程を追えるものではない。今回は、この2種の文様の説明を最後とし、これから派生する問題は他の属性の検討も踏まえたうえで今後の課題としたい。

(大越)

第2節 奈良・平安時代について

能登遺跡からは奈良・平安時代に属する良好な一括資料が出土している。これらの土器を理解するためにも、会津地方における同時代の資料を集成し、その変遷について考えてみた。現段階では、資料に欠けるところも多いが、本地方の歴史を考える上からも必要な基礎的作業と思われる。まずは会津地方の窯跡の資料の変遷を推定し、それを基準として会津地方の消費地遺跡出土土器の変遷を明らかにし、能登遺跡出土土器を位置付けたい。そして最後に奈良・平安時代の能登遺跡の性格について触れたい。

東北地方における奈良・平安時代の土器研究としては、氏家和典（氏家：1957）、岡田茂弘・桑原滋（岡田・桑原：1974）、白鳥良一（白鳥：1980）らの優れた研究がある。ここでは、須恵器の杯の法量と製作技法に着目した岡田・桑原の論稿に従い、底部切り離し技法ではヘラ切り（静止糸切り）から糸切りへ、ケズリ調整技法としては有から無へ、法量では底部が小さくなる変遷の方向で考えていくと思う。元来、福島県は浜通り・中通り・会津の3地方に区分されて論じられることが多い。この区分は気候・風土のみならず、生活様式のうえにも反映しており、そのような中では、各地方ごとに土器の変遷をまとめた上で、古代陸奥国南部地方について考える必要があると思われる。浜通り地方においては、相馬開発による調査成果をもとにした変遷案が示されている（目黒他：1989）。このような視点にたち、会津地方の土器変遷についてまとめていきたいと思う。

まず会津地方の須恵器窯跡出土遺物から杯を中心とした須恵器の変遷を考えてみる。（第67図）8世紀代に比定される窯跡としては、大沼郡新鶴村大久保窯跡B区1号窯跡（皆川他：1985）と会津若松市大戸古窯跡群南原33号窯跡（横崎他：1989）がある。大久保須恵器窯跡では2基調査されているが、今回は資料数の多いB区1号窯跡（O-B1）の資料を用いることとした。

O-B1では、杯・盤・長頸壺・蓋・高台付杯・甕・擂鉢などを焼成している。杯の特徴としては、底部回転ヘラケズリ再調整、底部回転ヘラ切り後ナデ調整の2種類をあげることができ、回転ヘラ切りなどの存在から報文では8世紀中葉から後半に位置付けられる。南原33号窯跡（M33）では、杯・蓋・高台付杯・双耳瓶・甕・高杯・盤・長頸瓶・双耳瓶・瓶等が焼成されており、出土資料はほとんどが灰原資料である。M33の杯は、底部回転ヘラ切り後ナデ調整であり、長頸瓶は肩部に丸みを持ち、体部と頸部の



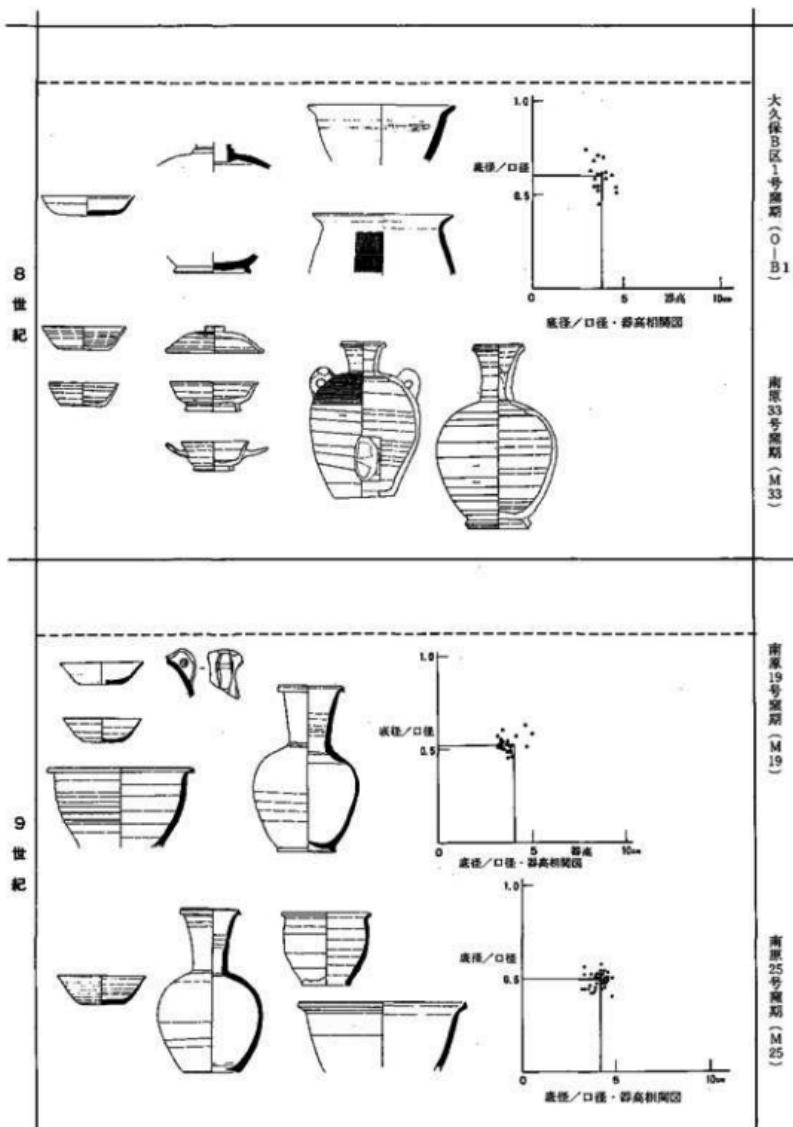
第66図 間連遺跡位置図

間にリング状の隆帯を持たず、三段構成の製作技法である。報文では、M33は「東北地方の須恵器の変遷過程の中では8世紀後半に位置づけられる可能性が強い」とされている(辻:1989)。9世紀の窯跡としては大戸古窯跡群の南原19号窯跡(M19)と南原25号窯跡(M25)がある(柳内:1984)。M19の灰原からは、杯・高台付杯・双耳杯・蓋・盤・鉢・壺・長頸瓶・双耳瓶・横瓶・円面鏡・焼台などの出土がみられる。M25では、杯・蓋・鉢・壺・長頸瓶・円面鏡・焼台などを焼成している。M19、M25ともに杯底部の切り離し技法が、回転ヘラ切りを主体として回転糸切りも若干含む傾向を示しており、前代の杯と比べて底径が小さい。長頸瓶の体部と頸部の境にリング状の隆帯をもち、M33よりは若干下部で最大径をもつ胴部となっており、鉢は縁部をもつ口縁となっている。報文では9世紀中頃から後半に位置づけられているが、M25と同じ底径/口径比、器高値を示す会津清水上遺跡4号溝出土資料は9世紀前半から中葉の年代観が与えられており(高橋他:1987)、M25は9世紀中葉に比定されるものと考える。また杯や鉢の形態はM19の方がM25より若干古い様相を示しており、M19は9世紀中葉の中でも先行するものと考ええた。

以上、会津盆地内の窯跡出土土器の変遷について考察を加えてきた。会津盆地内の窯跡の調査例は少ないので現況ではあるが、OB-1(8世紀中葉)-M33(8世紀後葉)-M19(9世紀前葉)-M25(9世紀中葉)という変遷を推定することができた。

次に、窯跡出土須恵器の変遷を基軸に、8世紀から10世紀にかけての会津地方における消費地遺跡出土土器の変遷を考えたい。駒板新田横穴群は河東町に位置する遺跡であり、23号横穴墓からは、「最終時期の墓前において供献した土器群を主とする一括遺物」が出土し、報文では8世紀後葉に比定される(大越他:1989)。墓域という特殊な性格の遺跡からの出土ではあるが、資料数の不足と、一括資料という点から今回取り扱った。土師器・杯はロクロ整形を行うもの(ロクロ整形)と行なわないもの(非ロクロ整形)が出土している。また須恵器・長頸瓶は、頸部から肩部にかけて丸味をもって張り出す形態であり、頸部と体部の境にリング状の隆帯はみられない。今回後述する博毛遺跡の土器群との関係を考え、8世紀中葉に遡る可能性を指摘したが、横穴墓の資料でもあり、今後の資料の増加に期待したい。

会津盆地からやや離れるが、耶麻郡猪苗代町登戸遺跡4号住居跡からは、土師器杯・甕が主体的に出土しており、ロクロ整形のものと非ロクロ整形のものが共伴している(寺島他:1988)。ロクロ整形の甕は口縁部が「く」の字状に外傾したあと、上端がつまり出されて直立している。7号住居跡からは、土師器杯・甕、須恵器杯・盤・蓋・甕・長頸瓶などが出土しており、なかでも墨書き土器のしめる割合が非常に高い。土師器杯はすべてロクロ整形、甕は非ロクロ整形のものとロクロ整形のものがみられる。8号住居跡からは、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶が出土している。須恵器杯では底部の切り離しが回転糸切りのものと回転ヘラ切りのものが同量程度み



第67図 会津盆地における奈良・平安時代の須恵器の変遷

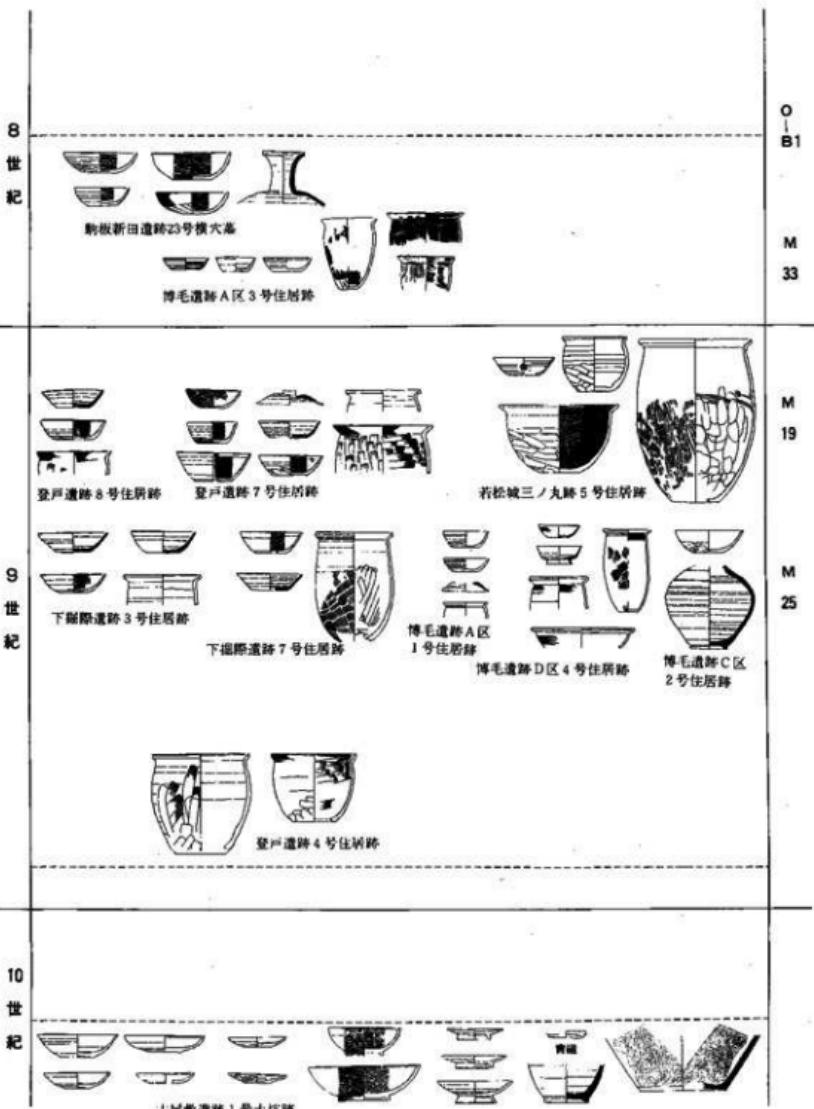
られる。登戸遺跡では平安時代の遺構、出土土器に関して細かな考察が加えられており、詳細については先の報告をご覧戴きたい。報文では7号・8号住居跡は9世紀第1四半期、4号住居跡は9世紀後葉に比定されている。

若松城三の丸跡は会津若松市に位置しており、平安時代の竪穴住居跡は4軒調査されている。(柳内：1986)その中から比較的資料数の多い5号住居跡を取り上げた。5号住居跡からは土師器杯・甕・壺・須恵器などが出土している。今回記載した資料はカマド・床面からの出土であり、長胴甕は外面にタタキ目をもつ平底の甕である。小甕はロクロ整形であり口縁部がやや「く」の字状に外反し、端部が軽くつまみだされた形態をしている。報文によると表衫ノ入式期に比定されており、須恵器杯の形態から登戸遺跡7号・8号住居跡に近い時期のものと考え、9世紀第1四半期に位置付けた。

下掘際遺跡は会津高田町に位置する遺跡であり、今回は比較的まとまりをもって遺物が出土した3号・7号住居跡について扱った(石本：1983)。3号住居跡からは、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・壺が出土している。杯類は須恵器が大半を占めており、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。土師器はすべてロクロ整形であり、甕の口縁部は「く」の字状に外反した後、端部を逆「く」の字状につまみ出している。7号住居跡からは土師器杯・甕・須恵器杯が出土している。土師器はすべてロクロ整形であり、甕は外面にタタキ調整痕を残し、口縁部形態は3号住居跡に近似している。これら2軒の住居跡の年代について報文では、「上限は9世紀前半を過ぎず、下限は9世紀中葉を大きく下らない」とされているが、須恵器杯には登戸7号・8号住居跡より後出の要素がみられ、9世紀第2四半期に比定した。

博毛遺跡は耶麻郡高郷村に位置する遺跡であり、奈良・平安時代の遺構として10軒の竪穴住居跡が調査されている(古川：1985)。今回はその中から比較的まとまりをもって出土した資料を取り扱った。報文では、土師器杯は表衫ノ入式に比定されているが、今回はさらにその細分を試みようと思う。A区3号住居跡須恵器杯は床面からの出土であり、底部回転ヘラ切りである。土師器杯はカマド内から重なった状態で出土したものであり、ロクロ整形である。土師器・甕類は壁、カマド、床面からの出土であり、内外ともにハケメ調整である。これらの遺物群の時期については須恵器杯の形態からO-B1窓式期に近いものと推定され、8世紀中葉頃と考え、さらに土師器杯の比較から駒板23号横穴墓より後出のものと推定した。A区1号住居跡からは、土師器杯・甕・須恵器蓋などが出土している。甕の口縁部は「く」の字状に外反する形態である。C区2号住居跡からは土師器杯と須恵器長頸瓶が出土している。長頸瓶は体部中央よりやや上に最大径をもつ形態である。D区4号住居跡からは、土師器杯・甕・壺・須恵器杯・高台付杯が出土している。長胴甕は体部外面にタタキ調整痕を残している。A-1号、C-2号、D-4号はともに杯や甕の諸特徴が下掘際3号、7号住居跡と共通する点から近い時期のものと考え、9世紀第2四

第1編 能登遺跡



第68図 会津盆地における奈良・平安時代の土器変遷

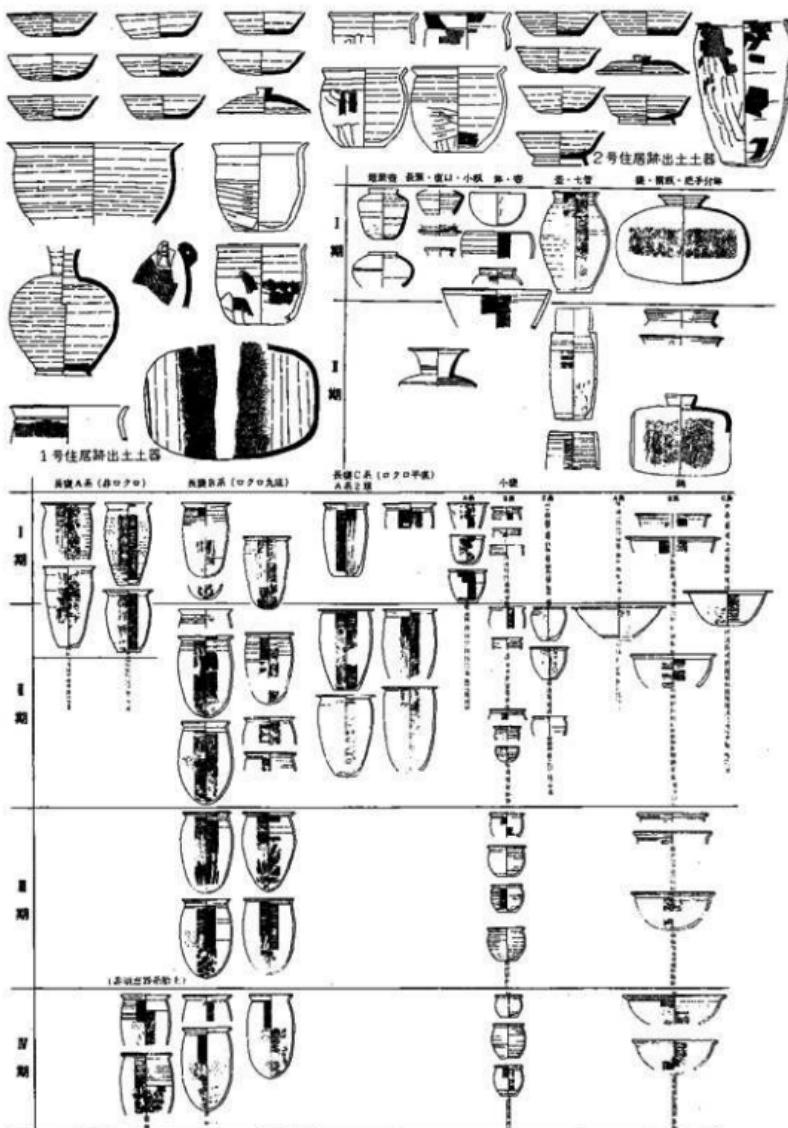
半期に位置付ける。

古屋敷遺跡は能登遺跡と同じ会津坂下町に位置する遺跡である。報告書は未刊行であるが、現地説明会資料を参考にして、1号土坑出土の土器について扱うこととする。1号土坑から土師質土器の皿・高台付椀、青磁、須恵器甕・長頸瓶の底部などが出土している。越州窯産の青磁、白瓷模倣の椀・皿が出土しており、10世紀後半に比定される土器群と考える。

ここで会津地方の消費地遺跡出土土器の変遷についてまとめたい。駒板新田23号横穴墓（8世紀中葉）－博毛A-3号（8世紀中葉）－登戸7号・8号、三ノ丸5号（9世紀第1四半期）一下掘際3号・7号、博毛A-1・C-2・D-4号（9世紀第2四半期）－登戸4号（9世紀後葉）－古屋敷1号土坑（10世紀後半）となる。次に、能登遺跡出土土器をこの変遷の中で位置付けたい。

1号住居跡からは須恵器杯・蓋・鉢・長頸瓶・双耳椀・双耳瓶・横瓶、土師器甕が出土している。前述したように、食膳具・貯蔵具は須恵器、煮炊具は土師器という使い分けが明確であり、出土土器の中で須恵器の占める割合が非常に高い点に特徴がある。また双耳瓶耳部の面取りするような作りは、坂井秀弥氏の御教示によると、佐渡地方にみられるものに類似することがあり、1号住居跡の土器群に横瓶がみられる点にも、北陸地方からの影響が伺える。1号住居跡出土の杯の底径/口径比の平均は0.61であり、器高の平均は約3.7cmである。この数値を会津地方の須恵器甕出土のものと比較すると、OB-1は底径/口径比0.61、口径3.8cmであり、非常に近い数値を示している。すなわち、1号住居跡出土土器はOB-1とはほぼ同時期のものであり、8世紀中葉に比定されるものである。また、土師器甕については福島県である新潟県に類例が求められ、山三賀II遺跡出土土器の編年案を参考に、検討を加えたい（坂井：1989）。1号住居跡からはロクロ整形の小甕と非ロクロ整形と思われる甕が出土している。これらの甕にみられる諸特徴を、山三賀II遺跡に求めると、II期の小甕（B系）、長甕C系・A系2類に共通点がみられる。また山三賀II遺跡でも横瓶が出土しており、土器のセット内容にも共通点がみられ、1号住居跡出土の遺物は山三賀II土器群のII期に比定されるものと思われる。報文によるとII期は「8世紀第2四半期から第3四半期にかけて」とされており、これは須恵器杯の年代幅と矛盾するものではなく、1号住居跡出土遺物を8世紀中葉－第2四半期－第3四半期－に位置するものと考える。2号住居跡からは、須恵器杯・高台付杯・蓋、土師器甕などが出土しており、やはり食膳具のほとんどは須恵器であり、煮炊具はすべて土師器甕である。2号住居跡出土の須恵器杯の底径/口径比の平均は約0.56、器高の平均は4.1cmである。近似した数値を示す甕は、M19であり、底径/口径比が0.52、器高が4.0cmであり、底径/口径比が大きいほうが相対的に古いという考えからすると、2号住居跡出土土器のほうがM19より若干古いと考えた。また土師器甕はロクロ整形のものと非ロクロ整形のものがみられる。登戸遺跡4号住居跡からも非ロクロの甕は出土しており、福島県

第1編 能登遺跡



第69図 能登遺跡1・2号住居跡・新潟県山三賀II遺跡出土土器変遷図 (坂井1989)

全域で9世紀代まで残ることが知られている。ロクロ整形の小妻は山三賀II遺跡ではIII期に比定されるものと近似している。III期は「8世紀第4四半期から9世紀第1四半期にかけて」とされており、須恵器杯に関する検討と併せると、2号住居跡出土土器は9世紀前葉-第1四半期-に比定されると考える。

他に、1・2号土坑からは土師質土器皿、1号溝からは高台付椀・土師質土器皿が出土している。先の消費地遺跡と比較すると古屋敷遺跡より新しい時期に位置付けられ、紙幅の関係から詳述は避けるが、1号溝は10世紀後半から11世紀代、1号土坑は11世紀代、2号土坑は11世紀後半と考えられる。

以上の出土土器の検討から本遺跡の変遷を推定すると、以下のようになる。

1号住居跡（8世紀中葉）

2号住居跡（9世紀第1四半期）・2号掘立柱建物跡

1号溝跡（11世紀代）・1号土坑（11世紀代）

2号土坑（11世紀末～12世紀初頭）

2号掘立柱建物跡は2号住居跡と主軸方向が等しく、同規模であることから同時期のものと考える。また1号掘立柱建物跡は1号土坑に隣接しており、1号土坑出土土器に関する遺構であるとも考えられるが、東側斜面に形成された弥生時代の遺物包含層にも近く、旧地形が畠地造成時に削平されたことを前提とすれば、弥生時代の住居跡の上部が破壊されて、柱穴のみが残ったものと理解してよい可能性も残る。

8世紀中葉から9世紀第1四半期にかけての本遺跡の性格は、1号住居跡などの出土遺物、立地状況を考えると、いわゆる「離れ国分」（中山：1976）のような小規模集落とは異なるものであるが、一般集落の縁辺部とも考えられない。しかし種類豊富な出土遺物を持つことから、特殊な職能に服する人々の生活した場ではないかと推察される。また11世紀代の能登遺跡は溝と土坑と非常に小さい掘立柱建物跡をもつ遺跡であった。人間の生活空間を再現するには資料が少なすぎ、遺跡の性格については不明である。以上のように、遺跡の性格については不明確な点が多いが、今後の会津盆地における調査・研究成果に期待したい。

（西山）

〈主要引用・参考文献〉

- 坪井清足 1953「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生式文化の性格—」『史林』3-1
- 中村五郎 1976「東北地方南部の弥生式土器編年」「東北考古学の諸問題」
- 藤田定市 1951a「昭和25年における天王山遺跡の調査報告(第一報)」
- 藤田定市 1951b「天王山遺跡の出土品について」
- 馬目順一 1987「入門講座・弥生土器—南東北1・2—」「月間考古学ジャーナル」148・151
- 弥生時代研究会 1989「『天王山式期をめぐって』の検討会資料」
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』
- 岡田茂弘・桑原道郎 1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」「研究紀要I」宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要II」宮城県多賀城跡調査研究所
- 目黒吉明他 1989「相馬開発関連遺跡調査報告I本文2」福島県教育委員会 (財)福島県文化センター 地域振興整備公団
- 高橋信一他 1987「清水上遺跡」「国営会津農業水利事業開発遺跡調査報告V」福島県教育委員会
- 皆川隆男他 1985「大久保須恵器窯跡」「新鶴村遺跡発掘調査報告IV」大沼郡新鶴村教育委員会
- 橋崎彰一 1989「会津大戸古窯跡群発掘調査概報I」会津若松市教育委員会
- 柳内寿彦他 1984「南原埋蔵文化財発掘調査概要」福島県会津若松市教育委員会
- 大越道正他 1989「駄板新田横穴群」「東北横断自動車道遺跡調査報告6」福島県教育委員会 (財)福島県文化センター 日本道路公団
- 寺島文隆他 1988「笠戸遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告3」福島県教育委員会 (財)福島県文化センター 日本道路公団
- 柳内寿彦他 1986「若松城三の丸跡発掘調査報告書」福島県会津若松市教育委員会
- 石本弘他 1983「下椎原遺跡」「国営会津農業水利事業開発遺跡調査報告I」福島県教育委員会
- 古川利意 1985「博毛遺跡」耶麻郡高郷村教育委員会
- 坂井秀弥他 1989「新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀丘遺跡」新潟県教育委員会
- 中山吉秀 1976「離れ國分考」「古代61」早稲田大学考古会

付 章 能登遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 计 利 一

会津坂下町にある能登遺跡から出土する須恵器はすべて大戸群産かどうかが注目される。また、土師器や弥生土器はどんな化学特性をもつ駿士なのかが注目される。

まず、表1に分析値を示してある。すべて、岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。

生データを Rb-Sr 分布図上にプロットしたのが図1である。すべてが大戸群領域周辺に分布していることがわかる。そこで、大戸群の重心からのマハラノビスの汎距離を計算してみた。表1にその結果も示してある。No.2・4・8・15以外のすべてのサンプルは $D^2 \leq 10$ の大戸分への帰属条件を満足しており、これらは大戸群産の須恵器であると判定できる。大戸領域をすれた4点のうち、No.4・15は大戸群産である可能性は十分ある。しかし、No.2・8の2点は外部からの

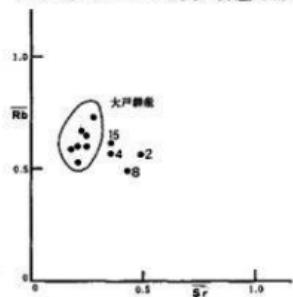


図1 痛喜器のRb-SR分布図

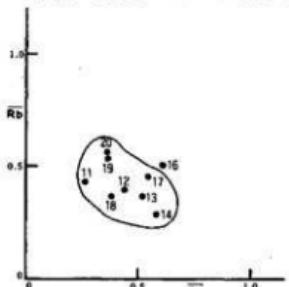


図2 土師器のB-h-S分布図

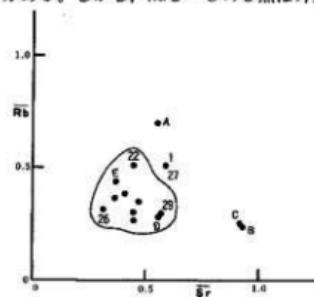


図3 弥生土器のRb-Sr分布図

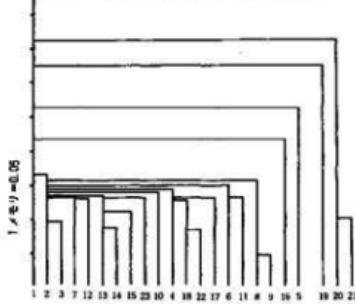


図4 能登遺跡出土土師器・弥生土器のクラスター分析 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)

入品とみられる。勿論、これらは船ヶ森西I群とも対応しない。以下のところ、產地未定としておく。

次に、土師器の分析結果を説明する。はじめに、K・Ca・Rb・Sr因子を使ってクラスター分析による分類を試みた。図4にデンドログラムを示す。No.1～No.9までが一群を構成するとみてよい。そして、図2のRb-Sr分布図ではこれらを包含するようにして領域をとつてある。この領域は船ヶ森西I群の須恵器の領域と似てはいるが、びたりとは対応しない。むしろ、図3の弥生土器の方が船ヶ森西I群領域によく対応する。窯跡が残っていないので、產地を推定することは難しいが、大半の弥生土器、土師器は地元産と推定される。しかし、弥生土器のNo.27、A・B・Cは別産地で作られたもので、外部からの搬入品と推定される。ただし、B・Cは同一產地の製品であろう。

表 能登遺跡出土土器の胎土分析値

試料番号	遺物番号	種別・器種	部 位	遺 墓	出土地点	色調(外)	色調(内)	C/N	K	Ca	Fe	Rb	Sr	大戸群	船I群
1	1住22	須恵器・長颈瓶	胴部	能登	1号住居跡	灰白	灰	0.689	0.109	1.10	0.671	0.231	10	73	
2	1住11	須恵器・双耳瓶	胴部	能登	1号住居跡	灰	赤灰	0.384	0.299	1.39	0.563	0.489	360	13	
3	1住19	須恵器・鉢	胴部	能登	1号住居跡	灰黄褐	灰黄褐	0.700	0.134	1.36	0.730	0.277	7.0	64	
4	1住2	須恵器・杯	口縁部	能登	1号住居跡	灰白	灰白	0.623	0.173	1.43	0.571	0.363	25	25	
5	2住6	須恵器・杯	口縁部	能登	2号住居跡	灰黄褐	灰黄	0.606	0.101	1.13	0.595	0.205	5.5	56	
6	2住7	須恵器・高台杯	口縁部	能登	2号住居跡	灰	灰	0.621	0.122	1.21	0.653	0.248	0.7	56	
7	2住3	須恵器・杯	口縁部	能登	2号住居跡	灰白	灰白	0.537	0.069	1.34	0.532	0.210	2.0	49	
8	2住14	須恵器・碟	胴部	能登	2号住居跡	赤灰	赤灰	0.315	0.253	1.18	0.493	0.426	320	9	
9	2住15	須恵器・碟	胴部	能登	2号住居跡	青灰	青灰	0.564	0.117	1.17	0.600	0.250	2.1	43	
10	2住	須恵器・碟	胴部	能登	2号住居跡	灰灰	青灰	0.577	0.100	1.25	0.584	0.178	9.0	78	
11	1住16	土師器・碟	口縁部	能登	1号住居跡	橙	明黄橙	1	0.451	0.138	1.78	0.425	0.259		
12	1住12	土師器・碟	口縁部	能登	1号住居跡	純白	純白	2	0.446	0.418	2.47	0.402	0.436		
13	1住14	土師器・碟	胴部	能登	1号住居跡	浅黄褐	浅黄褐	3	0.461	0.415	2.15	0.371	0.515		
14	1住13	土師器・碟	口縁部	能登	1号住居跡	純白	純白	4	0.284	0.652	2.54	0.291	0.579		
15	1住3	須恵器・杯	口縁部	能登	1号住居跡	灰白	灰白	0.568	0.162	1.47	0.619	0.355	21	36	
16	2住10	土師器・碟	胴部	能登	2号住居跡	黃褐	5	0.530	0.506	2.16	0.507	0.605			
17	2住12	土師器・碟	胴部	能登	2号住居跡	純黃	純黃	6	0.438	0.272	2.82	0.462	0.542		
18	2住	土師器・碟	胴部	能登	2号住居跡	純白	純白	7	0.451	0.315	2.82	0.369	0.380		
19		土師器・杯	口縁部	大村	d区主体部	黑	8	0.446	0.150	2.23	0.544	0.356			
20		土師器・杯	胴部	大村	d区主体部	黑	9	0.422	0.140	2.20	0.570	0.359			
21	包397	弥生土器・不明	不明	能登	遺物包含層	純黃	純黃	10	0.265	0.377	2.24	0.271	0.449		
22	包71	弥生土器・碟	胴部	能登	遺物包含層	墨褐	墨褐	11	0.416	0.333	2.37	0.506	0.449		
23	包110	弥生土器	胴部	能登	遺物包含層	純黃	純黃	12	0.387	0.349	1.75	0.393	0.450		
24	包79	弥生土器・壺	口縁部	能登	遺物包含層	墨褐	墨褐	13	0.336	0.287	1.89	0.394	0.401		
25	包258	弥生土器・壺	口縁部	能登	遺物包含層	純白	純白	14	0.275	0.275	2.32	0.374	0.371		
26	包394	弥生土器・不明	不明	能登	遺物包含層	純黃	純黃	15	0.234	0.225	2.56	0.315	0.309		
27		弥生土器・不明	不明	能登	遺物包含層	純白	純白	16	0.316	0.511	2.38	0.510	0.593		
28	包15	弥生土器・不明	不明	能登	遺物包含層	灰褐	灰褐	17	0.370	0.506	3.06	0.351	0.474		
29		弥生土器・不明	不明	能登	遺物包含層	灰白	灰白	18	0.320	0.507	2.03	0.299	0.572		
30		弥生土器・不明	不明	能登	天王山	橙	橙	19	0.721	0.284	2.33	0.704	0.554		
31						澄	澄	20	0.359	0.598	2.81	0.240	0.929		
32						黄褐	黄褐	21	0.360	0.688	3.16	0.248	0.919		
33						浅黄	浅黄	22	0.363	0.566	2.26	0.285	0.662		
34						黄褐	黄褐	23	0.345	0.181	2.31	0.443	0.365		

第2編 南原 B 遺跡

遺跡記号 AB-MH

所在地 会津坂下町大字牛川字南原

時代・種類 奈良・平安時代一散布地

調査期間 9月11日～9月27日

調査員 大越道正・熊谷金一

協力機関 会津坂下町教育委員会

目 次

第 1 章 調査経過	111
位置と地形	111
基本層序	111
調査経過	111
調査方法	113
第 2 章 遺構と遺物	113
1 号溝跡	113
遺構外出土遺物	114
まとめ	114

第1章 調査経過

位置と地形

南原B遺跡は、福島県河沼郡会津坂下町大字牛川字南原地内に所在する。JR会津坂下駅から南に約2kmほど離れたところにある。この地点は、会津盆地西縁山地の東側を南北に流れる田沼川と出鶴沼川に挟まれた平坦地の西側に位置し、標高は198m前後である。本遺跡は、田沼川がつくる河岸段丘崖沿いに細長く立地している。本遺跡と段丘下段面の比高差は約3mを測る。現況は、蔬菜畑・果樹園などが主である。

本遺跡の付近には多くの遺跡が分布している。南には南原A遺跡・中丸遺跡がある。東には能登遺跡や大豆田の各遺跡、山ノ神遺跡が密集している。また、田沼川をはさんで北西には村西遺跡・大村新田遺跡・前林遺跡・大村古墳群、南西には鬼渡A遺跡をはじめ水上遺跡・沢口遺跡の各遺跡が点在している。

基本層序

基本土層や調査区北側の壁を利用して土層断面図を作成した。LⅠは暗褐色シルト層の表土・耕作土である。LⅡは黒褐色シルト層でしまりはなくボソボソした感じの土で、調査区の中央部から東側へと薄く堆積しているが、南西の農道付近では10cm前後の堆積をみせる。しかし、西側の段丘崖に近づくにつれて消滅している。LⅢは暗茶褐色砂質土でバミスが多量に含まれている。また、段丘崖付近では小礫が混入している。

調査経過

今回調査対象とした面積は500m²である。発掘調査は9月11日から9月27日までである。また、調査区付近で路線内にかかる部分の予備調査も合わせて実施したが遺構は発見できなかった。

調査経過の概要は次の通りである。

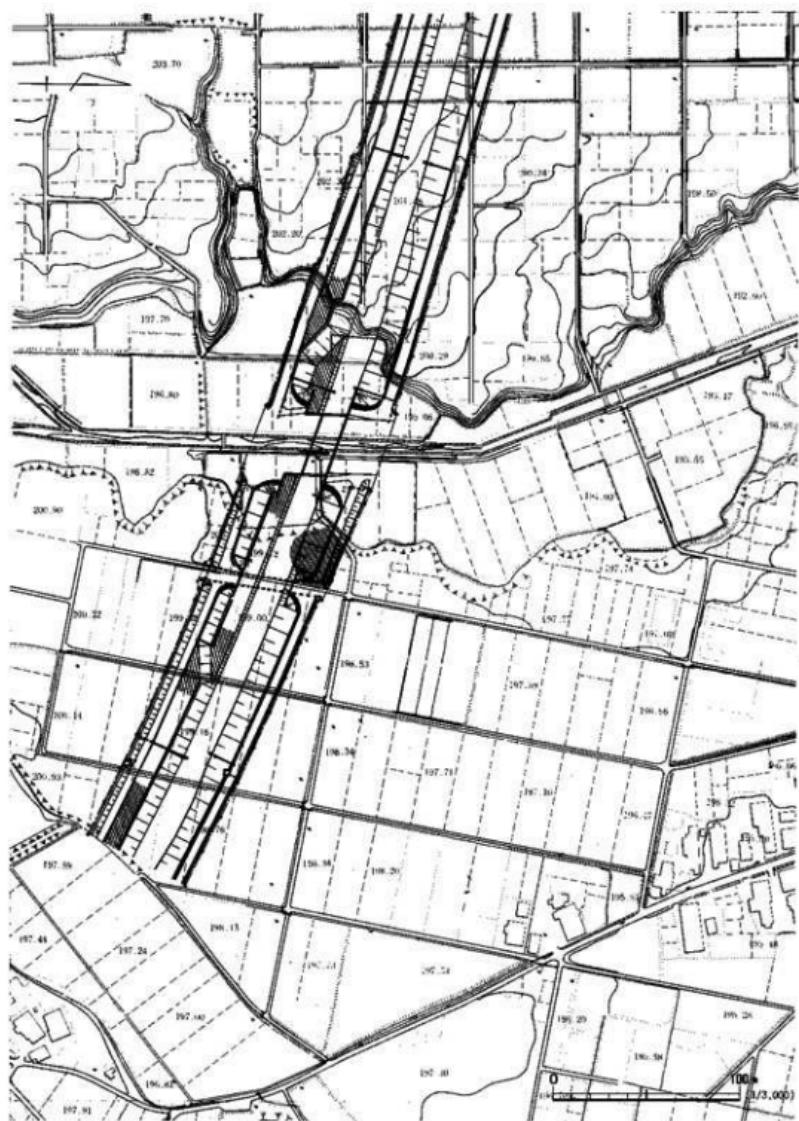
9月11日 調査区とその周辺の下草刈りを実施し、田沼川の西側対岸より調査区の遠景写真撮影をする。



第1図 南原B遺跡位置図

国土地理院 (1/50,000)

第2編 南原B遺跡



第2図 南原B遺跡周辺路線計画図

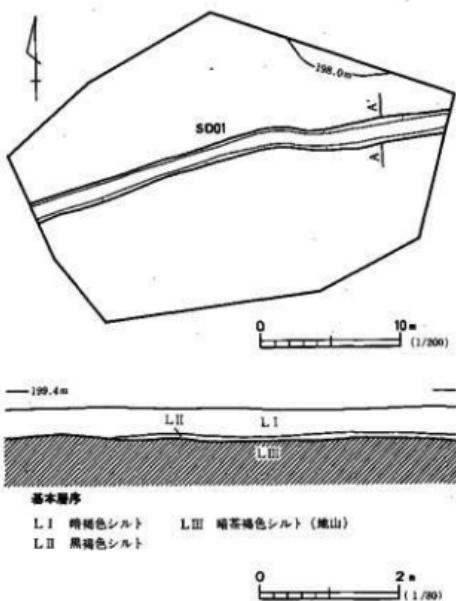
9月12日 調査区の表土剥ぎのため重機の業者と交渉したが、調査区に通ずる農道の幅が狭いので、重機が入れないと結論に達したため、作業員による表土剥ぎを開始し22日に終了する。

9月14日 大村古墳・遺跡の調査終了と道路公団への引き渡し期限が迫っているため、午後から調査員と作業員共々15日まで応援にてかける。

9月22日 遺構検出作業を開始し、調査区の中央を東西に横切る1号溝跡を検出する。

9月26日 調査区の全測図を作成する。

9月27日 調査区の全景写真を撮影し、全調査を終了する。



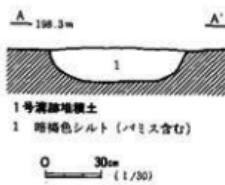
第3図 南原B遺跡全体図

ベンチマーク(BM)は調査区の東方約300m離れた標高197.40mの三角点から移動して、調査区の北側中央に設置した。標高は199.50mである。表土剥ぎは、調査区までの農道の幅が狭く重機の搬入が困難であったことから、人力によって行った。調査区の全体図は1/200の縮尺として測量を行った。遺構は1/20の縮尺で図化した。写真是35mmモノクロームおよびカラーリバーサルフィルムを使用して、両者同アングル、同コマ数で撮影を行った。また、特に必要と認められた場合は6×4.5判のカメラを使用した。また、調査区の南側、道路予定部分に5本のトレンチを設定し予備調査を行った。

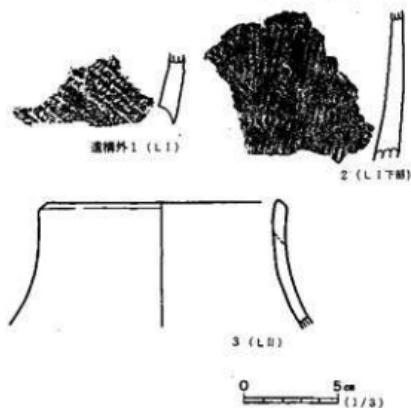
第2章 遺構と遺物

1号溝跡 SD01 (第3・4図 図版3)

本遺構は、調査区のほぼ中央を東西方向へ横切るように東の調査区外まで伸びている。検出面



第4図 1号溝跡断面図



第5図 遺構外出土土器

タクキ痕がみられ、内面にはナデ痕がわずかに確認される。遺構外3は、調査区南西側のL IIから出土した土器片の一部である。器面はたいへん荒れているが、内外面にミガキの痕跡がわずかではあるが認められ、積み上げ痕もみられる。この土器については不明の点が多いが、縄文時代後期頃の無文の粗製土器で、広口壺の口縁の一部であろうと推定される。

ま と め

今回、調査対象としたところは遺跡の南端部である。調査面積も約500m²と狭かったためか、遺構は溝跡1条だけであった。また、遺物の数もたいへん少なかった。これらにより、本遺跡の性格について物語れる遺構や遺物の発見は残念ながらできなかつた。しかし、昭和63年度に会津坂下町教育委員会が調査区の北側を対象として試掘調査を行つており、その調査結果を考えてみると、本遺跡の中心は、今回調査した地点よりも北側にあるものと推定される。

(熊谷)

第3編 村西遺跡

遺跡記号 AB-MN

所在地 会津坂下町大字勝大字村西

時代・種類 奈良・平安時代-散布地

調査期間 8月23日～9月8日

調査員 大越道正・熊谷金一

西山真理子

協力機関 会津坂下町教育委員会

目 次

第1章 調査経過	117
位置と地形	117
基本層序	117
調査経過	117
調査方法	118
第2章 遺構と遺物	119
1号土坑	119
遺構外出土遺物	120
まとめ	120

第1章 調査経過

位置と地形

村西遺跡は、福島県河沼郡会津坂下町大字勝大字村西地内に所在する。JR会津坂下駅から南西に約2.5kmのところにある。この地点は南北に連なる会津盆地の西縁山地に接する扇状地の扇端部付近に位置し、標高は208m前後である。本遺跡周辺は、東に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の西側はほとんど蔬菜畑で、一部果樹園として利用されている。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が分布している。西側の丘陵上突端部には大村古墳群、北西には大村新田遺跡・前林遺跡がある。南側には水上遺跡・沢口遺跡・鬼渡A遺跡があり、東側では田沼川の対岸に南原A・B遺跡などがある。

基本層序

基本土層中、L Iは暗褐色シルト層で表土・耕作土となる。L IIは茶褐色シルト層でバミス粒を若干含んでいる。この層は調査区西側で観察されたが、東側ではみられなくなる。L III aとL III bはともに黒褐色シルト層だが、L III bは小礫が多量に入っている。調査区の東側において観察できる。L IVは、暗茶褐色シルトの比較的薄い層で、L IIと同様に東側ではみられなくなる。L Vは明茶褐色砂質土で人頭大から拳大の角礫を多量に含む砂礫層である。

調査経過

今回調査対象になったところは、遺跡の南側で、調査面積は1,150m²である。

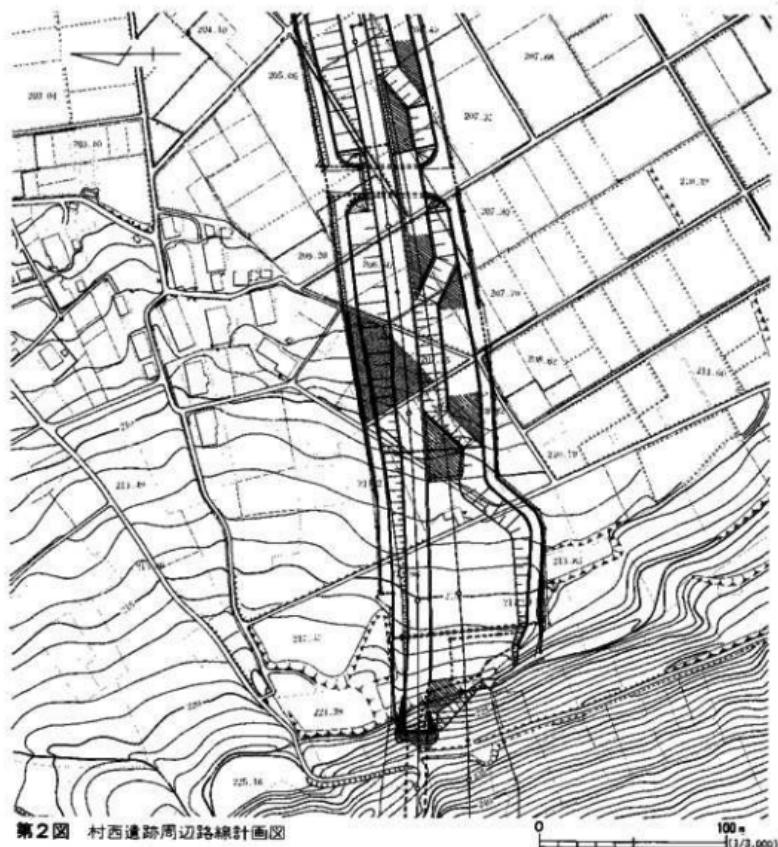
調査経過の概要是次の通りである。

8月23日、調査区の遠景写真撮影と下草刈りを行う。8月28日、調査区全体が拳大の礫層に覆われているため、遺構検出作業は困難を極める。また、調査区の南側から水が湧き出て排水がはかどらず作業に支障をきたす。9月8日、遺構は1号土坑以外に検出されず、全景写真と全測図を作成し調査を終了した。



第1図 村西遺跡位置図

国土地理院 (1/50,000)



第2図 村西遺跡周辺路線図

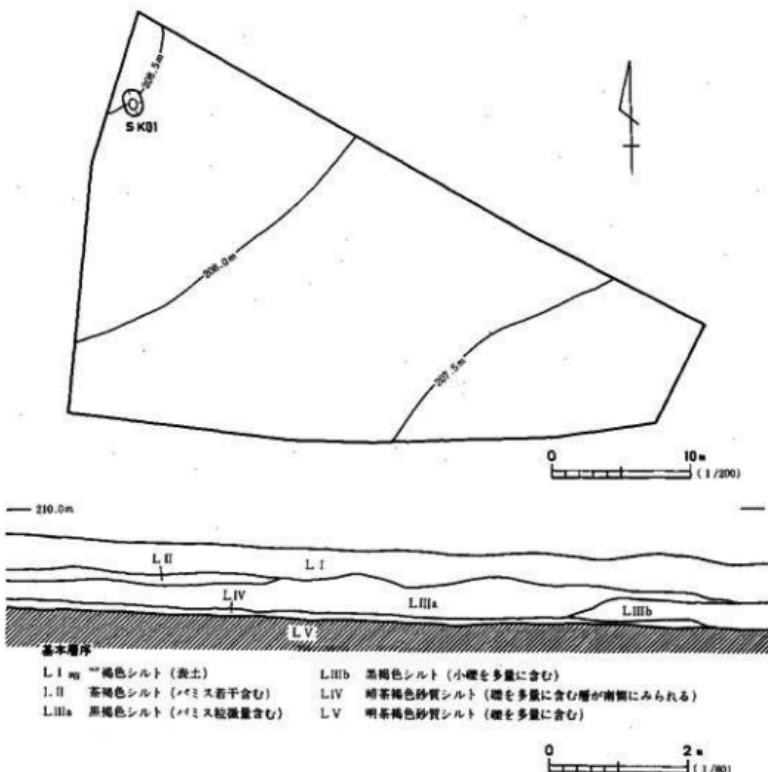
調査方法

ベンチマーク（BM）は道路公團設置のBMから移動して2か所設定した。BM1は調査区東端付近に207.88m、BM2は調査区北西付近の209.70mである。表土剥ぎは時間と予算の関係で重機を使用して行った。調査区の全体図は1/200、遺構は1/10の縮尺で図化した。写真は35mmモノクロームおよびカラーリバーサルフィルムを使用して、両者同アングル、同コマ数で撮影を行った。また、特に必要と認められた場合は6×4.5判のカメラを使用した。

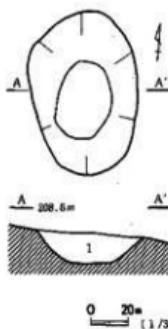
第2章 遺構と遺物

1号土坑 SK01 (第4図)

本遺構は調査区の北西側で検出された土坑である。検出面はLV上面である。平面プランは長径174cm、短径116cmの橢円形を呈する。深さは32cmを測る。壁は直線的に外傾して緩やかに立ちあがっている。堆積土は黒褐色シルトの1層で粗大の礫が多量に混入していた。遺物は出土しなかった。



第3図 村西遺跡全体図



遺構外出土遺物（第5図 図版4）

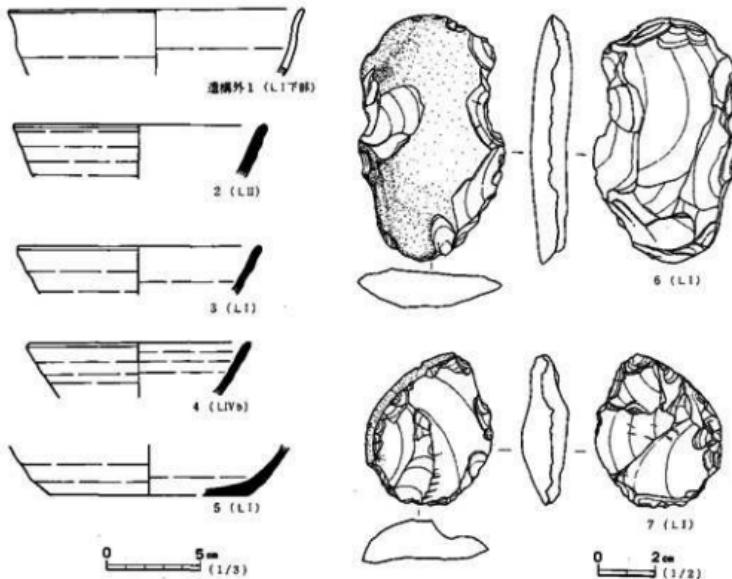
調査区からの出土遺物はすべて遺構外からである。出土点数もたいへんに少なく、小破片のものばかりである。遺構外1は、ロクロ成形の土師器杯である。遺構外2・3・4・5はいずれも須恵器の杯である。遺構外6は真岩製の分鋼形打製石斧、遺構外7は凝灰質真岩のスクレイバーである。

まとめ

- 1号土坑堆積土
1 黒褐色シルト
(小砾を多量に含む)

第4図 1号土坑

今回の調査で、確認されたのは時期不明の土坑1基だけであったが、縄文・奈良・平安時代の遺物が各層から出土していることから、調査区周辺の地区については、当時の人々の生活にかかわる何らかの遺構群の広がりが存在していると推定される。
(無 谷)



第5図 遺構外出土土器・石器

第4編 大村古墳群・大村遺跡

遺跡記号 AB-OM

所在地 会津坂下町大字勝大字大村

時代・種類 縄文時代-集落跡

古墳時代-古墳

調査期間 7月17日~9月15日

調査員 大越道正・西山真理子

熊谷金一

協力機関 会津坂下町教育委員会

目 次

第1章 調査経過	123
第1節 立地・地形	123
第2節 調査経過	123
第3節 調査方法	124
第2章 遺構と遺物	125
第1節 大村1号墳	125
第2節 大村遺跡	131
第3章 まとめ	137
第1節 大村1号墳について	137
第2節 大村遺跡について	138

第1章 調査経過

第1節 立地・地形

大村古墳群は、河沼都会津坂下町大字勝大字草山・水林に所在する遺跡である。会津盆地の西縁には博士山・明神ヶ岳から連なる西縁山地が南北に伸びており、古墳群は西縁山地の東面する尾根筋上に位置している。遺跡は大小5基の円墳群であり、1号墳から南方約13m～15mのところに3基の円墳が確認されている。今回調査を行った1号墳は、古墳群のなかでも東端に位置し、その標高は約244m～246m程度である。

遺跡の現況は山林であり、北西にある堤が決壊した際に土取りされたため、一部削られていた。また調査を進めていくうちに、墳丘下に縄文時代前期の遺構が見つかり「大村遺跡」とした。東100mのところに大村新田遺跡、南1.5kmのところには鬼渡横穴群、北6kmのところに宇内古墳群、北東6.5kmのところに青津古墳群がある。

第2節 調査経過

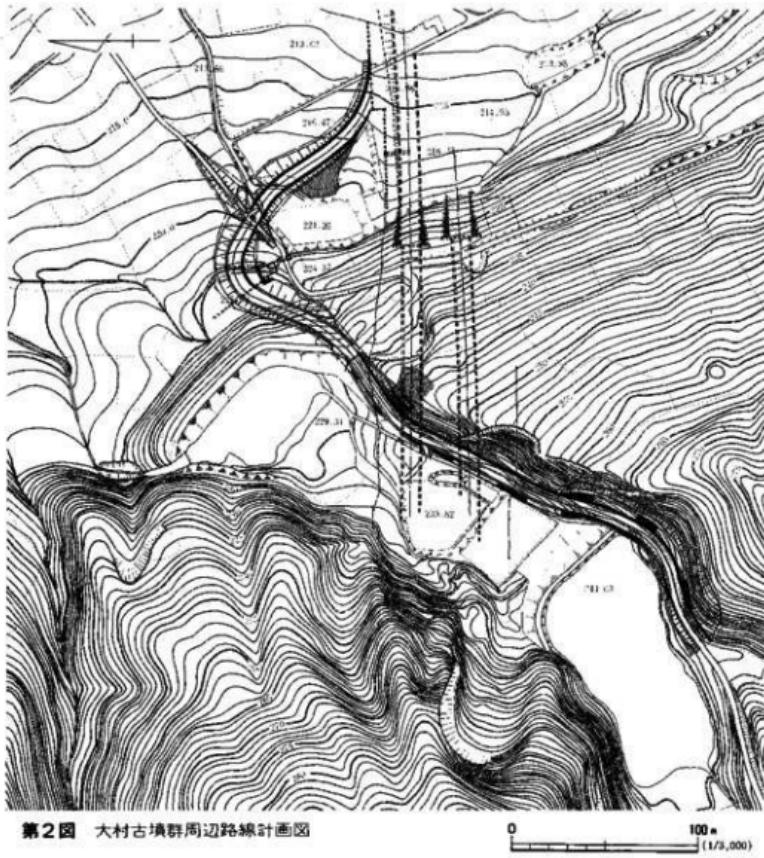
大村1号墳は、年度当初では調査が予定されていなかったが、土砂の採取・運搬のための工事用道路拡幅にかかることが明らかとなり、緊急調査を実施した。調査面積は400m²である。大村古墳群は周知の遺跡であったが、調査を進めていくうちに古墳墳丘下に縄文前期の遺構があることが判明し、それらを別の遺跡とすることにし、大村遺跡として発掘調査を行うこととした。調査期間は7月17日から9月15日までであり、能登遺跡・村西遺跡の調査と連動しながら行う。

- 7月17日 現況の墳丘測量を開始。
- 7月19日 遠景写真撮影後、作業員による表土剥ぎ開始。
- 7月26日 周溝掘り込み終了。
- 8月2日 墳丘部分精査開始。
- 9月8日 古墳部分の調査終了。
全景写真撮影後、大村遺跡調査開始。
- 9月15日 土坑群の精査終了後全景写真撮影を行い、調査終了。



第1図 大村古墳群位置図

1:50,000



第3節 調査方法

発掘調査にあたっては、遺跡の立地上周溝西側の任意の点と埴丘上の任意の点を結んだ線を基準として調査を行った。基準高は越沢3号堤近くにある標高233.602mの工事用ベンチマークを基準として調査区北西に設定した。調査区の全体図は1/50縮尺、等高線は20cmごとに測量を行った。遺構は1/20縮尺で図化した。写真は35mmモノクロームおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、両者同アングル、同コマ数で撮影を行い必要に応じて6×4.5判のカメラを使用した。

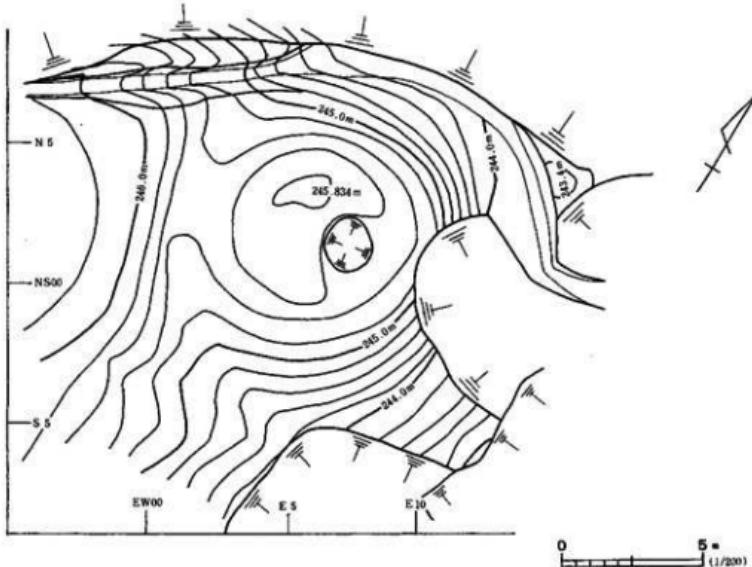
第2章 遺構と遺物

第1節 大村1号墳

墳形と規模

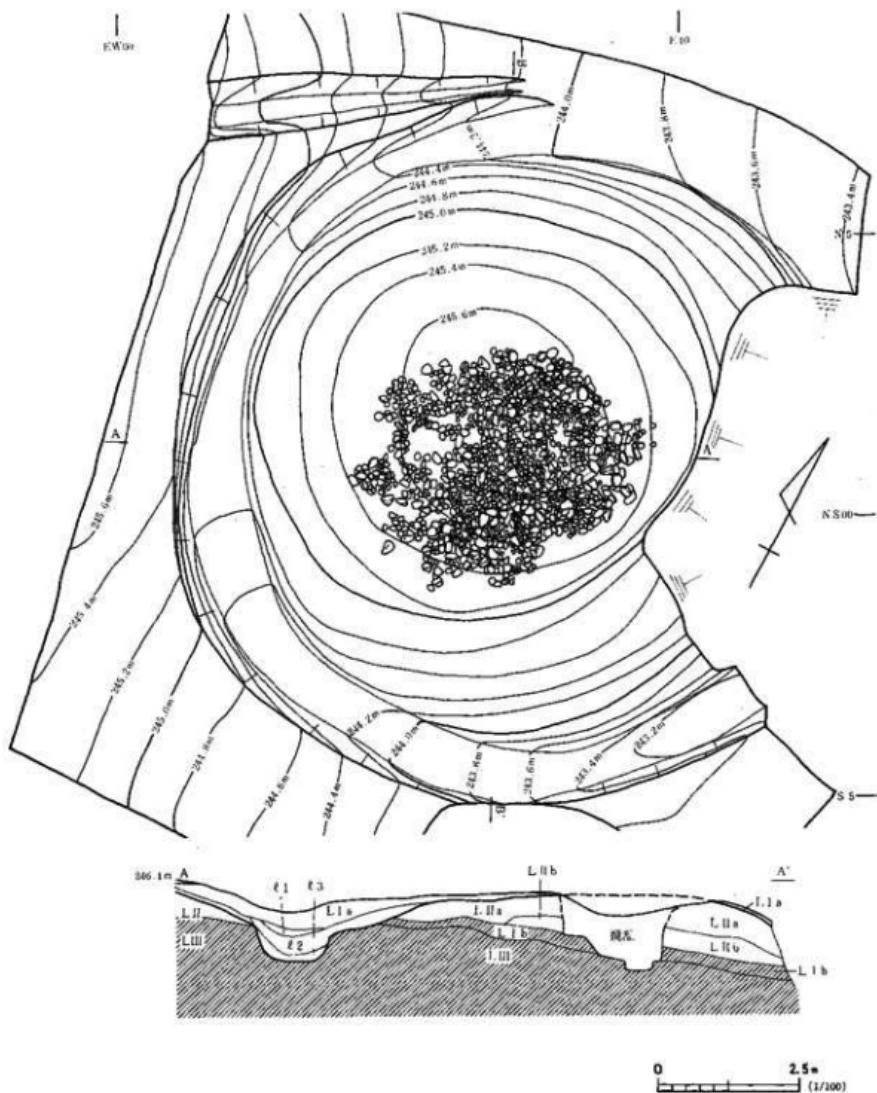
1号墳は、現況の測量により周溝跡らしき窪みを含めて東西約9.2m、南北約12.3mの円墳と確認された。北東にある堤が決壊した際に、堤防用の土取りのため墳丘の東側が削られており、東側部分の墳裾・周溝の様相については分らない。表土を除去後の測量によると、墳丘が東西約8m、南北約11.9m、周溝幅約1m～1.5mであり、墳裾のラインを復元していくと墳丘径約12m、周溝幅の上端が約2m、下端が約1mとなり、径14m弱の円墳であったと思われる。

本古墳は、周溝をめぐらすことによって尾根筋を寸断し、盛土による墳丘の成形をおこなっている。周溝底面から墳頂までの高さは西側で約0.8m、東側で約2mである。この高低差は、やはり盆地内からの景観を考慮した意識の現れと思われる。

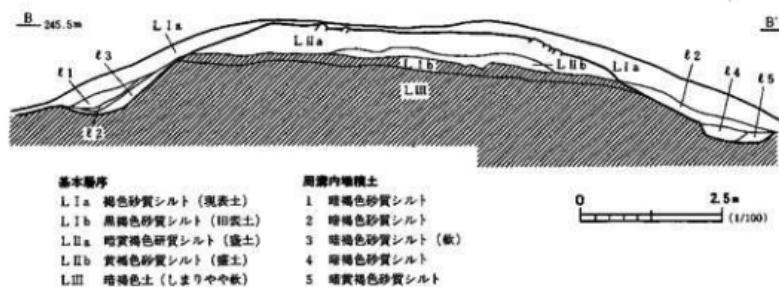


第3図 大村1号墳現況図

第4図 大村古墳群・大村遺跡



第4図 大村1号墳 (1)



第5図 大村1号墳 (2)

墳丘 (第5図)

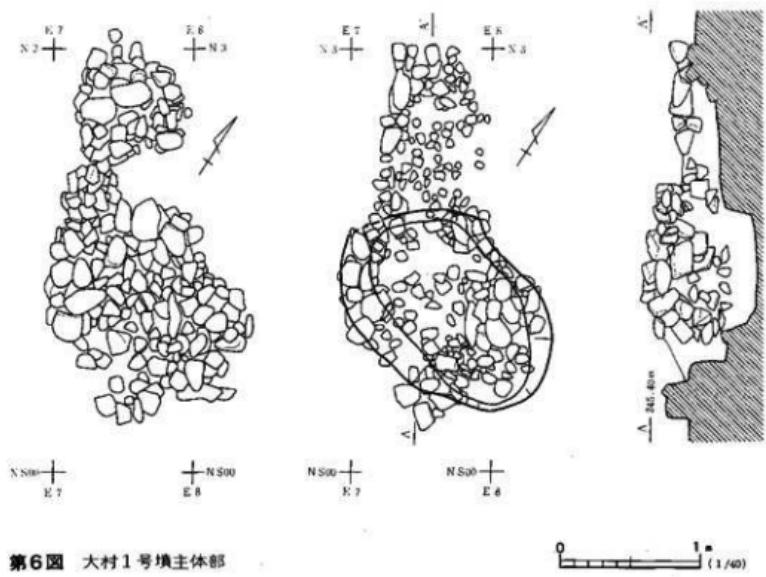
墳丘は盛土成形である。墳丘上面は、ほぼ平坦になっており截頭円錐形である。盛土は西側で約40cm、東側で約90cm、南北では50cm~60cmの厚みをもち、西側は緩傾斜、東側は急傾斜の墳丘である。この盛土内からは、縄文前期の土器片などが出土しており、墳丘下からも同時期の遺物が出土していることから、周溝掘削時の堆土を盛土に利用したものと思われる。

周溝 (図版5)

墳丘北側は崖になっており、周溝は現在道になっている付近であろうと思われる。この道が墳丘を囲むように東方へ下っていることから、東側でも周溝はまわっていたものと思われる。形態は平底の箱型状であり、旧表土面からの深さは20cm~80cmである。堆積土の②は炭化物粒子を微量に含んでいる。

主体部 (第6図 図版6)

墳丘平坦面に、径約4mの円形の範囲に河原石の広がりが確認された。河原石は人頭大~拳大程度のものである。現況で確認した浅い窪みは墳丘中心よりやや東よりであり、集石部分でも東端である。1枚目を除去すると、2枚目は東寄りに東西、南北ともに約3mの半円形の礫の広がりであった。石の大きさは人頭大のものが多い。第6図は3枚目、4枚目の状態である。平面形は東西1m強、南北約2.5mの楕円形をしている。4枚目北側の小礫が散在している部分は旧表土面であり、下方への掘り込みは確認できなかったことから、おそらく盛土成形した部分に掘り込みをもつ主体部であると思われる。主体部の構造については、礫が墳頂に散布していたことから礫郭ではないかと思われるが、擾乱が大きく明確な構造はつかむことができなかった。



第6図 大村1号墳主体部

0 1m (1/40)

遺物（第7・8図 図版10）

〔土師器〕

杯 1墳3はLⅠからの出土である。内面ヘラミガキ後黒色処理されており、外面は体部上半から口縁部にかけてミガキ、体部下半はヘラケズリ後ナデ調整されているが、口縁付近しか残っていないため、底部の調整等については不明である。器形は体部半ばで屈曲し、体部上半はやや内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は軽く引き出されているものである。

甕 1はLⅡ（盛土）内出土である。口径22.8cm、口縁部のつくりは、縁帯下部をやや外側へ引きだしたものである。口縁部から体部にかけてはくずれた「コ」字状に変化し、胴部の張りはあまり強くない。口縁部縁帯は強いナデのため中央部が浅く溝状に窪み、指または竹管等による圧痕がみられる。外面の調整は口縁部付近が横ナデであり、体部は縦方向のハケメがみられる。内面は口縁部付近が横ナデ、体部はナデ調整である。また、外面の口縁部縁帯下から体部にかけて煤の付着がみられる。

器台 1墳2は小型器台の脚部であり、LⅡ（盛土）内出土である。外径（上）4cm、（下）3.9cm、内径（上）1.8cm、（下）3.6cmである。透かし穴は3か所に確認された。おそらく2個1組の穴が2

か所につけられていたと思われる。外面は縦方向のヘラミガキ後朱彩しており、内面はヘラナデである。

〔縄文土器〕

1 墳 4 は周溝からの出土である。「く」字形の断面をもつ工具を押し引きした間に貝殻腹縁文を施している。田戸上層式期に比定される。

1 墳 6・7・15 は口縁部資料であり、同一個体の胴部破片である。口唇部には竹管によると思われる爪形の押し文がついており、口縁部付近は竹管による 2 本同時平行沈線文が 3 組、胴部には S 字状連鎖撚糸文が施されている。胎土は砂の混入が多く、繊維を少量含む。金雲母を含んだ土である。大木 2 b 式期に比定される。

1 墳 5・8・9・12・13・16・17 は単節縄文 (R L) であり、量の多少はあるが繊維を含み、砂を多く含んだ胎土である。また、1 墳 16 と 1 墳 17 は縄文施文後に半截竹管を利用した縦方向の連続刺突文が施されており、同一個体ではないかと思われる。

1 墳 14・18・19・22 は r の撚糸文である。少量ではあるが繊維の混入が見られる砂を含んだ胎土である。焼成は堅緻である。

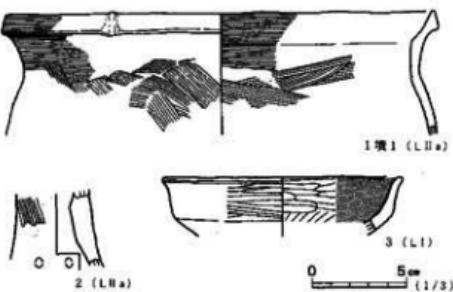
1 墳 10 は結束羽状縄文を施した口縁部破片である。胎土は若干の繊維を含む。

1 墳 20・21 は L II からの出土である。器面の施文方法は竹管による 2 本同時施文であり、一定間隔で止めながら引く有筋沈線文である。口縁部付近は 6 条の沈線を横方向に引き、胴部では山形文ふうに沈線を施している。山形の中央部分から縦方向に、竹管の背を利用して刺突文が施されている。沈線文施文後、r の撚糸文が施されている。胎土は砂を含み、焼成は非常に堅緻である。

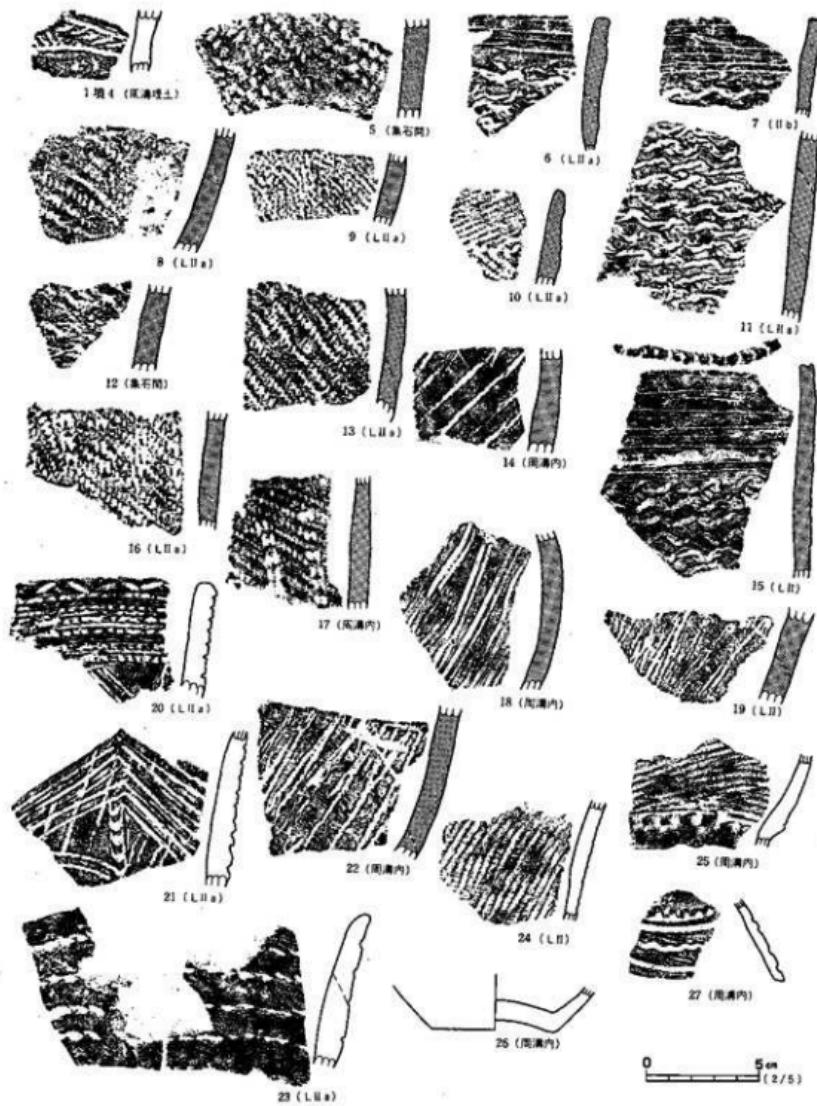
1 墳 23 はし II からの出土である。口縁部付近は 2 本同時の施文であり、竹管を利用した横方向の刺突文である。胎土は砂を含み、焼成は良い。1 墳 20・21 とともに浮島 I 式に比定される。

〔弥生土器〕

1 墳 24 は体部破片資料であり、地文は単節 (R L) である。1 墳 25 は口縁部付近の破片であり地文は単節 (R L) である。口縁部下に一条の沈線を引いた後、横方向からの連続した指圧を施している。1 墳 24、25 はともに似通った胎土であり、同一個体の可能性がある。1 墳 26 は底部破片であり、上底状の形態を示す。1 墳 27 は鋸歯文と交差刺突が施されている蓋の破片である。文様の形態などから、4 点とも弥生時代後期に比定されるであろう。



第7図 大村1号墳出土土器



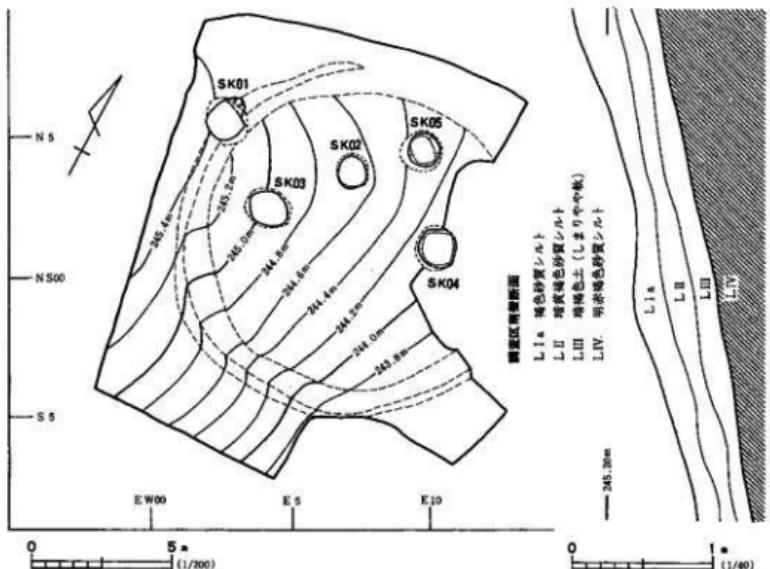
第8図 大村1号墳出土陶文土器・弥生土器

まとめ

本古墳は径14m弱の周溝をもつ円墳であるが、共伴関係の明らかな遺物の出土がなく、時期については確定できない。搅乱・L I 内出土の土師器杯を古墳に伴う遺物とみなすと、7世紀代に比定されるであろうが推測の域をでないものである。また主体部の構造については、墳頂上に礎の散布が見られたため、礎部ではないかと推察されるが決め手に欠けている。他に盛土内から古式土師器・庄内式に比定される甕・器台脚が出土しているが、甕に煤の付着がみられることから古墳に共伴する可能性は低いと考えた。盛土内からは、縄文時代前期を中心とした遺物が出土しており古墳築造の際にこの時期の遺構が壊されたものと思われる。

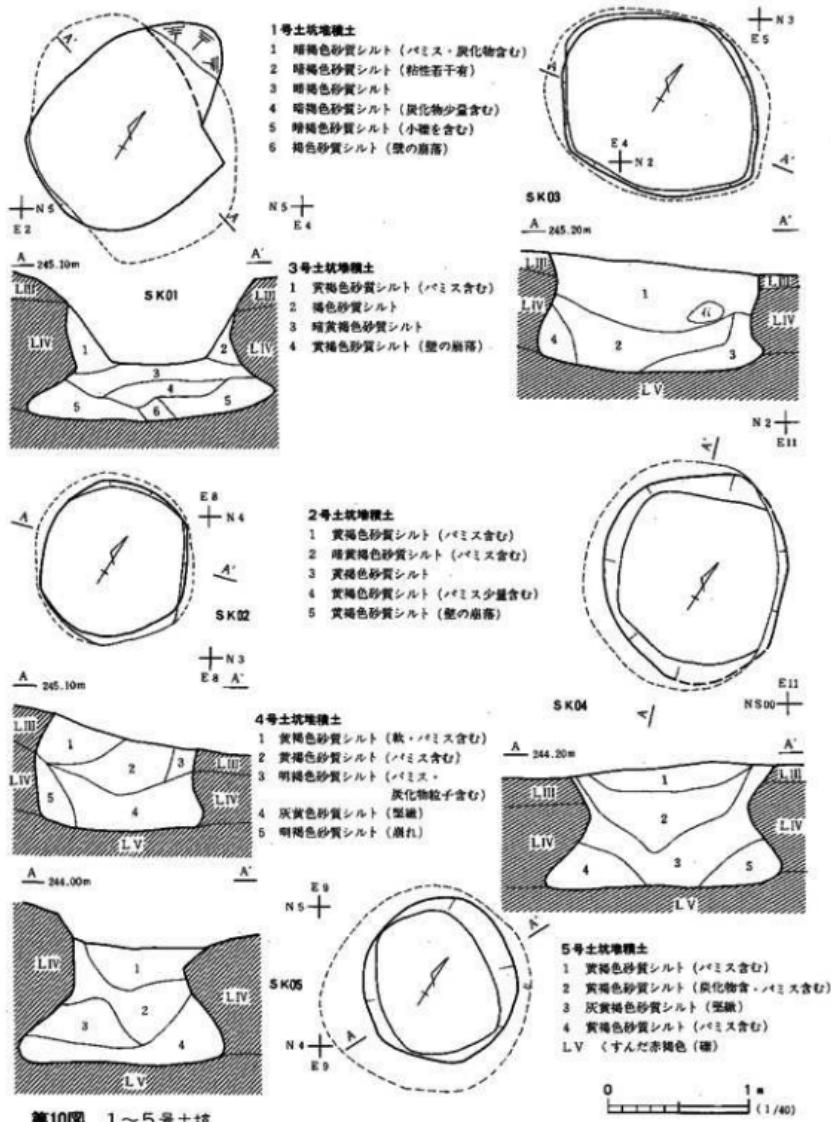
第2節 大村遺跡

大村遺跡は、調査開始当初は未知の遺跡であったが、古墳の調査が進むにつれてその存在が明らかになり、墳丘除去後調査を行うことにした。遺構は土坑が5基であり、その他縄文前期を主体とする遺物包含層が形成されていた。



第9図 大村遺跡全体図

第4編 大村古墳群・大村遺跡



第10図 1～5号土坑

遺 構 (第10図 図版9)

1号土坑 1号墳周溝完掘後に検出したものであり、周溝構築の際に上部は壊されたものと思われ。検出面はLIIIである。上端が $120 \times 144\text{cm}$ 、下端が $180 \times 155\text{cm}$ である。深さは 104cm であり、平面形が橢円のフラスコ状土坑である。堆積土は $\ell 1$ がバミスを含んだ暗褐色砂質シルトである。また $\ell 4$ には炭化物粒子が含まれる。遺物は石斧が出土している。

2号土坑 LIIIが検出面である。上端が $112 \times 122\text{cm}$ 、下端は $104 \times 106\text{cm}$ 、深さは 81cm である。堆積土 $\ell 1 \cdot 2 \cdot 4$ には、バミスが含まれている。 $\ell 5$ は、壁の崩落土と思われる。フラスコ状の土坑である。

3号土坑 LIIIが検出面である。上端が $153 \times 120\text{cm}$ 、下端は $171 \times 135\text{cm}$ 、深さは 84cm である。堆積土は、 $\ell 1$ にバミスを含み、 $\ell 4$ が壁の崩落土である。ややくずれた円形の平面形態を呈するフラスコ状土坑である。

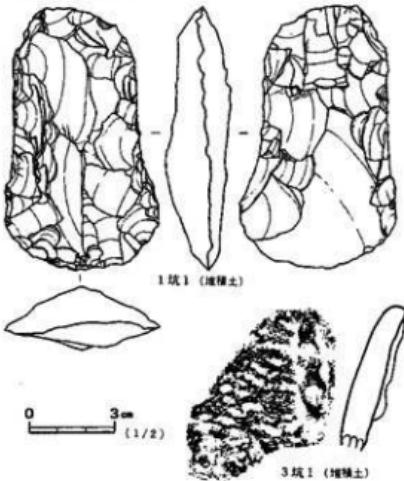
4号土坑 LIIIが検出面であり、東側の削られた部分でかろうじて検出された。上端は $132 \times 130\text{cm}$ 、下端が $160 \times 143\text{cm}$ 、深さは 86cm である。堆積土は $\ell 1 \cdot 2 \cdot 3$ にバミスを含む。フラスコ状土坑と思われる。

5号土坑 LIVが検出面である。上端は $114 \times 109\text{cm}$ 、下端は $151 \times 146\text{cm}$ 、深さは 104cm である。堆積土は $\ell 1 \cdot 2 \cdot 4$ にバミスを含む。フラスコ状土坑である。

5基ともLIVを振り抜き、土坑底面をLVとしている。

遺 物 (第11図 図版12)

1号土坑からは図示した石器の他小破片の土器が出土している。1坑1は体長 9.1cm 、幅 5.3cm 、厚さ 2.1cm の打製石斧である。石質は硬質岩である。2号土坑からは土器片が少量出土しており纖維を含むものも見られるが、小破片のため図示できなかった。また3坑1は3号土坑出土の口縁部破片である。単節(R L)繩文であり、口縁端部から縦方向に隆帯を貼り、その上に丸みのある工具を使い、刻みを施している。胎土は纖維を少量含む。



第11図 1・3号土坑出土石器・繩文土器

まとめ

3号土坑から出土した遺物は縄文時代前期、大木2b式に比定される土器である。後述する遺物包含層出土遺物や、全ての土坑がフラスコ状であること、検出面が5号土坑以外ではLⅢであることから、1・2・3・4号土坑の時期については縄文時代前期と思われる。また検出面がLⅣである5号土坑についても出土遺物からしてほぼ同時期のものと考えられる。

遺構外出土遺物（第12・13図 図版11・12）

調査区内で出土した遺物中、周溝外の区域と墳丘の下層（旧表土下層）から出土した遺物は、大村遺跡遺構外出土遺物として扱うこととした。以下の通りである。

遺構外1・2・6・22は早期の土器である。遺構外1は2本同時施文の沈線の間に横方向の連續刺突文を施している。縦方向の文様帯の区切りは沈線の施文に使用したと思われる竹管の背面を利用したと考えられる。遺構外2は2本同時施文の浅い沈線である。口縁端部と横方向の2本の沈線の間を埋めるように、断面「く」形の細い沈線が縦方向に施されている。横方向の沈線の下は、山形文と「山」の中央から縦方向に垂下する沈線の組み合わせが展開していたと思われる。遺構外6は断面「く」形の2本同時沈線である。口縁部付近は「V」字形とその中央から上方に延びる沈線文であり、その下は横方向の平行沈線である。遺構外22は、断面「く」形の工具を押し引きし、間に斜め方向の圧痕が見られる。遺構外2・6は田戸下層式、遺構外1・22は田戸上層式に比定される。

遺構外3～5・7・9～11・14・18は、それぞれLⅠb、LⅢの出土である。口唇部に爪形の押し文が施され、口縁部付近は2本同時施文の沈線が4本めぐる。胴部はS字状連鎖撚糸文である。胎土は纖維を少量含み、砂・金雲母の混入がみられる。大木2b式に比定される。

遺構外8・13はLⅠb、遺構外17はLⅡの出土である。口縁部は2本の沈線間を横からの竹管施文で区切り、口唇部と沈線間も同様に区切られている。胴部の地文は単節（RL）であり、撚文施文後面が軽くナデられている。大木2b式に比定される。

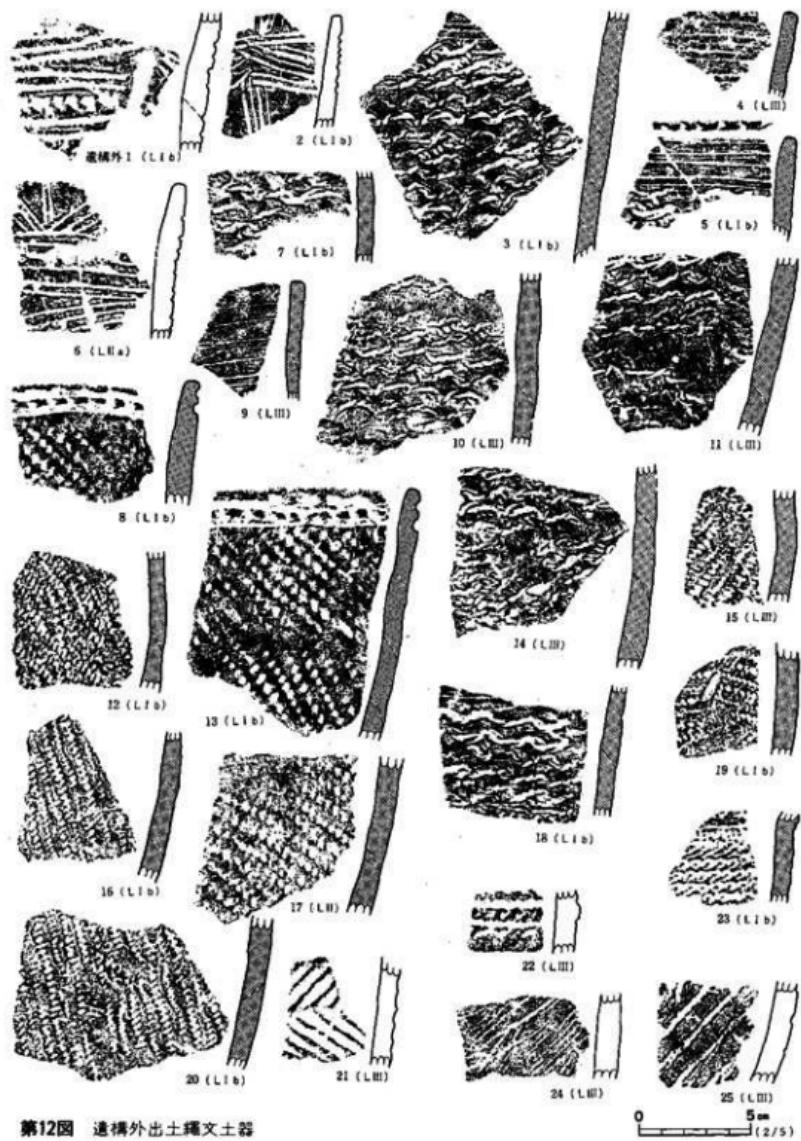
遺構外12・15・16・19・20は、胎土に纖維を含み、地文は単節（RL）縄文である。

遺構外21は結束羽状縄文が施されている。胎土は緻密、焼成も良好である。

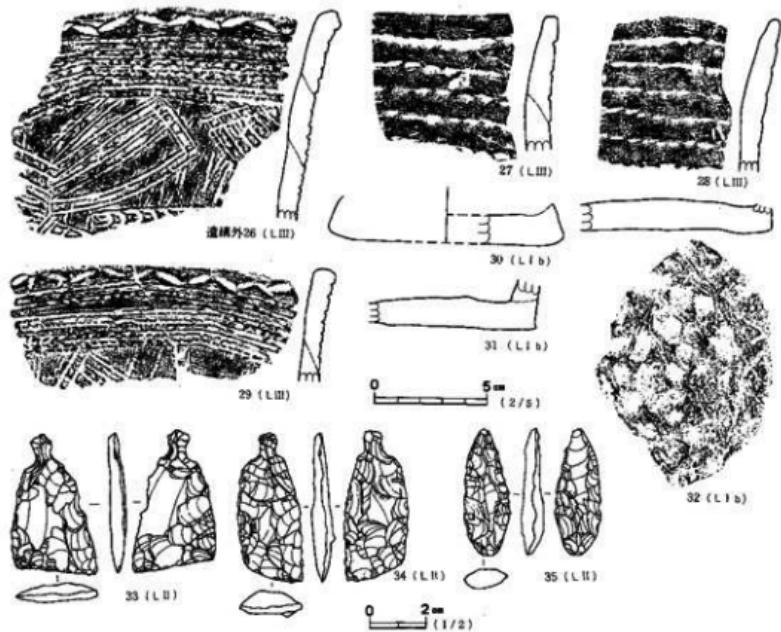
遺構外23はループ文が施文されており、焼成は堅緻、胎土に砂・纖維を少量含む。

遺構外24・25は撚糸（r）文が施されている。遺構外24は砂を含む胎土であり、焼成は軟質である。遺構外25は若干砂を含み、焼成は堅緻である。

遺構外26・29は口縁端部に断面に丸みのある工具による山形文がつけられている。口縁部には2本同時施文による平行沈線が3組、一定間隔をもって止めるように押し引きされている。口縁部の平行沈線から下、胴部には、やはり2本同時施文による「V」が変形したような幾何学的な



第12図 造構外出土繩文土器



第13図 遺構外出土縄文土器・石器

文様が施され、横方向の連続刺突文もみられ、全体に撚糸文が施されている。内面の調整も丁寧であり、胎土は非常に良く、焼成は堅緻である。浮島Ⅰ式に比定される。

遺構外27・28は横方向から2本同時に平行して連続刺突文を施している。内外面とも丁寧にナデられており、外面はナデの後に施文されたものと思われる。胎土は若干砂を含み、焼成は良好である。浮島Ⅰ式に比定される。

遺構外30~32は底部資料である。遺構外30は砂を多く含み、焼成は甘い。遺構外31・32は砂を含み、焼成は堅緻である。遺構外32の底部裏面には指圧痕がみられる。

遺構外33・34は石匙、遺構外35は石槍である。遺構外33は体長5cm、最大幅2.8cm、厚さ0.6cm、灰褐色の硬質頁岩である。遺構外34は体長5.3cm、最大幅2.2cm、厚さ0.8cm、灰褐色の硬質頁岩である。遺構外35は体長4.5cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、乳白色の珪質細粒凝灰岩である。

以上、遺構外出土遺物について詳述してきたが、遺物が大村遺跡で確認された土坑の検出面であるL IIIからも出土していることから、土坑が利用されていた時期の遺物と考えられ、大村遺跡は縄文前期を主体とした遺跡であると思われる。

第3章 まとめ

第1節 大村1号墳について

大村1号墳は、尾根筋上東端に造られた径約12m強、周溝をもつ円墳である。墳丘頂部において拳大から人頭大程の礫の散布が確認されたことから、主体部は礫郭ではないかと推定されたが、調査を進めていく中でも明確な構造はつかめず、また遺物も殆ど出土しない状況であった。墳丘上ののみでなく、周溝内からも古墳に伴うと考えられる資料の出土は見られなかった。以上のような状況から、遺物の出土が殆どなく、主体部が明確につかめなかつた理由として、①古墳築造後に、盜掘などによる搅乱をうけたため、②実際に死者が葬られることがなかつた、③古墳ではなく経塚である、などの可能性が考えられる。①については、実際に擾乱がみられることから可能性があると思われるが、③については経塚に関する遺物の出土が皆無であることや、墳丘・周溝などの構造を考えると、その可能性は非常に低いと思われる。②については楠元氏による論稿があるので、まずはそれを紹介したい。(楠元 1988)

楠元氏は、奈良県桜原町能作遺跡群の北山1号墳や当麻町氏家7号墳、大和郡山市東脇塚古墳における体験などから、「墳丘を築成しても、さらには墓坑を穿ってもなお、棺を納めない（人を葬らない）古墳が存在する」と推察されている。また、ひとを葬らない理由として、早くその存在に着目した大場氏の考えについて触れている。大場氏は、①封土状をなす高まりは一種の祭壇様設備である、②ひとを葬らない記念的な墓である、という見解を出されている。②の見解から楠元氏は、「遺骸が当初予定されていた古墳とは別の墓に葬られたため、ひとを葬らない古墳となつた」という可能性があると指摘されている。そして、「考古学上からはこれは立証し難いので」とことわりながらも、「被葬者の死亡以前に墓が築かれていた、すなわち「寿墓の制」という概念をとりいれれば、満更不可能ではないであろう」とされている。

ここで、大村1号墳が「寿墓」かは不明だが、先にも述べた様に、①遺物の出土が殆ど見られない、②主体部を構築しようという意図は窺えるが、その構造が不明確である、という2点からひとを葬る目的ではあったが、実際にその行為が行われたとは考え難いと思う。以上、諸問題はあるが、大村1号墳の性格を積極的に評価するという視点から考えられる可能性について述べた。

最後になるが、1号墳墳丘盛土・周溝内より縄文土器・弥生土器・石器等が出土している。盛土は、周溝構築時の排土によるものと思われ、縄文土器・石器は大村遺跡に関連するものと考える。また弥生後期に比定される土器もみられることから、この時期の遺構が近辺に存在する可能性もあると考える。

第2節 大村遺跡について

大村遺跡では、5基の土坑が確認されており、うち1基は古墳周溝構築の際に上部が壊されている。さらに1基は土取り工事により東半分がほとんど壊され、他3基は墳丘上から検出されている。立地としては5基とも比較的緩やかな傾斜をもつ尾根上に造られている。

土器は縄文時代早期・前期の2時期にわたって出土しており、縄文時代早期の田戸下層式・田戸上層式、縄文時代前期の大木2b式、浮島I式である。早期の土器は非常に少なく、図示した程度であり、前期の土器が主体である。

今回の調査では住居跡等は確認されなかったが、遺物の出土から考えると尾根上方部には住居跡などがあるものと思われる。本遺跡は縄文時代前期の集落端部であると考えられる。

大村1号墳・大村遺跡出土土器についてまとめるところとなる。

縄文時代早期……田戸下層式、田戸上層式

縄文時代前期……大木2b式、浮島I式、その他型式名不明

弥生時代後期……天王山式、鎌瀬大山式

古墳時代前期……庄内式

古墳時代後期……栗圓式

大村1号墳は、古墳群中最東端に位置するものであった。今後同古墳群の他の古墳との繋がりを考えていくとともに、近接する鬼渡横穴群（7世紀後半）などの遺跡との関連を検討していく必要があると思われる。また大村遺跡では、西方150mほどのところに縄文時代草創期の土器を出土した大村新田遺跡が存在している。本地域における歴史を考えいくうえでも、これら遺跡間の連続性や時期ごとの立地の変化などについて、検討を加える必要があるものと思われる。今後の調査・研究に期待したい。

（西山）

〈参考・引用文献〉

- 楠元哲夫 1988 「人を葬らない古墳—寿墓をめぐる一考察」『同志社大学考古学シリーズN考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズ刊行会

写 真 図 版

第1編 能 登 遺 跡

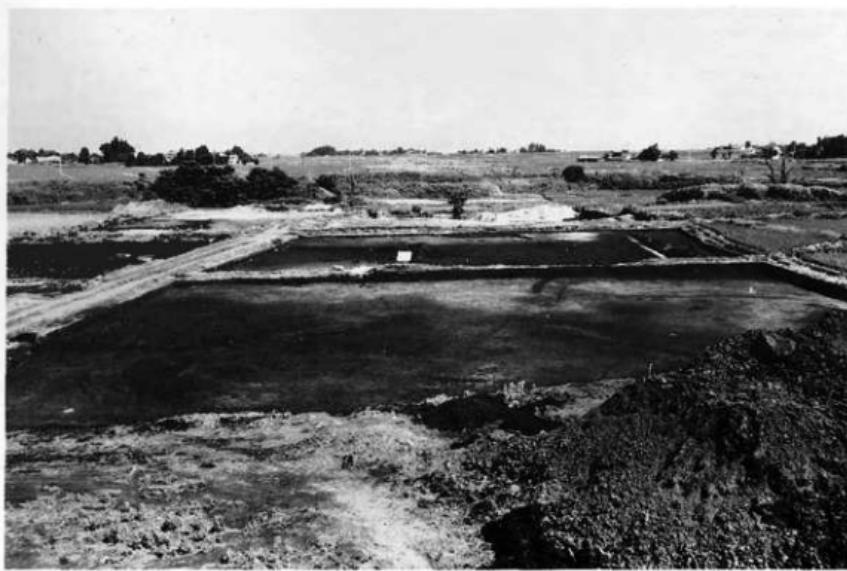
写 真 図 版 目 次

第1編 能登道路

1	能登道路景（東から）	141	17	遺物包含層南側全景（南から）	149
2	調査区西側全景（西から）	141	18	遺物包含層北側全景（南から）	149
3	1号住居跡全景（西から）	142	19	遺物包含層南側埴積土断面（南西から）	150
4	1号住居跡遺物出土状況（南西から）	142	20	遺物包含層北側埴積土断面（南西から）	150
5	1号住居跡カマド（西から）	143	21	噴砂検出状況－1（南西から）	151
6	1号住居跡カマド遺物出土状況	143	22	噴砂検出状況－2（南西から）	151
7	2号住居跡全景（北西から）	144	23～25	遺物包含層遺物出土状況－1～3	152～154
8	2号住居跡遺物出土状況	144	26	1号溝跡全景（北西から）	155
9	2号住居跡カマド（北西から）	145	27	2号溝跡全景（西から）	155
10	2号住居跡細部	145	28	1号住居跡出土土器－1	156
11	1号建物跡全景（南から）	146	29	1・2号住居跡出土土器	157
12	1号建物跡およびピット群（南西から）	146	30	2号住居跡・土坑・溝跡出土土器	158
13	2号建物跡全景（北西から）	147	31～48	遺物包含層出土土器	159～171
14	2号建物跡細部	147	37・49	遺物包含層出土土製品	165・171
15	遺物包含層検出状況－1（西から）	148	50～53	遺物包含層出土石器	172～173
16	遺物包含層検出状況－2（南西から）	148	54	遺構外出土土器	174
			55	遺構外出土石器	174



1 能登遺跡遠景（東から）



2 調査区西側全景（西から）



3 1号住居跡全景（西から）



4 1号住居跡遺物出土状況（南西から）

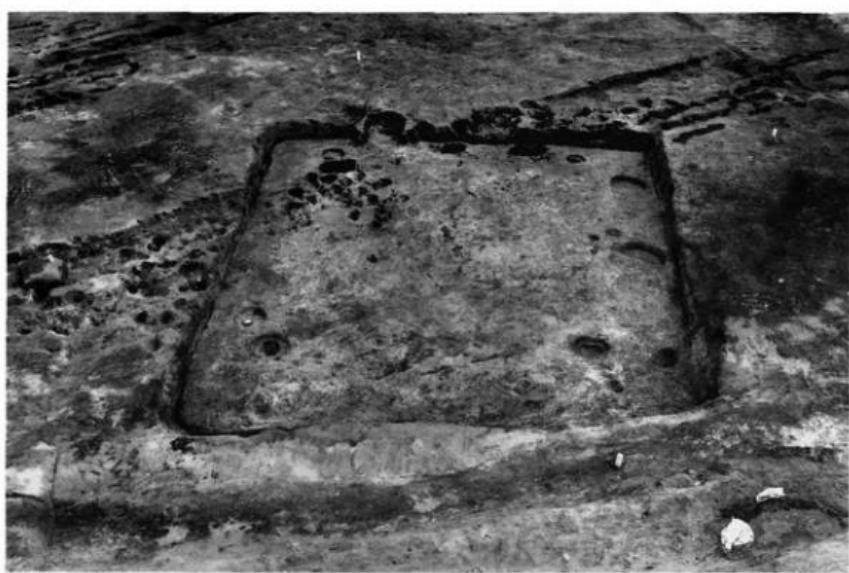


5 1号住居跡カマド（西から）



6 1号住居跡カマド遺物出土状況

a 北から b 北西から



7 2号住居跡全景（北西から）

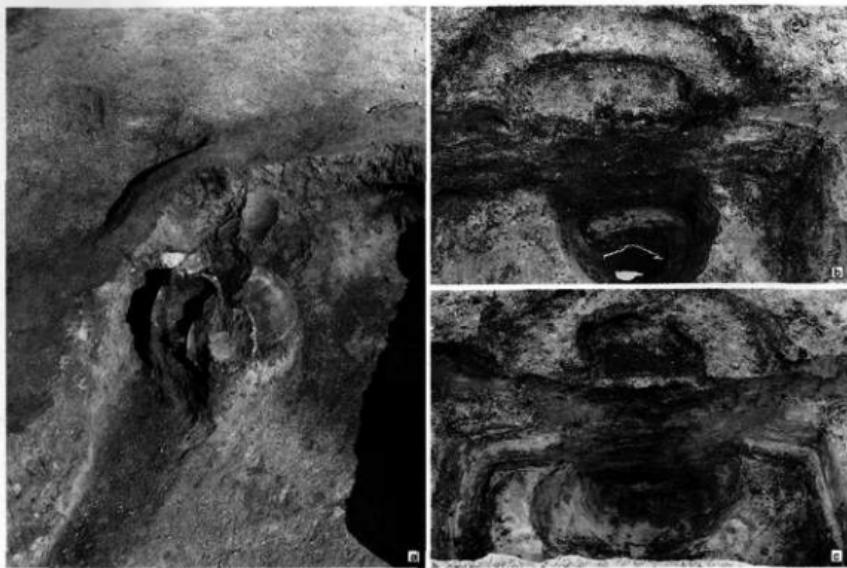


8 2号住居跡遺物出土状況

a 西壁付近（東から） c 東壁付近（南から）
b 北壁付近（南から） d P₃（東から）



9 2号住居跡カマド（北西から）



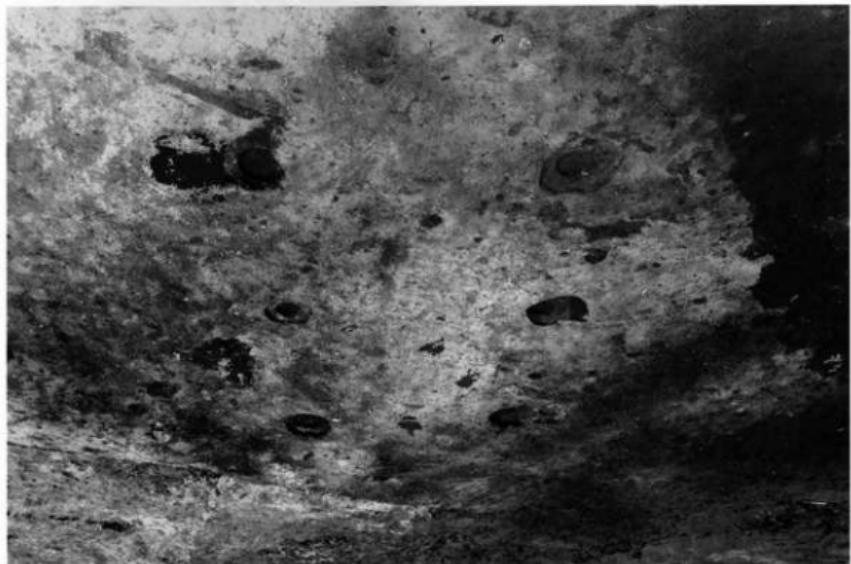
10 2号住居跡細部

a カマド遺物出土状況（北西から）

b F1（北西から） c F2（北西から）



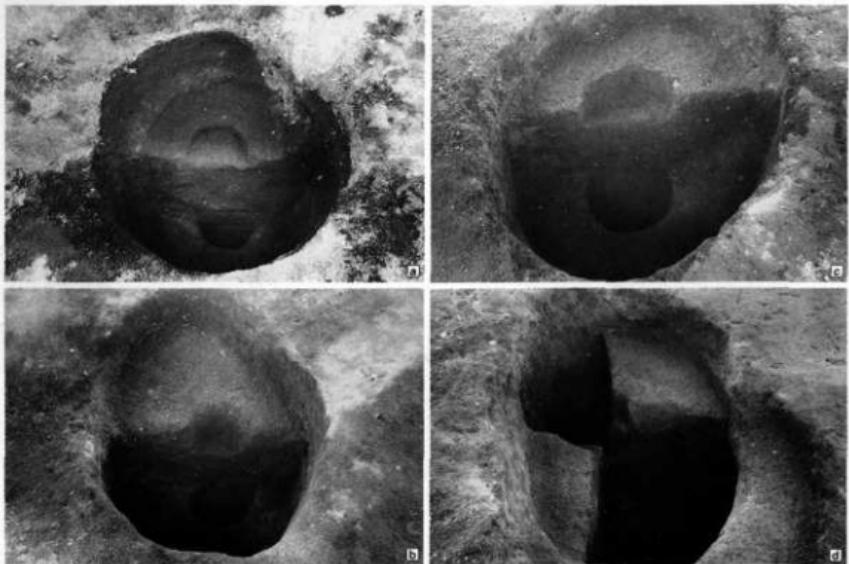
11 1号建物跡全景（南から）



12 1号建物跡およびピット群（南西から）

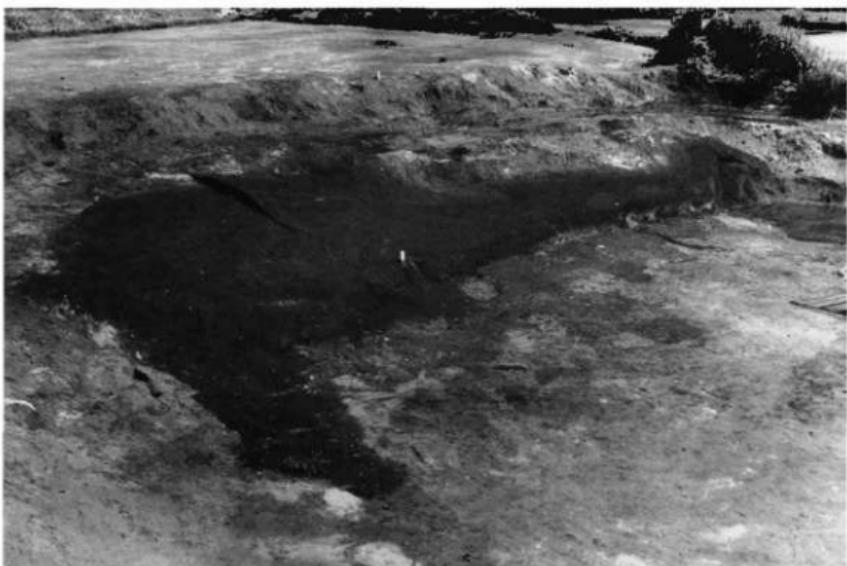


13 2号建物跡全景（北西から）



14 2号建物跡細部

a P₁ (北東から) c P₃ (北東から)
b P₂ (北東から) d P₆ (南東から)



15 遺物包含層検出状況－1（西から）



16 遺物包含層検出状況－2（南西から）



17 遺物包含層南側全景（南から）



18 遺物包含層北側全景（南から）



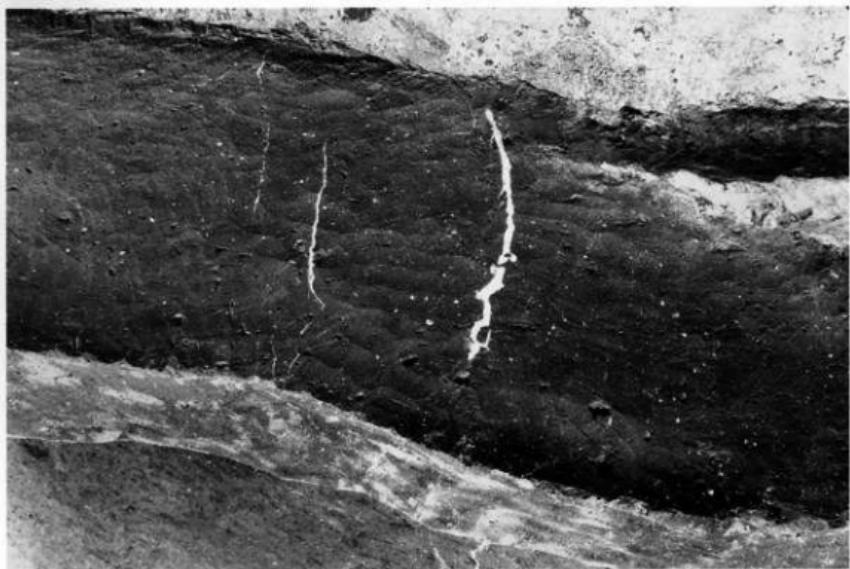
19 遺物包含層南側堆積土断面（南西から）



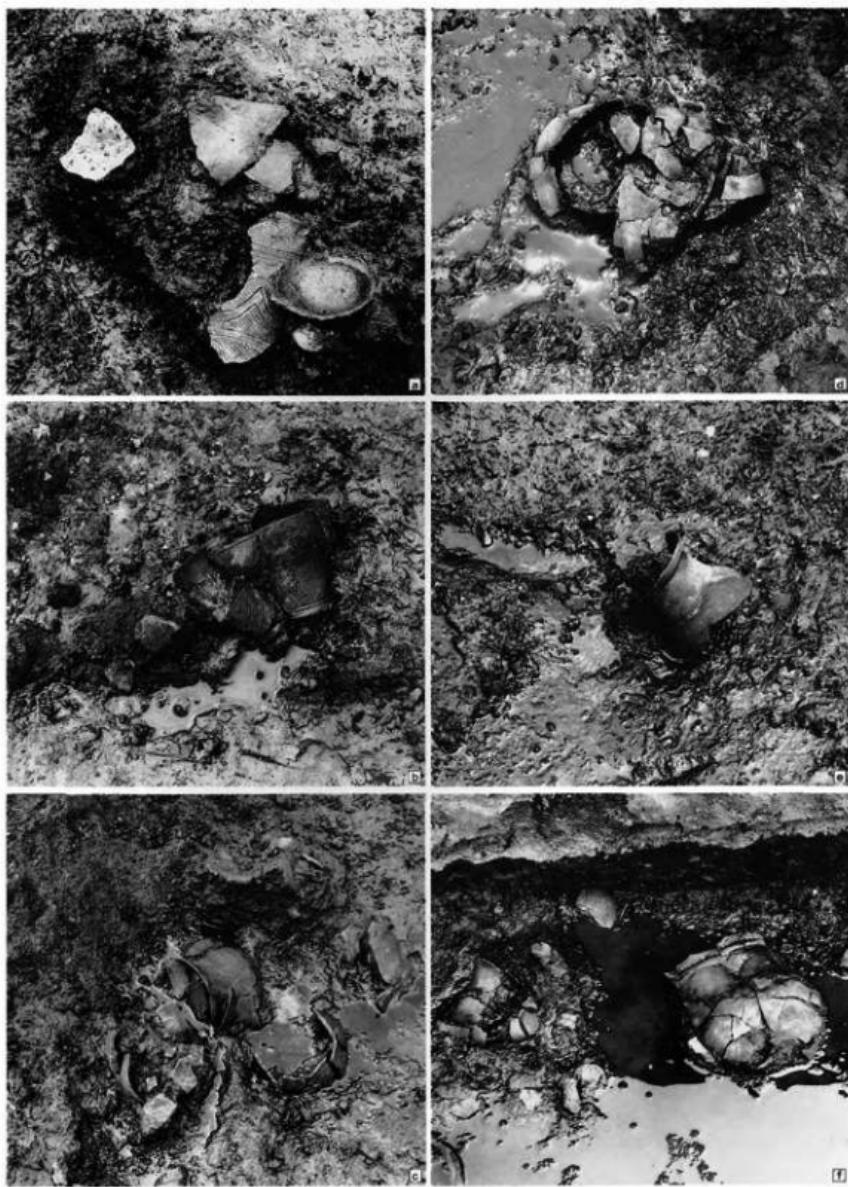
20 遺物包含層北側堆積土断面（南西から）



21 噴砂検出状況－1（南西から）

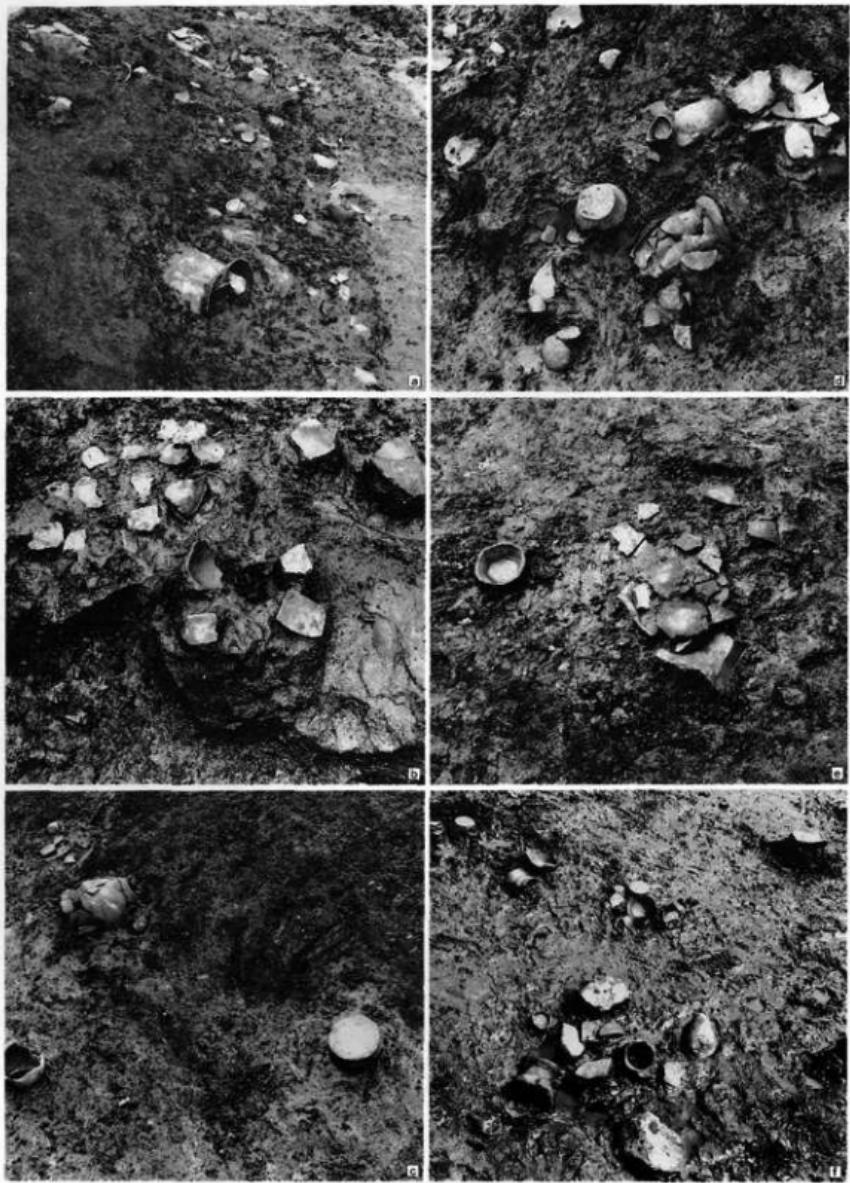


22 噴砂検出状況－2（南西から）



23 遺物包含層遺物出土状況－1

a (北東から) d (東から)
 b (東から) e (北東から)
 c (北から) f (北東から)

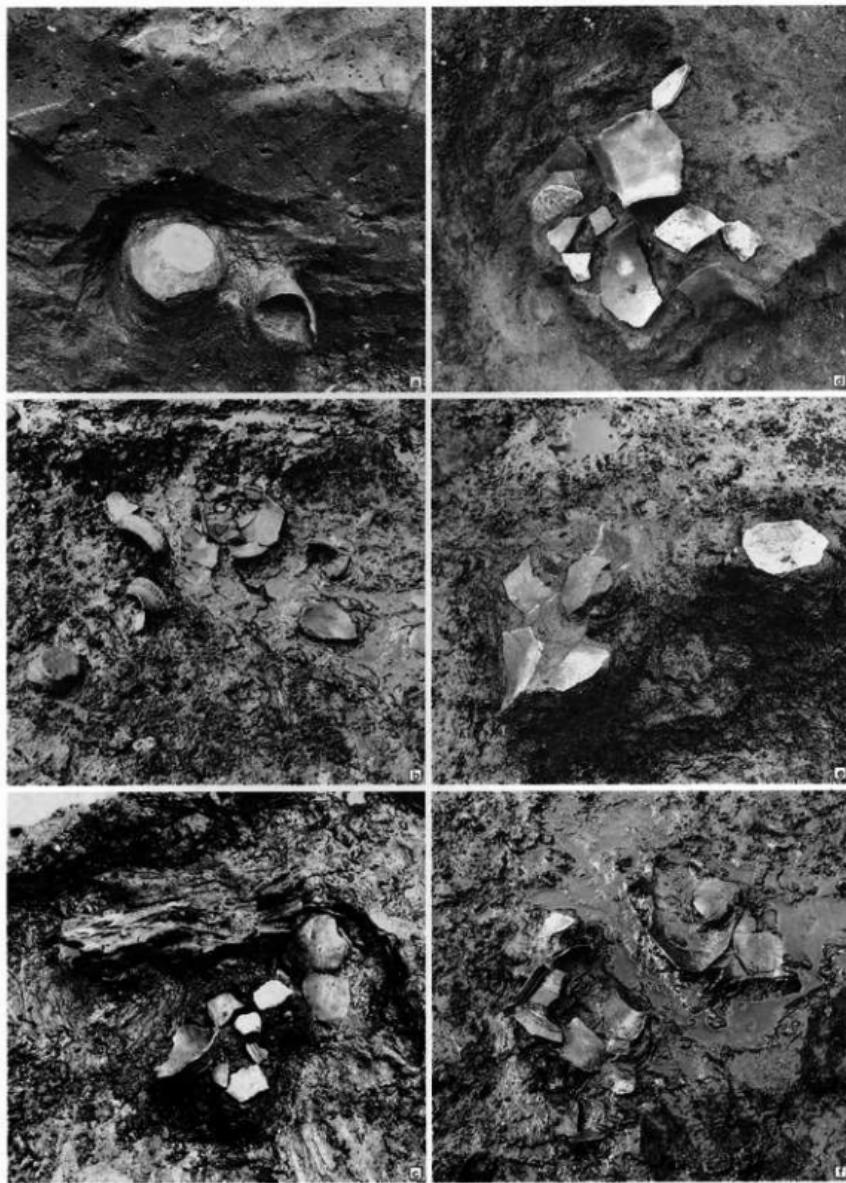


24 遺物包含層遺物出土状況－2

a (西から) d (南東から)

b (南から) e (南から)

c (北から) f (南から)



25 遺物包含層遺物出土状況-3

a (北西から) d (南東から)
 b (南から) e (東から)
 c (東から) f (南から)



26 1号溝跡全景（北西から）



27 2号溝跡全景（西から）



1.1



6



2



7



3



4



5



8



9

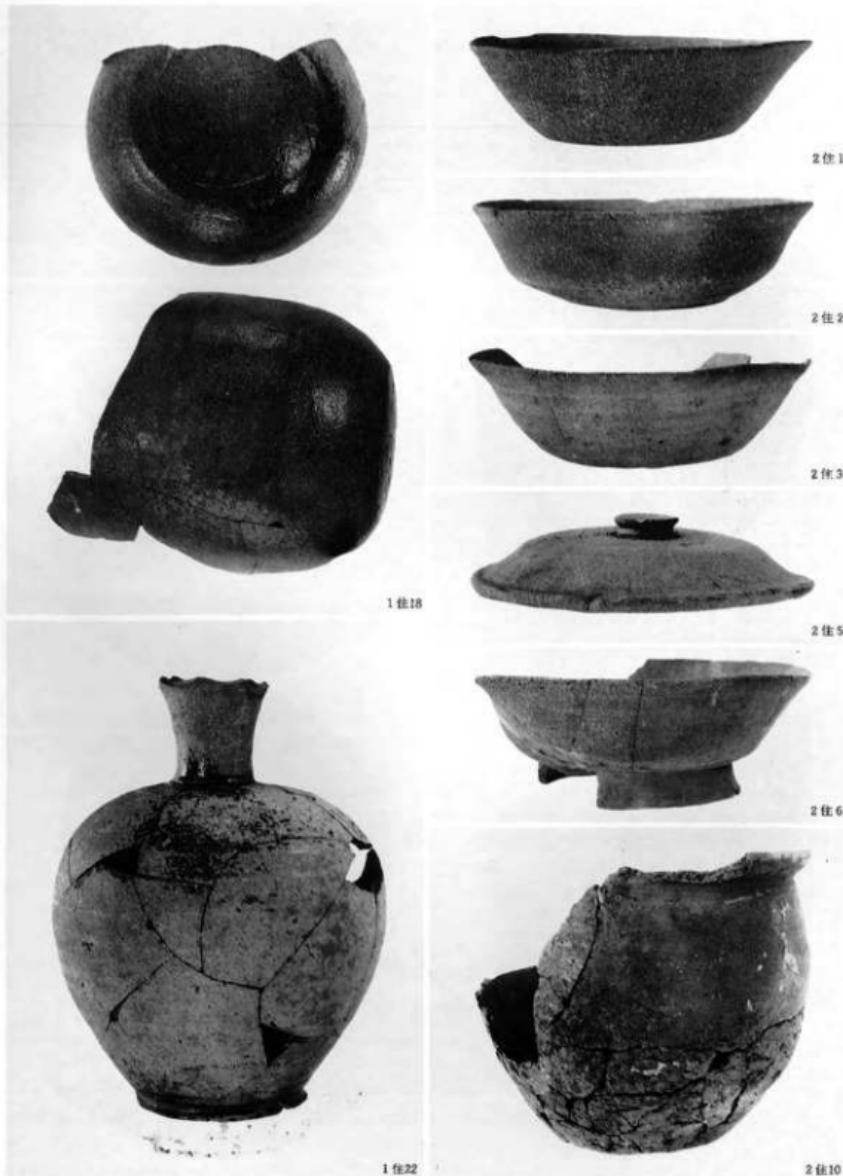


12



13

28 1号住居跡出土土器 - 1



29 1・2号住居跡出土土器



2住7



1坑4

2住11



2坑1

2住12

1溝1

30 2号住居跡・土坑・溝跡出土土器



38

42



41

44

31 遺物包含層出土土器



45



52



46



47

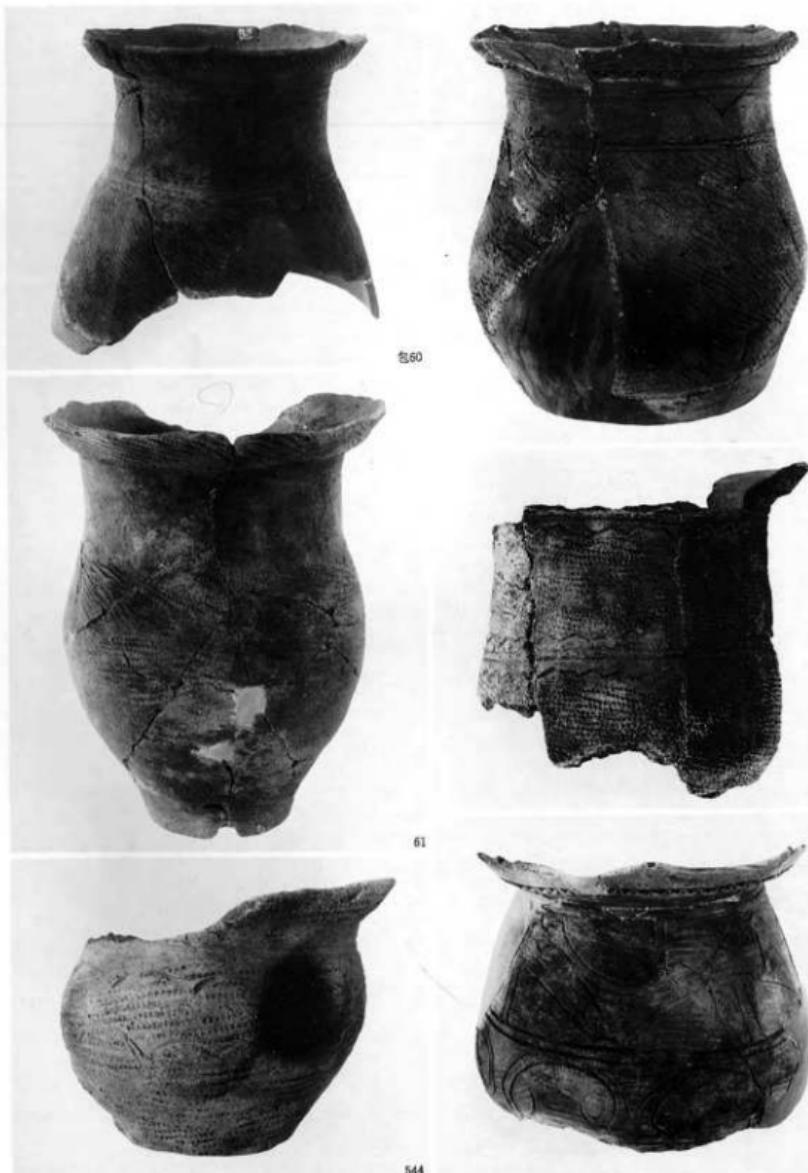


55



48

32 遺物包含層出土土器



33 遺物包含層出土土器



81



81



69



106



106



94

34 遺物包含層出土土器



56



37



56



122



56



123

35 遺物包含層出土土器



图123



34



546

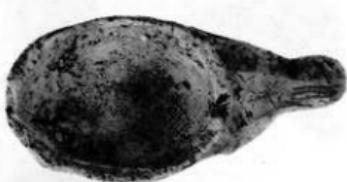


103



246

36 遺物包含層出土土器



536

245



537

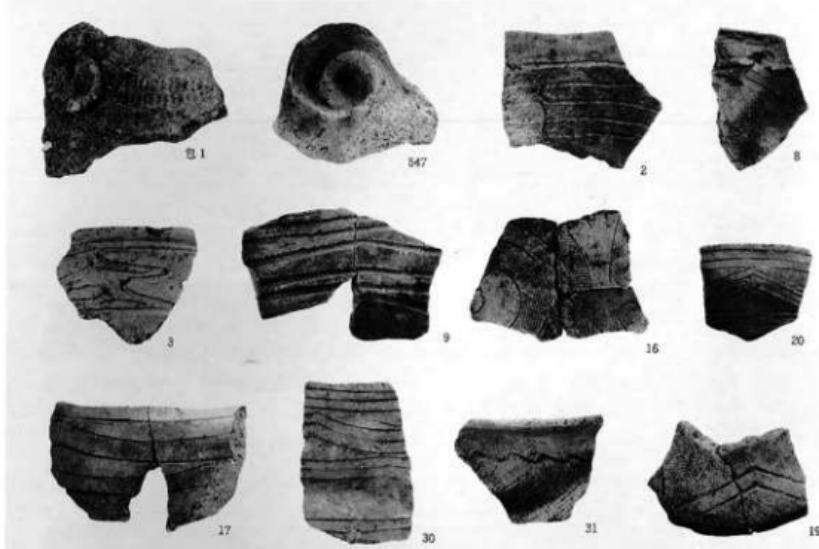
238



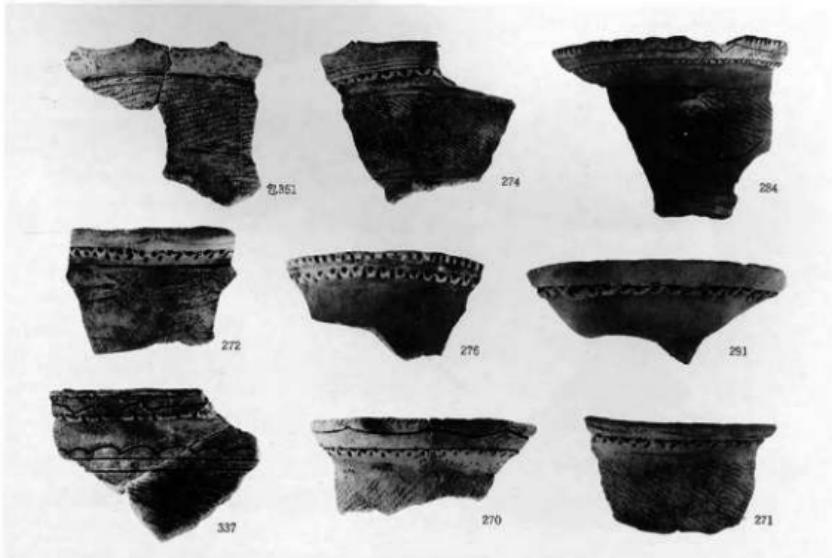
543

250

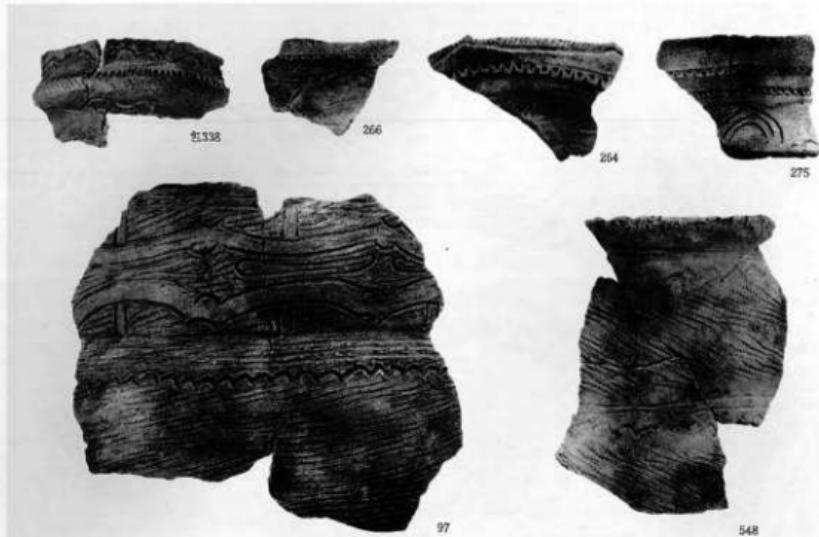
37 遺物包含層出土土製品



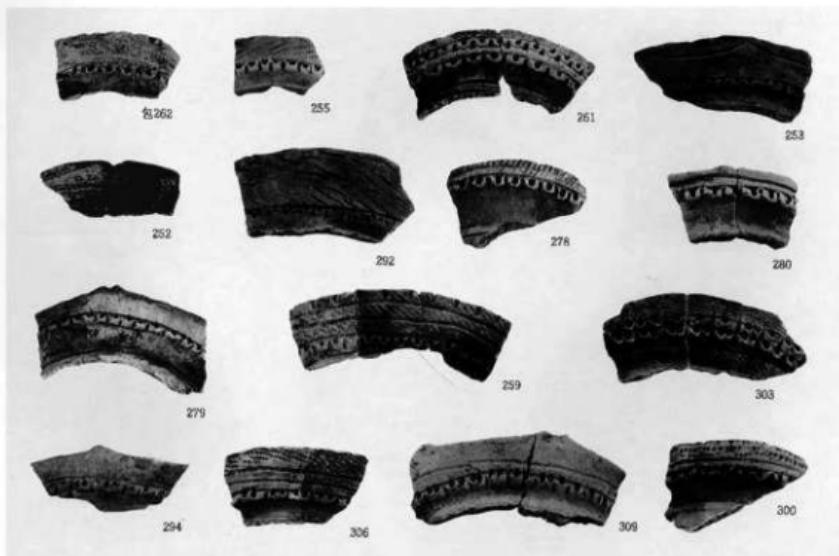
38 遺物包含層出土土器



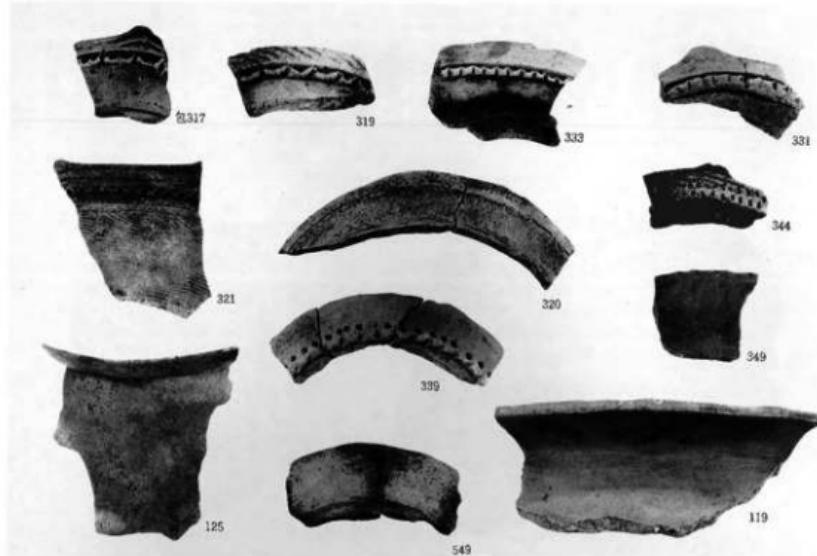
39 遺物包含層出土土器



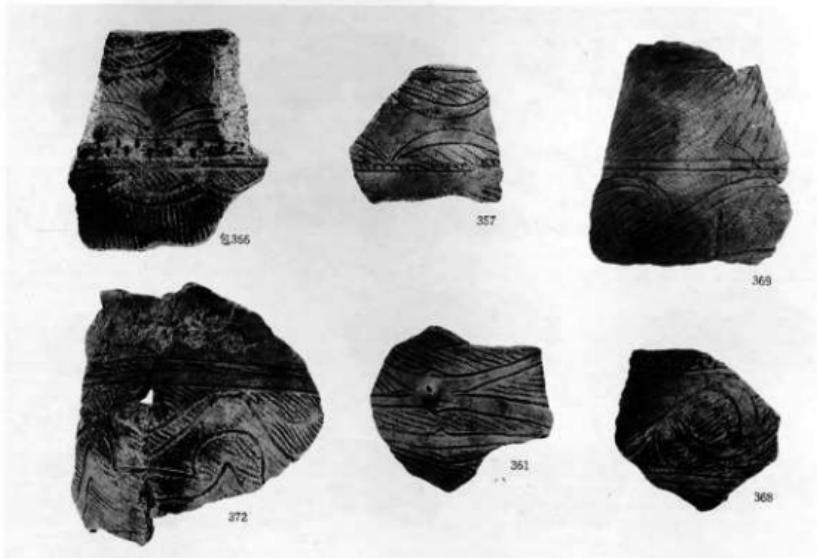
40 遺物包含層出土土器



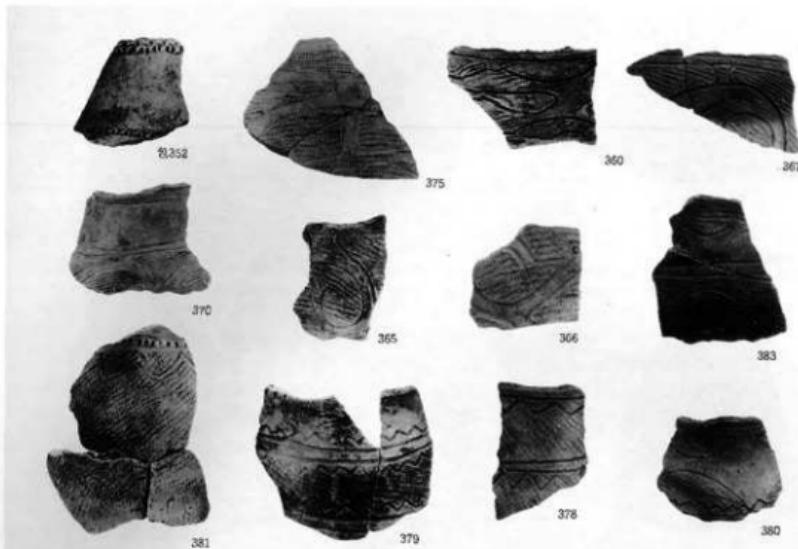
41 遺物包含層出土土器



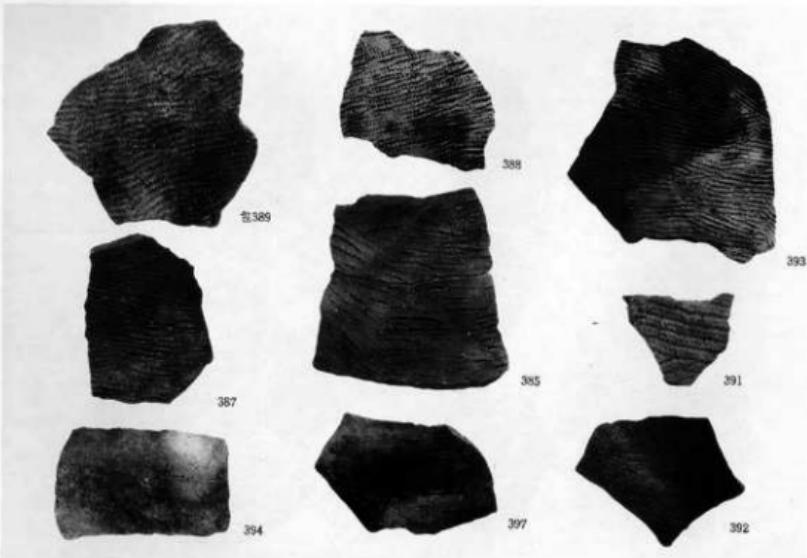
42 遺物包含層出土土器



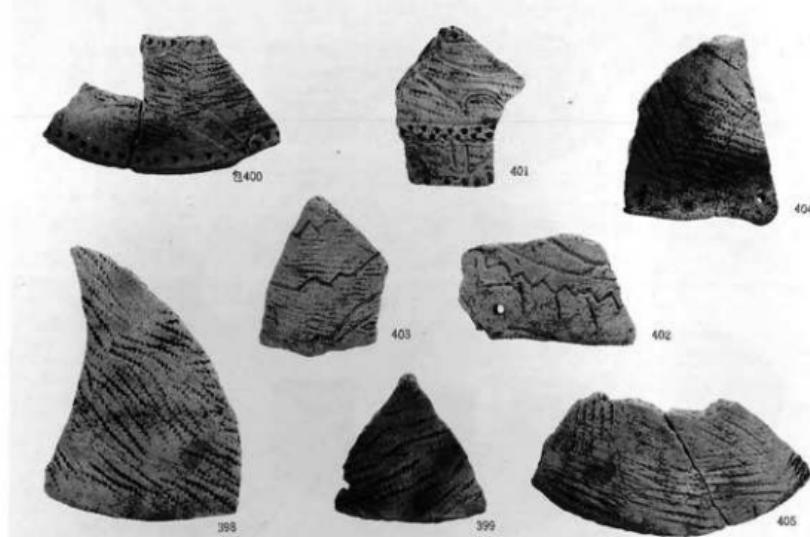
43 遺物包含層出土土器



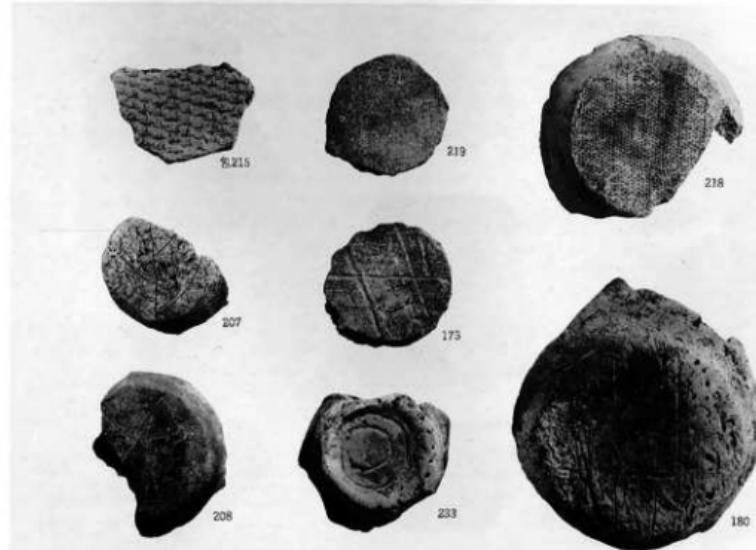
44 遺物包含層出土土器



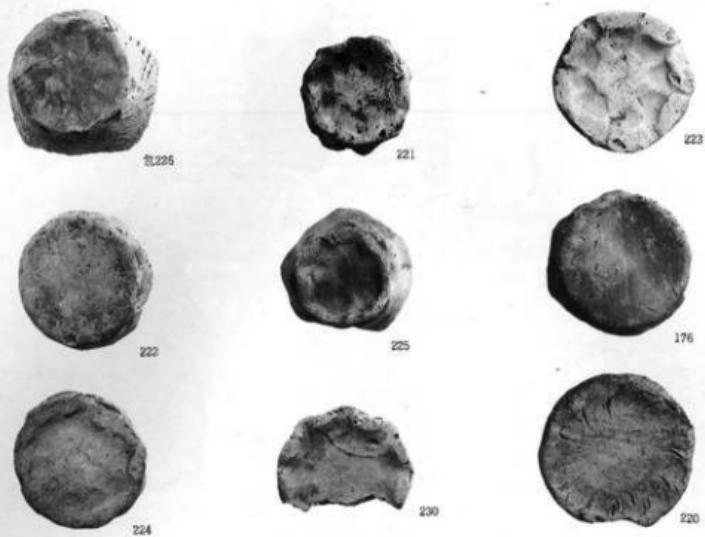
45 遺物包含層出土土器



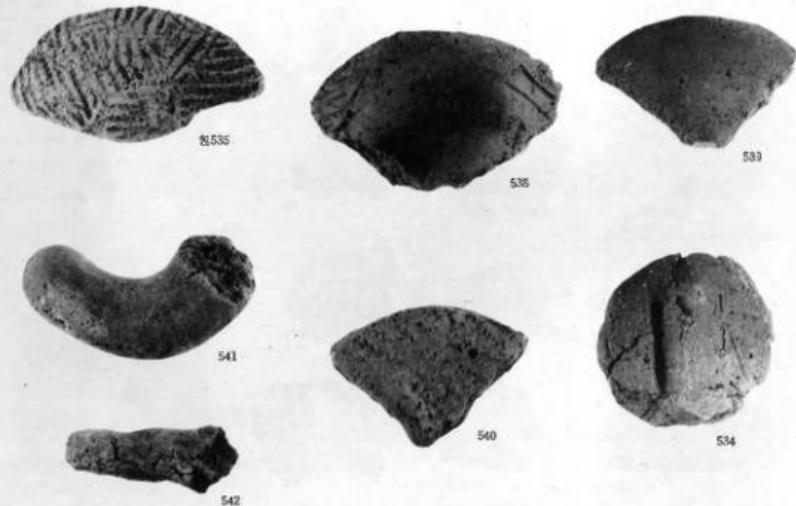
46 遗物包含层出土土器



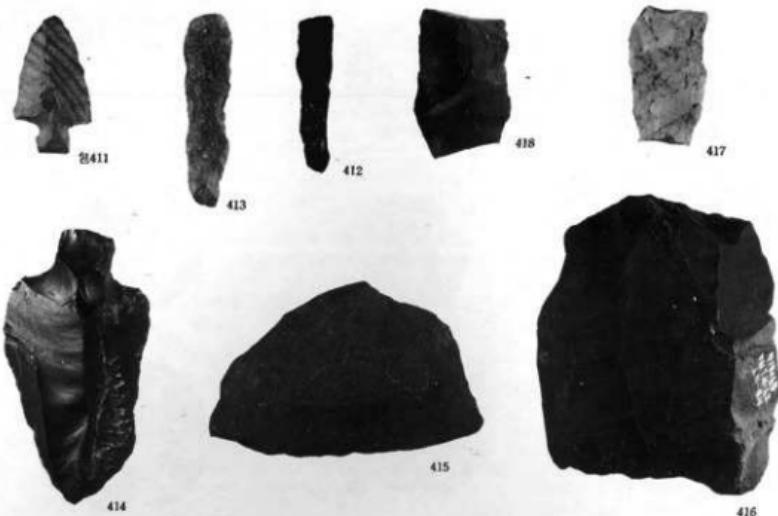
47 遗物包含层出土土器



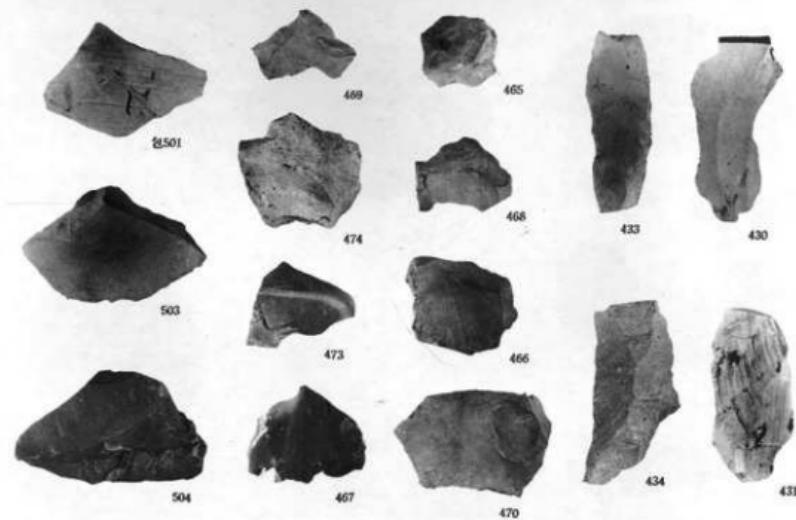
48 遺物包含層出土土器



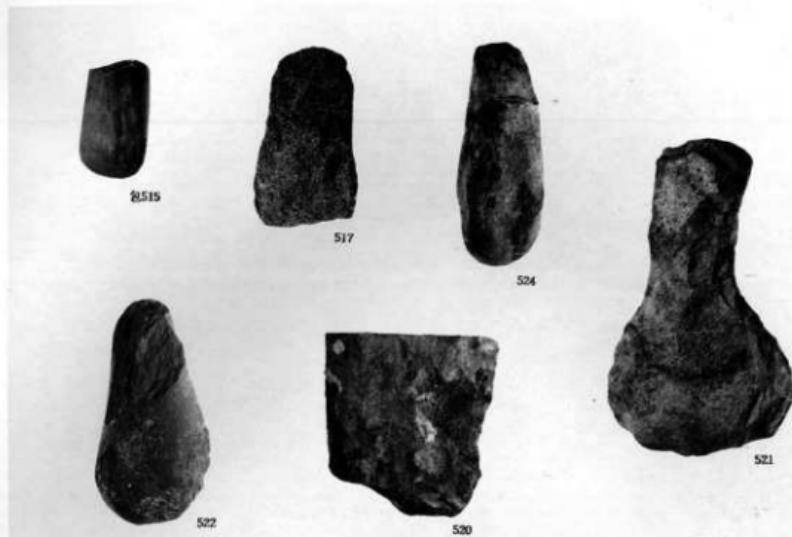
49 遺物包含層出土土製品



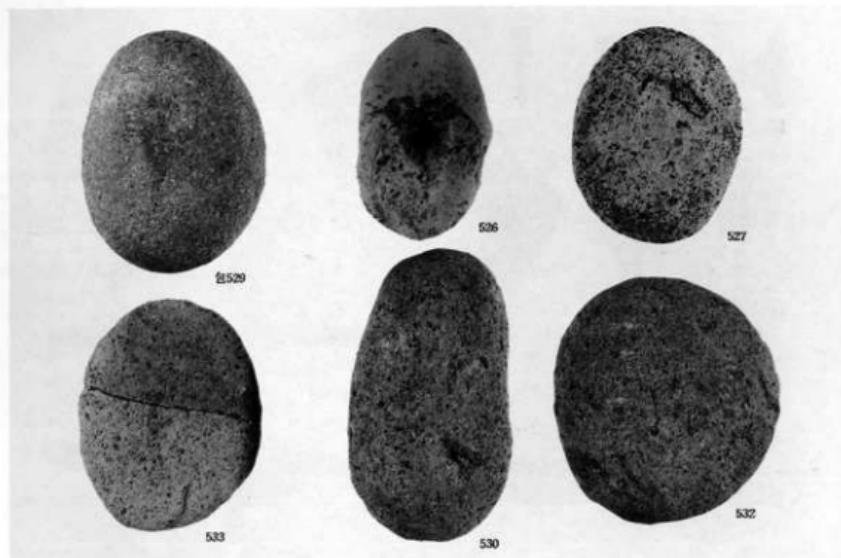
50 遺物包含層出土石器



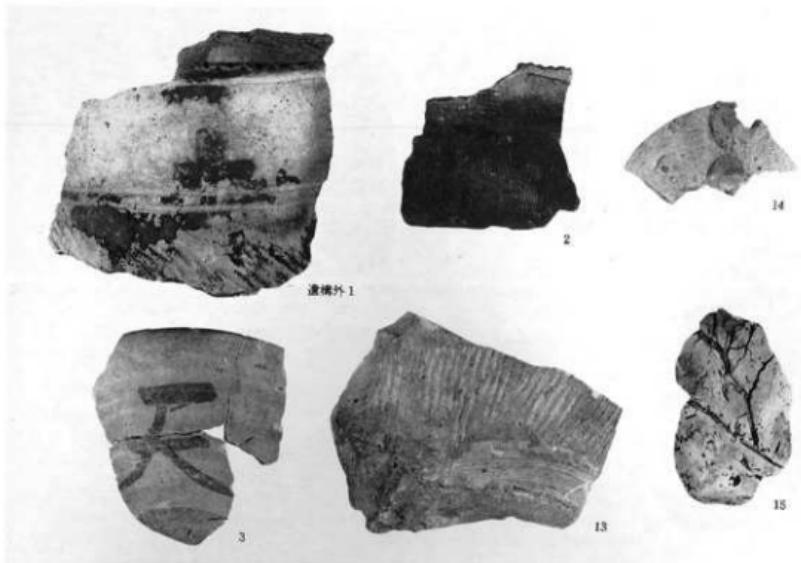
51 遺物包含層出土石器



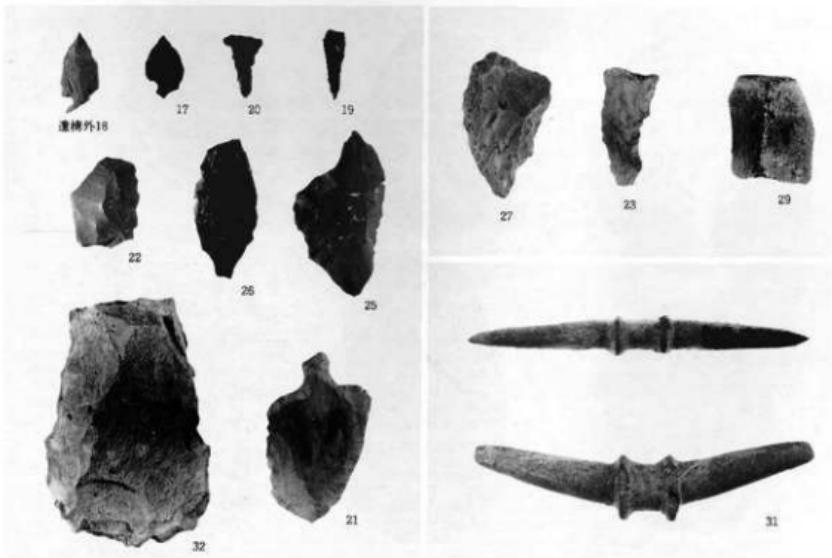
52 遺物包含層出土石器



53 遺物包含層出土石器



54 造構外出土土器



55 造構外出土土石器

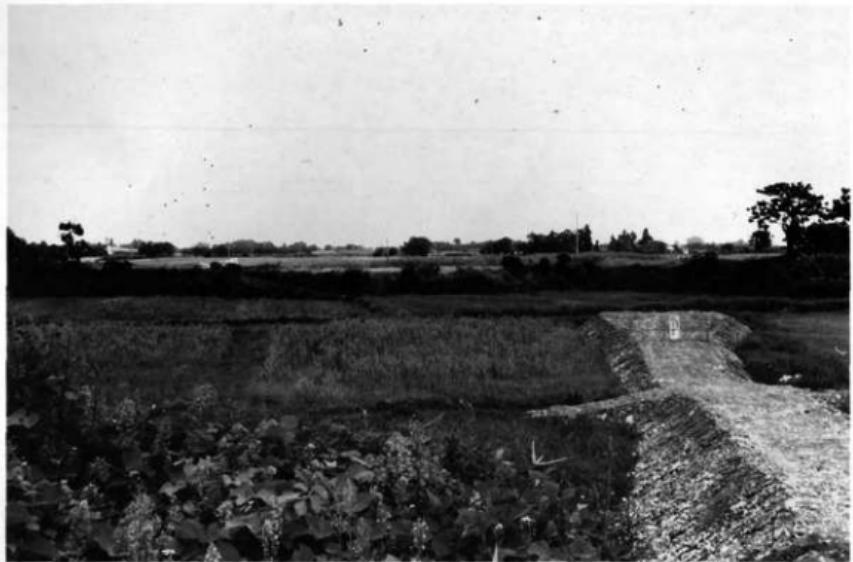
写 真 図 版

第2編 南原B遺跡

写真図版目次

第2編 南原B遺跡

- | | | | |
|----------------------|-----|-------------------|-----|
| 1 南原B遺跡遠景(西から) | 177 | 3 1号溝跡(東から) | 178 |
| 2 南原B遺跡全景(南から) | 177 | 4 南原B遺跡出土遺物 | 178 |



1 南原B遺跡遠景（西から）



2 南原B遺跡全景（南から）



3 1号溝跡（東から）



4 南原B遺跡出土遺物

写 真 図 版

第3編 村 西 遺 跡

写真図版目次

第3編 村西遺跡

- | | | | |
|---------------------|-----|----------------------|-----|
| 1 村西遺跡遠景(東から) | 181 | 3 村西遺跡全景(北西から) | 182 |
| 2 村西遺跡遠景(西から) | 181 | 4 村西遺跡出土遺物 | 182 |



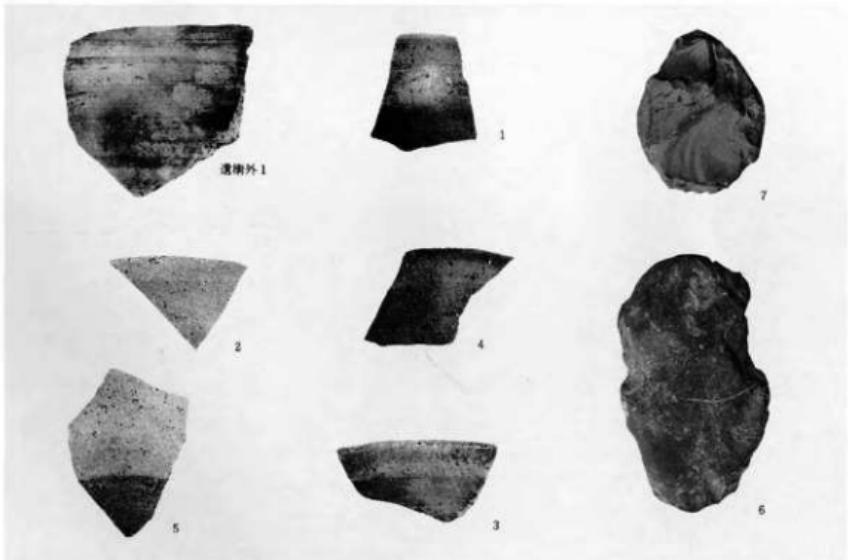
1 村西遺跡遠景（東から）



2 村西遺跡遠景（西から）



3 村西遺跡全景（北西から）



4 村西遺跡出土遺物

写 真 図 版

第4編 大村古墳群・大村遺跡

写真図版目次

第4編 大村古墳群・大村遺跡

1	1号墳遠景(東から)	185	7	主体部全景(北から)	189
2	1号墳近景(南から)	185	8	大村遺跡全景(南から)	189
3	1号墳全景(南から)	186	9	土 坑	190
4	1号墳丘断面(西から)	186	10	1号墳出土土器	191
5	1号墳周溝	187	11	大村遺跡出土土器	192
6	墳頂部および主体部極部	188	12	大村遺跡出土土器・石器	192



1 1号墳遠景（東から）



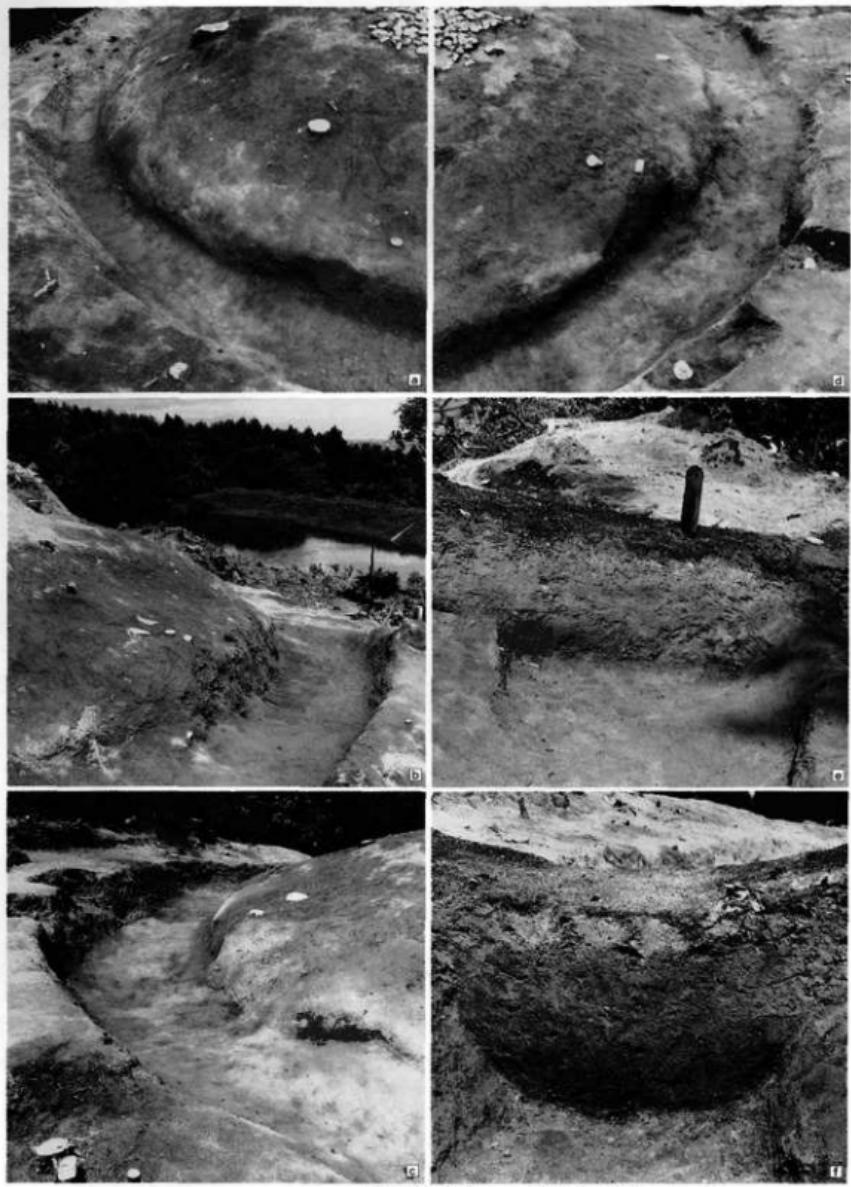
2 1号墳近景（南から）



3 1号墳全景（南から）

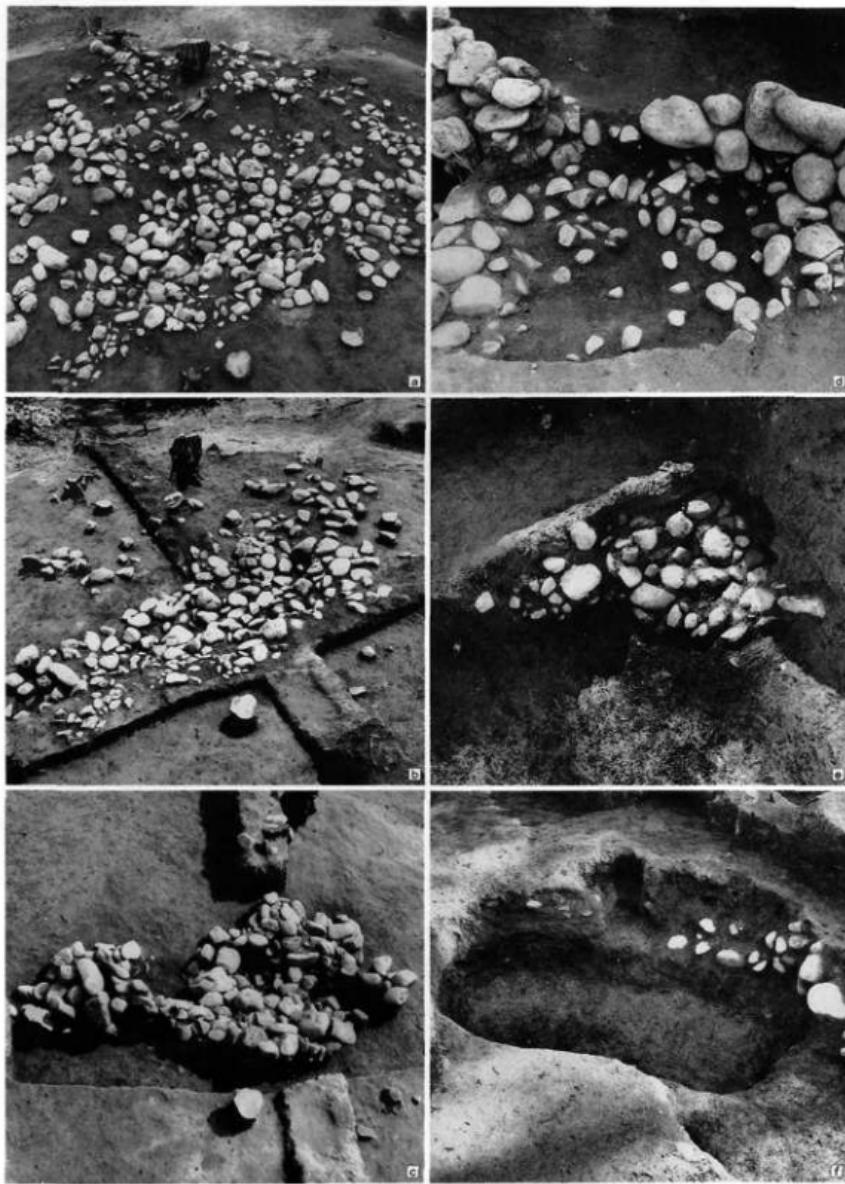


4 1号墳墳丘断面（西から）



5 1号墳周溝

a 北西側 (西から)
b 南東側 (南西から)
c 西側 (南西から)
d 南側 (西から)
e 南側堆積土断面 (西から)
f 西側堆積土断面 (南から)



6 墳頂部および主体部細部

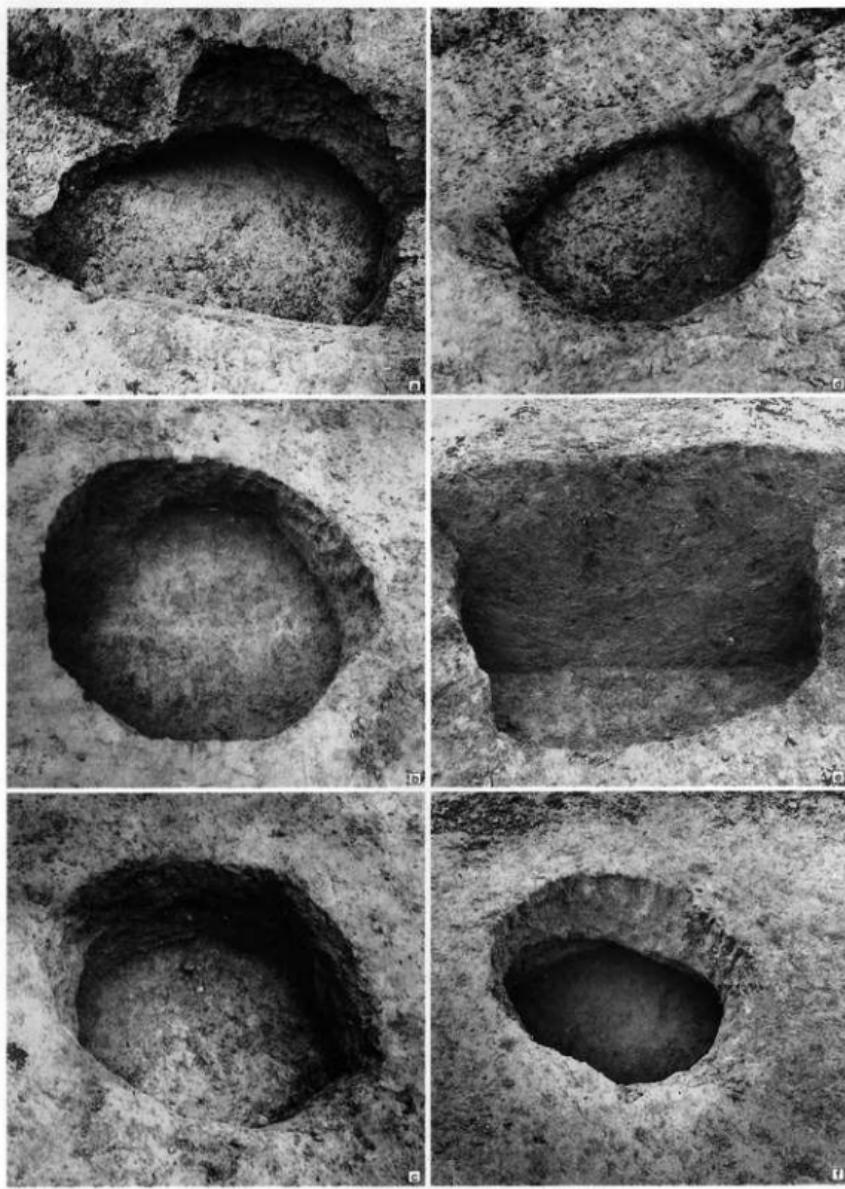
a 墳頂部（西から）	d 主体部（北東から）
b 墳頂部（西から）	e 主体部床面（東から）
c 主体部検出（西から）	f 主体部裏込め（東から）



7 主体部全景（北から）

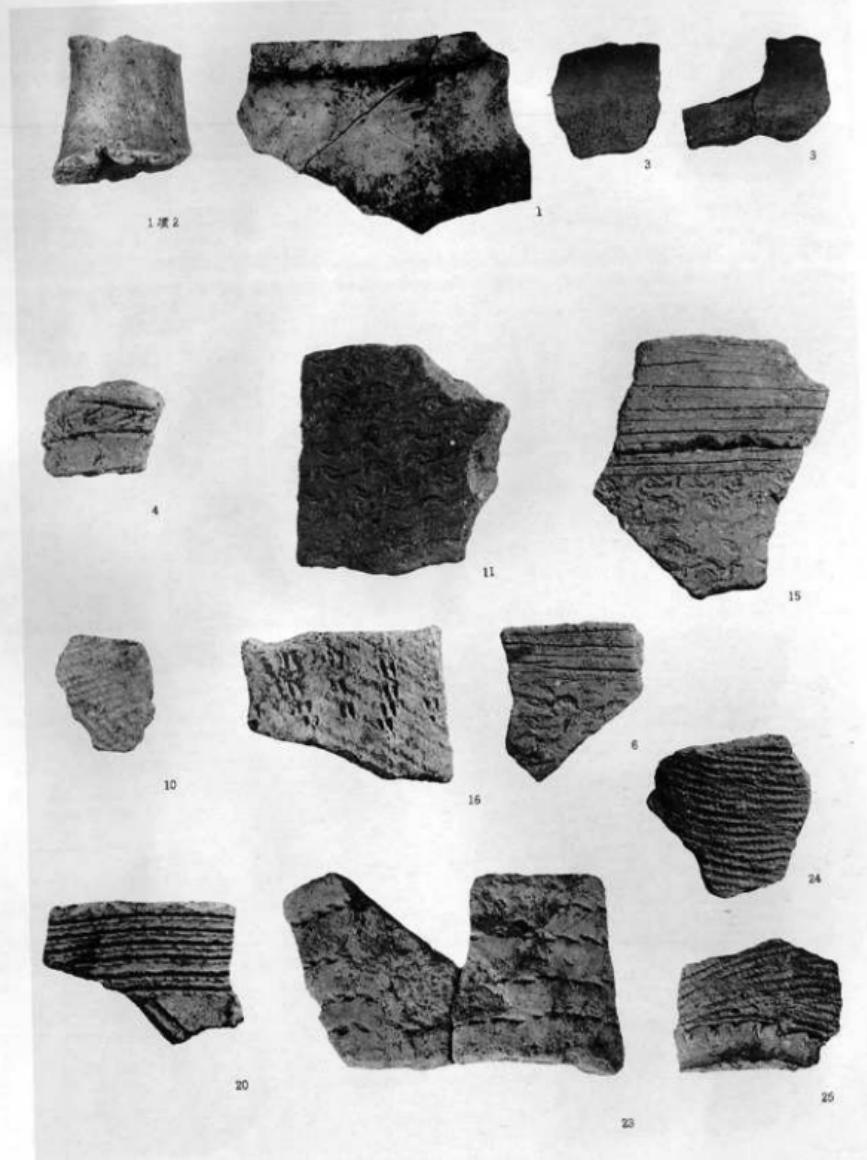


8 大村遺跡全景（南から）

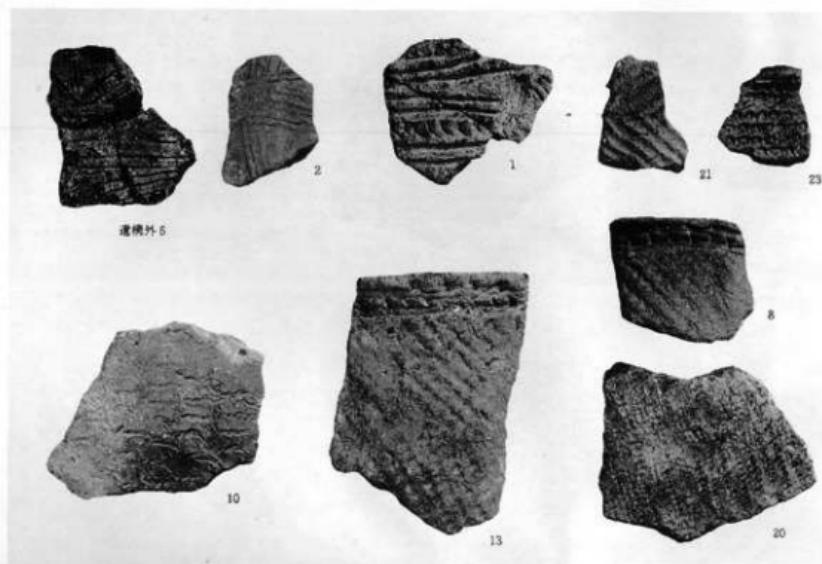


9 土坑

a 1号土坑（西から） d 4号土坑（西から）
b 2号土坑（南から） e 4号土坑埋土断面（東から）
c 3号土坑（南から） f 5号土坑（西から）



10 1号墳出土土器



11 大村遺跡出土土器



12 大村遺跡出土土器・石器

福島県教育庁文化課

長 速藤征一郎
副幹事長補佐 菊田謙一郎
遺跡班
専門文化財主査 稲部 正俊 文化財主査 口下部善巳 文化財主査 五川 一郎 文化財主査 西戸 桂一

(財)福島県文化センター職員組織表

監 長	瀧見栄之助	副 館 長	活田 義久	事務第二部長	高橋 清吉	
遺跡調査課	課長	日置 吉明(出)	課長補佐	本田 光輝(出)	課長補佐	佐藤 博重(出)
第1係	専門文化財主査	高木 政光(出)	文化財副主査	芳賀 英一	文化財主事	本間 宏
専門文化財主査	佐藤 建太(出)	文化財主査	大平 好一(出)	文化財主事	佐々木慎一	
文化財主査	木本 元治(出)	文化財主事	小林 雄一(出)	文化財主事	香川 勝一	
文化財主査	尾家 孝一(出)	文化財主事	森内 修(出)	文化財主事	小野田義和	
文化財主査	松崎 真一(出)	文化財主事	鈴木 博治(出)	文化財主事	西山真理子	
文化財主査	佐原 朝彦(出)	文化財主事	只野 雅彌(出)	文化財主事	北野 和人	
文化財主査	金一(出)	文化財主事	佐野 陽明(出)	文化財主事	鶴屋 大和	
文化財主査	源谷 康雄(出)	文化財主事	山崎 浩治(出)	文化財主事	高村 朋子	
文化財主査	中野 道正	文化財主事	丹治 秀樹(出)	文化財主事	井上 秀紀	
文化財主査	石本 弘	文化財主事	福島 雅彌	文化財主事	田中 伸	
文化財副主査	松本 広	文化財主事	山岸 英夫	文化財主事	小川哲彦	
文化財副主査	高橋 信一	文化財主事	小川哲彦			
第2係	文化財主査	石山 泰生(出)	文化財主事	猪狩 葵史(出)	文化財主事	吉田 秀亨
文化財主査	木島 文隆	文化財主事	菊田 克紀(出)	文化財主事	能登谷宣康	
文化財主査	鈴鹿 良一	文化財主事	安田 良志	文化財主事	鈴木 良美	
文化財主査	山内 大輔	文化財主事	宮川 安志	文化財主事	井 上 審治	
文化財主査	三浦 謙幸(出)	文化財主事	吉田 功	文化財主事		
文化財主査	佐々木 修(出)	文化財主事	飯村 均			
監時職員	角田美和子	舟治 敦子	茂木美津枝	佐藤 佳子	沼田恵美子	
南上賀一郎	市川和也	山岸千恵子	鳴原 千恵	渡辺 信子	小川ひろみ	
宍戸 錠哉	宍戸 錠哉	荒井 慶子	村上 純子	鈴木美奈子	曾野恵美子	
佐々木 琴子	舟治 京子	大内まゆみ	明石 未渡	千賀子	東条山美子	
石山豊美子	山崎三起子	八卷 治子	齋藤 浩子	渡辺千賀子	鈴木恵子	
渡辺 礼子	五十島時子	高橋友里恵	高橋恵理子	西方 咲子	青山恵子	
上野 真理	川久木美子	佐藤 純忠	佐藤 有美子	三瓶 京子	斎藤千賀子	
船木美智子	斎藤 義子	本間美津子	坂部 賀子	阿部 優子	清野 聰子	
安田 晶	佐々木千鶴子	阿部まゆみ	吉田江美子	須田 梅子	三浦久美子	
二瓶 由佳	菊田 習子	大内 孝子	星川寅美江	山内多賀子	安田 真弓	
			佐藤 道雄	赤子	鈴木 優子	
				惠	原藤宗美子	

(平成元年度)

福島県文化財調査報告書第242集

東北横断自動車道遺跡調査報告10

能登遺跡・南原B遺跡

村西遺跡・大村古墳群

平成2年11月15日 発行

編集発行 財団法人 福島県文化センター(遺跡調査課)
 稲葉 副幹事長補佐 (〒960) 福島市杉妻町2-16
 財団法人 福島県文化センター
 (〒960) 福島市春日町5-54
 日本道路公团仙台建設局会津若松工事事務所
 (〒965) 会津若松市一箕町大字八角字中村東196-1
 印刷 株式会社川島印刷(〒992)山形県米沢市大字花沢221-2

本報告書は中性紙を使用しています。

(本文 王子製紙 サンファンタジー 50kg)
 (写真版 十王製紙 ダイヤコート 135kg)